

下 玉 埼 七

二四 武 平介上申書

鹿兒島県下第二大区三小区

薩摩国鹿兒島郡鹿兒島

新屋敷居住旧士族

當時懲役囚

武 平介

私儀

明治十年五月熊本県下ヨリ中島健彦・貴島清等兵ヲ引テ  
鹿兒島ニ帰リ開戦ノ砌、吾モ振武十四番隊給養方ニ加入  
シ小野村ヘ在陣ス、五月廿五日熊本県下江代口援兵トシ  
テ鹿兒島ヲ発足シ、同廿九日黒比地(多良木町)村(水上村)へ着ス、翌日本隊  
ハ解隊ニナリ、吾ハ正義九番中隊大小荷駄寄役トナリ、  
(多良木町)柳野ヘ五日在陣スルニ人吉口敗軍ニ付須木郷へ引揚ケ、  
各隊へ弾薬・糧米等ヲ分配ス、數十日ヲ經テ野尻口敗ル  
、報知アリ綾郷へ引揚ケ、佐土原諸所ヲ經テ延岡ニ到ル、  
後チ同所敗軍ノ節吾ハ疾病ノ為途中ニ後レ、數十日山谷  
ヲ經テ鹿兒島ニ帰リ警視出張所ニ自首帰順セリ、

二五 伊勢八郎上申書

鹿兒島県第一大区四小区

薩摩国鹿兒島郡鹿兒島

西田村ノ内新正院居住旧士族

當時懲役囚

伊勢八郎

私儀

昨年二月西郷隆盛等政府へ尋問ノ趣有之上京途中ノ守衛  
(編野和秋隊長)第四大隊三番小隊給養方ニ加リ、同月十六日鹿兒島ヲ発  
シ數日ニシテ熊本ニ到ルニ、既ニ開戦ニ及ベリ、依テ我  
隊山鹿・大津・矢部・延岡・竹田・臼杵辺ヲ回軍シ、七  
月一日熊田駅出張大小荷駄へ寄役シ、糧米等ヲ各隊へ分  
配ス、然レトモ戰地ニ出サル役場ナルニヨリ其實際ヲ知  
ラス、

二六 馬場利八上申書

鹿兒島県第十二大区一小区

平民

當時懲役囚

馬場利八

私儀

鹿兒島縣第一大區武小區

薩摩國鹿兒島郡鹿兒島

坂元村ノ内平中ノ馬場居住

士族野間吉二長男

當時懲役囚

野間九左衛門

私儀

鹿兒島縣第一大區武小區

明治十年三月鹿兒島ヲ發シ日ヲ經テ肥後矢部ニ到り、三  
日滯陣シ熊本ヘ到リ、(村田新八隊長)第二番大隊九番小隊夫卒トナリ尽  
力イタスノ処、日ナラスシテ川尻口ノ味方敗軍シ、本隊

(益城町)

木山ヘ引揚ニ成リ、夫ヨリ矢部・馬見原・椎葉山ヲ越ヘ、

(蘇陽町)

日州美々津ヘ至リ、(日向市)十五日程滯陣ノ処、宮崎口ノ味方敗

軍ニヨリ、各隊追々富高新町ヘ向ケ引揚ニナルニ隨ヒ、

行事能ハス終ニ美々津ニ於テ官兵ニ囮マレ、鎮台兵隊ノ

軍門ニ降伏ス、夫ヨリ宮崎ニ送ラレ同所裁判所ニテ放免

ニナリ帰邑ス、然廻味方ノ各隊再ヒ鹿兒島ヘ襲來ノ節、

鹿兒島高麗町ニテ官軍ノ兵卒老人切殺シ夫形帰宅ス、然

ル処同九月日置出張警視署ヘ呼出サレ、御調ノ上伊集院

並鹿兒島警視所ヘ送ラレ、本年二月長崎ヘ送ラレ、同三

月十四日九州臨時裁判所ニテ懲役二年ノ御処分ヲ申渡サ  
レ候、

客年二月西郷隆盛等上京ノ際有志輩隨行ヲ請フ少ラス、  
吾モ四番大隊八番小隊長嶺崎半左衛門ノ指揮ニ從ヒ、同  
(稱野利秋隊長)人隊ヘ編入セラレ兵士トナリ、同月十六日鹿兒島ヲ發シ  
大口・水俣等ヲ經テ進行、途中熊本県下ヲ望メハ黒烟空  
ニ漲リ、既ニ開戦ニ及ヒタルカト衆皆先ヲ競フテ黄昏小  
川駅ヘ達ス、即隊長ヨリ通知ニ曰、川尻駅在陣ノ別隊ヘ  
当県鎮台妄ニ小銃數発ヲ放ツテ去ルト、是ヲ以テ愈彼レ  
ヨリ兵端ヲ開クヲ知リ、翌廿三日平明ヨリ攻城ノ軍議決  
シタリト報告ス、則チ當駅ヘ哨兵ヲ張リ間牒ノ患アル故  
ニ敵ニ出入ヲ点検ス、翌廿三日平旦当所ヲ發陣シ、途中

大小砲声恰モ百雷ノ轟然タルカ如シ、我軍憤激勇ヲ奮ヒ連日遠路ノ勞疲ヲ忘レ、數刻ナラス熊本城下ニ達シ暫時安政橋下ニ休憩ス、此夜同所近傍某所ヘ宿陣ス、廿四日同所発陣山鹿駅進軍、半途ニシテ砲声ヲ聞テ先ヲ争テ檢ヲ凌キ絶嶺ニ登レハ、木ノ葉駅ノ背後ニ出ツ、時ニ兩陣戰酣ナリ、即合旗ヲ揮ヒ闕ヲ作り檢ヲ下リ、或ハ発銃シ或拔刀切込モアリ、先ヨリ戦ヒシ西軍大ニ喜ヒ勇ヲ奮フテ戦フタリ、東軍ハ我應援ノ統タルヲ見テ愕然恐怖ノ色アリ、死骸ヲ捨テ(五名市)高瀬ヲ差シテ敗走ス、味方大ニ利ヲ得逃ルヲ追フ數拾町、時ニ日西山ニ傾キ且ツ地理ヲ知ラサルヲ以テ尾撃ヲ止メ陣ヲ整ヘ植木駅迄陣陣ス、此日分捕数多アリ、廿六日東天ヨリ又山鹿駅進軍、晚景当駅ヘ達シ則チ地位ヲ見定メ墨ヲ築キ固守ス、廿七日五更官軍襲来ス、味方防禦術ヲ尽ス、戦ヒ少頃ニシテ官兵敗績シ南ノ關ヲ差シテ敗走ス、味方尾撃スル一里余ニシテ兵ヲ収メ旧塁ニ復陣ス、此戦我隊戦死・負傷數名アリ、東軍取捨タル死骸凡ハ拾余名アリ、四五日ヲ經テ長野原進撃ノ軍議アリテ、吾隊ハ後備軍トナリ當日午前十一時発陣進行ノ處、官兵我軍ノ斥候ヲ銃撃セリ、乃チ先鋒隊ヨリ戦ヲ始メ頗ル激戦、晚景ニ及ンテ戦尚烈シ、我後備隊ノ如キ

モ本道ノ官軍墨ヲ繫ク銃撃ス、天明ナントスル比当地曳揚ヘキ旨本營ヨリ報知アリ、即チ兵ヲ収メ更々殿トナリテ徐々山鹿駅迄退陣ス、然ルニ官軍我ノ後ヲ追ヒ攻撃スルニ就キ、即チ軍ヲ返シ防戦、時刻ヲ移サス、官兵敗走ス、味方追撃スルニ拾余町即墨ヲ築キ守備ス、此時各隊中隊麥制アリ、積事幾ト二旬余大小拾四五戦、東軍攻撃ノ術ヲ尽セハ西軍方ニ隨ヒ拒破シ、都度勝利我ニ在リ、一日田原方面ノ味方彈薬竭尽シ戦利アラスシテ敗軍ス、即チ吾隊ノ左翼應援トシテ該地ヘ出軍ス、是ニ於テ山鹿ノ西軍守線ヲ退ケスンハ不可ナル故ニ、一時鳥ノ巣村ニ滯陣ス、亦軍議ヲ定メ(菊池市)限府ヘ進軍即チ墨ヲ築キ守備ス、三四日ヲ經テ官軍攻メ來リ戦ヒ須臾ニシテ官軍遂巡、我隊機ニ乘シ尾撃凡一里許ニシテ軍ヲ旧墨ニ退守ス、亦四五日ヲ經テ官兵襲来スル数々ナリト雖激戦ナシ、一日官軍大挙隈府ヲ囲中ニ置キ、四方ニ篝火ヲ点ス、而シテ該地ハ防禦地位ナラサル故ニ一先兵ヲ便ニ曳揚ヘキ軍議決定シ、(竹迫、合志町)深夜篝火ノ間隙ヲ窺潛行シテ竹葉ニ達シ、居ル二日、鳥ノ巣西軍連日苦戦、兵労スルヲ以テ應援ノ為メ該地ニ進軍ス、茲ニ墨守數日、然処川尻方面ノ西軍寡ハ衆ニ敵セス且ツ弾薬竭乏シ、卒ニ敗軍ニ及ヒタルヲ以テ該地ヲ守ル

可ラス(大津町)岩坂村へ退軍、翌日東軍大津駅進撃アル由牒者之ヲ報ス、故ニ四更ノ比応援トシテ大津へ進軍スルニ果シ

テ暁天官軍大挙襲来ス、即開戦少時ニシテ味方閥ヲ作り抜刀切込ム、東軍辟易敗走ス、味方勢ニ乗シ追撃スル幾一

里ニシテ兵ヲ收メ大津ニ休兵ス、本日ノ戦ニ我隊死傷ナシ、亦三日ヲ経テ官軍來リ攻ム、即拒戦フ、然レトモ激戦

ナシ、時ニ木山方面ノ味方利ヲ失ヒ敗軍スルニ因テ、大津ヲ守ル便ナラサル故ニ、空ク兵ヲ矢部ニ曳揚、之ヨリ先

山鹿ヨリ植木へ応援トシテ出軍ノ我左翼爰ニテ合隊シ、即チ地形ヲ熟視シ墨ヲ築キ固守ス、此処ニテ隊名ヲ変革シ、吾隊ハ奇兵拾壹番中隊ト改称ス、居ル三四日、馬見町

・椎葉山等ノ深山ヲ經テ岩野村ニ軍ヲ退ケ、滯陣スル数日、軍議相決シ、奇兵隊ノ儀咸ク日州口進撃トシテ、不日ニシテ富新町ニ達ス、即チ吾隊外ニ一中隊細島ヘ

進軍配兵ス、居ル両日ニシテ大分県下竹田駅ニ向フテ進軍、延岡・重岡等ヲ經テ竹田駅へ達ス、居ル事一日、此

時各隊廿名宛ヲ選テ都合百六拾名ヲ以テ鶴崎ニ進軍スルニ決シ、払暁該地ヲ発足ス、三里余ニシテ少時休息ス、

従是吾レハ斥候都合八名ト共ニ黄昏鶴崎ニ達ス、時ニ巡査隊当港ヨリ上陸シテ該地ニ宿陣スルニ出逢ヒ、即チ一

名外行スルヲ見懸ケ捕縛セントスルニ、大声之ヲ報スレハ前後ヨリ忽然トシテ官軍一中隊余寄来リ、吾レノ四方

ヲ取囲ム、即チ勇ヲ奮テ戦ハントスレトモ弾薬乏シケレハ攻撃スル事能ハスシテ、軍略ヲ変ヘ、既ニシテ漸ク切

抜ケ竹田へ退陣ス、此ニ墨守スル事數日、而テ官軍坂梨等ヲ經テ竹田進撃スルノ旨細作ノ報アルヲ以テ、直ニ隊ヲ繰出シ玉來ニ要ス、而テ地形不便ニシテ一時鳥越ニ退キ

墨壁ヲ築キ、官兵ノ來リ攻ヲ待ツ、二日ヲ經テ來リ攻ム、昼夜連戦雌雄ヲ決セス、此時ニ我モ押伍ニ転シス、一日

敵大挙来戦フ、味方數日ノ連戦ニ弾薬竭乏、拔刀督戦スト雖トモ遂ニ敗軍シ、小野ノ市迄退ク、然シテ軍議相定

リ、一ハ三重ノ市、一ハ佐伯進撃ニ決定シ、我隊外ニ一中隊佐伯へ進軍ス、居ル二日ニシテ切畠村迄曳揚ケ配守

数日ナリ、然ル處白杵進撃ノ我軍大ニ利ヲ得テ銃器・弾薬其外分捕夥シ、吾隊ノ如キモ該地ニ進行スヘキノ通知アリ即進行シ、日没スルノ頃該地ニ達スレハ戦酣ナリ、夜ニ至リテ戦尚止マス、翌日ニ至リ戦益烈シク勝敗未タ分

タス、翌日味方弾薬竭尽シ遂ニ敗北シテ切畠村迄退軍兵ヲ収ム、此夜亦三重ノ市進撃相決シ、即進軍攻撃愈烈シ

ト雖トモ官軍要地ヲ占メ、味方ノ寡兵ヲ以テ容易ニ抜ク

能サル故ニ、一先兵ヲ小野ノ市ニ退ケ、或ハ三國崎或ハ  
(三重・宇都町境)  
 旗返シ<sup>シ</sup>崎等ノ要地ヲ守リ、吾隊モ一ノ要地ヲ守レリ、積事  
 七日余ニシテ官軍味方ノ哨兵稍怠ルヲ窺ヒ、忽然三國崎  
 ノ要害ヲ攻メ抜キ勢ヒ甚劇シ、味方此ノ銳氣ヲ避ン為メ  
 重岡迄退キ墨守ス、官軍勢ヒニ乘シ來攻ム、味方固ク防  
 禦ス、然処霖雨数日為ニ江川漲り糧食運輸意ノ如クナラ  
 ス、故ニ一先兵ヲ<sup>(北川町)</sup>熊田駅迄曳揚ヶ巖重墨守ス、吾隊ハ<sup>ヤ</sup>八  
 戸村ニ出軍配兵ス、數日ヲ經テ梓崎進撃相決シ、吾隊外  
 ニ一中隊ヨリ拾五名宛ヲ精撰シ、都合三拾名ヲ以テ先鋒  
 ヲ定メ攻撃ニ及シ處、奄チ彼要害ヲ拔キ、尋テ水ヶ谷ヲ  
 敗リ尾撃スル式拾余町ニシテ、官軍亦墨ヲ固フシ防戦ス、  
 味方便地ニ兵ヲ配置シ固守ス、然處<sup>(高千穂町)</sup>三田井方面ノ味方曰  
 タ利ヲ失フヲ以テ応援トシ、翌日吾隊一中隊該地ニ進行  
 斯レハ、既ニ味方<sup>(北芳町)</sup>椎畠村迄曳揚墨守セリ、居ル三旬余ニ  
 シテ味方敗軍<sup>(北芳町)</sup>曾木村ニ退キ、防戦スト雖トモ衆寡敵セス  
 遂ニ敗軍、延岡迄退軍、而テ諸口ノ味方戦ヒ利ナクシテ  
 既ニ門川モ敗レ延岡ヘ退軍、尋テ延岡敗レ長井村ヘ退陣  
 ス、此時吾レハ分隊長ヲ命セラル、官兵機ニ乗シ破竹ノ勢  
 ヒヲ以テ長井村ヲ囲ム、然リ而テ八月十八日ヲ以テ江ノ  
 嶽ノ嶮岨ヲ凌キ開ヲ衝キ形勝ノ地ニ出ン事ニ軍議決定シ、

(三重・宇都町境)

前夜深更軍ヲ収メ江ノ嶽ニ出ントスル時、衆皆忙忽隊伍  
 モ整ハス、吾レハ同隊ノ者數名ト江ノ嶽ニ登レハ、東軍  
 ノ壁墨目下ニ在リ、嶺上ヨリ下擊スレハ則チ秋風ノ木葉  
 ヲ飛スカ如ク散々ニ敗走ス、逃ルヲ追ヒ且ハ樵  
 路ヲ索メ、夜白經テ堀川村ニ達ス、爰ニ官軍防戦スト雖  
 トモ吾兵不意ニ出ルヲ以テ狼狽敗走ス、味方戦ヒヲ好マ  
 ス徐々山浦崎・岩戸越等ノ難所ヲ經テ三田井ニ達ス、該  
 所ニ官軍ヲ散々ニ打破リ、器械・弾薬等分捕夥シ、爰ニテ  
 前軍・中軍・後軍ト隊ヲ編制シ、我レハ後軍ニ編入シ、居  
 ル二日ニシテ官軍当地ヘ攻來リ、即隊ヲ繰出シ即迎戦ス  
 ト雖トモ雌雄ヲ分タス、三更ノ頃相引トナリ味方坂<sup>(五ヶ瀬町)</sup>元村  
 ヲ經神門ニ達ス、此處ニモ官軍アリ開戦ニ及ヒケレトモ  
 激戦ナン、<sup>(鬼神野・南郷村)</sup>雉野ニ達シ官兵ノ銃器・弾薬ヲ分捕ル少ラス、  
 即日同所発陣米良路ヲ經、八月廿八日小林郷ニ達ス、當  
 地ハ警視派出ニ相成居タレトモ事急遽ニ出ルヲ以テ進退  
 度ヲ失シ、巡查拾余名捕縛ニ就ク、三十日平旦横川郷ニ  
 達スレハ、官軍既ニ要地ニ墨ヲ築キ銃口ヲ揃テ待居タリ、  
 味方烈シク攻撃衝キ抜ントスレトモ、素ヨリ劣兵ナレハ  
 容易ク其意ヲ達スル能ハス、夜中迂回シテ官軍ノ背後ニ  
 出テ前軍ヲ以テ東軍ノ追撃ニ備ヘ、中軍ヲ以テ先鋒トシ

テ蒲生・吉田等ヲ経テ、九月一日前軍鹿兒島旧城下ニ達

シ、大砲・小銃・弾薬等分捕甚<sup>タ</sup>夥シ、此時吾ハ後軍ニ

在リ鹿兒島ヲ志シ、吉野村ノ途中忽チ官軍川上村ヨリ突

出シ、中軍ト後軍ノ中間に出ソ、味方勇ヲ奮ヒ氣ヲ励シ

中軍ニ合セント欲シ、嚴シ<sup>ク</sup>攻撃スレトモ寡兵且ツ弾薬

竭乏スレハ、意ヲ遂ル能ハス、故ニ軍略ヲ変ヘ晚景ヨリ

吉野菖蒲谷ヲ抜ケ戸越ニ達シ、未明ノ頃旧城下ニ達ス、

吾隊ハ即チ多賀山ヲ墨守ス、同三日東軍攻撃ス、味方寡

兵且ツ劣ヲ以テ逸ニ敵シ難ク、敗軍ニ及ヒ鶴城山ニ退キ

各所ニ墨ヲ築キ固守ス、間モナク官軍大挙四方ヲ囲ミ昼

夜城中ヲ攻撃弾丸雨注、味方死傷數多アリ、同廿四日雞

鳴ノ頃官軍進撃相成候際其軍門ニ降伏ス、隊号將師不相

分、

## 二八 池田喜兵衛上申書

鹿兒島県第二大大区八小区

薩摩國鹿兒島郡鹿兒島郡元村居住

旧士族

當時徵役囚

明治十年丁丑二月西郷隆盛等鹿兒島出發前ニ膺リ、壱番砲隊即チ岩元平八郎隊ノ兵士ニ加リ、同月十九日鹿兒島ヲ発シ、數日ヲ経テ熊本県下花岡山ニ至ル、此時既ニ戰

争始リ兵燹天ニ燐ク、則チ吾等砲墨ヲ築キ夜半ニ至リ城中ヲ砲撃ス、後チ五日ヲ経テ木ノ葉ニ至リ、又山鹿ヲ經テ吉次越ニ至ル、二日ニシテ官軍襲來ス、乃砲戰須臾ニ

シテ遂ニ苦戰ニ及ヒ、翌日午後二時頃ヨリ官軍三方ヲ囲ム、吾隊正面ヨリ切込ミタリ、此時篠原國幹・村田新八

等勇ヲ奮テ味方ノ軍ヲ指揮シ、戰酣ナルトキ遂ニ篠原弾丸ニ中リ暫ク官兵ヲ睨ンテ死ス、亦タ隊長岩元平八郎茲ニ傷ク、已ニシテ官軍敗走シ仍ホ逃ルヲ追テ三拾町余ヲ尾撃ス、此時官兵ノ死骸堆ク且ツスナイトル銃四拾余挺及ヒ弾薬<sup>(箱詰)</sup>ヲ分捕ル、夫ヨリ凡十八日間程該地ヲ墨守ス、然ルニ一日未明ヨリ官軍大斥候一小隊程寄来ル、味方之ヲ支戰ス、此時官軍亦タ八代口ヲ襲フノ報知アリ、

故ニ吾等左半隊彼ノ地ノ応援ノ為メ熊本城下ニ至ルノ処、彼ノ地ノ応援ハ式番砲隊ニ交換シ、吾等ハ又花岡山ニ登リテ砲戰ス、此時味方安政橋ノ守兵手薄ニヨリ、吾隊長

讚良清藏狙撃応援ヲ率ヒ奮戦此ニ傷ク、然ルニ味方川尻

口ノ軍敗ルニ及テ、吾隊モ該地ニ止ル事能ハス遂ニ(益城町)木山

ヲ經テ(熊本市)川原ニ至ル、亦タ(熊本市)永嶺ニ赴キ保田溝ノ守戦ヲ為ス

ト雖トモ、一時外隊敗レテ將ニ退カントス、此時吾隊声援

ヲ張リ味方ヲ左右スレハ又大ニ勢ヒヲ得テ返戦ス、暫ク

アリテ衆抜刀敵中ニ切入リ之ヲ擊ツ事無算、加フルニ四

斤半砲拾首余及ヒ「スナイドル」銃八拾挺余・弾薬六千

発余ヲ分捕タリ、此時味方素ヨリ銃器・弾薬ニ乏ケレハ、

宛モ餓人ノ食ニ就クカ如ク争フテ之ヲ取ル、且ツ死骸ハ

堆ク血ハ麦田ヲ濺キ風為ニ腥シ、此時吾レハ頭上ニ負傷

シ人吉病院ヘ入院ス、同六月中旬比平癒シ小隊差引トナ

リ、野尻(野尻町)紙屋口ニ至ルノ処、官軍襲来シ、戰ヒ酣ナルニ

吾亦タ負傷ス、時ニ官兵前後ヨリ襲ヒ來ルニ以テ不得止

山中ニ入り、間道ヲ經テ鹿兒島ニ帰邑シ、竟ニ八月中旬

鹿兒島出張裁判所ニ付自首帰順セリ、

鹽屋村五百六拾番地居住旧士族

當時懲役囚

鎌田十太郎

私儀

明治十年二月十一日頃八等警部拝命第一分署へ相詰居申

候処、同三月十三日頃課長右松祐永ヨリ達之趣ニハ、此

節西郷隆盛工隨從人数残リ西目筋郷々へ罷居由ニ付、出

發致シ度者ハ、熊本県之様可差越旨可達吳承リ候ニ付、

翌日ヨリ發足串木野郷ヲ初外五六ヶ郷へ差入、右ノ趣相

達シ出水・米之津迄差越、夫ヨリ帰宅右達ノ次第祐永ヘ

届出置候処、同十七日頃九等警部田中十太郎私外ニ巡查

廿名第五分署出張被申付、翌日右人数発足右分署出張所

出水郷米之津へ相詰居タリシニ、同四月七日頃七等警部

ヘ昇等、然ル処同廿五日午後一時頃鳳翔艦入津、同艦乗付

海軍少尉補長谷川某外一名上陸、右出張所へ被參、艦長

ヨリ各方へ尋問ノ筋有之ニ付右艦へ參吳候様承リ、先詰

九等警部(久良衝野)九賀野登・田中十太郎・私迄三名同六時比乗艦

セシニ、艦長ヨリ当地ノ形勢且戦争ノ次第相尋候ニ付、

何モ相變儀無之、勿論肥後表戦争ノ次第等ハ全ク不相分  
段相答候処、此節ハ官軍大勝利ニ付実地検査ノ為メ八代

二九 鎌田十太郎上申書

薩摩国鹿兒島郡鹿兒島  
鹿兒島県第二大区二小区

迄可列越候付、其上当地ノ取締等尚又嚴重行届候方可然トノ儀付、夫丈ヶ官軍大勝利承候上ハ曾テ可疑儀無之、実地検査ニモ及間敷、再三相断候得共、一名ハ罷帰二名ハ是非差越シ候様強テ被申付、不得止其意ニ承諾シ、久良賀野登・私可差越相究メ、田中壱名ハ帰署、私共ニハ

得共死スル能ハス、終ニ舌頭ヲ喰ミ切、夫形打臥居候処、午後六時比捕縛ニ就キタリ、

### 三〇 阿多加内上申書

其夜本艦へ一泊、翌未明後川尻海上三里計ノ承ヨリ同艦乗付海軍中尉鮫島某並私共二名漁船へ乗移リ、漕行キ候

央右鮫島ヨリ承ルニ、此節ノ戦争ハ御互ニ実々氣之毒ノ

仕合ニ付即今戦相止候様周旋致度、就テハ川尻本陣川村

参軍所へ可列越ニ付、我々共ニモ右示談可致坏其他色々

戦争ノ次第等承候内、同所松葉瀬(松瀬)へ着船、一里余モ歩行

候處船酔ノ上空腹ニ相成、午前十一時比ニテモ候半宇土

駅手前ニテ頻リニ食ヲ求ント思折節、右駅五六町モ近寄

リシニ、駅入口ノ家ヨリ戎服ヲ着タル人私ヲ見、隱レ候様見受タリシニ、私共縛セラレン事ヲ疑フ処ヨリ兼テ持病

ノ癪氣胸ニ詰込ミ、暫時前後不取覚処、計ランヤ兼テ所持セシニ寸位ノ封切小刀ヲ以テ鮫島中尉へ突掛リ居候ヲ

夢ノ如ク覺ヘ、仰天ノ紛レ其場捨置、此上ハ我身ヲ片時

モ早ク可相片付思ヒ込ミ、其處左リ手三四町有之栗崎山ト云フ所迄差越候得共、右小刀モ振捨何モ刃物持合無之

鹿兒島県第一大区五小区

薩摩国鹿兒島郡鹿兒島

西田村居住旧士族

當時懲役囚

阿多加内

私儀

明治十年二月少警部中原尚雄等國憲ヲ犯シ、陸軍大將西郷隆盛等ヲ暗殺セントノ奸謀發覚シ、就テ政府へ尋問ノ筋アリ、私学校生ヲ率ヒ上京セントス、其事由タルヤ実ニ之ヲ傍観スルニ忍ヒス我モ隨行セン事ヲ請フニ、第二大隊八番小隊兵士ニ編入セラレ、同十五日大口筋ニ向ヒ

鹿兒島ヲ発ス、同廿一日熊本県下川尻駅ニ至ルヤ、同日

午後二時比官軍襲来スルノ報知アリ、直ニ各隊ヲ繰出シ進行スルニ官軍逃去リタリ、然ル(熊本市西海岸)三百貫石冲ニ軍艦一艘

溝艦スルノ報知アルヤ、官軍ノ上陸ヲ防カシカ為メ我等  
隊外一小隊ト共ニ(熊本市西部)  
月上旬ニ至リ佐土原隊ト交代キ、守兵スル事數日ナリ、三  
ス、一両日ヲ經テ(阿蘇町)  
府(熊本市)二重峠ニ赴キ守兵スル事二三日、亦隈(熊  
市)  
トシテ進軍ス、間モナク味方大勝利ヲ得テ休戦ス、後チ  
該地ニ墨ヲ築キ守兵ス、此時小隊ヲ中隊ニ変制シ小隊ヲ  
以テ交番スルヲ約シ、吾レノ右小隊ハ当日ヨリ墨守シ、  
翌朝左小隊ト交代ス、當日午後二時比ニ至リ植木口応援  
トシテ吾隊外二三中隊ト共ニ該地ニ到ルニ、兵烟天ヲ焦  
シ戰ヒ酣ニシテ、則チ吾隊之ヲ横撃シ日没スルニ及ンテ  
墨守ス、翌朝吾隊外五六中隊ト共ニ該地ノ官軍ヲ正面ヨ  
リ進撃シ、闕ヲ作り敵中ヘ駆ケ込ムニ官軍辟易シテ、銃  
器・弾薬ヲ捨テ散々ニ走リ、味方追撃スル事二三拾町余  
ナリ、然レトモ不利ノ地形ナレハ線ヲ退ケ墨ヲ築キ守兵  
ス、間モナク官軍亦寄来リ戰フニ、翌朝迄奮戦スレ共勝敗  
決セシテ互ニ墨守ス、後チ五六日ヲ經テ左小隊ト交代  
シ、吾等(西谷志町)鳥ノ巣ニ至リ墨守ス、四月上旬官軍寄来リ激戦ニ  
及フニ、此時味方手薄キナレハ防ク事能ハシシテ引退ク  
ヲ、応援続ヒテ亦官軍ヲ散々ニ追払ヒ旧墨ニ復ス、此日官

軍ノ死骸夥シク、味方死傷七八名アリ、吾モ負傷シ為ニ  
木山病院(益城町)二入院ス、四月中旬味方御船口敗レ就テ病院矢  
部ヲ經テ馬見原ニ転院ス、五月上旬亦馬見原ヨリ三田井(高千穂町)  
ノ様曳揚ケアリタリ、吾レハ外一名ト共ニ椎葉山ヲ經テ  
人吉病院ニ入院ス、五月中旬ニ至リ吾レ平癒スルヲ以テ、  
村田新八ノ命ヲ受ケテ人吉ノ内頭地口(五木村)ヘ外二名ト共ニ到  
リ、同所本當附属トナリ、專ラ防禦ノ為ニ尽力ス、五月  
下旬人吉諸口味方ノ軍敗レ、人吉城下ニ集会シ、該地ノ  
橋ヲ絶チテ墨守ス、一両日ニシテ官軍寄来リ味方防戦ス  
ト雖トモ、遂ニ防ク事能ハスシテ小林ヲ經野尻紙屋村ニ  
退陣シテ此ニ墨守ス、此時亦吾レハ常山二番中隊ニ入隊  
ス、二三日ヲ經テ官軍寄来リ奮戦スルニ、味方寡兵且弾薬  
ニ乏シケレハ、終ニ防ク事能ハス又佐土原ヲ經テ美々津(日向市)  
ニ曳退キ墨ヲ築キ守兵ス、此時吾レハ中隊代理トナリ、  
八月上旬美々津川上山蔭口ノ味方敗軍ニ依リ該地ヲ守ル  
事能ハス延岡ヲ經(北川町)長井村ニ退陣ス、然ルニ官軍四方ヲ囲  
ミ破竹ノ勢ヒヲ以テ我ヲ攻撃ス、八月十八日西郷隆盛等  
官軍ノ囲中ヲ切抜ケントスル時、吾レハ足痛ノ為ニ進行  
スル事能ハシシテ、終ニ同村ニ於テ帰順セリ、

### 三一 村田經庸上申書

鹿兒島県第二大区四小区

薩摩國鹿兒島郡鹿兒島

荒田村居住旧士族

當時懲役囚

村田經庸

私儀

ス、官軍來ラス、明日川尻ニ到リ遙ニ熊本ヲ望メハ、烟  
焰天ニ漲リ砲声耳ヲ穿ツ、即チ馳テ熊本ニ到レハ戰ヒ方  
サニ酣ナリ、吾隊突進仰テ城ヲ攻ム、官軍ノ援兵植木駅  
ヘ到ルノ報アルヤ、即日同所ヲ發シ、向ヒ坂ニ到レハ先  
進ノ我兵既ニ官軍ト接戦ス、吾隊大呼シテ官軍ヲ突ク、  
官兵遂ニ支フ能ハス死骸五六ヲ棄去ル、此戰ヒヤ官軍ノ  
聯隊旗一流ヲ奪フ、即チ之ヲ我本營ニ送レリ、此時我レ  
ノ死傷二三名ニ過キス、同廿三日官軍木ノ葉ヘ屯集セリ  
ト、即チ該地ニ向テ進軍ス、官軍田原ニ在テ我兵ヲ拒ク、  
我兵突擊之ヲ破リ尾シテ木ノ葉ニ及ヒ、官軍又田中諸所  
ヘ伏テ防戦ス、我兵凡一小隊銃ヲ捨拔刀シテ官軍ニ迫レ  
ハ全軍之ニ統ク、官兵寸時モ抗スル能ハス死傷若干ヲ棄  
走ル、時已ニ日モ西山ニ没スレハ追撃スル能ハス木ノ葉  
駅ニ入テ、官軍ノ本營タリシ某ノ宅ヲ見レハ銃器二百余・  
弾薬凡五百箇ヲ遣セリ、是レ則チ天ノ賜ナリト諸隊争テ  
之ヲ分捕ス、遂ニ兵ヲ植木ニ収ム、明日山鹿ヘ軍ス、同  
廿七日官軍山鹿ヘ襲来ス、我兵逆撃官兵ニ迫リ或ハ抜刀  
突進ス、官兵愈々支フル能ハス我レ先ニト死傷ヲ棄走ル、  
我兵追撃數人ヲ斬ル、追フ事凡里許日暮ニ及ヒ我兵山鹿  
ヘ収ム、路傍官軍ノ死屍ヲ見ル凡百ヲ過ク、此戰ヒヤ吾  
暴発スト、又台兵來テ吾背ヲ襲フ等ノ報アルヤ即チ戒厳  
利秋隊長  
四大隊第六小隊兵士ニ編入セラル、同二月十六日鹿兒島  
ヲ発シ大口ヲ過キリ、熊本県下小川駅ニ到レハ過日川尻  
ニ於テ熊本台兵既ニ我通路ヲ遮リ、一ノ応対モナク妄ニ  
暴発スト、又台兵來テ吾背ヲ襲フ等ノ報アルヤ即チ戒嚴

隊長松下助四郎少シク負傷ス、縊テ我レノ死傷纏カニハ  
 九ニ過キス、居ル事凡七八日輒シテ田原坂ニ軍ス、此ニ  
 於テ昼夜劇戦迭ヒニ勝敗ナク、既ニ十三四日ヲ経レハ吾  
 隊殆ント疲ル、転シテ木留ニ到リ応援備フ、已ニシテ又  
(河内町)  
 白濱港ヘ軍シ某ノ隊ト交換ス、敵ハ遙ニ拾余町ヲ隔テ墨  
 守ス、彼我ノ中間広田ニシテ固ヨリ不利ノ地ナレハ迭ヒ  
 ニ攻撃スルナク、或日官軍ノ候兵竊ニ來テ我墨下ニ窺フ、  
 我兵疾クニ知テ之ヲ擊ツ、一人ヲ傷ク、即チ官軍之ヲ助  
 ケ去ル、又軍艦五六艘常ニ白濱沖ニ在テ殊ニ我當ヲ砲撃  
 ス、或日又小船（小蒸氣）ヨリ海岸ヲ候フ、漸ク近ケハ  
 我伏兵斉ク起テ之ヲ放撃ス、官軍狼狽急ニ本艦ヘ向テ去  
 ル、而シテ官軍八代ヘ上陸スルヤ諸口ヨリ援兵ヲ該地ニ  
 出スニ当リ、木留口ノ守兵寡ナルヲ以テ吾隊分隊宛ヲ該  
 地ニ出シ交番墨守ス、此時第一分隊ノ堡守スルヤ官軍來  
 リ襲フ、我兵逆撃官兵ノ墨ヲ拔キ三四人ヲ斃ス、加フルニ  
 銃器十八九ヲ奪フ、且ツ我兵此ニ傷モノ一人ノミ、後チ  
 該地ノ守備ヲ外ニ属シ、更ニ萬樂寺ニ墨ヲ築キ交番防守  
(北郷町)  
 スル事前ノ如シ、此時吾レ白濱ニ在テ押伍ヲ命セラル、  
 後チ吾レ萬樂寺ノ守備ヲ先隊ニ交換ス、二三日ヲ経テ官  
 軍襲来ス、吾レ防守スル甚厳ナレハ遂ニ拔ク能ハスシテ

退ク、後チ三四日ヲ経テ吾レ白濱ニ帰リ吾本隊ニ合ス、此  
 ニ滯陣スル凡三四十日、然ルニ一日川尻ノ敗ヨリ及ヒ熊  
 本ノ囲ミヲ解クヤ、遽ニ我兵木山ヘ収ムベキノ報アリ、  
 即チ列ヲ整ヘ左右ヲ正シ徐々木山ニ向テ兵ヲ収ム、明日  
 木山ヘ達ス、此ニ於テ更ニ軍議ヲ定メ御船ニ軍ス、官軍  
 来リ襲フ、我兵三面掩撃ス、官兵遂ニ死傷ヲ棄走ル、既  
 ニシテ二三日経レハ官軍又大挙シ来テ我ヲ襲フ、我兵防  
 戰スル事凡二時間、誤テ一墨ヲ敗ラレ又返撃セントスレ  
 トモ、既ニ彈薬モ乏ケレハ返スニ由ナク口惜クモ我軍金  
(金内町)  
 内ヘ収ム、此戦ヒヤ我兵死傷多シ、其内官軍ノ為ニ道ヲ  
 遮ラレ川ニ迫リ泅ク事能ハサル者、或ハ自刃スル者アリ、  
 又同所ヲ発シ矢部及ヒ椎葉山ノ隙ヲ經テ江代ニ到リ、此  
 ニ於テ隊号ヲ改称シテ行進トス、止ル事凡六七日、終ニ  
 人吉ニ到ル、此時官軍鹿兒島ヘ屯集スルノ報アルヤ、則  
 チ該地ニ進軍ヲ命セラレ即日同所ヲ発シ、寸時モ早ク鹿  
 児島ノ官軍ヲ蹂躪セント勇ミ進ンテ道ヲ急キ、既ニ五月  
 上旬鹿兒島吉野ヘ達シ、遙ニ鹿兒島ヲ望メハ、城下悉ク  
 灰燼トナシ、官軍ハ愛宕山及ヒ鷦越等諸所ヘ墨ヲ築キ竹  
 木ヲ以テ柵ヲ結ヒ守備甚嚴ナリ、或日愛宕山ノ官軍ヲ襲  
 ント吾隊既ニ山下ニ進ムト雖トモ期ヲ違フテ成ラス、遙

ニ開ヲ揚ケ徒ニ放射シテ去ル、又官軍我墨ヲ襲フ事屢々  
ナレトモ拔ク能ハス、既ニシテ官軍重富ヨリ上陸シ來テ  
我背ニ出ツ、之ニ応シテ前面ヨリ又來リ襲フ、我兵防戦ス

ル殆ント半日ヲ過レハ、背後ノ官軍モ漸ク近ツキ前後ニ

敵ヲ受ケ防戦ニ如何トモスルナク、遂ニ兵ヲ<sup>(鹿兒島市吉野)</sup>帶迫ヘ収ム、  
官軍ハ凡半里ヲ隔テ雀ヶ官ヘ屯集セリ、且日我兵雀ヶ官

ヲ襲フ、大呼突進ス、官軍寸時モ支フ能ハス死傷ヲ棄テ  
潰散ス、我兵尾撃甚急ナリ、遂ニ我旧墨ヲ復シ固守スル故

ノ如シ、既ニシテ我紫原・武岡等ノ墨敗レヒ川内口ノ  
敗ル、ヤ官軍又我背後ニ出レハ如何トモスルニ術ナク、

又帯迫ヘ軍ヲ収テ官軍ヲ待ツ、既ニシテ官兵四面來リ襲

フ、我兵奮戦スル事終日漸ク彈薬モ竭レハ終ニ防戦能ハ  
ス兵ヲ加治木ヘ収ム、然シテ上別府川ニ拠テ墨ヲ築キ橋

ヲ截ツテ官軍ヲ待ツ、官軍襲来ス、我兵墨ニ拠テ之ヲ狙  
撃ス、官軍近ツク能ハス、前岸ニ墨ヲナシ遙ニ放擊スル事

三四日、夜陰カニ兵ヲ敷根ニ収ム、官軍來リ襲フ、我兵  
防戦スルニ誤テ一墨ヲ拔カル、是ニ於テ何レヲ拒クニ術

ナク不得止兵ヲ財部ニ収ム、此時吾レ分隊長ヲ命セラル、  
隊ヲ転ス、後チ日州諸所ヲ經テ美々津ニ到ル、山蔭口ノ  
敗ル、ヤ吾レ官兵ノ為ニ囲マレ出ル能ハス、山中ニ潜伏

スル事三日間、後チ又間行シテ邑ニ帰リ、谷山郷警視出  
張ノ軍門ニ降伏セリ、

### 三一 野村助左衛門上申書

鹿兒島県第三大区式小區

薩摩國鹿兒島郡鹿兒島

鹽屋村居住旧士族

#### 當時懲役囚

#### 野村助左衛門

私儀

明治十年二月少警部中原尚雄等陸軍大將西郷隆盛等ヲ暗  
殺セント企タル事顯レ、依テ政府ヘ尋問ノ筋ヲ以テ上京  
スルノ際、私學校輩隨行セントス、於是數大隊ヲ編製シ  
我モ<sup>(永山勢一郎隊長)</sup>第三大隊六番小隊押伍トナリ、二月十六日鹿兒島ヲ  
発程シ、數日ヲ経テ同月廿二日前熊本県下川尻駅ニ至  
ルノ處、今朝ヨリ戰争始リタルト聞ク、直チニ城下迎町  
ニ繰込軍議ヲ定メ、安政橋ヨリ城ニ向テ進撃ス、茲ニテ  
奮戦數刻ニ及ト雖トモ両軍未タ勝敗ヲ得ス、日暮ニ至リ  
戰ヒヲ止メ同所ヲ守兵ス、翌朝吾隊交番シテ亦タ迎町ニ

宿陣ス、三日アリテ後チ該地出町ニ繰込ミ直ニ宇土小路ニ墨ヲ築キ兵備ヲナス、爰ニテ四五日ヲ經テ城兵襲來スト雖トモ敗ル能ハス空ク城内ニ引、吾モ亦タ是レヲ追擊セス、三日經テ城兵亦タ吾等墨ヘ進軍ス、然リト雖トモ吾レ烈シク発砲シ故ニ退軍セリ、茲ニ數日ヲ送リ當所ニテ(制)小隊ヲ中隊ニ編製シ守備甚タ力ム、時ニ三月廿日早朝ヨリ植木ヘ官軍攻來リ、味方少兵故ニ敗レテ向坂迄曳揚ルニ、亦タ該地ニ官軍襲來スルト報知アリ、因テ吾等右小隊外ニ一小隊援兵トシ植木ニ至リ、直チニ本部ノ指揮ヲ以テ向坂ニ繰込、哨兵ヲシテ官軍背後ニ出、午前十一時頃ヨリ攻撃ヲナシ、両軍奮戦シ官軍支ル事能ハス、時ニ官軍ノ一墨ヲ拔キ爰勢ヒ得、亦タ進テ本道ヲ指シ官軍ノ後面ニ出暫ク追撃シ、官軍墨ヲ捨銃器ヲ捨テ散乱ス、吾隊勢ヒニ乘シ抜刀切込み、官軍支ル能ハスシテ植木駆ニ走ル、此時官軍死骸道傍ニアル事式百拾余名、亦タ士官ト見ヘシ者五六名アリ、味方即死九名・手負拾名ナリ、スナイトル銃五拾余挺ヲ分捕シ当夜味方植木ヘ墨守ス、時ニ日暮レテ吾等出町ニ帰陣ス、茲ニテ分隊長トナリ數日アリテ四月川尻敗レタリ、故ニ植木諸所ノ兵守ル事能ハス、止ヲ得スシテ吾隊モ共ニ木山ニ曳、該地ニ四五日ヲ經テ官

(熊本市)

(全土)

軍長領・保田窪ヘ襲來シ、味方少兵且労兵ニシテ敗レタルノ報知アリ、故ニ吾等隊各隊援兵トシテ至リ、則チ奮戰シテ漸ク繰留亦タ直ニ進軍ス、爰ニ官軍ノ一墨ヲ抜ク、時ニ官軍ノ死骸ヲ見事數十名アリ、吾隊傷ク者四名、是ニ暫ク墨守スルニ日暮ニ至リ吾モ銃創ヲ受ケ、故ニ詮方ナクモ味方勧メニ応シ馬見原病院ヘ送ラレ、夫ヨリ米良道ヲサシ駅々ヲ經テ鹿兒島県内都城病院ヘ入院ス、茲ニテ療養スル事凡四ヶ月ニ至ル、然處七月庄内敗レテ諸所ノ兵ヲ山ノ口迄曳揚タリ、故ニ我等病院宮崎ヘ転ス、夫ヨリ佐土原ニ至リ、三日アリテ延岡ニ転院ス、当所ニ四五日逗留シ亦タ敗レテ長井村ニ退ク、時ニ官軍四方ヲ囲ム、該地ニテハ負傷患者ノミニシテ、吾モ未癒故ニ進退茲ニ谷リ、止ヲ得スシテ八月十八日鎮台兵ノ軍門ニ降伏セリ、

### 三三 萩田長暢上申書

鹿兒島県第二大区五小区

薩摩国鹿兒島郡鹿兒島

荒田村居住旧士族

(益城町)

当時懲役囚

蓑田長暢

私儀

明治十年二月陸軍大將西郷隆盛等政府へ尋問ノ筋有之、  
旧兵隊ヲ隨行セシメ上京スルニ膺り、大小荷駄掛トナリ  
(永山赤一郎隊長)  
第三一大隊ニ属シ、同月十六日鹿兒島ヲ發シ、同廿二日熊  
本県下川尻駅ニ至ルノ處、熊本鎮台ハ既ニ県下ヲ焼払ヒ、  
我ノ通行ヲ遮リ妄ニ戰端ヲ開クニ至レリ、於是砲声ハ雷  
ノ如ク轟キ火燄ハ天ヲ焦スニ至ル、則チ衆ヲ勵マシ該地

ニ炊出シ場ヲ設ケ、以テ兵糧・彈薬ヲ各隊ニ運搬セシム、  
同廿四日迎町ニ進ミ居ル事数旬、然ルニ該地ハ味方明午  
橋近傍ニ砲台ヲ築キ城中ヲ砲擊スルニ際シ、城中ノ応砲  
先ニ当リ火災ノ憂ヒアルヲ以テ、位置ヲ別府村金昆羅堂  
ニ移ス、然ルニ一日川尻口ノ防戦敗ル、ニ及テ、味方ノ  
軍ヲ矢部地方ニ曳揚ケ、該地ニ於テ更ニ各隊ヲ編成シ隊  
号ヲ改ム、後チ馬見原ニ至リ尋テ椎葉山ノ險ヲ経テ人吉  
ニ至ル、而シテ吾レハ本營ノ差団ヲ以テ米良小川ニ至リ、  
又佐土原ヲ經テ宮崎ニ至ル、此時各隊モ同地ニ繰込ミ、更  
ニ新兵ヲ募リ各地ノ守備ヲ為スト雖トモ、彈薬大ニ乏キ  
ヲ以テ該地ニ弾薬製造場數所ヲ設ケ、夜ヲ日ニ繼テ各種

八日西郷隆盛等官兵ノ団中ヲ切抜ケ鹿兒島再襲ノ際、吾  
レハ疾病ノ為ニ途中ニ後レ、既ニ鹿兒島平定ノ後山中ヲ  
経テ蹄鄉鹽浸温泉ニ至リ治療ヲ加ヘテ、本年一月下旬鹿  
兒島ニ帰邑シ、二月廿六日鹿兒島出張警視ニ自首帰順セ  
リ、

三四 市成秀清上申書

鹿兒島県第二大区八小區

薩摩國鹿兒島郡鹿兒島郡元村(ホリモト)

二百二拾六番地居住旧士族

当時懲役囚

市成秀清

私儀

明治十年二月少警部中原尚雄等陸軍大將西郷隆盛ヲ暗殺  
セントセシ奸計發覺致シ、隆盛等政府へ尋問ノ為メ上京  
スルヤ、途中警備ノ為メ旧兵隊ノ者隨行スルニ際シ、実ニ

人民ノ義務タルヲ以テ、<sup>(福野利秋隊長)</sup>第四大隊一番小隊ノ押伍トナリ、同十六日大口筋ニ向テ発足シ熊本県内ニ入ル、小川駅ニテ押伍津留正直・鎌田精之介ノ両名ヲシテ先鋒別府督介營ニ遣リ、往先ノ模様ヲ伺ハシムルニ、當県鎮台専ラ籠城ノ用意ニシテ序下ノ民屋残ラス焼払ヒ、剩ヘ川尻迄逆撃シ万民歎息ノ声耳ニ盈リテ鶴ヲ飛シテ応返ス、依之同所ヨリ間道ヲ經テ御船<sup>(御船町)</sup>三出ツ、熊本城ハ今朝ヨリ開戦ノ由ニテ兵煙天ヲ焦シ砲声耳ニ聞フ、然リト雖トモ今朝ヨリ拾壹里余ヲ一日ニ馳セ、川尻ニ達スルヤ夜十時ナリ、故ニ爰ニ一泊シ夜ノ明ルヲ待テ繰出シ熊本城下ニ至ル、二月廿三日ナリ、当城ハ味方十分ナレハ植木口ヘ応援ヲ為ス可キトノ報知アリ、直チニ遠路ノ勞キモ休メス発足シ同日午後植木ニ達スル十一時、此駅ニテ昨夜戦争アリ、路傍官軍ノ死体見ル五六、此ニ一昼夜滯陣ス、同廿五日山鹿<sup>(玉東町)</sup>ニ進撃ス、新町ニ至テ探索スルニ、昨夜迄ハ山鹿ヘモ東兵宿リシト、故ニ兵ヲ十分ニ配リ寄セシカトモ東兵一人モ見ヘス、如何トナレハ木之葉ノ戰ヒニ東兵散々ニ打成

魚ノ水ヲ得タル心地シテ少シク応砲スルヤ直チニ拔刀、群ル官軍ノ中ニ切込ミシニ、蜘蛛ノ子ヲ散ス力如ク鍋田川ヲ渡ントシテ淵ニ溺ル、者不少、吾兵一里半尾擊シテ銃器・弾薬數多分捕ス、長追シテハ惡シカラント旧ノ山鹿ヘ曳揚ル、此日味方戦死二名・手負八九名アリ、官兵ノ死体路傍ニ捨シ者百五拾余ノ内士官ト見ヘシ者三名アリ、鍋田坂迄ハ足ノ踏ム地モナク鳥犬肉ヲ争声喧シ、見聞スルニ不忍土人ヲシテ埋メシム、該地ニ守備スル五六日、三月上旬<sup>(玉名市)</sup>高瀬ニ向テ進撃シ川ヲ背ニシ山ニソヒ広田ヲ中トシ戦ヒ數刻ニ及ヘリ、去レトモ矢頃ニシテ間近ク寄せ來ラス、切込ントスレトモ田地ニシテ尺寸ノ墨ナク、日没ニ至ルト雖トモ勝敗更ニ決セス、故ニ深入シテ夜入ハ害アランモ難計、心静ニ尋曳シテ山鹿ヘ帰陣ス、同中旬南之關ニ向テ進軍ス、途ニシテ<sup>(三加和町)</sup>永野原ニ戰フ、彼ハ要地ニ墨ヲ築キ吾ハ平地ナレハ頗ル苦戦ス、日暮ニ至リテ一ノ砲台ヲ抜ク、二ノ墨ヨリ頻リニ發砲ス、其夜雞鳴ヲ犯シテ戰フト雖トモ拔ク能ハス、于時桐野利秋等計テ曰ク、夜明テ官兵ヲ見定メ切込ナバ此墨ヲ拔ン事掌握ニアリ、然レトモ味方モ少損ナキ能ハス偽負テ官名ヲシテ広場ヘ誘キ出シ塵セント、夜已ニ明ケナントスル頃緑曳セシニ、果

シテ追來リ猶モ引寄セント鍋田山へ登り、官兵ヲ目下ニ

(山鹿市)

見卸スヤ音シク起リテ発射ス、山鹿ヨリ応援モ来テ之ト

共ニ防戦ス、暫時ニシテ、官兵退クヲ少シク尾撃シテ又

墨ヲ設ケ襲來ニ備フ、此日味方死傷最モ多シ、四五日アリ

テ小隊ヲ編製(制)シ中隊トナス、時ニ半隊長ヲ命セラレ素ヨ

リ衆ヲ曳ヒテ官兵ニ当ラン事ヲ欲シケレハ安ク肯ヒ、即

チ其翌日菊地街道ヨリ東兵襲來ノ報アリ、吾隊右小隊ハ

受持ノ台場ヘ応援ノ為メ繰出シ、左小隊ハ吾レ之ヲ司リ

該地ヨリ二拾余町出張シ、兵ヲ要地ニ伏セ待ケレ共日没

迄寄セ来ラス、夜ニ入テ曳揚タリ、夫ヨリ先ニ築シ墨ヲ

堡守ス、嶺崎半左衛門隊ト代ニ之ヲ勤ム、四五日アリテ

又官軍ヨリ寄セ来リ防戦數刻ニ及フ、戰ヒ正ニ酣ナラン

トル時岡ラズモ銃創ヲ負ヒ川尻病院ヘ送ラレ、爰ニ療

養スル凡廿日ニシテ木山ニ転院ス、後チ負傷ノ者ハ帰県

(益城町)

ス可キノ令アリ、故ニ吾モ筋骨未タ平癒、日州ヲ經テ五月

上旬鹿兒島へ着ス、不日ニシテ船艦鹿兒島湊ヘ廻来シ上

陸シテ所々ニ散在シタリ、故ニ伊集院角目小路ニ潜伏シ、

八月上旬鹿兒島警視出張所ニ自首帰順セリ、

### 三五 上野 司上申書

鹿兒島県第一大区五小區

薩摩國鹿兒島郡鹿兒島

西田村後馬場通居住旧士族

當時懲役囚

上野 司

私儀

明治十年丁丑二月西郷隆盛等既ニ鹿兒島出發ノ後チ、邊

見十郎太ヒ再帰邑シ募兵ノ由ヲ聞ニ付、吾モ出兵致シ度

旨同人エ申入、第九大隊一番小隊兵士ニ加入シ、同三月

廿五日大口筋ヘ向テ発足シ人吉ニ至テ三日滯陣ス、夫ヨ

リ八代口ヘ向テ進軍ノ途中ヨリ、日奈久ヘ官兵襲來スル

ノ由ニ付、彼地ヘ向フニ官兵一人モ見ヘス、然レトモ軍

艦四艘ヲ見ルニ及テ海岸ヲ守衛スルニ、程ナク大砲ヲ打

掛ル事數発ニ及ヘリ、味方ヨリハ遙カニ冲ナルカ故ニ小

銃ヲ打モ詮ナク、唯備ヲ為スノミ、此日砲丸ノ為ニ味方

手負一名アリ、夜ニ入テ官軍ノ砲発ヲ止ム、翌朝亦タ大

砲ヲ打チ官兵上陸スルノ勢ヒニテ小舟五六艘ニ乗込、地

方近ク来タルカ故ニ小銃ヲ放チタルニ、官兵上陸スル事能ハス、夜ニ入テ同所ノ守備ハ外隊ニ委シ、吾隊人吉高<sup>神</sup>之瀬ニ曳揚ル、翌日又八代エ行ク途中小川ニテ戦フ、味方手負五六名アリ、官兵ノ死骸八九名ヲ見ル、既ニシテ官兵八代迄曳退ク故ニ八代ヲ尾撃シテ櫻馬場ニ戰フ事三日ナリ、遂ニ味方猫谷口敗レテ防ク事能ス小川ヘ曳揚ケ、又高之瀬ヘ曳揚テ守兵スル事數日ナリ、此時隊号ヲ改メ雷撃六番中隊ニ編制ス、又一日肥後之内<sup>(音北町)</sup>熊瀬ニ官兵襲來スルノ報知アルヲ以テ直ニ該地ヘ進軍ス、二日ノ間劇戦アリテ遂ニ官兵大敗シテ曳退ク、此日双方死亡多シ、夫ヨリ大野<sup>(音北町)</sup>ヘ行キ守兵ヲ為ス、然ルニ高之瀬口敗タルヲ以テ祝小路ニ曳揚ル、此時我ハ半隊長トナリ守場ノ指揮ヲナス、茲ニ官兵來テ吾ヲ擊ツ、吾隊弾薬乏シク殊ニ少兵ナレハ防ク事能ハス、遂ニ一時曳揚ケ程ナク援兵ノ來ルヲ以テ又追返シ、前ノ持場ヲ守リ四五日間アリテ、又官軍襲來シテ我ヲ攻撃スルニ当リ衆寡敵セス、遂ニ鹿兒島<sup>(大口市)</sup>迄曳退ク、尋テ<sup>(大口市)</sup>本城郷<sup>(斐別町)</sup>・踊郷<sup>(斐別町)</sup>ノ軍利アラスシテ下庄内ヘ曳揚ケ、後チ末吉郷<sup>(大隅町)</sup>岩川ニ到リ同所ノ官兵ヲ進撃シ終日戦フ、翌朝彼ヨリ進軍シ遂ニ味方支フル能ハス上庄内ヘ退カントスルニ、既ニ該地モ敵地トナ

リ進ム事能ハス、不得止間道ヲ經テ飫肥<sup>(日南市)</sup>ニ到リ、宮崎ヘ出ント欲シ小内海ヘ行クニ、豈料ランヤ官兵前後ヲ襲フテ出ル事ヲ得ス、即チ山中ニ入り間道ヲ經テ鹿兒島ヘ帰邑シ、八月十四日遂ニ自首帰順セリ、

### 三六 黒木榮藏上申書

鹿兒島県第拾二大区壱小区  
薩摩国日置郡日置諸村

士族黒木十郎弟

當時懲役囚

黒木榮藏

私儀

明治十年旧三月十日区長達シニヨリ、同列十五名日置郷ヲ出発諸郷ヲ經テ大口ニ到ル、此地ニ於テ遊撃隊兵士ヘ加入セラレ、其後該地ヲ發シ人吉ヘ着ス、此地ニテ亦拾壹番大隊三番小隊ヘ転セラレ、我小隊長ニ揚ケラル、時ニ大口ニ在ルノ味方苦戦之通知ニヨリ、我三番小隊応援トシテ征クヘキ命ヲ受ケ、直ニ整軍行進シテ大口ニ到ラントスルニ、味方敗レ既ニ曳揚クルニ会フ、茲ニ於テ共

ニ奮励防戦スレ共支ユル能ハス、遂ニ曳テ吉田ニ到ル、  
時ニ亦大口ヲ復スヘキ命アリ、依テ亦隊ヲ大口大野ニ進  
メ屢々突撃シテ遂ニ官軍ヲ敗リ、味方大イニ利ヲ得タリ、  
依テ茲ニ墨ヲ築キ防守スル日全、時ニ我病ニ罹リ湯之尾  
(余カ)  
病院ヘ入院シ治療ヲ施スト雖トモ急ニ快ヲ得ス、此地ヲ  
去リ諸所ヲ經テ延岡(北川町)長井(美刈町)村病院ニ到ル、然ルニ不日ニシ  
テ諸方利ヲ失ヒ依テ多クハ敗兵茲ノ地ニ集マレリ、猶官  
軍ハ四方ヨリ重團シテ逼ル事甚シ、茲ニ於テ更ニ施スヘ  
キノ術ナク、遂ニ官兵ノ軍門ニ降伏セリ、

### 三七 深川仲左衛門上申書

鹿児島県第二大区壱小區

薩摩國鹿兒島郡鹿兒島

松原神社前百九拾壹番居住平民

當時懲役囚

深川仲左衛門

私儀  
(田代五郎隊長)

明治十年丁丑日正月五日西郷隆盛以下上京ノ際二番砲隊  
ノ夫卒主取ニテ熊本県下段山ニ至ル、同月十一日朝ヨリ

合戦致シ夫ヨリ安政橋及ヒ出町口ニ於テ三月比迄戦ヒ、  
後チ川尻敗レヨリ木山ニ曳揚、又川原ニテ一戦ス、夫ヨ  
リ矢部ニ趣キ同所ニテ奇兵六番中隊ニ合隊トナリ、吾ハ  
給養夫卒ノ主取ニテ富高新町ニ赴キ、夫ヨリ延岡ニ至リ  
又鹿兒島ニ赴キ、同所坂元村ニ番兵致シ、夫ヨリ吉野村  
ニテ合戦致シ、又武村ニテ戰ヒ後チ坂元村ニ曳揚、夫ヨ  
リ吉野村及吉田・末吉ニ赴キ、又市成ニテ合戦ス、夫ヨ  
リ大崎(大隅町)・岩川及ヒ末吉ニテ合戦ス、夫ヨリ宮崎ニテ戰ヒ  
又廣瀬及ヒ高鍋ニ赴キ山陰ニテ合戦ス、夫ヨリ門川ニ趣  
キ合戦致シ同所ニ於テ官兵ニ包マレ出ル事能ハス、其軍  
門ニ降伏ス、夫ヨリ宮崎ニ護送セラレ同所ニテ放免ニ相  
成直ニ帰県致シ、又鹿兒島再襲ノ節自ラ出兵致テ巡查一  
名殺害シ、辨天台場ニアル処ノ四斤半砲弾及ヒ弾薬等  
ヲ分捕城山下ヨリ発砲致シ、後チニ帰宅、同十二月警視  
出張所ヨリ御用有之御調之上長崎ニ護送セラレ、三月十  
四日同所出張九州臨時裁判所ニ於テ懲役二年ノ御処分ヲ  
受タリ、

三八 河内織右衛門上申書

鹿兒島県第一大区壱小區

薩摩國鹿兒島郡鹿兒島

坂元村之内平之馬場居住旧土族

當時徵役囚

河内織右衛門

私儀

明治十年二月陸軍大將西郷隆盛等政府へ尋問之筋有之、

(内田新八隊長) 第二大隊二番小

私學校輩ヲ隨行セシメ上京スルニ當リ、

小川尻口ノ防戦敗ル、ニ及テ、植木・鳥ノ巣・木留等ノ

隊給養トナリ、同月十五日鹿兒島ヲ発シ同廿日熊本県下

小川駅ニ至ルヤ、熊本鎮台ハ県下民屋ヲ焼払ヒ我ノ通行

ヲ遮リ、戦端ヲ開クノ状ヲ先隊別府晉介ヨリ報知ス、即

チ吾隊翌廿一日払曉同駅ヲ発シテ川尻駅ニ至ルニ、既ニ

(百鬼、熊本市西海岸) 百關港ヘ軍艦三艘滯艦スルノ報知アリ、則チ各隊繰出シ

吾隊ハ高橋ニ進テ守兵ス、然ルニ翌廿二日熊本城戦争始

リ吾隊同日午後四時頃ヨリ城ニ向ツテ進軍各隊激戦ス、

後チ數日ヲ経テ吾隊外ニ一小隊本營ノ差団ヲ以テ松橋ニ

至リ一週間程番兵ス、後チ二本樹ニ帰營シ二日間休兵シ

テ田原口へ進軍、該地ノ官軍ヲ攻撃ス、未タ勝敗ヲ分タ  
スト雖トモ一時味方不利ニシテ(熊本町) 向坂迄曳揚ケ、又軍議ヲ  
定メ急ニ攻撃スレハ、官兵狼狽シテ死骸二百余ヲ捨テ去  
ル、内士官ト見エシ者六七名アリ、官軍遂ニ植木ニ退ク、  
味方追テ同所ニ至リ墨ヲ築キ固守ス、後チ數旬ヲ経テ味  
方川尻口ノ防戦敗ル、ニ及テ、植木・鳥ノ巣・木留等ノ  
各隊木山ニ曳揚ケ、吾隊ハ永峯・窪田村ヲ守兵ス、後チ  
同所ヲ曳揚矢部ニ至ル、此時更ニ各隊ヲ編製シ吾隊ハ振  
武四番小隊トス、後チ人吉ニ至リ本營ノ指揮ヲ以テ鹿兒  
島県下上伊敷村ニ至リ、該地ノ官軍ヲ攻撃ス、各隊ハ新照  
院谷へ進ミ、吾隊ハ応援トシテ四郎ヶ迫戸へ進ミ攻撃ス  
ト雖トモ勝ツ事能ハス、兵ヲ上伊敷村ヘ曳揚ケ、翌日甲突  
川尻ノ官軍ヲ襲ハント、時ニ満潮ニシテ渡ル事能ハス又  
旧陣ニ曳揚ク、後チ田上村・武村境ヘ墨ヲ築キ守兵ス、數  
日ヲ経テ六月下旬谷山口ヨリ紫原ヲ伝フテ官軍襲来ス、  
味方武岡ニ防戦ス、此時味方戦死四五名アリ、翌日下田  
村口ノ味方敗軍ノ報知アリ、吾隊此ニ止ル事能ハス川上  
村ヘ曳揚ケ、後チ蒲生郷ヲ經テ恒吉郷ニ至リ、(古引、熊北町) 百鬼ノ官  
軍ヲ進撃ス、官軍敗走シ砲三門其他弾薬等分捕多シ、又恒  
吉ヘ曳揚ケ翌日大崎ノ官軍ヲ進撃ス、官軍又敗走ス、之

ヨリ味方ノ兵ヲ志布志ニ曳揚ケ四日間休兵ス、七月上旬

(都城市)

上莊内ヘ至リ、後チ末吉通山ニ至テ墨守ス、二日間ヲ經

(村部町)

テ財部ニ至リ墨守スルニ、味方不利ニシテ遂ニ各隊ヲ山

(北川町)

之口ヘ曳揚ケ、後チ諸所ノ防戦ヲ経テ延岡ニ達シ長井村

(萬子德町)

ニ至ル、官軍我カ兵ヲ囮中ニ置キ四方篝火ヲ星列ス、即

(全上)

チ八月十八日味方官兵ノ囮中ヲ切抜ケ、岩戸・三田井等

ノ官兵ヲ追散シ、小林郷ニ達ス、此時吾レハ中軍大小荷駄

心得トナリ後チ横川ニ至ル、官軍此ニ防戦ス、我カ兵戦

ヒヲ好マス間道ヲ経テ蒲生ニ達シ、九月一日鹿兒島城山

ニ至リ該地ノ官軍ヲ追払ヒ、同所ニ墨守ス、吾レハ各隊

ヘ兵糧等ヲ送致スルニ配手ス、然ルニ廿四日曉官軍大挙

我レノ孤城ヲ攻撃ス、此時味方残ク散在シ繩カニ三百名

ニ過キス、吾等各隊給養等ト共ニ宿陣スルノ処、官兵忽

然押来ル、衆忙忽遂ニ其軍門ニ降伏セリ、

下堀江町四拾六番地居住旧士族

明治十年丁丑二月十五日陸軍大將西郷隆盛等上京ノ際、

(阿蘇町) (村田新八隊長)

二番大隊八番小隊ノ給養種子島十造ニ従ヒ夫卒小頭助ト

ナリ鹿兒島ヲ出発シ、同廿一日熊本県下川尻ニ着シ、夫

ヨリ大津ヘ至リ二重峠ニ番兵中病氣ニ依リ川尻ノ病院ニ

入院シ、其後鹿兒島ニ帰宅シ、一応官軍ニ降伏ス、然ル

ニ九月一日西郷隆盛等再ヒ鹿兒島ニ襲來ノ際、貴島清隊

下ニ加入シ、鹿兒島辨天台場ノ四斤半砲武門並ニ弾薬其

外スナイトル弾薬二十箱余分捕本當エ差送リ、同所ノ弾

薬藏ニハ火ヲ掛焼払ヒ市中ヲ守ル東京巡查ヲ散々ニ追散

シ殺害スル者モアリ、又生捕ノ者ハ本當ニ差送リ、鎮台

兵ハ米藏ノ内ヘ引籠リ、其時同所ノ兵卒ヲ一名殺害シ、

直ニ城山ニ引籠リ其後帰宅致居候処、警視出張所ヨリ御

用有之出頭仕候処、御調ノ上長崎ヘ護送セラレ、本年三

### 三九 松元丑之助上申書

鹿兒島県第二一大区拾一小区

薩摩国鹿兒島郡鹿兒島

下堀江町四拾六番地居住旧士族

當時懲役囚

松元丑之助

私儀

リ、

月十四日同所九州臨時裁判所ニテ式ヶ年ノ御処分ヲ受タ

裁判所ニ於テ懲役壹年ノ御処分ヲ受ケタリ、

四〇 土師熊太郎上申書

鹿児島県第二大区拾三小区

薩摩国鹿兒島郡鹿兒島

下新町居住旧士族

當時懲役囚

土師熊太郎

私儀

明治十年丁丑旧正月廿三日西郷隆盛等上京スルニ当リ、

桐野利秋隊長  
第四大隊九番小隊ノ夫卒小頭トナリテ鹿兒島ヲ出発、肥

後熊本ニ着直ニ山鹿ニ赴キ、夫ヨリ隈府ニ着、同所ニテ

近衛兵一名生捕、夫ヨリ大津ニ赴キ同所ニテ弾薬式箱分

捕リ、夫ヨリ人吉ニ至リ又延岡ニ赴キ、其後豐後陸地峠

ニテ旧六月二日手負致シ、夫ヨリ延岡病院ニ入院仕、同

七月七日右ノ處ヲ出発、鹿兒島ニ七月十五日帰仕、同廿四

伏セリ、

日鹿兒島再襲ノ節本當ヨリ出兵申付ラレ、後チニ帰宅仕

候處、自宅床ノ下ニ官兵ノ夫卒走込ノ潜匿致シ候ヲ見懸

テ則チ追払ヒ候科ニ依リ、警視出張所ヨリ御用有之御調

之上、長崎ニ護送セラレ、三月十四日同所出張九州臨時

四一 松下吉左衛門上申書

鹿兒島県第五拾三大区一小区

大隅国始良郡蒲生郷上久徳村

四拾九番地居住旧士族

當時懲役囚

松下吉左衛門

私儀

明治十年二月西郷隆盛等ノ挙アルヤ、三月廿日頃戸長ヨ

リ我カ郷内城山番兵申付ラレ、同所番兵中小隊長心得ト

為リ、同四月中旬比ヨリ該地巡邏等ヲ勤メ、後チ佐山戰

田町境  
争ノ節味方ノ道案内トシテ野細ニ向フノ処、途中ニシテ

佐山口敗レ久木村ニ曳揚ケ、五月廿六日官兵ノ軍門ニ降

伏セリ、

大隅国大隅郡垂水郷田上村

四拾壹番地居住旧士族

当時懲役囚

石躍岩左衛門

私儀

鹿兒島県第二大区武小區  
薩摩國鹿兒島郡鹿兒島鹽屋村

式百七拾五番地居住平民

当時懲役囚

吉田小太郎

私儀

明治十年丁丑旧二月十五日垂水郷ヲ出発鹿兒島ニ赴キ、  
陸軍大將西郷隆盛等ノ遊撃隊ニ加入シ、同廿日鹿兒島ヲ  
出発大口郷ニ着、同廿四日大口郷ヲ出発、三月上旬熊本県、  
下川尻駅ニ至ルノ処、同所ニ於テ本官ノ指揮ヲ以テ吾レ

(益城町)

八分隊長心得トナリ該地ニ防戦ス、後チ敗ルニ及テ木山

(猫伏石、益城町)

ニ引揚、又猫伏キニ番兵致シ同所ニテ彈薬等ヲ武宮ニ送

(健軍、熊本市)

リ、又斥候ニ出、同所敗レニ及テ木山ニ引揚、夫ヨリ矢

(蘇陽町)

部ニ至リ該地ニ奇兵拾七番ニ合隊シ、後チ馬見原ニ至リ

(矢部町)

同所ヨリ菅野口ニ応援致シ、程ナク吾レハ病氣ニ罹リ人

(玉名市)

吉ニ赴キ、後チ帰郷ノ処、本年二月鹿兒島出張警視所ヨ

(高瀬町)

リ御用有之御調ノ上、長崎ニ護送セラレ、三月十四日同

(那古町)

所出張九州臨時裁判所ニ於テ除族ノ上懲役一年ノ御処分

ヲ受タリ、

四三 吉田小太郎上申書

鹿兒島県第二大区武小區

式百七拾五番地居住平民

当時懲役囚

吉田小太郎

私儀

明治十年丁丑旧正月陸軍大將西郷隆盛等東上之隊第一大隊

(鹿兒島幹)

六番小隊ノ夫卒ニテ鹿兒島ヲ出発、同月十日熊本県下

(花岡町)

花岡山ニ至リ、又高瀬及ヒ木留・田原坂等ヲ経過シ、夫

(玉名市)

ヨリ三間町ニ至リ、三月二日矢部濱町ニ引揚、自是鹿兒

(那古町)

島攻撃ニ從事シ、後チ鹿兒島ヲ引揚百引ニ赴キ、同所ニ

(高崎町、高崎町)

テ戰ヒ、又大崎ニ赴キ高崎ニテ一戰ス、此時手負イタシ

(北川町)

都城病院ニ入院シ、夫ヨリ延岡ノ長井村ニ至リ、同所ニ

於テ官兵ノ軍門ニ降伏セリ、

## 西南之役懲役人筆記 八 神奈川県

### 一 花房庸夫・丹羽哲郎連署上申書

記

八 神奈川県

維新ノ始朝鮮國礼ヲ我カ 天皇ニ失ス、因テ内閣征韓ノ議起リシカトモ事遂ニ協ハズ、此ニ於テ西郷・板垣等ノ諸公共ニ職ヲ辞ス、明治七年二月旧佐賀藩士征韓ノ論ヲ起シ、以テ内閣ノ議ヲ再振セント欲シ、前參議江藤新平之カ魁トナリ西陲騷擾ス、朝廷乃チ征討ノ令ヲ海内ニ布キ大久保内務卿西下シ本官ヲ我カ福岡県下博多ニ置キ旧福岡藩士ヲ募リ征討ノ軍ニ充テントス、此ヨリ先キ県士ノ内二名、佐賀県ニ到リ親シク江藤等ニ問ヒ其名義ノ在ル所ヲ了スルモノアリ、故ニ此命ノ下ルヤ県土越知彦四郎・久光忍太郎等謁ヲ内務卿ニ請テ曰ク、佐賀士族ノ挙タル其実頗ル暴ナリト雖トモ、其情大ニ恕スヘキ所アリ、願クハ暫ラク征討ノ師ヲ緩フセヨ、我輩驚ナリト雖、中

間ニ周旋シ之ヲ解説スルアラント、卿曰ク、事既ニ此ニ至ル、之レヲ宥スヘカラスト、則チ止ムコトヲ得ス兵ヲ出ス、越知・久光等之レカ長トナリ与ツテ尤モ力ム、既ニシテ事平ラクト雖トモ、猶天下形勢ノ測ルペカラサルヲ察シ凱旋、直ニ越知・久光及ヒ舌間慎吾ナル者鹿児島ニ遊ヒ、西郷氏及ヒ桐野利秋ニ接シ以後往返交義ヲ厚フスルコト茲ニ年アリ、明治十年二月西郷氏兵ヲ率ヒ京ニ上ラントス、朝廷忽チ征討ノ令ヲ下シ戦端既ニ熊本ニ開ク、是レ政府中原尚雄ナル者ヲシテ西郷氏ヲ図ラシメントセシニ濫觴スト、我カ県士ノ鹿児島ニ遊学スルモノ相尋キ、馳セ帰ツテ之ヲ越知等ニ告ク、事実明確、且中原カ口供書ノ在ルアツテ相照徵スルニ足レリ、乃チ越知・久光・舌間及ヒ武部小四郎・加藤堅武・久世芳麿・村上彦十等相議シテ曰、抑西郷氏ハ維新ノ元勲國家ノ柱石ニシテ國ニ許スノ丹心、終始一ノ如クナルハ、我輩之ニ親炙シ素ヨリ信シテ疑ハサル所ナリ、且桐野・篠原ノ如キ剛直ノ士ニシテ何ゾ私意ヲ逞フスルコトアラン、今政府其罪ナキニ之ヲ害セントス、殘暴ノ甚シキ扼腕切歎ニ堪ヘス、且熟々維新以来ノ形勢ヲ察スルニ聖天子上ニ在スト雖、海内猶王化ニ潤ハス、外交内治其術ヲ失ヒ國權振

ハズ政体立タズ、法律ハ寛ナルカ如クニシテ反テ苛ニ、  
租税ハ輕キニ似テ反テ重ク、万姓流離土炭ニ陥リ悲歎怨  
嗟ノ声ハ四海ニ溢ル、加フルニ大分・福岡・三重等ノ土  
寇、熊本・山口・秋月等ノ兵乱有ツテ無辜ノ人民鋒鏑ニ  
罹リ、肝腦地ニ塗レ膏血野ヲ潤スモノ枚挙スペカラズ、  
是レ頑愚或ハ過激ノ致ス所ト雖、畢竟施政当ヲ失ヒ人々  
其所ヲ得サルニ根拠ス、是レ即チ誰カ咎ヅヤ、政府権要  
ノ官其人ヲ得サレバナリ、我輩平素西郷等ト列頭ノ交ヲ  
為ス所以ノモノハ、緩急力ヲ戮セ綱紀ヲ振張シ、億兆ヲ  
保安セント欲スレハナリ、今ニ至リ亦何ノ猶予スルコト  
アラン、速ニ兵ヲ挙ゲ西肥南筑ヲ連ネ掎角ノ勢ヲ為サン  
ト議即チ茲ニ決シ、潛ニ義故ヲ収合シ之カ部署ヲナシ、  
明治十年三月廿八日ノ午前、夜未タ明ケザルヲ期トシ、  
共ニ事ヲ挙ケンコトヲ約ス、是レヨリ先キ県下有志ノ私  
学校十一舎ニ於テ會議セシカトモ県命アツテ之ヲ止ム、  
廿八日ノ戦タルヤ兵ヲ三ツニシ武部小四郎東部ノ長トナ  
リ舌間慎吾之カ副トナリ(福岡市博多区)刑珂郡住吉村住吉神社ノ境内ニ  
在リ、越知彦四郎南部ノ長トナリ加藤堅武・久世芳麿之  
カ副トナリ(小椎、福岡市中央区)早良郡小篠(ラン)子ナニ在リ、久光忍太郎西部ノ長ト  
ナリ(福岡市西区)村上彦十之カ副トナリ早良郡西新町曼華庵名ニ在リ、

三部合テ四百余人、三方合撃陸軍ノ分営タル福岡城及ヒ  
福岡県本庁ヲ襲ハント欲ス、午前第三時頃ロ久光・村上  
進ミ城ノ西門ニ向フ途チ、兵ヲ分チ村上ハ本県懲役場ニ  
向フ、久光直ニ進ンテ西門ヲ衝ク、門堅フシテ破ルベカラズ、因テ西南ノ門ニ転ス、同時越知・加藤・久世カ兵  
西南ノ門ヨリ襲撃砲戦、門ヲ破テ突入シ三ノ丸ニ迫ル、  
然レトモ福岡ノ城タル高堅壁黒田長政カ築ク所ノ名城  
ニシテ要害ヲ備ヘ、且官兵(台)死守力拒スルヲ以遂ニ抜ク  
能ハズ、乃チ城南ノ大休山ニ拠ラント皆兵ヲ收ム、村上ハ  
懲役場ヲ破リ曩ニ国事犯ノ科ヲ得タル旧秋月藩士今村百  
八郎カ兵拾余人ヲ脱セシメ、而シテ大休山ニ来ル、武部・  
舌間ハ県庁襲撃ノ任ヲ受ケリト雖、兵士期ニ後レ至ラサ  
ルヲ以テ舌間ハ直ニ大休山(早良郡・那珂郡ニ跨ル)來リ、武部ハ更ニ兵  
ヲ募ラント那珂郡ノ中ニ潜伏セント云フ、我カ兵既ニ大  
休山ニ集リ須臾ニシテ官兵(巡査兵)來撃ス、之ト戦フコト終  
日、黄昏ニ及ヒ互ニ戦ヲ罷ム、此日我カ兵死スル者一人、  
傷ク者一人、官兵ヲ殺スコト二人、同夜早良郡(早良町)飯場村ニ  
本陣ヲ移シ舌間・加藤此ニ在リ、越知・久光・久世・村  
上ハ内野村(早良)ニ在リ、而シテ加藤ハ兵五十人許ヲ率ヒ金  
(福岡市西区)武村(早良)ヲ警守ス、廿九日午前第十時頃官兵(台)二小隊許人

力車ニ乗シ一条ノ官道ヲ馳セ、金武ヲ指シテ来ル、我兵譲シテ之ヲ知リ、川ヲ隔テ伏兵ヲ設ケテ待ツ、内野ノ兵モ亦五十人許警邏シテ金武ノ方ニ來ラントス、官兵之ヲ知ラス進ンテ川ヲ渡ル、半ハ渡ルトキ起ツテ之ヲ擊ツ、官兵狼狽内野ノ方へ敗走ス、内野ノ警邏兵モ亦之ヲ横撃ス、越知・久光・久世・村上砲声ヲ聞テ來会シ三面合撃、北クルヲ追フコト半里許、官兵野芥村(福岡市西区)<sub>〔原良郡〕</sub>二入り保守ス、我力兵之レヲ囲ミ黄昏ニ及ヒ拔釤之ニ薄ル、官兵支ヘス該村ヲ放火シ遁ル、此日我力兵死スル者三人、傷ク者十余人、官兵ヲ殺スコト四十余人、三十日兵ヲ三方ニ出ス、一ハ久世・舌間曲(原良町)リ淵嶺(原良郡)ニアリヲ扼守シ、一ハ村上曲リ淵嶺ノ南麓ニ陣シ、一ハ加藤遊軍トナリ金武嶺(原良郡)ヲ警邏ス、午前第八時頃官兵(台)数百道ヲ分ツテ來攻ス、久世・舌間カ兵先ツ之ニ応シ拒戦スルコト四五十分、官兵更ニ最高ノ峯ヲ攀チ頭上ヨリ敵撃ス、我力兵之ニ苦ム、忽チノ砲声宛モ雷ノ如ク天地為ニ震ヒ草木為ニ動ク、此日ヤ趣ケハ村上力兵戦ヒ方ニ劇シ、舌間即チ之ヲ援ク、各所又嶺ノ南方ニ当リ砲声頻リナルアリ、舌間兵ヲ引テ之ニ

バ則チケベールナリ、加フルニ勿卒製造スル弾薬ニシテ漸々雨氣ニ浸サレ雷管ノ火勢ニ感伝セサルモノ十二七八兵氣之力為甚沮ム、然シテ官兵ノ携フル所ハ方今ノ利銃ニシテ百発意ノ如シ、午后四時ニ至リ殆ント支フヘカラスト雖、援兵既ニナク又如何トモスベカラズ、則チ退兵ノコトヲ越知ニ諮ル、越知則チ退兵ノ令ヲ各部ニ伝エ、且該所仮病院ヲ水無(原良郡ニ宇早ニアリ)移サシム、我力兵且戦ヒ退キ兵ヲ本陣ニ収ム、幾モナク官兵勝ニ乘シ兵ヲ縱ツテ本陣ニ迫ル、我全軍退キ水無及ヒ肥前国某郡三瀬駅(神崎郡三瀬町)ニ至ル、時既ニ午後第九時ナリ、乃チ此所ヲ本陣トシ散兵ヲ四方ニ聚ムルニ現ニ残ス所二百五十人許、余ハ其所在ヲ知ラズ、此日我力兵死スル者七八名、傷クモノ十人、官兵ヲ殺スコト五六人、三十一日平旦諸魁軍議シ途ヲ山野間道ニ取り、(甘木市)秋月ニ往キ割拠セント進発ノ令ヲ諸隊ニ伝フ、秋月ハ旧福岡藩主黒田氏支封ノ城墟ナリ、諸隊発スルニ臨ミ哨兵遽ニ報シテ曰ク、巡查兵ノ近ク来ルアリト、此ニ於テ加藤半小隊ヲ率ヒ邀ヘ擊ントセシカトモ互ニ戦ハスシテ退ク、乃チ列ヲ整ヘ三瀬・背振(共ニ肥前郡)等幾多ノ峻山嶮路ヲ躰ヘ、午前第十時頃肥前国某郡久保山(村名)ニ至ル、是迄道程凡ソ三里許ナリ、此所ニ於テ午餐ヲ喫シ又

進行ス、道路艱難且全軍累日連夜ノ馳驅ニ疲れ行歩意ノ如キヲ得ス、漸クニシテ同国某郡(東背張村)松隈(鳥居村)ニ至リ、日既ニ晩ル、即チ晚餐ヲ喫ス、偶此所ニ宿陣ノ議起リ、既ニ決セントス、人アリ告テ曰ク、之ヨリ二里東南ニ川上(勝前)ト云フ所アツテ數百ノ官兵アリト、信否未タ審ラカナラスト雖、若シ果シテ信ナルヤ、夜襲ノ患アリ、殊ニ我レ劣レ、彼レ逸セリ、仮令一夕ヲ佛倅スルモ明日來擊ヲ受ルトキハ敗走必セリ、宿シテ敗ヲ取ンヨリハ寧ロ宿セザルニ若スト、即チ進発ス、時既ニ午後第十時ナリ、同夜進行スルコト四里許、四月一日払曉肥前国某郡(鳥居市)田代駅(鳥居市)ニ至ル、兵士ノ疲困愈甚シク、後レテ猶至ラサル者過半、多ク行々睡テ途上ニ転仆スルニ至ル、隊長或ハ激励シ或ハ慰撫シ、測ラス時剋ヲ経過ス、然シテ越知・久光最モ先ツテ至ルヲ以テ令ヲ後軍ノ未タ至ラサルモノニ伝ヘテ先ツ發シ進行スルコト一里許、筑後国小郡(小郡)ニ至ル(村名ニシテ御、原郡ナラン)兵凡ソ百五十余人、喫食シテ小郡原ニ出ツ、此時午前第十一時頃ナリ、即チ兵ヲ松林ニ潛メ後軍ノ至ルヲ待ツ、午后猶未タ至ラス、忽チ砲声アリ西北ニ起ル、漸次声遠ク、後チ全ク聞ヘス、斥候ヲ出シ之ヲ探ラシムルト雖、絶テ其由ヲ報セズ、乃チ亦之ヲ顧ミス秋月ニ向テ進行ス、此

時午後第三時ナリ、既ニシテ日暮秋月ニ達ス、卻テ説ク、彼ノ後軍ハ既ニ田代ニ至リ、道ヲ別途ニ取り夜須郡馬市(村名ナ)ニ進行ス、是レ村上・舌間・久世等ナリ、該所ニ至ルヤ偶官兵(台)ノ久留米(三瀬郡)ニ趣クニ遇フ、村上等即チ議シテ曰ク、官兵未タ我兵ノ爰ニアルヲ知ルヘカラス、宜シク其不意ヲ擊チ彼レノ彈薬ヲ奪ヒ我力用ニ供セント、衆之ヲ善トシ則チ兵ヲ散シテ叢林ノ中ニ伏ス、官兵始メ之ヲ知ラス、而シテ之ヲ聞知スルヤ、隊ヲ整ヘ來進ス、乃チ互ニ発砲戰ヲ始ム、官兵我ニ數倍シ殊ニ兵氣方銳ク操縱自在ナリ、我兵日夜ノ奔走ニ疲れ携フル所ノ彈薬僅カ數十包ニシテ銃器モ亦二三十二過キス、故ニ短兵直ニ之ニ薄リ接戦数時、我カ兵四分五裂進退窘蹙、舌間先ツ弾丸ニ中リテ死シ、久世モ亦死シ、村上重創ヲ被リ捕縛ニ就ク、外カ死スル者四十人傷ク者二十余人、或ハ捕虜ニ就キ或ハ僅ニ身ヲ以テ遁レ全ク遺類ナキニ至ル、然シテ官兵ハ是ヨリ直ニ久留米ニ趣キシト云フ、越知・久光等ノ秋月ニ達スルヤ、該城墟ヲ以テ本陣トシ、此地士族ヲ説キ以テ用ヲナサント百方術ヲ尽スト雖事ナラス、何ントナレハ前年熊本及ヒ山口前原一誠カ兵ヲ拳ルヤ、旧秋月藩士今村百八郎モ亦兵ヲ拳テ之ニ応シ、戦ヒ敗レ

壯士中人心ヲ得タル者悉ク死亡ス、故ニ依違躊躇シテ久シク決セス、二日器械ヲ脩シ彈薬ヲ製シ兵士ヲ犒フ、忽チ馬市ノ敗聞至ル、衆驚愕殆ント戰志ナキニ至ル、然レトモ越知慷慨人心ヲ激励シ土豚ヲ集メ砲墩ヲ各所ニ築キ以テ拒戦ヲ期ス、久光夫婦石村名<sub>夜須</sub>ニアリ、加藤八幡山秋月ニ在リ、夫婦石兵僅力ニ四十余人、其他各所ニ配置アリニテ、一所二十余人ニ過ス、翌旦哨兵スル多少アリト雖トモ、一所二十余人ニ過ス、翌旦哨兵還リ報シテ曰ク、官兵阿弥陀力峯<sub>夜須郡</sub>ニアリ及ヒ甘木村名<sub>夜須兩</sub>ニアリ道ヲ分テ來攻スト、我兵乃チ砲墩ノ下ニ散伏シテ待ツ、官兵<sub>鶴岡縣</sub>忽然トシテ三四百歩ノ中ニ至ル、此ニ於テ互ニ発砲、戰フコト半時許ニシテ官兵更ニ又左右ヨリ迫リ、我力兵死傷數人且官兵我ニ數倍シ殆ント拒ク能ハス、急ヲ本陣ニ報スルヤ即チ援兵ヲ出ス、既ニシテ久光面ニ傷ツキ本陣ニ退ク、越知代テ夫婦石ニ向ヒ大喝一声奮進、敗兵ヲ麾キテ返戦セシムレトモ壊裂俄ニ整フル能ハズ、止ヲ得ス退キ第二墩ニ至ルニ、官兵急ニ來リ迫ル、然シテ我兵彈薬ニ乏シク且死傷夥多、又保ツコト能ハラントス、則チ抜劍囃ヲ衝ントストモ亦令ヲ奉スル者ナシ、更ニ第三墩ノ兵ニ合シ決死一戰セント之ヲ回顧スレハ、既ニ官兵ノ敗ル処トナリ如何トモスル能ハズ、故

ニ一旦敗兵ヲ収メ城内及ヒ八幡山ノ兵ト共ニ左右合撃セント該山ノ部長加藤ニ旨ヲ通ス、官兵ハ勝ニ乘シ益々奮撃猛進、砲声山谷ニ震動シ黒烟空ヲ蔽フ、時ニ三日午后第二時ナリ、越知等兵ヲ収メ本陣ニ退クヤ官兵驅撃道ヲ左右ニ取り、一ハ城濠ニ迫リ一ハ八幡山ニ向ヒ互ニ砲戦スルコト凡ソ一時間余、我兵死傷五六人、降雨漫々彈薬ノ発火ヲ害シ、且銃器多ク毀損ス、然レトモ加藤能ク拒戦シ官兵轍ク進ムヲ得ス、同時城内ノ戰タル劍鎗以テ城門ヲ守リ、小銃以テ官兵ヲ拒撃スル、數時ニシテ官兵諸部ヲ攻破シ全軍合撃、飛丸城内ニ雨注ス、乃チ傷者ヲ城後ノ古所山ニ護送シ、而シテ決死官兵ノ門ヲ破ルヲ待ツ、忽チ城東ノ陵上ヨリ銃丸直下ス、城内素ヨリ寡兵、仮令皆死戰スルトモ城門ヲ拒クニ足ラス、且両面兵ヲ受ケ如何トモスヘカラス、越知・久光等乃チ奮勵呼テ曰ク、退クトモ死シ、進モ亦然リ、寧ロ進戦縱横猛撃死ヲ潔クスルニ如カスト、衆皆快ト称ス、時ニ前後ノ官兵益々追撃シ、前面ノ官兵ハ既ニ門外百歩ノ中ニ薄ル、越知・久光等奮起門ヲ開キ突出セントス、人アリ袖ヲ扣ヘ止メテ曰ク、勝敗ハ時アリ一敗何ソ宿志ヲ擲ツラ須ヒン、且聞ク西郷氏ノ兵モ豊後ニアリト、願ハクハ彼ノ軍ニ投シ後岡

ヲ能クセヨト、二人等肯ンセス奮ツテ死闘セントス、衆

モ亦異口同音、共ニ之ヲ強制シ漸クニシテ許諾シ残余ノ

兵ヲ城後ノ古所山ニ遁レシメ、壯士十余人ト共ニ囲ヲ潰

シテ走ル、時已ニ午后第五時頃ナリ、八幡山加藤ノ兵戦

愈々劇シク砲声震轟、硝烟四散満地朦朧トシテ咫尺ヲ弁

セス、且密雨潛々猶未タ霽レス、我カ哨兵官兵ノ城中ニ入

リシヲ報スルヤ否ヤ忽チ城上ヨリハ幡山ニ向ケ直射シ、

三方齊シク薄リ、遂ニ支フベカラズ、加藤乃チ兵ヲ収メ

下秋月村<sub>（秋月ハ上下二分レニ）</sub>至ラシメ、而シテ兵數人ト古所山

ニ至フトス、途越知・久光等ニ遭フト雖モ、故ラニ道

ヲ異ニシ南ミ豐後ヲ指シテ走ル、此日我カ兵死スル者九

人、傷ク者十余人、縛ニ就クモアリ、後三日ヲ出テズ越

知等皆縛ニ就キ、武部モ亦二十余日ヲ経縛ニ就クト云フ、

右各所死傷ノ人員及ヒ時剋ノ如キ、兵馬倥偬ノ際、其詳

細ヲ了スル能ハザリシガ為メ、固ヨリ謬誤ナキヲ保スペ

カラス、

右之通ニ御座候、

福岡県筑前国穂波郡庄司村<sub>（飯塚市）</sub>

憲役十年 花房庸夫<sub>（海田）</sub> ○

福岡県筑前国那珂郡春吉村<sub>（福岡市中央区）</sub>

明治十一年三月

憲役二年

丹羽哲郎

○<sub>（海田）</sub>

(表紙)

# 西南之役懲役人筆記 九 山梨県

(中表紙)

## 戰地形狀筆記

### 一 山東清武上申書

一自分儀明治十年二月十七日二男山東寅次郎ヲ吉田伊平

工養子ニ遣し候間、熊本エ出府仕候事、

一同十八日本家山東半次郎ヲ訪ヒ、夕刻同行ニテ子飼鈴

木良平宅エ立除キ候事、

一同廿一日細川興永東京より下着候段承リ罷り越シ候處、

今般之事件三付、旧知事公殊之外御苦惱ニ相成、既ニ

昨年上野・(鉄平、太田黒伴邊)大野等暴動之節モ、不一方御配慮ニ相成リ

尚又重テ当節大義名分モ無之處、擾々渦々騒キ立、既

ハ如何様ニモ説諭致し候様、既ニ御直書モ持參ニ相成、篤(健軍)御主意も遵奉し尽力可仕(熊本市)と之事ニテ、則県士屯集之竹宮村工急キ候中、既ニ松浦新吉郎大隊ヲ帥キ來候途中、石原瀨と申処ニテ出逢ヒ、旧知事公御直書之趣キ興永演舌之旨粗談シ聞ケ候處、新吉郎等ハ既ニ名義モ相立候間出兵仕候事ニテ、不審之面々ハ書面ニ認メ有之候間披見可仕段申聞ケ候間、尚明日一読可仕段興永エ申聞ケ候處、更ニ往復之儀ハ無用と之事ニテ相止メ候事、

一旧知事公御直書披見致サセ候處、出兵之際ニ臨ミ留リ候者居多有之候事、

一姦民無賴之徒此挙ニ乗し強盜・放火・搶奪・掏摸・窃盜・闖殿之類凡ソ良民之妨害ニ相成リ候件々至サル處ナク、真ニ以テ憤然之次第ニ付、第三大区九小区戸長平田平七より区内保護之為、鎮撫致し吳候様依頼候ニ付、同区内今(菊池市)村國分寺エ鎮撫処ヲ取立テ、甲田正照・關角三・大宮休可及ヒ自分四人ニテ基礎ヲ立候上、賴ニ応シ自分社長と相成リ、追々社中増員百四五十人ニ及ヒ候事、

一 結社当分之処ハ本當より通行印鑑ヲ受ケ社中エ配分シ  
候処央より印鑑返却、社中印鑑ヲ以テ通行仕候事、  
一 南郷・大津暴民沸騰ニ付、区長より頼ミ応シ鎮撫人数  
(白木村) (大津町)  
廿人引率シ、甲斐一衛と共ニ大津迄出懸ケ候処、既ニ  
両処共ニ鎮定ニ付罷リ帰リ候事、木村健太井ニ伊藤五  
平大津近郷ニ伏匿シ候間、探索致し吳候様池部吉十郎  
より頼談有之、既ニ五平ハ逃去リ次郎迄残居、木  
村ヘハ本當より用事有之段申聞候処、直ニ出頭、半次  
郎ニハ用事無之候事、

一 盗賊并ニ徒役人・賭博之徒或ハ放火等ニテ、処々妨害

二 相成候者教人繫縛致セ候事、

上 放逐候事、  
一 賭博・盜賊ハ笞刑ヲアテ、職物ハ悉皆財主ニ引渡シ候

一 強盗松本新十郎也者ヲ繫縛押送シ來リ候間、池田藤清  
ヲシテ訊問ニ及ヒ候処、熊本草野某之宝蔵ヲ破リ財物

ヲ盗ミ取り、六ヶ村ニ於テハ農家ニ押入強盗致し、又

或ハ抜刀酒店ニ入込ミ婦人ヲ剥シ金錢ヲ奪ヒ去リ、其

余窃盜ハ數ヶ処ノ事ニテ有之候、元來開戦之節ハ中津  
(大島) (中津町)  
大四郎隊ニ加リ居リ候処、是又窃盜之罪責ヲ以テ脱隊  
致し、爾後ハ薩兵之印ヲ付ケ暴行仕候者ニ相違無之段

白状仕候、中津大四郎ニモ問合せ候処、全ノ盜賊ニて  
除隊申付置候段返答仕候事、以前ハ懲役ニモ入居候事、  
畢て社中罰条之議有之候間、自分儀ハ親類保管可然  
と申立候得共、甲田正照より強盗放火之類ハ本當より  
適宜ニ処(電)知可然と有之、且襲ニ新十郎ヲ養子ニ仕居候  
養父よりも渠ハ真ノ悪漢ニテ、万一放逐ニ相成リ候  
テハ、実以テ後難恐敷、如何様ニモ先々之妨害ニ相成  
リ不申候様防キ吳候段申出、此際ニ臨ミ、繫縛之獄屋  
とても無之、万々断頭より外ハ他岐ナク、既ニ社説モ  
一決シ候間如何と承り、然ハ別ニ手段も無之、自分同  
意之上断頭申付候事、  
但シ揮刀者 高木作太と申者ニて候事、

一二等巡查野上文九郎私物と共に巡查服并ニ合羽十二三

枚持參リ着用可仕之事ニテ預り置キ候処、開庁之後  
県官より受ケ取リニ相成リ、則チ証書モ有之候事、

一小銃十二三挺 脚乱四ツ

右ハ社中之人自分々々之所持品ヲ持參仕候事、

一 國分寺鎮撫社中外ニ出兵希望之者有之候得ハ、本當工  
知せ候様池部吉十郎より申来リ候得共、希望之者無之

一 鎮撫所ハ台兵進入之後ハ引払ヒ、自分ハ八反田より河(金)  
本市工転し、終ニ帰宅仕候事、

一四月廿三日自首書持參、熊本警察所エ自首仕候事、

熊本県第六大区四小区

菊池郡(七城町)加惠村住居

士族 山東清貞隠居

山東清貞

明治十一年二月

武

## 二 山内甚右衛門上申書

明治十年丑二月政府之内命ヲ蒙リ、中原尚雄其外二十余  
名致帰県、西郷隆盛等ヲ暗殺之一条露顯いたし候ニ付、  
政府エ尋問之為メ上京之筈候間、隨行ニテ出立之仕舞方  
仕候様、副区長越山休藏(六番大隊長)より相達候ニ付、同月十四日宿  
許発足仕、同廿日比肥後国尻工着キ、同廿二日熊本城エ  
相掛戦争仕、同廿五六日比高瀬川ニテ終日相戰ひ木(玉東町)之葉  
迄引揚相守リ居候處、廿八九日比官軍ヨリ進撃ニテ戦争  
仕候處、外隊の方ヨリ相破れ、夫故田原坂迄各隊引揚、

翌早朝ヨリ昼夜之戦争、其内幾日とも不取覺、第七番大隊(長山内幸左衛門小隊長)拾壹番小隊(兒玉強之助隊長)ヨリ応援ヲ乞ひ候ニ付、半隊引列差越相戦

ひ、官軍間近く進入ニ付一日ニ三度程切込、双方戦死・  
手負多ク有之、銃器・弾薬等分捕、翌夕方我守リ場工罷  
帰リ相戦申候處、三月十五六日比ニも候哉、本道守場之隊  
ヨリ相破れ、官軍ヨリ跡ヲ被取切、夫故各隊引退キ申候、

同月御船西度之戦争、一度ハ小勢ニテ被取明、一度ハ各隊  
之中央ヨリ相破れ敗軍、同下旬比(御船町)南田代相守居候處、官  
軍ヨリ進撃ニテ相戦、我隊ヨリ横矢ヲ入追散シ銃器・弾  
薬等分捕、私隊初発ハ第七番大隊(本田元瑞小隊長)九番小隊、四月比正義八  
番中隊ト隊銘相変リ申候、六月中旬比(上隅木、多良木町)附木工致進撃、

官兵ヲ追散シ廿日余リ相守居申候處、霧深キ朝官兵ヨリ  
不意ヲ被討、敗軍ニテ引退キ、七月須木其外綾・佐土原  
辺之戦争弾薬尽果、終ニ及敗軍ニ、延岡迄引退キ、七月中  
旬比中隊長被申付候、八月十日於延岡ニ降伏仕候間、此  
段申上候也、

鹿児島県大隅国曾於郡第六十大区  
五小区國分郷向花村住居

明治十一年二月

旧士族 山内甚右衛門

### 三 野村盛賢上申書

予出軍ノ趣意タルヤ、舊テ陸軍大將西郷隆盛・全少将桐野利秋・篠原國幹等在県之処、東京在勤警部鹿兒島県士族中原尚雄等數名上官ヨリ暗殺ノ内命ヲ奉シ帰省致居候趣露顯致シ、依之彼ノ陰謀徒捕縛ノ上其筋ニ於テ鞠問ニ及レ候処、尚雄等ハ勿論野村綱等断然事実白状ニ及ヒ、其事件ニ付政府へ尋問ノ筋有之、西郷大將ヲ始桐野・篠原兩少将等旧兵隊隨行ニテ明治十年二月某日鹿兒島出發相成段ハ、刺客ノ口供相添ヘ具令ヨリ管内一般ヘハ普ク布告相成候、夫西郷等ノ肥後ヲ経過セントスルヤ、台兵城市ヲ蕩燼シ之ヲ川尻ニ要擊ス、既ニ戦端相開ケ候段ハ兼テ承知仕居候、然処同三月七八日頃貴島清鹿兒島ヨリ宮崎ヘ來リ、彼表ノ壯士ヲ募ラントス、時ニ四方ヨリ來会スル者凡千四五百名、於是其募兵ノ旨趣ヲ聞クニ、今般中原等暗殺内命云々ノ儀ニ付政府へ尋問ノ為西郷・桐野・篠原等上京ノ途中熊本鎮台ニ遮ラレ候段、意外ノ挙動啻ニ傍観難シ、何レ事曲直アルベシ、其菽麦ヲ弁ゼス、猥ニ壅塞スル理ニ非スト、依テ同心戮力、是非上ヘ尋問ノ

本旨貫徹致サセ度トノ儀ニ付、義理ノ在処敢テ辞セス、則綾・(高岡町)倉岡・(全上)穆佐三ヶ郷相協議シ百有余名ヲ一小隊トナシ、予不肖ト雖トモ其隊長トナリ直ニ繰出ス、時ニ三月十日ナリ、是ヨリ我眞幸街道飯野越ニテ人吉・八代ヲ経全十五日熊本城下ニ到ル、至レハ則龍城ノ戌兵命セラレ、第一ノ九番小隊ヘ交代、長六橋ヨリ下五六町程受持守衛ス、先是我隊号貴島清隊八番小隊ト相唱候処、更ニ第八大隊八番小隊ト改称相成候、尔来廿余日ヲ経テ四月十四日川尻敗軍ニ付、不得止城ノ守兵皆囮ヲ解ヒテ引去、是時我隊城ノ東南ナル(熊本市)大江村ト申処迄引揚守ヲ付ルト雖トモ、地形殊ニ便ナラザルニ依リ、翌早朝又保田窪村迄引上ル、同日午後保田窪原ヘ押出シ竹宮ノ兵ト保塞ヲ連ネ守備ヲ設ク、然ニ四月廿日払暁ヨリ官兵襲來、殆ト間近ク押寄候ニ付、衆奮然力ヲ尽シテ防戦ス、然ルニ午後三時頃ニ至リ我隊ヨリ左ノ方四五小隊目ヨリ相敗レ、延テ我隊モ半退走スト雖トモ往還ヘ土手築立置候ニ付、殘兵之ニ寄テ防キ止メ頗苦戦、殺傷相当、此時余モ手負致シ詫方ナクモ退テ病院ニ入、其ヨリ四十余日ヲ経テ疵モ平愈候ニ付、六月六日出院、再ヒ人吉表ヘ赴カント出行途中、(えびの市)飯野ニ於テ池上四郎ヘ出会、彼ニ薦ラレ須木口本營

ニ至ル、然処本營詰高城十次・河野四郎左衛門ヨリ本營附屬中隊長被申付、是ヨリ彼ノ方面受持諸隊ノ守場等へ奔走ス、当方面ノ儀ハ肥薩ノ境ナル山間僻地ニ守ヲ付居時々戦フト雖トモ互ニ勝敗アリ、然ニ七月中旬頃飯野口ノ軍相敗、從テ諸口モ敗走ス、其後諸所ニ拒戦スト雖トモ自然人氣挫折シ毎戦至不能支、其ヨリ窮蹙宮崎・佐土原両大河ノ際ニ於テハ、一同決戦セント欲スト雖トモ約束ノ密ナラザル、遂ニ其機ヲ失ヒ相敗レ、退テ高鍋美々川ニ禦クト雖トモ是又保守スルコト能ス、終ニ八月八九日頃其川上山陰村ニ於テ官軍狙撃四中隊ヘ相付帰順仕候也、

鹿児島県管下日向国元宮崎県

第一大区九小区諸県郡穆佐郷

小山田村居住士族盛祐長男

野村盛賢

明治十一年二月

## 四 有馬友助上申書

余明治十年二月初、東京在勤警部鹿児島県士族中原尚雄ヲ始メ外数名、上官ノ内諭ヲ奉シ、事ヲ帰省ニ托シ西郷大将及桐野・篠原両少将等ヲ謀ラントスルノ密計未成シ

テ発覚シ、依之刺客ノ者共捕縛糾弾相成候処、尚雄等事実具ニ白状シ剩ヘ野村綱等申出ノ条件モ有之、於是右三將政府へ尋問ノ為メ私学校徒ヲ率ヒ上京スルノ旨達ニ応シ、迅速出県本校へ届出候処、則第池上四郎隊長五大隊四番小隊長崎尚五郎隊兵卒ニ編入セラレ、同月十七日鹿児島出発、出水米之津ヨリ乗船、全廿一日肥後國松橋へ着、其夜川尻迄差越シ、翌廿二日昧爽熊本城東北面坪井口へ相掛リ三昼夜攻撃スト雖トモ城兵尽力防戦不能抜、其ヨリ廿四日城ノ西方段山へ相転シ、一ノ壇へ交代、此地ニ拒守スル十四日ニシテ三月八日ノ黄昏同所ヲ外隊へ譲リ植木へ進軍、同所一泊ニテ翌九日田原へ押出シ先鋒隊へ交代、其ヨリ昼夜連戦、十五日頃未明敵ヨリ襲来候ニ付味方双方ヘ相開キ敵ヲ中央へ誘キ、喇叭ノ相図ヲ以テ一同切込ニ及候処、敵散乱途ニ迷テ走ル、依テ味方ハ元ノ墨ヘ引上ル、其翌日予ハ本營ノ護衛兵被申付、熊本二本樹ノ様引取、是時各隊ヨリ四名宛擇抜シテ護衛ニ充、隊伍ヲ編制シ名ヲ狙撃隊ト称ス、然ニ同月廿日八代口へ敵兵上陸ノ趣キ相聞ヘ候ニ付、直ニ我二番狙撃并外三四小隊繰出シ、廿三日ノ午後三時頃宮原駅へ到着ノ処、敵已ニ小川へ繰込候様子ニ付足ヲモ止メス是ヨリ山手ヲ伝ヒ進軍ノ処、

終二日暮ニ及、故ニ同駅ヨリ甘余町隔リタル所ノ要地ヘ  
墨塞ヲ設ケ戊ヲ付ル、然ニ其翌朝敵ヨリ来撃候ニ付相戦  
ト雖トモ勝敗不決、其后戦ヒ三四度ニ逮ヒ終ニ敗走、其  
ヨリ諸所ニ転戦、一勝一敗事ノ記スベキモノナシ、四月  
六日川尻迄引揚、大渡ト申処ノ川ヲ庄シテ陣ヲ布ク、此  
時予伍長ト成、同所三四日居守ニテ其川下御伊勢新開ト  
申処ヘ守ヲ転ス、其ヨリ四月十四日ノ曉天川下蜜柑ト申  
(天明町美登里)  
處ヨリ相敗レ候ニ付、一往川尻町涯迄引退、朝八時各  
隊進撃相掛奮戦中本道ノ方相敗、延テ大破ト成、此時我  
隊木山迄引去、是ヨリ又本營附トナル、其ヨリ全月廿二  
日本當ト共ニ矢部迄引上ル、全所ニ止ル三四日ニシテ人  
吉ノ様転軍ス、其ヨリ五月五六日頃十三ノ五番小隊植村  
良右衛門隊監軍被申付、(球磨郡須恵村)當隊守場ノ須江村ノ様赴ク、然  
ニ同月十日頃江代本營桐野氏ヨリ御用申來候ニ付差越候  
処、隊ノ編制有之、正義九番中隊ト相成ル、此時予其中  
隊長被申付、同所ヘ三日位滯在ニテ其ヨリ雨堤ト申処ノ  
様繰出シ、同所諸間道ヘ守ヲ付、居守一ヶ月計ニシテ頭地(五木村)  
口ノ味方敗走シ、我左翼小隊ノ正面ヘ掛來候ニ付擊退ケ  
居候処、其夜本營ヨリ可引揚旨報知相達候ニ付、此時人  
吉領櫻木村ノ様引退守リヲ付ルト雖トモ、僅一二中隊位

ニテハ広大ノ山間実ニ難守場所ナレトモ、本營ノ指揮ニ  
從ヒ本道ノ久米峠其他二三ヶ所ヘ配兵相固居候処、七月  
十日前後ニテモ候半、敵兵三方ヨリ取囲ミ少勢ニテ逆モ  
難應ニ付、須木ノ内堂屋敷ト申処迄引揚候処、我旧墨ハ  
悉ク敵ノ有トナル折柄、応援兵一二中隊參候ニ付、十二  
三日頃元ノ櫻木村進撃ノ儀相決、其夜半過堂屋敷ヲ繰出  
シ候処、未タ櫻木村ヘ達セスシテ夜明渡候ニ付、其手前  
ヘ兵ヲ潛メ置、大斥候差出候処、最早敵櫻木村ヨリ打掛  
候段斤候壱人馳帰候ニ付、直ニ本隊ヲ以テ押掛、稍久戰  
ト雖トモ右櫻木村ノ儀ハ山間ノ谿合ニテ誠ニ地理惡ニ依  
リ、一往繰引ニテ尾筋ノ様徐々引上ケ候折柄、敵勢ニ乘  
シ追駆來候ニ付、二小隊位ヲ以正面ヲ支、外小隊ハ三方  
ノ小高所ヨリ烈敷打掛候処、敵ノ死傷頗ル多シ、終ニ敵  
辟易シテ其夜久米村迄引退、依テ再ヒ地藏峠等ノ諸寨ヲ  
復ス、其後屢戦ト雖トモ互ニ勝敗ナシ、然ニ七月中旬過  
飯野口敗軍ニテ彼ノ方面ノ味方野尻ノ内天ヶ谷ト申処迄  
引退、我守場ノミ敵地ヘ闖入シ難守相成候ニ付、退テ須  
木ノ内煤原ヨリ立野越ヘ亘リ戊ヲ付居候処、日不覺未明  
敵立野越ヘ襲來、味方相敗敵盛ンノ勢ナリト告ク、依之  
正義七八九ノ三隊応援トシテ直ニ駆付、忽一里計追返ト

雖トモ、其絶頂実ニ天敵ノ要地ニシテ二昼夜余激戦スト  
雖トモ終ニ抜能ハス、故ニ野尻口ノ兵ト一直線ノ処迄引  
退配兵中、又野尻口相敗レ退テ戸崎ヲ保ツ、依之我隊ハ  
綾ノ様相転シ陣之尾ト申処ヘ墨保ヲ築ク、然處野尻口本  
道ノ軍又々相敗候ニ付、其ヨリ森永・六野原及佐土原等  
ノ諸所ニ防戦スト雖トモ、毎戦利アラス、退テ高鍋・美  
々川ニ拒クト雖トモ、是又長ク保コト能ハス、終ニ力屈  
シテ八月八九日頃其川上山陰村ニ於テ官軍狙撃四中隊ヘ  
相付帰順仕候也、

鹿児島県管下薩摩国第廿二大区  
一小区日置郡伊集院郷徳重村居住

明治十一年二月

旧土族 有馬友助

## 五 橋本諒助上申書

一自分儀明治十年一月中、同県士族中原尚雄等数名上官  
ノ内命ヲ奉シ、西郷・桐野・篠原等ヲ暗殺セント欲シ  
帰省中露顕シ、隆盛等政府へ為尋問上京ス、依テ我輩  
隨行シ二月十七日<sup>(元)</sup>第三ノ六番小隊押伍ニテ出発ス、同  
廿二日熊本県川尻着ノ処、台兵繰出シ既ニ挑戦ノ勢ニ

テ開戦相始、我隊出町口ヨリ進撃ス、城固シテ不拔、

暫時滞陣、同所ニテ諸隊中隊ニ変制相成、余ヲ左小隊  
半隊長ニ命ス、十日ヲ過キ植木口ノ急ヲ得、遽ニ左小

隊ヲ城ノ防禦トシ右小隊ヲ繰出ス、街道ヲ右ノ浦ニ廻  
リ植木向坂ニテ戦ヒ台場数ヶ所ヲ乗取り大ニ官兵ヲ破  
ル、中隊長町田權左衛門素ヨリ鉄術ノ達者ニテ刀ヲ抜  
テ官兵十人ヲ倒シ終ニ戦死セリ、此ノ戦到テ烈シク  
我軍皆拔刀ニテ切込、弾薬・器械ヲ得無算、又城兵屢襲  
来、我軍台場ヲ嚴ニシ悉ク追払ヘリ、又余ヲ右小隊長  
ニ命ス、四月十四日川尻口破レ命ヲ受テ<sup>(木山・益城町)</sup>黄山ヘ引揚、

夫ヨリ永峯ヘ繰出、然ルニ官軍大挙襲来ル、急ヲ聞我  
隊応援ス、諸隊部署シ鯨波ヲ揚テ返戦ス、我隊左ノ方  
崩ノ中ヨリ横矢ヲ入レ連リニ攻撃シ、又先ノ台場ヲ取  
替ヘス、弾玉飛コト震ノ如シ、晚御船口ノ敗報ヲ得テ

黄山ヘ転陣ス、翌日官軍来ル、我軍大敗シ矢部ヘ引退  
キ馬見原ヨリ胡摩山ヲ越テ旧藩人吉領内<sup>(湯前町)</sup>湯ノ前ニ引揚  
暫時滞陣、新古兵入替ヘアリ正義隊ヘ変制、余ヲ七番  
中隊長ニ命ス、令ヲ受テ日州<sup>(高千穂町)</sup>三田井ヘ繰込、諸隊手配  
アリ馬見原ヘ進撃ス、官兵鏡山ノ峠ヘ台場数ヶ所ヲ築、  
朝霧深我隊潛ニ本道ノ右脇山中ヲ登リ、境松ノ敵背ヨ

リ衝ク、官兵狼狽シテ逃レ走ル、尾撃シテ町口ノ台場ニ至ル、我軍深入シ又心援不来シテ引返シテ官之原へ転陣ス、豊後中津隊一小隊ニテ男坂ヲ守リ我中隊廣木野ヲ守ル、時ニ馬見原ノ官兵襲来テ右ノ山上ヨリ我軍ヲ眼下ニ狙撃ス、我兵孤軍ニテ甚難義ナリ、土民共ヘ紙旗ヲ持セ後ロノ山上ニ登セ防カシム、又坂元ヨリ分隊ノ応援ヲ得、山上ノ官兵ヲ追落シ終ニ勝利ヲ得、三日ヲ過キ三田井ノ敗報アリ、(萬千穂町)諸塙村ヘ転陣ス、命ヲ受人吉ヲ向テ繰出シ米良山ニ到リ江代・人吉ノ敗報ヲ聞暫時滯陣、今ヲ受須木方面ノ様差越、又聞、宮越ニ敵来ルト、直ニ我隊ヲ繰出途ニシテ敗兵ニ行逢ヒ我隊ノ至ヨリシ我隊ヲ左右ニ備ヘ押寄ス、官兵要害ニヨリテ防戦ス、我右小隊左脇ヨリ突込連發シ一ノ台場ヲ乗取、又我左小隊右ノ山中谷川ヲ登リエイヽ声ヲ出シ、官兵ノ台場間近ク迫リ互ニ石ヲ投シ烈シク打合、薄暮ニ到リ刀ヲ抜キ一時ニ進入候処、官兵一人モ不残逃去レリ、此地タルヤ人家ヲ隔ルコト五六里ニシテ野陣甚難義ナリ、六月中旬頃ニモ候半、飯野・小林口ノ味方大勢須木方面ヘ來リ、二手ニ分レ一ハ白髮山ヲ越、(上村)植村ヲ破

リ、一ハ坪屋村ノ官兵ニ当ル、敵坂ノ上ニ砲台ヲ築ク、我軍正面ヨリ一道ニ攻撃、大ニ呼テ戰ヲ挑ム、サレ要害ニシ実ニ可落様ナシ、我隊左ノ山中道ノ無キ處ヲ潛ニ銃ヲ背ニシ登リ官兵ノ後ロヘ不意ニ出テ前後ヨリ一聲ニ発砲ス、官兵窮蹙逃レ走ル、追テ坪屋村ニ到大ニ勝利ヲ得、軍馬二疋・小銃弾薬等ヲ分捕ス、我軍統キ不来、當ヲ焼テ引退ク、翌日官兵来ル、我軍利アラス須木内山ヘ引揚、立ノ越ニテ二昼夜連戦、互ニ死傷アリ、然ルニ山手ノ方敗軍ノ趣報知ニ付、綾ヘ転陣、我軍屢不利シテ佐土原ヘ引、又官軍来ル、川ヲ隔テ陣砲撃ス、我軍散乱シテ山中ニ潜伏シ力尽テ別勵第二旅團ヘ相付帰順仕候也、

鹿兒島県下薩摩國鹿兒島郡

第一大区三小区鹿兒島天神馬場

八番地

明治十一年二月

旧士族 橋本諒助

## 六 杉野逸藏上申書

一自分儀明治十年二月廿一日池邊吉十郎・(熊本隊長) 櫻田惣四郎等

より至急ニ面会仕度段申来リ候間、北村盛純・(のら七番小隊長) 友成正

雄同行江津村小学校ニ於テ出会会仕候處、今般西郷隆盛

等上京之覚悟ニ候得共、不図キ当鎮台野ヲ清テ俟ノ勢

即今互ニ目撃スルゴトク、必明朝よりハ開戦ニ相違モ

無之、依て積年同憂スル處之同志等尽ク協心戮力隆盛

等ヲ助ケ潔ク奮戦セント申シ聞候間、名義如何と相尋

候處、廟堂之姦魁ヲ除キ皇運ヲ挽回スルノ議ニて未タ

確乎タル名義立兼、今一層名義相立候得ハ何時ニモ出

兵可仕、今日之事豈誰痛心切歎セサランヤ、然ト雖ト

モ兵士攻撃事央ニシテ名義ニ餓工候てハ勝算之目的モ

無之、尚事機ニ応シ再会可仕段申向ケ決別仕候、夫よ

り同志等集リ候竹宮村エ至リ、吉十郎等ノ拳動談

シ聞ケ候處、踊躍シテ頓ニ意氣ヲ変スルアリ、頗ル名

義如何と顧ルアリ、挙止擾々議論済々将ニ患ヲ社中ニ

生セントス、曉諭百端事稍々解コトヲ得テ返ル、暫ア

リテ人アリ、倉皇トシテ来ル、云フ事甚タ迫ル、先ニ

説破スルノ比ニアラス、請フ速ニ來リ見ヨ、共ニ至ル、

衆皆銃器ヲ手ニシ隊旗ヲ張テ以テ待ツ、死トモ可止之

勢ニアラス、喋々頻ニ迫ル、余云フ、何ソ事ニ惧テ決

セサルニアラス、名義ヲ顧ル而已、余モ又素より知ル

事必ス此ニ至ラント、請フコレより從容タレ、請フ必

ス悔ル勿レ、余モ又断然出兵衆皆奮励ス、揮涙部署既

ニ決ス、我名義トル処ハ、曰、國憲ヲ張ナリ、曰、

士氣ヲ強スルナリ、曰、弊習ヲ一洗スルナリ、隊伍ヲ

正シテ出ツ、廿二日同郡大江村ニテ大隊ヲ勤ス、我断

行隊ヲ七番小隊ト号ス、廿三日昧爽城兵ヲ襲撃セント

ス、城下我兵甚タ多シ、午後一時頃より筑後口ニ向フ、

則チ一番小隊佐々友房・九番小隊深野一三及ヒ我隊ト

共ニ三小隊進軍、薩兵モ又前後ニ進ム、此夜木留村ニ

宿ス、廿五日伊倉エ進軍途ニシテ聞アリ、木葉ニヨイ

テ台兵ヲ敗ルト、我板援以テ尽ク生擒セント欲ス、直

ニ斥候兵ヲ出ス、台兵既ニ散乱、死屍野ニ満ツ、輜重

途ニ遺棄ス、其敗衄ヤ可知、我隊銃ヲ得ル殆ド卅、弾

薬四駄、銃槍・喇叭荷担シテ来ル、赤血淋漓タリ、鰐

魚ノコトキ枚擧スルアタワス、廿六日三隊共ニ高瀬ニ

出兵、午後二時頃ヨリ岩崎原ニテ抗戦ス、台兵遁テ山

上ニ退キ頻ニ銃ヲ放テ拒ク、我兵又進コトヲ不得、兵互ニ寡単記ヘキノ戦ニアラス、市街中二三ノ台兵斃アリ、蓋斥候と云フ、此夜伊倉ニ退宿ス、廿七日午前九時頃より寺田原ニテ戦フ、斥候來リ云フ、砲声天地ヲ鳴動ス、恐クハ我軍利ヲ得サルカト、請フ急ニ出兵掎角セント、处分既ニ定テ兵ヲ揮ス、官兵大挙田野山谷皆敵ナリ、我兵寡鮮肉薄憤戦スト雖トモ、台兵益々多ヲ加フ、或ハ前後ニ受アリ、左右ニ受アリ、一團ヲ敗レハ又一團勉テ殺傷相当ト雖トモ衆寡不敵、殆ト敗ニ至ラントス、日没交綏シテ三ノ岳(河内町)太田村ニ転守ス、一番隊ハ吉次(玉東町)ヲ退守シ、九番隊ハ木留(猪木町)ヲ退守ス、日ニ大木土豚ヲ転運シテ台壁ヲ固メ一戦相待チ候處、病ヲ患テ脱隊仕候事、

熊本県第三大区十小区

託麻郡(熊本市)神水村住居

旧士族 杉野逸藏

## 七 八木豊治上申書

明治十一年

明治十年一月比中原尚雄等外數十名上官ノ内命ヲ受ケ、

西郷・桐野・篠原ノ三名暗殺セントノ企逐一露顯イタシ、信ニ西郷ハ國家ノ柱石ニテ維新前後ニ至リ有功無罪、豈之ヲ奸計ニ陷サレテハ遺憾ノ至リ、依テ西郷始メ尋問ノ為上京之由、元來我輩之依頼スル處ナレハ、先隨行シテ熊本川尻ニ至ルヤ台兵要擊ス、我先鋒擊テ之ヲ卻ク、既ニ二本木町ニ至リ台兵城中ヨリ発砲イタシ遂ニ大戦争ニ及ヒ、我軍蟻附シテ攻ム、城固シテ抜コト能ハス、依テ長团ヲ築キ持久ノ計ヲナス、官軍木留口ニ來ルヤ又之ニ趣キ屢交戦、迭ニ勝敗アリ、官軍又八代口ヨリ攻来リ我軍僅ニ五六中隊ニシテ支コト能ハス、遂ニ敗走、竹宮及ヒ下南部村エ転陣ス、二日ニシテ官軍又大挙シテ攻来リノ中央エ切入我軍勝利ニシテ、一時ノ敗走我軍ノ傍伴トス、此日御舟口ノ敗走ヲ聞ヤ木山エ転陣ス、官軍又攻來リ我軍敗走、矢部エ転陣ス、此地糧食乏シキヲ以テ人吉城下迄引退キ官軍又鹿兒島へ來リ我隊之ニ趣ク、吉野村ノ中雀ヶ官ニ至リ官軍ノ制鉄器械所ニアルヤ我軍ノ來ルヲ知ラス倦怠、依テ我隊ニ令シテ後ノ高山ヨリ一声ニ発射ス、官軍狼狽「バツテーラ」ヨリ海ニ遁ル、者多シ、之ヲ狙撃スルコト鳥ヲ擊ガ如シ、留コト四五日ニシテ人吉

方面(頭地、五木村)頭智口ノ援兵トシテ趣ク、二日ニシテ官軍攻來リ我

軍敗走人吉城下迄退キ、此夜兵氣ヲ養ヒ翌日進撃、城下

ヲ隔コト一里半許ニシテ檜山ニテ会戦ス、戦酣ニシテ我

半隊ヲ以テ敵ノ後ヨリ咄嗟シテ切入官軍大敗、我軍之ヲ

追躡ス、薄暮ニ至リ引退キ翌日官軍攻來リ我軍敗走、大

小場(人吉市南郷)迄引退キ四五日ニシテ官軍攻來リ我軍敗走、官軍追

躡(えびの市)加久藤越ニ至リ我軍返戦ス、大戦争ニ及ヒ敵ト隔コト

二間許ニシテ激戦ス、我軍弾薬尽キ石ヲ投シテ防ク、薄

暮ニ至リ引退キ加久藤町工宿陣、高千穂山ヲ後ニシテ守

備ヲ修ム、官軍ノ飯野ニ在ルヲ聞ヤ之ヲ進撃ス、我軍利

アラス、四五日アツテ官軍又攻來リ我軍敗走、宮崎川ヲ

阻テ、防ク、官軍攻來リ我軍敗走、之ヨリ毎戦利アラス

美々津川ヲ阻テ、防ク、二日ニシテ官軍攻來リ我軍敗走、

官軍我後ヲ絶切豐後口ヨリ突出ントスルニ霖雨數日ニ及

ヒ進退ニ艱ミ餽糧ツカス、敵ヲ前後ニ受ケ窮蹙イタシ遂

(日向市)二美々津ニヲヒテ降伏仕候、

## 八 肥後直治上申書

私儀兼テ私学校徒ニテハ無之候得共、昨明治十年五月鹿

兒島伊敷村出張本營中島健彦ヨリ出兵可致旨被申付候ニ

付、右伊敷村へ出張候処、直ニ振武十四番隊兵卒ヘ編入

相成、同月廿三日肥後國人吉ヘ出兵致候処、直ニ解隊相

成、其節(野村盛貴中隊長)正義九番中隊右小隊押伍被命、同國雨堤ト申処

ヘ出張守兵致居候処、六月上旬ニテモ候半、敵兵押寄候

ニ付防戦ノ折柄、外隊ノ守場ヨリ相敗引退候ニ付我隊ニ

モ(多良木町)櫻木村ト申処迄引揚、同所(多良木町)花立峠ト申処ノ要地ヘ台場

ヲ築キ相守居候、然処同所本營高城十次ヨリ小隊長被申

付、其後全月下旬ニテモ候半、敵寨山王山ヘ進撃致候央、

地藏峠及其他諸所ノ味方敗軍ニテ引退候段報知有之候ニ

付、我兵モ其儘日向國須木郷迄引上ル、其后諸所敗軍ニ

テ終ニ高鍋美々川迄引退拒守罷在候内、其川上(東郷町)山陰村ト

申処相破レ通路被相絶、依テ右山陰村ニ於テ官軍狙撃四

中隊ヘ相付帰順仕候也、

鹿兒島県薩摩国鹿兒島郡  
第一大区五小区西田村居住

(明治)十一一年二月  
旧士族 八木豊治

坂元村居住士族傳左衛門二男  
鹿兒島県鹿兒島郡第一大区小三区

## 九 郡山誠治上申書

私儀私学校工入校罷在候、依て其趣意タルヤ陸軍大将西郷隆盛・同少将桐野利秋・同僚原國幹等ノ三名暗殺スヘキ旨、政府ヨリ中原尚雄等始メ數十名内命ヲ奉シ鹿児島ニ着県シテ、密ニ諸所奔走致候趣等暴露致シ、追々捕縛ニ相就キ、然シテ其任ノ官吏鞠問ニ及ハレタル処、果シテ中原已下數十名ノ輩正ニ暗殺ノ内命ヲ奉シ候趣等顯然明瞭ニ各白状致シ、衆挙て意外ノ人氣ヲ懷キ判然是非曲直ヲ待タスシテ弁明セザルニ依り、衆同心協力致シ西郷・桐野・篠原等三名政府へ御尋問ノ筋アルニ依リ彼ニ隨従シ、五番大隊八番小隊小隊長石橋清八隊工兵卒編入セラレ、(池上四郎隊長)明治十年丑二月十七日同県出発、同廿一日熊本県内松葉瀬ヘ到着致シ候處、鎮兵ヨリ城下ノ街衢ヲ焼払ヒ、其火焔々、且城内ヨリ夥シク銃砲等相発シ、其拳動ノ報ヲ告テタルヤ兵勢大ニ動搖シ、同廿二日昧爽ニ至リ城下エ馳行候処、意外ノ形勢ニ立至リ止ムヲ得スシテ互ニ一戦ニ相及、本日ハ勝敗決セスシテ長六橋エ退キタリ、即日ヨリ

同所成兵ス、後三日位ヲ經同一小隊ヲシテ城門工夜襲スルノ評議相決シテ同廿六日ノ薄暮ヨリ終夜ノ戰、是亦勝敗ヲ決セスシテ空シク引揚ルニ至ル、同廿八日官軍高瀬エ要撃シテ三番大隊ト大ニ戦フ、其報ヲ得我カ隊援兵トシテ速ニ致リ三日ノ血戰、官軍終ニ敗衄シテ馬乗式名道路ニ斃レタリ、其外死傷等多シ、夫ト交代シテ木ノ葉エ引揚ケ同断守兵ス、官軍同所間道ヲ押破リ来撃シテ亦々終日ノ戰争、自分五列組合田尻小吉郎手疵ヲ負ヒ川尻病院エ護送ス、二日ヲ經同所本隊エ帰ル、然ルニ亦々援兵ト交代シテ田原エ趣キ岩一ヶ所固守スル処、官軍狙撃スルコト殆ト兩ノ如シ、数刻ニ及テ我カ兵敗ヲ取り少シク退キ既ニ敵兵ノ為追撃セラル、ノ勢ヲ為シ、尤予メ運カシタル計略ヲ以テ、敵ヲ術中ニ陥レ味方ノ惣兵追返シ兵氣大ニ奮励致シ、挙兵敵中ニ切込ミ悉ク敗走シタルハ勿論、路傍ノ死骸夥シク枚挙スルニ遑アラス、味方十分ノ勝利ヲ得タリ、夫ヲ期スルヤ兵氣數日ノ連戦ニ羸労シ、故ニ二本木エ引揚ケ二日位ノ休兵等致候、左候處曰ナラスシテ段山番兵ノ四番隊ト交代シテ三月十三日十字頃ニモ候半、城門ヲ破り出、一大隊余同所味方宿陣ノ傍ヲ來撃シ、即ヨリ互ニ戰争相成リ其夜ニ至リ閻断モ無之、翌十四日

昧爽ニ至リ敵纏ノ残兵ヲ以テ支ヘ居タリ、然處本日一字頃ニモ候半、城門ヨリ將亦二大隊程同断、互ニ血戦暫時止時ナシ、其央ニ至ルヤ味方弾丸殆ト尽果終ニ敗走シタリ、是ニ於テ身手疵ヲ負ヒ川尻病院ニ到リテ入ルコト三十日位ニシテ、出町エ番兵致シタル我本隊エ帰ル、数日同所皆ヲ固守ス、其後川尻敗戻シテ武ノ宮マテ引揚ルニ至ル、幾クナラスシテ敵是ヲ襲フ、遊撃三番隊ト大ニ戦フ、味方ノ弾丸尽テ引退ントスルニ望ミ、我援兵ヲ以テ敵ヲ追散ラシ、是ニ乘シテ亦身ニ疵ヲ負ヒ木山病院エ十五日位入ル、後人吉エ各隊引揚ノ節神ノ瀬本當ヨリ可差越旨申来リ相赴候処、(味磨村)破竹壹番中隊分隊長命セラレ、同所ヨリ一里計相隔候倉谷ト云所エ數日ノ守兵、敵兵終ニ神ニ瀬山中ノ陥ヲ冒シテ我兵ノ不意ヲ來擊シ、終日ノ戦争ニ相及、敵終ニ敗走シテ山中ヲ追落シ、是ニ於テ將亦創ヲ負ヒ人吉ヨリ小林・高原・高城・高岡迄ノ病院ニ入ルコト七十余日、其後快氣スルニ及テ野尻口本營詰中隊長黒木幸介ヨリ用談申来差越候処、不肖ノ身常山二番中隊小隊長命セラレ、即日ヨリ野尻・(野尻町)紙屋・(市ノ瀬、野尻町)一ノ瀬マテ差越成兵ス、同七月初方数百ノ敵兵俄ニ來撃シテ互ニ戦争ニ及候処、衆寡支フルコト能ハス、終ニ敗戻シテ退キタリ、依

テ高岡ノ様差越同所エ鹿児島県官徳尾野某出張相成居候ニ付自首仕候也、

薩摩国鹿兒島縣鹿兒島郡第三大區  
六小区坂本村居住

明治十一年寅三月六日 旧士族 郡山誠治

## 一〇 和田 勇上申書

吾輩出軍之趣意タルヤ、陸軍大將西郷隆盛・陸軍少將桐野利秋・同僚原國幹在県之処、警視庁少警部中原尚雄外數十名上官ヨリ暗殺ノ内命ヲ奉シ帰県ノ処、其陰謀發覚シ捕縛糾問ニ及候処、事情具ニ吐露、及野村綱自首之條件モ有之、依テ右三將政府ヘ尋問トシテ旧兵隊ヲ率ヒ上京之趣、中原等ノ口供ヲモ相副普ク布達ニ付、旧飫肥藩愛國ノ輩來会スル者数百名ニテ上京ノ隨行ヲ願、隊伍ヲ整シ三小隊ト成シ、余一番小隊給養専務ニテ明治十年二月十七日飫肥出発、兼程高千穂ヲ経テ同廿四日肥後国川尻ヘ着陣ス、然ルニ熊本城市灰燼、台兵戦ヲ挑、戰酣、依之(天明町)二丁川口海岸扞禦ノ指揮ヲ受ケ直ニ出張守防ス、三月三日山鹿ヘ転陣シ翌四日南ノ關進撃、先鋒トナリ十丁

村ヲ経間道ヨリ進軍之処、岩村<sup>(二加和町)</sup>ニ於テ敵ノ伏ニ遭ヒ、突

然左右ニ開キ迭ニ砲発激戦、午後一時頃ニ至リ敵退去、勢

乗シ追撃スル三里余ニシテ山鹿ヨリ引揚ハキノ報ヲ得、

遺憾不勘ト雖山鹿ヘ引揚ル、凡十九日頃山鹿引揚ケ菊地<sup>(池)</sup>

<sup>(菊池市)</sup>郡限府<sup>(義姫尾、菊池市)</sup>ヘ転陣、今朝尾原ヘ墨ヲ築守防ス、四月四日頃天

明敵大挙來襲、我兵憤怒防戦為ト雖衆寡敵セス終ニ苦戦、

川ヲ阻テ戦、午後五時ニ至リ敵退去戦息ム、薄晡ニ交代

ヲナシ赤星街道梨木坂ヘ転シ墨ヲ固シ守防ス、屢官兵我

ヲ伺ト雖不能動、爰ヲ戌ル凡二旬ニシテ又竹迫<sup>(合志村)</sup>ヘ転ス、

彼ノ地戌ルニ利アラス<sup>(大津)</sup>大洲ヘ引揚守ヲ付ル、廿三日頃菊

地街道ヨリ敵襲來、墨兵防戦ノ内瞬間応援來テ俱ニ横ヲ

突アリ、或ハ正面抜刀憤戦スルアリ、大ニ勝利ヲ得敵終

ニ辟易、騎馬其他土工具捨テ退散、追撃スルコト里余ニ

シテ又元ノ墨ヲ守ル、此戦頗ル快戦ナリ、廿八日頃川尻

敗衄ニ及惣軍矢部ヘ引揚ケ、爰ニ於テ飫肥隊変整シ三中

隊トナシ、奇兵十八、十九、二十番ト成ル、余十八番右翼

半隊長ノ任ヲ受ケ猿渡城<sup>(矢部町)</sup>名ヘ守ヲ付ル、五月一日頃惣軍

引揚矢部ヲ經テ人吉ノ内湯前村<sup>(湯前町)</sup>ヘ転シ逗ル七日ニシテ、

戌ル十余日、然ルニ宮崎口敗衄、直ニ延岡ヲ襲ノ急ヲ告

ルアリ、夜ル<sup>(長井村、北川町)</sup>永江村<sup>(延岡市福葉町)</sup>ヘ引揚ケ延岡口防戦ノ処聞中トナリ、

キ美々川アリ、沿川ノ舸數十艘ヲ纏シ各乗シ流ヲ下リ美

向<sup>(向市)</sup>津ヘ上陸ス、然ルニ宮崎ノ守衛ニ当リ兼程宮崎ニ赴キ、

着スルヤ要道哨兵ヲ張リ市邑ヲ巡邏シ居ル十余日ニシテ、

又細島港防禦ニ転シ、港口哨兵所置キ大洋ヲ望ミ守防ス、

凡廿八日頃南方ニ当リ汽船見ユルアリ、直ニ港前ニ来リ

港口ヲ窺フ、且港形迂曲ニシテ檢野ヲ狭ミ、浦人ノ室屋

見ル能ス、蓋シ野ヲ隔テ屢ニシテ艦ヨリ砲ヲ放ツ、破裂

スル有ト雖死傷更ニナン、我兵半隊野ニ攀チ銃ヲ艦ヘ放

ツ、艦直ニ向ヲ替ヘ馳リ不知所之ナリ、六月上旬豊後國

進軍大野市<sup>(小野市、宇喜田町)</sup>村ヘ着陣、三國<sup>(三重・宇喜田町)</sup>守兵ト交代シ墨ヲ堅シ守防

ス、十二日三重市進撃十三中隊ヲ三分チ進ミ勝敗決セス、

夜乘シ引揚元ノ墨ヲ守ル、十四日天明接続ノ旗返<sup>(三重・宇喜田町)</sup>ヘ敵襲

來、迭ニ砲声地ヲ震動シ我レ墨ヲ巡視シ前面ヲ望見ルニ

敵候兵見ニ、又後レテ隊列アリ是ヲ一擊欲敗之、我謀計

ヲ議センカ為メ中隊長石川駿ノ在ル旗返ニ赴キ、弾丸雨

注終ニ銃創ヲ蒙リ延岡病院ヘ入室、七月下旬ニ至リ創稍

瘥<sup>(北川町)</sup>ヘ八月六日<sup>(北川町)</sup>本當ヘ出頭之処、奇兵二十番右翼小隊

長被申付、鑑<sup>(北川町)</sup>ヘ赴キ天嶮ノ絶頂ヘ木ヲ雜キ墨ヲ築キ爰ヲ

戌ル十余日、然ルニ宮崎口敗衄、直ニ延岡ヲ襲ノ急ヲ告

ルアリ、夜ル<sup>(長井村、北川町)</sup>永江村<sup>(延岡市福葉町)</sup>ヘ引揚ケ延岡口防戦ノ処聞中トナリ、

八月十八日小梓峠ノ台兵ヘ帰順、

鹿児島県日向国那珂郡

(日南市)  
飯肥平野村

明治十一年二月

旧士族 和田 勇

## 一 伊東祐啓上申書

先般中原尚雄等在勤上官之密諭ヲ奉シ、姦謀ヲ逞セントテ事未タ果スシテ暴露ス、隆盛尋問ノ為メ上京セントスルニ、台兵既ニ川尻ニ要擊ス、城下街市已ニ灰燼トナル、功臣ノ惡ル、一二此ニ至ルカ、中原等ノ口供ニ因リ苟モ有志ノ士采集シ立ニ隊伍ヲ編立シ、我不顧浅劣、三番小隊分隊長トナリ肥後山鹿ニ進撃ス、市中ヲ戌ル四五日、三月初七桐野少将五千ノ兵ヲ率テ肥南ニ進軍セントスルニ、先鋒ノ斥候馳來リ敵ノ斥候ナルカ車返ニ數名ノ戦士來ルト、桐野少将徑ニ將士ヲ戒メ鞭ヲ揮テ布陣、砦ヲ設ントスルニ敵之レ薄ル、擊ニ大ニ之レヲ走ス、(山鹿市)鍋田原地ノ利ニ因リ益墨ヲ固シ道ヲ梗シテ守ル、同十二日敵冒朝不意ニ出テ我左翼ノ斬墨ヲ抜テ已ニ鍋田原ヲ乗リ取ラント、其鋒サキ当ル可ラスト雖、此ニ敗ヲ取ル何ノ面目アツテ生ン、決死奮戰兵士ヲ励マシ叱シテ鞭ヲ加フ、兵

士刀ヲ揮テ敵軍ニ乱入シ首ヲ斫ル無算、敵辟易銃剣ヲ捨て走ル、得ル処ノ銃凡七八十挺余、雜品不暇数、官兵斃ルモノ百ヲ以テ数フ、我兵ヲ亡スルモノ十分ノ一二居ルト、午後一時ノ頃ナラン復ヒ襲来両軍激戦炮声止ムトキナシ、殺傷相当ル、暮ル、ニアヒ敵近傍ノ廬舎ヲ火テ退ク、十七日敵大炮三四門ヲ列シ叨リニ砲撃ス、歩兵一時ニ攻撃苦戦スト雖、敗衄ニ至ラス、十九日昧爽大砲一発ヲ放ツヤ三道ヨリ攻撃ス、一ヲ八幡山ヨリ進メ、一ハ本道ヨリ、一ハ右側山手ヨリ、戦已ニ酣ナラントスルニ炮声ノ減少スルヲ怪ミ我レ本道口ヲ窺ハントスルニ味方ノ兵皆砦ヲ明ケ、何處ニ退クヲ知ラス、余ス処ノ兵我一分隊而已、敵之レヲ囮テ四方ヨリ狙撃ス、萬死一生廻ヲ衝テ漸ク山鹿ニ遁走、敵之レヲ尾撃ス、創ヲ受ルモノ僅一名而已、同日午後一時頃ヨリ田島ニ転陣ス、田原・木ノ葉・木留ヲ望ミ見ルニ、兵火炎々漲天砲声頻ニ盛ナリ、一方百余名ノ兵ヲ以テ同所ニ配布シ我一小隊ハ(西合志町)鳥巣辨天山ニ至リ植木ノ兵ト連絡ヲ取ル、戌二日ニシテ石川邸ニ転ス、守ル又三日ニシテ植木本道右側之堡壘ニ交代ス、当方面植木・木ノ葉・木留ノ激戦、我亡スル処ノ兵一日若干名、敵之守ヲ距ル近キ六七間、遠キ一丁ニ軼キス、時々戦ヲ

挑ム、敵之レニ乗シテ来ル、斬殺スルモノ不暇数、川尻  
之破ヤ遺憾ト雖、該墨ヲ舍テ木山ニ退陣、四月二十三日(益城町)  
ノ頃敵飯田山(益城町)ノ嶮ニ拠ルト聞ヤ径ニ進撃ス、抵ル官兵既  
ニ去ル、老翁アリ曰、官軍一昨日御船ニ退クト云、時日  
已ニ斜ナリ、速ニ土山ニ至リ處々ニ哨兵ヲ出シ配兵スト  
雖、日暮テ砦ヲ設クルニ由ナシ、記号ヲ嚴ニシ伏ヲ設ケ  
テ成ル、廿七八日頃官軍ニ敗ラレ我兵已ニ合囲中ニ陥ラ  
ントス、戦フト雖衆寡不敵、退テ矢部猿渡(矢部町)ヲ扼守ス、同  
所ニテ飫肥三番小隊ヲ奇兵十九番中隊ト改称ス、余左小  
隊々長トナリ五月一二日ノ頃那須越(椎葉村)ヲ経人吉湯(鳥飼町)ノ前ニ休  
兵スル旬余、全十一二日米良山ノ嶮路ヲ経過シ日向国(日向市)美  
々津ニ至リ市中ヲ警衛ス、十四五日頃敵ノ戦艦細島(日向市)ニ來  
リ砲撃スト、直ニ該地ヲ発シ細島防戦、三中隊ヲ以テ防  
クニ兵余リ有リ、我兵隊延岡ニ至ル東海ノ守兵ヲ命セラ  
ル、守衛中時々戦艦来ルト雖砲撃スルコトナシ、六月十  
五日ノ頃豐後口ニ向ヒ重岡(宇佐町)ニ戰フ一昼夜、地形不便時ニ  
暴雨乍チ水漲リ橋断ヘ弾糧ヲ断ツノ憂アリ、夜九時頃ヨ  
リ暗夜ニ乗シ熊田(北川町)ニ退ントスルニ、風雨雷ス、雷光道ヲ  
照ラシテ熊田ニ達シ休兵セントスルニ、(豊日満)陸地岬進撃之命  
アル、十六七日ノ頃午后十一時深山岩崖ノ地ヲ経過シ曉

霧ニ乗シ四方ヨリ擊テ大ニ之レヲ走ス、又銃刀及ヒ米等  
ヲ得即時該地ヘ守兵ヲ付ケ相持スル連旬、七月十一日三浦町  
河内口ヨリ応援ヲ乞フ、余一小隊ヲ率テ赴援セントスル  
ニ味方ノ兵破レテ大ニ散乱シ、吐ノ水流ノ残兵ヲ本道ヨ  
リ進メ我レ右半隊ヲ率テ左側ノ山ニ登リ、分隊長日高昌  
ハ左半隊ヲ率テ右側ノ山路ヨリ敵ノ不意ニ出テ大ニ之レ  
ヲ走ラス、尾撃スル里計リ、日暮ニ大井邸(北浦町)二守ル、戦フ毎  
ニ勝利アリトイヘトモ都城ノ破口・米良口・山陰口・三高  
田井口(千穂町)ヨリ一時ニ薄リ豊後口ノ兵ト連絡シ、已ニ合囲中  
トナリ、(延岡市留葉崎)小梓峠第二旅團ニ帰順、  
鹿兒島県日向国那珂郡飫肥  
板敷村住居  
明治十一年二月 旧士族 伊東祐啓

## 一一 坂元正一上申書

自分儀明治十年二月先是東京警部中原尚雄等政府之内命  
ヲ奉シ、西郷隆盛等ヲ暗殺之事暴露致シ、依之西郷・桐野・  
篠原等政府へ尋問之為私学校徒ヲ率ヒ鹿兒島出発相成段、  
同所士族永山矢一郎ヨリ報知有之候ニ付同意致、依テ同

士百三十名ト共ニ宿許出立、全十二日鹿兒島ヘ着、其ヨリ銘々諸隊へ加入シ、予ハ第四ノ十番小隊橋口精一隊兵卒ヘ編入、同十六日鹿兒島出発全廿二日熊本到着之処、先鋒隊既ニ熊本城攻撃ノ央ニ付、一時我隊ニモ城ヘ攻撃相掛ト雖トモ此場ハ直ニ引揚植木ヘ進軍之処、最早町口ヨリ二三町程手前ニテ官兵ニ出逢、暫時相戦候処、無程官兵ヲ追ヒ退、其ヨリ翌廿三日木之葉ト申処ヘ戦争相始リ候ニ付、我隊応援トシテ間道ヨリ進ミ暫ク接戦スト雖トモ勝敗決セザルニ付、直ニ抜刀切込ニ及候処、官兵紛乱狼狽シテ走ル、時ニ午後六時頃ナリ、此時分捕騎馬壱疋・針打銃五六百挺、弾薬之ニ称フ、其ヨリ植木ヘ引揚二日滯陣ニテ山鹿ヘ転軍、四五日休兵之処、同廿八九日頃日眩ト不覚、朝七時頃官兵襲来候ニ付、此時モ援兵ニテ直ニ駆付奮闘暫時ニシテ一同駆込短兵接戦、遂ニ官兵ヲ走ス、逃ルヲ追里許、此時暫獲頗ル多シ、其ヨリ山鹿ヘ引揚ケ滯陣之処、熊本々當ヨリ引上候様達ニ付引上候処、直又木留(植木町)ヘ出兵命セラレ、則同夜彼地ニ赴ク、至ルヤ否直ニ戰ヒ相始、此處一週間余リ昼夜無間断互ニ勝敗アリ、此時三月十二日予深房ヲ負ヒ、退テ川尻病院ニ入ル、其后四月中旬同所敗軍之節一旦帰國治療ヲ加フ、然

処六月上旬ニ至リ桐野利秋官崎ヘ本營ヲ据ヘ專募兵ヲ事リ銘々諸隊へ加入シ、(桐野利秋隊長)予ハ第四ノ十番小隊橋口精一隊兵卒ヘ編入、同十六日鹿兒島出発全廿二日熊本到着之処、(成)先鋒隊既ニ熊本城攻撃ノ央ニ付、一時我隊ニモ城ヘ攻撃相掛ト雖トモ此場ハ直ニ引揚植木ヘ進軍之処、最早町口ヨリ二三町程手前ニテ官兵ニ出逢、暫時相戦候処、無程官兵ヲ追ヒ退、其ヨリ翌廿三日木之葉ト申処ヘ戦争相始リ候ニ付、我隊応援トシテ間道ヨリ進ミ暫ク接戦スト雖トモ勝敗決セザルニ付、直ニ抜刀切込ニ及候処、官兵紛乱狼狽シテ走ル、時ニ午後六時頃ナリ、此時分捕騎馬壱疋・針打銃五六百挺、弾薬之ニ称フ、其ヨリ植木ヘ引揚二日滯陣ニテ山鹿ヘ転軍、四五日休兵之処、同廿八九日頃日眩ト不覚、朝七時頃官兵襲来候ニ付、此時モ援兵ニテ直ニ駆付奮闘暫時ニシテ一同駆込短兵接戦、遂ニ官兵ヲ走ス、逃ルヲ追里許、此時暫獲頗ル多シ、其ヨリ山鹿ヘ引揚ケ滯陣之処、熊本々當ヨリ引上候様達ニ付引上候処、直又木留(植木町)ヘ出兵命セラレ、則同夜彼地ニ赴ク、至ルヤ否直ニ戰ヒ相始、此處一週間余リ昼夜無間断互ニ勝敗アリ、此時三月十二日予深房ヲ負ヒ、退テ川尻病院ニ入ル、其后四月中旬同所敗軍之節一旦帰國治療ヲ加フ、然

处分儀明治九年十月山田郷私学校分校工入校候処、昨十一年二月上旬当県士族東京出張中原尚雄等數十名、当在県ノ陸軍大将西郷隆盛ヲ閻殺ノ内命ヲ蒙り帰県イタシ候段及露頭ニ、捕縛ノ上鞫問相成候処白状イタシ候趣ニ付、坂元正一士族四郎右衛門長男

### 一三 竹下六郎上申書

自分儀明治九年十月山田郷私学校分校工入校候処、昨十一年二月上旬当県士族東京出張中原尚雄等數十名、当在県ノ陸軍大将西郷隆盛ヲ閻殺ノ内命ヲ蒙り帰県イタシ候段及露頭ニ、捕縛ノ上鞫問相成候処白状イタシ候趣ニ付、坂元正一士族四郎右衛門長男

器ヲ携帶シ、為途中保護隨行ノ段県令聞届ニ付、出兵イタ  
シ候様区長別府晉介ヨリ被相達、同月十五日出兵候處、  
於加治木郷ニ(児玉強之助隊長)第七大隊八番小隊小隊長被申付、夫ヨリ大  
口通行ニテ同十九日肥後川尻町工着候處、最早熊本鎮台  
ノ義、籠城ニテ同所県下ヲ焼払、通路ヲ遮キリ候故、同  
町工宿陣ニテ諸道ニ哨兵ヲ張候處、其夜城兵襲來炮発イ  
タシ候得共、直ニ追銃器二三十挺モ分捕、左候テ其翌  
々廿一日城内工進撃ニテ我ケ兵城西八幡山工進撃候處、  
城塞嚴々タル故進事アタワス、夫ナリ春日村申処工引揚  
ケ、夫ヨリ転シテ城北千段畠工戍兵候處、安政橋敗軍ノ  
節我ケ兵モ敵ノ進撃ヲ受ケ尽力相防候處、終ニ敵兵引退  
キ候ニ付、尚亦敵重相堅メ居候處、其後川尻口ノ味方敗  
軍ニ付城外ノ団ヲ解キ候央、川尻口ノ官兵城兵ト合シテ  
我ケ兵ヲ突キ、凡十二時比ヨリ午後七時比迄相戦候得共  
勝負不相決、互ニ打止メ相堅居候處、總兵(益城町)木山町ノ様引  
揚ニテ我ケ兵ハ(熊本市東端)中牟田村工引揚守兵候、然ル処其後官兵  
ノ総進撃ヲ受ケ各所終日大戦ニテ御船口ノ味方大敗戦、  
中ニモ銃器ハ相損シ弾薬ハ乏敷候ニ付、此地モ引揚ケ、矢  
部町通行ニテ人吉ノ内湯(湯前町)ノ前村迄引退キ同所ニテ解隊、  
正義七番中隊左小隊工編入、更ニ小隊長被申付、則チ日

向国三田井村工出張、(五ヶ瀬町)宮ノ原工進軍同所鏡山ノ敵兵ヲ追  
落、肥後國豆原口迄押出候得共、終ニ利アラシシテ本ノ  
官ノ原迄引揚同所ヲ相守居候處、無間三田井口敗軍ノ報  
知有之候ニ付、早々七ツ山ヲ指テ引揚、夫ヨリ米良山通  
行ニテ人吉ノ内(上村)皆越村工出張成兵候處、飯野諸口守兵ノ  
内ヨリ十余中隊此地工來会、人吉工進撃ノ決議ニテ進撃  
イタシ、我ケ兵坪屋村敵軍ノ後ヲ襲候處、官軍崩レ逃ル  
ヲ追、(上村)植村迄押出シ銃器ハ勿論其外諸品ノ分捕多シト雖  
トモ、各隊評議紛々タル央、官軍襲來候ニ付、同所要地  
工引揚防戦ス、其翌日守兵ハ余隊工交代、鹿兒島県内須  
木郷迄引揚、其後連戦敗軍ニテ美々津川工引退キ、終ニ  
延岡エノ通路ヲ被相絶、山中工潛伏ニテ能々勘考候處、  
先非ヲ悔悟イタシ富高新町出張第三旅團軍門工於テ自首  
候也、

鹿兒島県下大隅国始羅郡山田

第五拾四大区壱小区下名村

士族次右衛門長男

竹下六郎

明治十一年二月

## 一四 江田 基上申書

明治十年一月頃中原尚雄等數十名上官ノ内命ヲ奉シ不容

易ノ姦謀ヲ企、周旋罷在候處、逐一露顎ニ及ヒ候間、隆

盛等為尋問上京ノ覺悟ニ決シ、我輩隨行出發、二月廿

二日熊本県下川尻工着、既ニ台兵繰出挑ミ戰ヒノ勢ニテ

開戦ニ相成、廿三日白川ヲ渡リ花岡山ヨリ筒口エ進撃、

城固シテ抜ケス城兵亦壁ヲ固フシテ出テス、互ニ銃炮ヲ

発スル而已、(永山勝 部隊長)筒口滯墨幾十余日、又聞ク台兵八代エ来ル

ト、故ニ第三大隊一・二・九ノ三小隊八代エ発ス、三月

七日鏡工進撃ノ処、敵既ニ干川エ進来ル、我河堤ヲ砲台

トシ午前六時頃ヨリ午後二時迄交戦、此日早天官兵ヲ捕

獲訊問スルニ巡查ト云、我前兵敗レ我兵防戦ノ処本當ヨ

リ退軍ノ命アリ、然ルニ我孤軍敵ノ囮ヲ受ル數重不能出、(松橋

皆云敵ヲ殺シテ死セント、遂ニ生路ヲ得テ逃ル、此夜砂

川迄川堤土豚ヲ運ヒ銃砲ヲ台シ以テ守ル、十日官軍砂川

工襲來ル、午前一時頃ヨリ午後六時頃迄憤戦、衆皆敵ヲ

犯シテ進、官軍器械ヲ遺テ遁ル、追コト里許、干川ニ至

ル、薄暮兵ヲ引揚ケ砂川エ退ク、彈薬・器械ヲ得無算、十

一日午前十時頃官兵襲來ル、數時防戦繰ニ利ヲ得ルト雖

トモ玉葉尽キ松橋迄退ク、同十二日下郷村エ転陣ス、此

(豊野村)

夜鯖上ノ急ナルヲ聞ク、昧爽援兵ヲ出ス、今朝霧深シテ

咫尺ヲ不弁、鯖上既ニ敗レ我兵既ニ至ル遲シテ共ニ堅志

田ニ至ル、当地ハ敵ヲ待ヘキノ地利ニ非ス、終ニ甲佐町

ニ転陣ス、敵來テ堅志田ニ陣ス、明十四日刻時シテ夜襲

セントス、東方未明ニ乗シ官兵ノ營ヲ斫リ大ニ敗之、東

駆西追戦酣ニシテ天明急ニ振旅シテ退ク、官兵又我ヲ尾

擊且防且戦、互ニ幸ニシテ敗衄ナシ、十五日官軍我甲佐

ノ陣ヲ襲來、我斥候怠テ敗ル、御舟エ引ク、四五日アリ

テ又御舟エ襲來ル、我軍敗積ス、黃山エ転陣ス、我官兵

軍御舟ニ來ルヲ聞ク、一戦功ヲ奏セント欲シテ御舟ニ至

ル、既ニシテ御舟又我地ト成ル、又明日官兵進撃我軍大敗

矢部エ退ク、是ヨリ我兵毎ニ不利、戦スシテ退ク、遂ニ旧

藩人吉領(椎葉村)不土野ニ至ル、於是余遊軍五番小隊小隊長ノ命

ヲ受ク、同所岩野ニテ一戦、愉快敵ヲ敗ルト雖トモ弾薬

尽キルヲ以テ米良山中エ退ク、近頃ノ戰勝コト少フシテ

敗ル、多シ、故記スヘキニ非ス、佐土原ヲ経、美々津エ

至ル、霖雨連旬糧道絶、凍綏交至ル、兵人不能操刀、力

尽キテ帰順仕候也、

明治十一年二月

旧士族 江田 基

## 一五 前田貞一郎上申書

一自分儀明治十一年一月中原尚雄・野村綱等東京上官ノ内  
 諭ヲ奉し、同盟連署姦謀ヲ逞セントスルニ當リテ事忽  
 チニ発赫ス、仍テ事之始末并ニ尚雄等カ口供相添、隆  
 盛等上京ニ付、旧兵隊隨行之儀普ク県達ニ相成候、豈  
 団ヤ隆盛等維新靜難之勲功アル、丙丁之童子ト雖トモ  
 又知之、是ヲ以テ八議ニ入ル、ト云トモ可恥ノ功ニア  
 ラス、何況、上官手ヲ刺客ニ仮リテ以テ殺害セントハ、  
 乍恐大政府之御躰裁ニ於テモ如何と苦慮仕候内、既ニ  
 熊本ニ於テ開戦ニ相成候段承り、益驚愕ニ堪ヘ不申候、  
 衆人ノ依頼ニヨリテ無拠佐土原四番小隊半隊長トナリ、  
 隊伍ヲ編立シ、貴島清隊ニ加リ同人四番小隊トナリ、  
 三月九日県下出発、同十三日熊本エ着ス、直ニ田原坂  
 ニ向ヒ第二大隊七番小隊ト交代、当地尔來連戦天地ヲ  
 鳴動ス、十五日午後五時頃全軍抜刀台墨ヲ研ル、台兵  
 左右皆披靡ス、惟リ中墨堅シテ不抜、此拳ヤ器械・弾

薬ヲ得ル若干、十七日我隊彈薬尽テ射弾ニ窮ス、且我  
 守墨台地ニ闖入ス、弾丸雨よりも繁し揮テ以テ全軍ニ  
 列ス、官兵隨て我旧墨ニ入ル、兩日之役多失卒伍、廿  
 日昧爽官兵枚ヲ銜テ間道我背ニ出ツ、我狼狽不能支、  
 多失其良器械、弾薬亦多遺失、敗兵漸遁テ(鹿子木、北郷町)  
 集ル、又隊伍ヲ整正シ、処分既ニ定テ向坂ノ台兵ヲ襲  
 撃ス、半ハ回リテ敵背ニ捨ル、半ハ直ニ正面ニ角ル、  
 台兵狼狽、接戦須臾、死屍殆ト三百ト云フ、此戦ヤ台  
 木ニ到ル、日暮て追逐ヲ不得対墨守之、銃煩連リニ發  
 ス、至テ此兵士減少、佐土原三・四ノ小隊合テ第八大  
 隊二番小隊ト号ス、四月十四日本營命アリ、南方敗レ  
 テ(木山)黄山ニ転退、我隊モ又黄山ニ退、十六日同隊小隊長  
 とナル、同十七日御舟之台兵ヲ襲フ、台兵散乱則チ御  
 舟ヲ守ル、十八日我隊退テ黄山ノ本營ヲ守ル、廿日矢  
 部ニ転ス、此より日々二日州ヲ指テ退ク、五月七日(西都)  
 納村ニテ佐土原新募兵と合し隊名ヲ遊擊一番小隊ト号  
 ス、十六日宮崎ニ転ス、十九日隅州福山台兵上陸ス、  
 守兵援ヲ乞フ、右半隊ヲ遊擊一番小隊ト改称シテ廿一  
 日福山ニ至ル、台兵既ニ去ル、滯屯七月初旬ニ及フ、

(國分市) 敗報至ル、福山孤軍獨リ守ルコトヲ不得、牧原  
(福山市)

二転ス、七月十三日通山(財部町)ノ官兵ヲ襲フ、敵不戰シテ走  
 ル、十四日早朝台兵襲來ス、我出テ戦フ數時、互ニ退  
 ク、又通山ヲ守ル、十六日我全軍進撃、通山・福山・

牧原ノ全軍ヲ敗ラント欲ス、官兵大挙我ニ先ツテ来ル、  
 正午我軍不利、退テ旧墨ヲ守ル、廿三日ヨリ振武隊交

代都城ニ退ク、廿四日同處敗ル、此地要地ニアラサル  
 ヲ以テ山ノ口ニ転ス、此ヨリ尔後毎戦不利、兵氣挫折  
 日ニ佐土原ニ退ク、八月三日岡富ニ戦、此ニ至リて敗  
 兵愈不競、八月十八日宮崎出張所ニ自首仕候事、

### 鹿児島県第九十六大区三小区

日州那珂郡(佐土原町)上田島村住居

明治十一年二月 旧士族 前田貞一郎

### 一六 日高義正上申書

一明治十年一月中原尚雄等在勤上官之内諭ヲ受ケ不容易  
 之奸謀密計ヲ企テ尽力仕候中捕縛相成、逐一露顕、実  
 ニ維新靜難之功臣ヲシテ渠之為ニ殺害セラルトハ、切  
 齢之次第擧テ歎慨仕候処、隆盛等為尋問上京ニ付我輩

隨行之儀、区長坂田諸潔布達ニ及候間、二月廿七日宿  
 本發出、三月中旬熊本着、夫ヨリ直ニ同城下安巴橋ニ  
 番兵仕、四月八日迄同處ニ罷在候、近頃屢城中ヨリ相  
 同ヒ何欵怪數摸様有之、番兵等堅固ニ念ヲ入レ、八日  
 内、橋上浅瀬ヲ渡リ南方指テ馳セ抜ケ候、続て三中隊  
 モ可有之兵勢ニテ又同所ニ衝出候間、手強ク防戦ニ及  
 ヒ候處、我兵纔ニ一小隊ニテ苦戦仕候内、台兵周リテ  
 我兵ヲ中央ニ入レ殆ト支エ難ク、川堤ニ從テ凡壹丁余  
 モ退キ守ヲ付候、援兵俄ニ川東ニ來リ共ニ合力憤戦數  
 刻ニ及ヒ、漸没日又遁テ城中エ入ル、我兵又依然旧墨  
 ヲ守ル、我隊死者廿余人、傷者亦同、城兵横尸水トナ  
 ク陸トナク、作毛中枕藉不知其数、蓋此戦ヤ城兵糧尽  
 テ米ヲ運フ之窮戦也、同十四日本嘗有命、南軍敗レ因  
 ヲ撤シテ去レト、今夕戸島エ転ス、又命ス竹宮原エ転  
 陣スヘシト、十六日竹宮支村廣村エ転ス、墨ヲ築テ守  
 之、敵丸雨注、十八日竹宮原大戦有之、東ヨリ始リテ  
 終ニ我南方ニ及フ、敵軍死傷ヲ負ヒ弾薬・糧餉ヲ運テ  
 湖水ヲ渡ル、我墨湖ニ臨ミ狙撃命中頗得利ト云、東方

エ退ク、此ヨリ日々向ヲ指テ退ク、旧延岡領(南郷村)鬼神野・

渡川(南郷村)両所ニ守ル幾ト六七十日余、稍銃戦ニ及フト雖モ

毎ニ勝負ヲ以テ語ニ不及、後渡川ヲ譲テ鬼神野ヲ守ル、

敵渡川ヲ襲フ、渡川之兵敗散ス、鬼神野独リ守ルヲ不

得、(東郷町)山陰ニ転シ耳川ヲ守ル、我凡ソ二中隊敵兵什倍、

直ニ來テ我ニ逼ル、午前八時頃ヨリ午後三時頃迄防戦

衆寡不敵、我軍大ニ破ル、帥ル廻之兵散乱、過半残兵

ヲ收テ

(延岡市南郷)渡土呂ニ転ス、

八月十六日渡土呂ニ於テ隊下ヲ

率テ、第三旅団本部ニ帰順ス、

鹿児島県日向國那珂郡第百三大区

一小区福島(串間市)西方村

士族日高義穀長男

明治十一年二月

日高義正

一八 前田源之丞上申書

### 一七 指宿通綱上申書

私事兼テ私学校へハ関係不致候得共、西郷隆盛等出発後

区長島津又七ヨリ脅迫セラレ、不得止明治十年丑四月廿一日出張、肥後ノ内人吉表ヘ到着、(篠田清之丞)鵬翼六番中隊ヘ編入

被申付、右人吉領(人吉市西郷)中神村ヘ相固居候処官兵ノ進撃ヲ受、

三時間位互ニ砲戦、終ニ官兵ヲ追退ケ勝利ヲ得、我隊針打銃等分捕ス、其後吉松エ番兵致シ夫ヨリ高原ニ於テ官兵へ進撃、其台場迄乗取一時勝利ヲ得ルト雖、既ニ彈薬相尽難支、因テ官兵ノ守返ヲ受都之城(大谷町)頭へ引揚暫ク

番兵致、同所ニ於テ小隊長川畑堤二観官ニ付、跡役被申付、無程官崎ヨリ帰郷、同年八月十一日加世田郷警視出

張所へ帰順自首仕候也、

鹿児島県薩摩国河邊郡(川)第六大区一小区加世田麓

明治十一年寅二月

旧士族 指宿通綱

私事私学校エ入校不致候得共、西郷隆盛等政府エ尋問ノ筋有之出発ノ後、明治十年四月上旬県令大山綱良ヨリ郷内保護ノ為、巡查心得可申付旨達之趣戸長相徳善藏ヨリ

被申渡奉職罷在候処、豈岡ラン哉、区長島津又七ノ達ニ依リ、不得止同月廿日出発人吉エ到着致候処、常山一番小隊隊長被申付、(五木村)中村ヘ出張山口(全上)五木村内谷等ヘ相固メ互ニ砲擊致居候処、中村固メ拾一ノ一ノ兵、官兵ヨリ打破ラレ

応援スルト雖トモ、地形便ナラス平瀬迄引揚、徹夜巡邏  
 トトイタシ翌日椿ト云(五木村)所ノ本道工台場築建相固メ居候  
 処、官兵ヨリ進撃ヲ受、速ニ高山ヲ取ラレ右ノ台場へ踏  
 止マル能ハス木石ニ拠リ支レトモ三方ヲ取開マレ、轍ク  
 引揚ル能ハス、川渕ニ拠リ砲撃スル内終ニ接戦ニ相及、  
 其節左手ニ銃創ヲ受、因テ引退キ人吉病院ニ入治療ス、  
 五月十日帰国、六月下旬頃ニテモ候半段、一時方向ヲ誤  
 リ候段、先非ヲ悔悟シ、別働第三旅団ヘ相付帰順自首仕  
 候也、

負候ニ付帰宅療養罷在候処、区内戸長諭ニヨリ旧六月二  
 三日比鹿兒島県令工帰順書差出置候処、又々警部衆差入  
 二相成、綿貫少警視工帰順書差出候様御達ニ相成、(八月廿四日)旧七月  
 月十四日帰順書差出シ、即日鹿兒島監獄署工護送相成  
 候也、

## 鹿兒島県薩摩國河邊郡

明治十一年二月

旧士族 永山正兵衛

## 二〇 山下嘉兵衛上申書

鹿兒島県薩摩國河邊郡

第六大区壱小区加世田麓

明治十一年二月

旧士族 前田源之丞

## 一九 永山正兵衛上申書

明治十年六月十三日戸長募ニ応シ無銃隊勇義拾式番小隊  
 ノ小隊長ニテ六月十三日致出兵、県下阿久根諸所番兵イ  
 タシ、夫より(阿久根市)桑原城エ番兵、同所明郷ニテ同月十四日官  
 軍ト双方出合直官軍ヲ追散シ、猶又桑原城ヲ相守リ同月

十七日官軍進撃、我隊敗走シテ直チニ山下村工引揚、私手  
 成候ニ付、戸長任指揮ニ右向田之様出兵致シ拾七番小隊  
 之隊号大隊与合相成、同所番兵ニ罷居候処、同廿三日同  
 所ニおひて官兵エ抵抗致シ、同日敗軍之節帰郷仕候、同  
 廿九日三旅団副官加藤中注殿エ相付帰順自首仕候也、

鹿兒島県第貳拾三大区一小区  
 日置郡市來郷湊村式百六拾五番地

明治十一年寅二月

山下嘉兵衛

明治十一年二月

旧士族 平山英藏

## 一一 平山英藏上申書

明治十年一月西郷隆盛等尋問之次第二テ上京之折、熊本  
県下ニヲイテ戦争相始り、然処後日援兵之募リ戸長達シ  
ニ付、勇義拾式番小隊押伍ニテ六月十三日出兵致シ、阿久  
根諸所番兵致シ、同十四日同所明シ郷ニテ戦争致シ官兵  
引退キ、同十七日桑原城ニおひて戦争ス、此戰ヒニ隊長  
手負候ニ付、右之替リ小隊長被申付、其日ハ山下村エ引  
揚相守リ、同十八日野田郷ニ押出シ當所ニオイテ戦争致  
シ山下村エ引揚ケ又々桑原城ニ守リ相付ケ居候處、官兵  
後エ廻リ戦フ、間モ無ク直ニ川内エ引揚、川ヲ越シ三日  
ケ間戦争ス、官軍川下モヲ渡リ横矢ヲ打ニ付吾隊ヲ引揚  
ケ候處、不日区内戸長之諭シニヨリ旧六月二三日比鹿兒  
島県令エ帰順書差出置候處、又々警部衆差入相成、綿貫  
少警視エ帰順書差出候様御達シニ相成リ、(八月廿二日) 旧七月十四日  
帰順書差出シ、同日鹿兒島縣檻署エ護送相成リ候也、

鹿兒島縣薩摩郡限之城郷  
第二拾八大区二小区東手村居住

明治十一年二月

旧士族 小田原要輔

## 二二 小田原要輔上申書

明治十年二月西郷隆盛等外私學校人數尋問之訛有之由  
ニテ上京之折、於熊本県ニ交戦相始、遂ニ官軍國境水俣  
迄迫來候ニ付、四月十六日境め番兵として出兵いたし候  
様所戸長ヨリ相達、勇義左半大隊ニ番小隊長ニテ鹿兒島  
県下出水郡出水矢越ケ嶽大峯筋エ兵隊僅ニ八拾余名、和  
銃六拾挺位、彈薬式拾五発当ニテ番兵仕居候處、五月三  
十日官軍ヨリ相懸、暫砲擊央、彈薬尽果終ニ同所麓迄引  
揚、彼所エ番兵仕居候處、六月十一日又々官軍相懸候付、  
未明ヨリ交戦相始リ十二時比ニも候哉手負仕候ニ付、出  
張病院官之城まで引揚、それヨリ所々病院エ被送、終ニ  
日向之國於延岡病院ニ官軍エ帰順仕候也、

鹿兒島縣薩摩國出水郡  
第三拾八大区小一区  
出水武本村住居

一三 乙守宗唯上申書

一四 岡本勝知上申書

自分儀私学校工入校不致候得共、西郷隆盛等出発已後明治十年四月六日都城戸長上原眞手右衛門ノ達ニ依テ宿許出発、同十三日熊本到着、千城遊軍六番小隊長藤月氏草小隊伍長拝命、翼十四日砂取町(熊本東部)ニ於テ戦争、官軍ヨリ横撃セラレ、朝ヨリ暮ニ至リ銃丸尽キテ敗走木山(益城町)ニ退軍、保墨スル六日、同十九日官軍進撃戦ヒ数時間ニシテ敵退走、之レヲ追撃スル十町余、当所ヘ戍兵、翼日本當ヨリ引揚ノ命アルヤ、径ニ尾前(稚葉村)ヘ引揚ケ向山(稚葉村)エ守兵スル三十日許リ、五月廿一日未明官軍攻來互ニ勝敗アリ、地形不便故ニ同日米良工退軍、(西都市)銀鏡村エ柵ヲ設ケ成ル、全所ニテ監軍原田永二ヨリ干城四番中隊左小隊長命セラレ、七月十九日全所古屋敷村ニ於テ官軍ト会戦勝敗ヲ決セシテ兩陣交退、同廿一日天包崎(佐賀市)ヲ進撃スト雖利アラスシテ退キ本墨ヲ固守スト雖、味方ノ兵諸口敗走ニ及ヒ支ルニ由ナク延岡(東郷町)中原ニテ第四旅団ニ帰順、

鹿兒島県日向国諸縣郡都城

五十町村居住

明治十一年二月

旧士族 乙守宗唯

明治十年五月廿二日区長武藤東四郎ヨリ御用ニ付罷出候処、町兵小隊長申付ラレ、官兵工抵抗スル心得ニテハ全ク無之候得共、已前官軍覇辱之咄シ致シ候等ハ不相成段御布告ノ趣承知致シ、右故病氣ヲ申立、区長始募兵掛リ黒水長繼・團井忠人方へ断申出候得共、近所当番之コトニ付、押テ相勤候様申付ラレ候処、其後参軍坂田諸潔方ヨリ当町近辺番兵ノコト故銃器等ハ不相渡、他国無檻札ノモノ相改メ并ニ出火等ノ節取防方致シ候様御達ニ付、同月三十日ヨリ番兵致シ候処、六月一日ヨリ病氣ニテ引取、同月廿八日ヨリ出勤仕、三官中ハ日々交代ニテ一名宛相勤候処、八月二日佐土原敗走之節高鍋引揚ニ相成リ、同所内(都農町)轟村申処工扣居降伏仕候処、同所ヨリ宮崎支厅エ護送セラレ御鞠問ノ上長崎ヘ相廻サレ、懲役二年申付ラレ候也、

鹿兒島県日向國兒湯郡高鍋  
第九十七大区二小区石原村居住

明治十一年二月

旧士族 岡本勝知

## 二五 木場宗兵衛上申書

明治十年一月西郷隆盛等尋問之次第二テ上京之折、熊本県下オイテ戦争相始り、然廻後日援兵之募リ戸長達ニ付、  
勇義七番小隊長ニテ旧三月廿四日出兵致シ、向田諸所番  
兵致シ県下出水郷番兵之折、(五月七日)旧五月一日未明ヨリ官軍進  
撃及戦争、我隊半隊ヲ引率シ(五万石營馬野士沙吐)八左衛門落シ台場相守リ候  
処、弾尽キ潰走、同日官之城虎江村エ引揚、(虎居)旧五月十一日官之城渡シ口ニテ戦争致シ、是モ弾薬尽其日入來町エ  
引揚ケ、同十四日入來郷添田原ニテ戦争ス、夫ヨリ吾区  
内エ引揚候処、区内戸長之諭ニヨリ旧六月二三日比鹿兒  
島県令エ帰順書差出シ置候処、又々警部衆差入相成、綿  
貫少警視エ帰順表差出シ候様御達シニ相成リ、(八月廿二日)旧七月十四日帰順書差出シ、翌日鹿兒島県監獄署エ護送相成リ候  
也、

鹿兒島県薩摩國薩摩郡隈之城郷  
第二十八大区二小区東手村居住  
明治十一年二月 旧士族 木場宗兵衛

## 二六 愛甲雄藏上申書

自分儀私学校エ入校不致候得共、明治十年五月七日戸長  
井上孫兵衛ノ達ニヨリ兵士ニテ出張、隈之城向田町エ倒  
着イタシ候処、本官中山甚五兵衛ヨリ勇義十一番小隊長  
被申付、彼地ヘ番兵ス、同六月十七日桑原城相固居候処  
官兵ヨリ進撃ヲ受、一時間位砲撃致候得共、弾薬相尽支  
ル事能ハス敗(毛)争スト雖トモ、又桑原城台場ヲ相守ル、翌  
十八日進撃致候処利アラスシテ引揚、同廿日官兵ヨリ四  
方ヲ取囲マレ、僅ニ身ヲ脱シテ川内向田町ヘ引退キ、同  
廿一日ヨリ二日迄川越ニ於テ瓦ニ砲撃スト雖トモ勝敗不  
決、然ル處官兵横玉ヲ入ルニ踏止ル能ハス、解隊シテ七  
月上旬帰郷、一時方向ヲ誤リ候段先非ヲ悔悟シ、水引郷  
警視出張所ヘ帰順自首仕候也、

鹿兒島県第廿七大区小四区  
薩摩國薩摩郡永利郷山田村  
(内市)明治十一年寅二月 旧士族 愛甲雄藏

一 自分儀昨明治十年一月中原尚雄等政府ノ内命ヲ受ケ西

郷・桐野・篠原ノ三名暗殺ノ企露顕ニ及ヒ、西郷始メ

途中熊本県ニ於テ戦争相始リ応援トシテ出兵可致旨、

当四月戸長西郷百左衛門ノ達ニ付、不取敢出張イタシ

熊本県人吉迄着、本營詰中島建彦ヘ届申出候処、振武

鉄刀武番小隊長被申付、其節官軍鹿兒島エ入ルノ報ア

リ、於是防禦トシテ引戻ニ相成、直ニ蒲生郷迄引帰り

守兵被申付、六月廿八日迄滯在、同廿九日同郷(蒲生町)佐山二

於テ午前八時比ヨリ午後二時比迄戦争、其場ヲ引退許、

兵糧百俵程残シ置タルニ付直ニ引通シ右糧米ヲ取戻シ

夫ヨリ福山迄引揚居処ニ、國分ニテ戦争ノ趣ニ付応援

トシテ直ニ罷越候処、守兵皆退ニヨリ又福山迄引揚居

処、又敷根(國分市)ニ戰始リ応援トシテ着、戦争中官軍ヨリ横

矢ヲ打レ戦ヒ利ナク、敷根上ノ段迄引揚、夫ヨリ國分

ノ内長迫ニテ守兵仕処、七月十一日三方ヨリ進撃、軍

破レ支能ハス、僅ニ身ヲ脱シ帰郷イタシ、八月十日帰

順自首仕候也、

鹿兒島県薩摩國河邊郡第十八大区

小五区知覽西別府村

士族元右衛門長男

明治十一年寅二月 旧土族 赤崎元瑞

## 二八 池田庄左衛門上申書

自分儀兼テ私学校党ニテハ無之候得共、同士四十余名ト相語ヒ、夜学校ヲ設ケ罷在候処、西郷隆盛等出発已來県

令ヨリ郷内保護ノ為巡查ヲ募ラレ奉職仕居候処、無程熊

本出軍先ヨリ兵士千名位差遣候様報知有之ニ付、可致出

兵旨区長町田内膳ノ達ニ応シ、不得止明治十年四月十九

日、五十九名当郷出発、三日路ニシテ(えびの市)飯野本營ヘ到着候

処、志布志郷・松山郷ヲ合シ一小隊トナシ拾壹番大隊四

番小隊エ編入セラレ、熊本県人吉本營ヘ到着届申出候処

小隊長ヲ命セラレ、同所ノ内(五木村)頭地ト云所迄繰出シ守兵イ

タシ居、七日位モ過、右半隊ヲ引テ白岩堂(五木村)ヘ守衛シ、五

日モ過官軍來擊暫時砲戦ノ処、中村守兵ノ味方敗軍ニ付

早々引揚候様報知有之、直ニ平瀬迄繰引イタシ街道諸所

相固メ、夫ヨリ我半隊ヲ以テ猪ノ鼻迄出兵候処、直ニ官

軍進撃候ニ付防戦スルト雖トモ、銃器損、弾薬相尽キ不

能支、無是非平瀬迄引揚ケ即日本ノ処ヘ守返シ、直ニ戦  
争相始リ午後六時頃迄勝敗不決、互ニ打止メ、味方一人

モ死傷ナシ、其後兩度ノ戦ヒ味方少々手負・戦死等有之候得共、勝敗同断、然處五月廿日頃ニモ候半、未明ヨリ官軍進撃ヲ受、午後五時頃迄ノ砲戦、味方敗軍散々相成リ田代エ集兵、此戦ニ足痛ミ引入候処、五木村ノ内諸所敗軍ノ節、人吉城下迄引揚相成リ、三日モ相遇(人吉市南郷)大烟迄同断、  
(人吉市)同所ノ内田代ト云所ヘ台場ヲ築キ我半隊ト合シ一小隊トナリ、各隊ト相守居候処、六月十日大戦終ニ勝敗不決、黄昏ニ至リ双方止戦ス、明ル十一日我隊一同ニ方向ヲ誤リ候段先非ヲ悔悟シ、官兵軍門ニ出テ帰順降伏仕候処、人吉山田少将ノ本營工護送セラレ、同所大信寺拘留所ヘ十日位罷居、夫ヨリ熊本裁判所工護送六十余日入檻、八月廿四日頃長崎ヘ同断廿日位入檻、然ル処九月十四日当所ニ於テ懲役二年申付ラレ候也、

鹿児島県薩摩国第四大区一小区  
谿山郡谷山鄉上福(元)本村居住  
旧士族 池田庄左衛門

明治十年二月

## 二九 田中傳左衛門上申書

自分儀私学校エハ入校不致候得共、西郷隆盛等政府ヘ尋

問ノ筋有之、旧兵隊隨行出発以来、戸長黒川幸吉ノ達シニ依リ明治十年三月廿四日宿許出発、大口郷ニ於テ第九大隊五番小隊々長小倉勇之助隊伍長ヘ編入、熊本県下人吉ヘ至ル、時四月初ナリ、夫ヨリ八代エ進軍セント神ノ瀬迄至ル、全所ヘ兩三日滯陣、全五日同所ヨリ八代ヘ進軍、本日黄昏ヨリ八代ノ内古麓ニ於テ同七日迄昼夜間断ナク攻撃、互勝敗アリ、然ニ同日午前十時頃ニモ候半、遂ニ味方敗走イタシ神ノ瀬マテ退陣同所ヘ四五日戍兵、同月十一日又候八代ヘ進軍セント藤本村ヘ一泊、翼十二日同所ヨリ十余小隊ヲ以テ三手ニ分ケ三道ヨリ進軍、我隊ハ妙見山(八代市官地)ノ方ヘ相掛リ候途中、坂本村ノ内小松山ヘ官兵台場ヲ築キ相防キ候ニ付、我隊奮擊終ニ此ノ墨岩ヲ得、走ヲ追フテ銃五挺・喇叭・弾薬等ヲ得、勝ニ乗シテ妙見山ヘ攻撃候処、大ニ勝利ヲ得、本日官地マテ進軍、同所ヘ堡塞ヲ設ケ、同十七日迄連戦、(八代市官地)猫谷ノ破ヤ同日午後十時ゴロ築瀬ニ退軍、戌兵スル三十日許、五月八日頃官兵來撃二昼夜連戦、頭地口敗走、本營ヨリ引揚ノ命アリ直ニ高曾村エ退ク、得ル處ノ銃ソノ他雜本營ヘ送ル、下原ヘ成兵、六月一日官兵襲来スト雖、擊テ之ヲ大ニ破ル、翼二日大烟ニ転ス、同所ニ於テ雷撃一番中隊左小隊々長

命セラレ大野村(音北町)へ至ル、保墨スル十四五日、十二日大畠

ノ方敗戦、尾撃セラレテ鹿兒島県内(えびの市)加久藤越マテ退軍、

同所ニ於テ銃創受ケ小林病院へ入ル、翼々日帰郷、七月

初旬別働第三旅団へ帰順、

鹿兒島県薩摩國第九大区第二小区

阿多郡(吹上町)伊作郷湯ノ浦村居住

明治十一年二月 旧土族 田中傳左衛門

### 二〇 坂木榮後上申書

自分儀明治十年五月三日戸長有馬誠之丞ヨリ出兵被申付  
至急出立、山崎郷エ着、本營中山甚五兵衛ニ届申出候処、  
勇義三番小隊小隊長被申付、川内隈之城郷(川内市)向田町橋口ニ  
番兵相固居候處、官兵ヨリ進撃ス、川ヲ隔三昼夜相戰候  
所、官兵ヨリ川下ヲ渡、横矢ヲ入レ、卒ニ市來郷ニ引揚、  
夫ヨリ帰郷ニテ七月九日帰順自首仕候、以上、

鹿兒島県薩摩國日置郡伊集院郷

第二十二大区三十一番地居住

明治十一年二月 旧土族 坂木榮後

### 三一 長峯正員上申書

私儀私学校エ入校不致候得共、西郷隆盛出発已來警部谷

山孫之丞都之城エ募兵トシテ巡廻相成リ、戸長エ相達セ

ラレ、明治十年丑三月八日戸長佐藤半太左衛門并武田太

兵衛等ヨリニ小隊募兵相成、小子半隊長命セラレ熊本県

内人吉本營エ差越候處、是ニ於テ十二番大隊七番小隊ト

相定ラレ、即ヨリ同所巡邏等致シ同月十五日方ヨリ川邊(稻良村)

村エ転シテ守兵致居候處、トウ地本營ヨリ亦々常山七番

中隊左小隊ト隊号相改ラレ、間モ無ク亦四月初方ヨリ大

保原工赴キ塞ヲ固守ス、折節又ケボウシト云所エ敵兵數

多相見得候ニ付、同所ヨリ一里程突出シ居候處、同廿日

七字頃ニモ候半、官軍進撃シテ互ニ相戰コト終日、味方彈

丸尽果ルニ及テ終ニ敗戦致シ、人吉城下近辺エ引揚ケ守

備ヲ嚴ニシ、同薄暮ヨリ亦起リテ終夜ノ血戰暫時止ムコ

ト無シ、敵終ニ大敗シテ悉ク退キ、同廿一日昧爽同所ヨリ

一里程相隔候堤村ト云所マテ押出シ戍兵致シタル處、敵

俄ニ街道ヨリ突出シ味方ヲ狙撃スルコト殆ト雨ノ如シ、

是ヨリ互ニ奮戦及ヒ抜刀切込ミ悉ク追蹤致シ、敵終ニ大  
敗スト雖、止ヲ得スシテ翌廿二日ノ払暁マテ戦鬪、味方

彈丸尽テ大畑<sup>(入吉市)</sup>ニ退転守星ス、其後同所敗戦シテヨリ鹿兒

島県内<sup>(えびの市)</sup>加久藤<sup>(飯江瀬カ)</sup>ナゲ村エ引揚ケ本官ヲ巡邏ス、夫ヨリ飯野

ヲバエ村江転シテ巡邏兵一番小隊ト改ラレ、將亦同所本

當ヲ巡邏ス、余隊ト交代シテ野尻紙屋エ退転シ寨ヲ固ク

成兵致居戦処、余隊ト候鬪相成、終ニ味方大敗シテ八月

十二日頃ニモ候小子都之城エ引帰リ警視出張所エ相付自

首仕候也、

### 三三 加鹽捷已上申書

鹿兒島県下日向國第十二大区

五小区諸縣郡都之城官丸村居住

明治十一年三月 旧士族 長峯正員

### 三 野崎丹左上申書

先般都城区内人民保護ノ為、明治十年丑四月下旬福山本

當伊東正吉巡廻ノ上、分當建設相成六小隊建付相成居候

處、同七月区内挙兵ヲ相募ノ為亦々本官東郷寶證同所工

巡廻ニ付、其節分當詰戸長財部實秋<sup>(鹿兒島市)</sup>ヨリ予備隊壹番分隊

長命セラルヽ、一週間位相勤居候処、平病等相煩暫時在

宿イタシ、然処財部并庄内・末吉等味方敗戦シテ山ノ口

エ引揚ニ相成、依テ敵兵ノ儀ハ同所工滯陣ニ相成、尤川

村參軍同断ニ付、彼ノ方エ相付自首仕候也、

鹿兒島県下日向國第十二大区

五小区諸縣郡都城下長假村居住

旧士族 野崎丹左

(年月日)

自分儀兼テ私学校党ニテ無之候得共、明治十年三月中旬  
当県警部奈良原喜角庄内表ヘ募兵ノ為メ巡廻相成候節、

戸長堤可武ヨリ出兵相達候ニ付、全廿八日宿許出発、全

卅日肥後国人吉ヘ到着ノ処、折節病氣差起リ暫ク滞在致

居候処、五月上旬ニ至リ病氣モ平愈候処、同所ニ於テ行

進十二番小隊半隊長被申付、其ヨリ無程当地引揚鹿兒島

ヘ転軍、地名永瀬戸ト申処ヘ墨塞ヲ築キ守兵致居候処、

五月下旬、日不覚官兵ヨリ襲来候ニ付相戰候得共、互ニ

勝敗不決一週間余対墨、其ヨリ花倉<sup>(鹿兒島市)</sup>ノ様相転シ行進八番

中隊ヘ交代、此処モ台場ヲ嚴ニシ戍兵數日、折柄又平病

ニ罹リ、不得止山田郷病院ニ入療養ヲ加フト雖、程久敷

不愈候ニ付一往帰宅養生中、終ニ七月中旬頃庄内敗軍ノ

節直ニ都城警視出張所ヘ相付自首帰順仕候処、直ニ長崎

之様被差廻、同所裁判所ニ於テ一年懲役ニ被処候事、

鹿兒島県下日向国諸縣郡

第十二大区三小区庄内郷

安永村居住

明治十一年二月

旧士族 加鹽捷巳

### 三四 山崎源右衛門上申書

私儀私学校工入校不致候得共、西郷隆盛出発已來明治十  
年丑三月同県山田市十郎ヨリ高岡戸長エ相達セラレ、戸  
長ヨリ大口表ノ様可差越旨承知致シ相赴候處、同所神崎

平左衛門儀十番大隊四番小隊小隊長命セラレ、予同隊工

兵卒編入セラレ、同四月十二日熊本県内谷ノ口エ官軍台

場等相築居候處、敵方ヨリ進来シテ互ニ戦争ニ相及、味

方終ニ台場ヲ乗取り其儘追払ヒ、夫ヨリ櫻馬場宮地マテ

追ヒ出シ、打続キ同十六日マテ互ニ戦争止ム時無シ、然処

外隊守兵致候猫谷同(八代市官地)十七日早天相敗レ候ニ付、神之瀬工

兵隊引揚相成リ三日位滯陣致シ、亦々ツゲ口ト云所工赴

キ暫時成兵ス、左候處大野口(鹿児島北町)本營ノ様相赴候處解隊相成

リ鵬翼二番中隊小隊長有田善太郎、半隊長阿久根彦八、分

遂長神崎周兵衛等、同隊エ予押伍命セラレ祝坂エ差越シ

(鹿児島北町)

守兵等致居候處、不田松守兵敗走致候ニ付人吉ノ様引揚

相成リ、亦々同所番兵等致ス、同五月廿七八日頃同所敗

衄シテ分隊長神崎周兵衛手疵ヲ負ヒ病院ニ入ル、同六月

三日予分隊長命セラル、大畠同断ニ付加久藤エ數日守兵、

同シク敗走シテ野尻(野尻町)天ヶ谷エ同断、外隊ノ砦ヲ敗ラレ夫

故紙屋ノ様引揚相成リ同所成兵ス、同シク本道敗レテ佐

土原エ引退キ毎戦支フルコト能ハス、同六月廿二日同所

ニ於テ亦々敗走ニ及ヒ終ニ高岡宿所エ引帰ル、左候テ鹿

兒島県官徳尾野某出張相成候ニ付、七月三日彼方エ相付

自首仕候也、

鹿兒島県下日向国第九十五大区

二小区諸縣郡高岡入野村居住

明治十一年三月 旧士族 山崎源右衛門

### 三五 日高藤一上申書

私事私学校ヘハ入校不致候得共、西郷隆盛等政府ヘ尋問  
ノ筋有之、旧兵隊隨行出発以來追々致出兵候場合ニ立至  
リ候ニ付、勢ヒニ乘シ從軍セント、明治十年三月廿七日

出発、大口郷ニ於テ第九番大隊十番小隊へ編入、隊長黒

木龍輔隊分隊長申付ラレ、熊本県人吉ヘ至リ夫ヨリ八代  
ヘ押出サント、四月十二日(坂本村)藤本村ヨリ十余小隊三手ニ分

レ三道ヨリ操出シ相成候、然ル処小川村辺ニ於テ戦争相

始リ、我隊ハ間道ヨリ相進候ニ付応援致シ、同日八代ノ

内古麓マテ追詰メ同所ヘ堡塞ヲ建築シ、翌十三日黎明ヨ

リ互ニ発砲致シ候得共勝敗不相分、午後二時頃ニモ候半、

各小隊挙テ奮撃接戦ニ及ヒ、遂ニ此堡塞ヲ乗落シ此時手

疵ヲ負ヒ詮方ナク入院致治療、日ヲ経テ帰郷仕居候処、

七月初旬ニモ候半、別動隊第三旅團三番大隊ヘ自首帰順

仕候也、

鹿児島県下薩摩國

第十五大区一小区

揖宿郡指宿鄉西方村居住

明治十一年二月

日高藤一

鹿児島県下薩摩國第十七大区

十五小区穎娃郡穎娃十町村居住

明治十一年二月

旧士族 成尾藤一

### 三六 成尾藤一上申書

三七 池田軍治上申書

私事私学校エハ入校不致候得共、西郷隆盛等政府ヘ尋問

ノ筋有之出発已來、戸長有留吉左衛門ナル者達ニ依リ、

明治十年四月廿三日宿許出発、敷根郷(国分市)本官ヘ至リ、此ニ

於テ切隊七番小隊々長阿萬甚五郎隊半隊長申付ラレ、直

ニ国分郷ノ内(小浜村、隼人町)大濱村ヘ出張堡臺ヲ築キ番兵致居候処、福

山郷ノ様転陣候様本營ヨリ報知相違シ神速操出シ、同郷

麓ヘ台場ヲ築キ戌守致居候処、七月三日頃ニモ候半、午後

八時頃官兵軍艦武艘ヲ以テ海岸ヘ押寄セ砲撃候ニ付防戦

致候処、暫時ニシテ鹿児島ノ様出艦、又三四日ヲ経テ武

艘押寄セ互ニ砲撃ニ及候処、二時間計ニシテ出艦、猶同

所相守居候処、同郷ノ内上ノ谷ノ方相敗レ候ニ付、我隊

モ末吉郷ヘ引揚、同郷町ヘ番兵致居候処、七月廿四日官

兵襲来候ニ付防戦致候得共、遂ニ味方敗衄散乱イタシ候

ニ付、詮方ナク帰郷仕居候処、警部差入ノ砌八月七日自

首帰順仕候也、

数名上官之密諭ヲ奉シ、陸軍大将西郷隆盛・全少将桐野利秋・篠原國幹等ヲ暗殺之事暴露シ、依之彼三将政府へ尋問之為私学校徒ヲ率ヒ上京スルニ當、(篠原國幹隊長)第一大隊九番小隊堀與八郎隊兵卒ヘ編入シ、同十五日鹿児島出發、全廿二日肥後熊本ヘ到着之処、既先鋒隊熊本城攻撃最中ニ付、乃城ノ西南ナル八幡山ヘ相掛、午後四時頃其地ヲ抜、同所ニ守ヲ付、其場ハ外隊へ交代米屋町へ引上嚴ニ守備ヲ構、此地ニ拒守スル廿日許ニシテ三月十五日夜貴島清隊八番小隊へ交代、其夜(熊本城西)嶋崎ト申処之様守ヲ転ス、居三日ニシテ同十八日午前二時頃同所引揚八代へ進軍之処、同日午後五時頃彼地ヘ到着、折柄日川ト申処ニテ官兵ト出逢、味方三小隊ヲ以五千計之敵ニ懸合セ、接戦一昼夜終逃ルヲ追テ斬獲スルコト甚多シ、其ヨリ敵ハ退、鏡山ニ拠ル、此地ハ嶮岨ニシテ前ニ大河ヲ帶ヒ容易ニ難拔、依テ一往守ヲ付其翌廿一日之午後一時頃籌策ヲ回ラシ味方ヲ二手ニ分、鏡山ヲ取囲ミ双方ヨリ夾撃致候處敵狼狽、器械ヲ棄テ散乱シ、川ニ赴湯者無數、或ハ舟ヲ求テ遁ントル者悉ク射殺ス、又外へ逃亡スル者アリ、余ハ是ヲ追蹤スル時負傷シ、不得止川尻病院ニ入、其廿九日又木

(益)山病院へ転移ス、其ヨリ四月六日帰国致療養候処、疵モ平愈ニ付六月六日再ヒ鹿児島ニ於テ振武廿七番隊へ加入候処、監軍小倉敬輔ヨリ同隊分隊長被申付、其翌七日ヨリ城ノ南郡元ト申処ニテ戰爭相始、昼夜連戦、全二十二日ニ至官軍大挙進撃相掛候節味方之敗軍ト相成、此時我隊伊集院之内(松元町)石谷ト申処迄引上、居三日計ニシテ終ニ振武二十七番隊之儀ハ解隊致シ銘々離散、是ヨリ予モ帰家致居候処、其后官軍別勵隊我郷内差入相成候節彼方へ相付自首帰順仕候也、

鹿児島県薩摩国第五大区一小区

川邊郡川邊平山村居住

士族四郎右衛門長男

明治十一年二月

池田軍治

### 三八 永田幸四郎上申書

一自分儀明治十年五月三日戸長有馬誠之丞より出兵被申付、速ニ出発、(宮之城町)山崎郷工着、本當詰メ中山甚五兵衛より勇義三番小隊半隊長被命、川内隈之城郷工哨兵相固メ候処、台兵進撃川ヲ隔テ戦フ一昼夜、我兵破レテ市郷

北町

成三退ク、終帰宅、七月九日帰順仕候事、

鹿児島県薩摩國日置郡伊集院鄉

出候処、同九月初旬長崎裁判所エ被護送、同十四日処刑  
二相成、壹年懲役被申付候也、

第廿二大区八小区住居

明治十一年二月 旧士族 永田幸四郎

鹿兒島縣下薩摩國第三拾三大区  
高城郡水引郷二小区五代村

明治十一年寅二月 旧士族 上村治右衛門

### 三九 上村治右衛門上申書

私儀

### 四〇 中馬八郎上申書

兼て私学校徒ニテハ無御座候得共、明治十年丁丑五月六  
日向田出張勇義隊本營中山甚<sup>(盛高)</sup>五兵衛募兵ニテ當番戸長ヨ  
リ出兵可致旨被申付出兵致候處、於出先ニ右甚五兵衛ヨ  
リ勇義八番小隊之分隊長被申付、右同處エ番兵致居候處、  
同六月廿一日阿久根之様出軍可致旨、右同人指揮隨ヒ、  
直ニ繰出、同所之内牛之濱村エ堀宿、翌廿二日午前八字  
同所山手間道工守相付居候處、午前九字時分本道相敗候  
付、隈之城<sup>(川内市)</sup>官里村迄引揚、同廿三日川内相敗、夫ヨリ帰  
宅仕、同七月五日水引大小路出張東京九等警部服部容安  
殿工相付、鹿兒島県令岩村通俊殿エ宛ニテ帰順自首仕居  
候處、又々同八月廿三日栗屋三等中警部殿外ニ式名御廻  
勤御取調ニ付、右エ相付少警視綿貫吉直殿エ宛帰順書差

一自分儀明治十年一月中原尚雄・野邨綱等數十名、上官  
ノ内命ヲ奉し大ニ姦謀ヲ逞セント欲シ、名ヲ帰省ニ托  
し周旋仕候内、逐一露頭ニ及ヒ、仍て隆盛等為尋問上  
京、旧兵隊隨行、小子四大隊七番小隊兵士ニ加入、二  
月十六日県下出発廿二日熊本ニ着ス、既ニ開戦ニ及ヒ  
直ニ城兵ヲ進撃スル数算、転して植木ニ進軍、途ニシ  
テ聞アリ、植木モ亦戰酣ナルト、急歩スト雖日既ニ暮  
ル、廿三日ヨリ前軍又木葉ニ進ム、台兵山を負て待ツ、  
一隊ハ直ニ正面ニ当リ一隊ハ周リテ敵背ニ出ツ、呐喊  
銃ヲ發して逼ル、台兵散乱遁テユク処ヲ不知、我兵ノ  
追フモノ死屍ヲ見テ敵ヲ不見、銃ヲ得ル二百余・彈薬  
四五千ニ及フ、此夜植木ニ退キ休兵一昼夜、廿五日山

鹿ニ進撃、廿八日又大ニ台兵ヲ敗ル、追逐里許、官兵死傷ヲ遺テ遁ル、横屍殆ト四百ト云フ、又器械ヲ得ル居多、三月三日岩村ニ進撃、須臾抗戦互ニ退ク、四日山鹿ヲ經テ田原ニ至リ田原且七本ノ塹ヲ守ル、連戦数旬日ニ一日より甚し、抜刀接戦毎日四五度ニ至ル、尔後台兵接戦ヲ恐レテ防禦殊ニ嚴ナリ、後接戦二三次ニ過キス、同十日押伍トナル、同廿日未明、台兵枚ヲ銜ミ回リテ我後ヲ衝ク、我軍大敗、指令官ヲ失モ亦不鮮、併ニシテ我隊一人ヲ不損、又敗兵ヲ鹿奈子木ニ收メ向坂ノ台塹ヲ襲フ、半ハ正面ニ当、半ハ後背ニ出ツ、台兵狼狽躊躇頻リニ台兵ヲ刃ス、台兵斃ル、モノ二百余ニ及フ、又銃且弾薬ヲ獲、北ヲ逐イ々々テ植木ニ至ル、日既ニ暮ル、令官揮テ止ム、此より対塹防戦旬余、三月下旬全軍拔刀進<sup>ゲキ</sup>軍利ヲ不得シテ退ク、四月四日隣塹敗ル、我兵救援又敵ヲ逐フ、死傷ヲ遺テ遁ル、又器械ヲ得、四月中旬本營より報知有之、南方之軍敗ル、全軍塹ヲ撤して去レト、此日新南部エ転シ塹ヲ築て守ル、十六日台兵進撃、今日之戰場、西ハ白川より東ハ江津湖水ニ至ル凡ソ里許、午前十時比より我軍東方不利、正午十二字比我兵大ニ怒て抜刀接戦、官兵大ニ靡披ス、

我兵死傷雖不鮮、台兵ノ死尸亦四五百ニ及フと云フ、銃砲且弾薬ヲ得リ、居多ナリ、此夜一時比<sup>(木山)</sup>黃山ヲ經テ川原ニ退ク、十七日官兵來擊我兵不屈撓、又台兵ヲ敗ル、此夜矢部ニ転退ス、隊名ヲ振武ト号、八番中隊トナス、滯屯七八日此より逐日鹿兒島ヲ指て退ク、五月三日鹿兒島ニ至ル、四日城兵ヲ襲フ、城兵我衝突ヲ恐ル、ヤ複柵ヲ設ケ煩銃ヲ列シテ俟ツ、我兵激進今日矢ツテ城ヲ拔カント欲ス、徒ニ進テ柵足ニ至ル、曳テ之ヲ倒サント欲ス、柵堅シテ不動、斫テ之破ラントス、砲銃連発距離僅々丈余、煩火ニ焼爛スルアリ、鉛烟ニ染黒スルアリ、末々拳闘スルアタハサル而已、衆怒テ後ヲ不顧終ニ利ヲ得サルコトヲ恐レテ、令官退ヲ命ス、五日伊敷ニ退ク、夫より塹ヲ玉江橋ニ築て守ル、七月夜甲突川之台兵ヲ襲フ、一旦利ヲ得と雖モ援兵不続、遂ニ敗トナル、死尸水ニ沈ム、夜暗して捌ルコトヲ不得、此戰ヤ士卒ヲ失十六名、又玉江橋工退ク、同廿五日鹿兒島敗ル吉田ニ退ク、廿六日未吉ニ転ス、七月八日又<sup>(鷲北町)</sup>百引ニ進撃、台兵凡四中隊憤戦數時、土人云フ、台兵逃モノ數人ニ過スト云フ、横死野ヲ蔽イ器械傍ニ充積ス枚拏スル能ワス、器械・什物尽ク火之、十二

日大崎ニ進撃、苦戦利ヲ不得シテ返ル、此夜志布志ニ退キ滯墨、廿一日分隊長とナル、廿八日高原ニ進撃一且快戦利ヲ得ル、雖左翼不競終ニ全軍敗ヲ取ル、此より爾後小戦數十、一勝一負可記モノナシ、(東郷町)山陰敗テ兵氣大ニ挫ク、後遁レテ(日向市)美々津山中ニ伏匿ス殆一旬、霖雨連旬、凍餓交至ル、力尽テ八月十四日山陰本營ニ帰順ス、

鹿兒島県薩摩國鹿兒島郡第三大区  
六小区住居 士族中馬喜三次長男

明治十一年二月

中馬八郎

鹿兒島県下薩摩國第三拾三大区  
高城郡水引草道村居住  
明治十一年寅二月 旧士族 内山八郎

#### 四一 内山八郎上申書

私儀

兼テ私学校徒ニテハ無御座候得共、明治十年丑五月六日

内志(内志)向田出張勇義隊本營中山甚五兵衛募兵ニテ、戸長山崎俊藏ヨリ出兵可致旨被申付、出兵致候處、出先ニ於テ右甚五兵衛ヨリ勇義八番小隊之分隊長被(命カ)免、右同所エ番兵致居候處、同六月廿一日阿久根之様出軍可致旨右同人指揮ニ隨ヒ直ニ繰出、同所之内牛ノ瀬村エ一宿、翌廿二日午前八字同所山手間道エ守相付居候處、午前九字時分本道相

敗レ候付、隈ノ城官里村迄引揚、同廿三日川内相敗、夫ヨリ帰宅仕、同七月五日水引(内市)大小路出張東京九等警部服部容安殿エ相付、鹿兒島県令岩村通俊殿エ宛ニテ帰順自首仕居候處、又々同八月廿三日栗屋三等中警部殿外ニ式名御廻勤御取調ニ付、右エ相付少警視綿貫吉直殿エ宛帰順書差出候處、同九月初旬長崎裁判所エ被護送、同十四日処刑ニ相成、懲役壹年被申付候也、

#### 四二 海老原半助上申書

私儀

私学校エ入校不致候得共、西郷隆盛等出発已來、明治十年丑六月十八日薩州之内谷山鄉鎮撫隊本營ヨリ用談申参リ、出頭致候處、阿多慶二外ニ二名ヨリ今般鎮撫隊被相建候ニ付、三番小隊分隊長ニ命セラル、トノ事ニテ案外之事件、於即座及辞退、且ハ其任ニ不在、判然相断候得共、是非相勤候様被申諭候故ヲ以テ相勤候次第、脅迫募

兵相成候テ、右同人共ヨリ同所浜手新田堤エ出張候様指揮ニ応シ番兵守リ居候処、同廿二日未明ヨリ官軍軍艦ヨ

リ脇田ト申場所エ上陸、其ヨリ進撃暫時相対シ戦候処、

終ニ弾薬相尽敗走シ、同郷之内玉利ト申所エ引揚一泊ニ

テ又々伊集院郷石谷村在内ヘ引取居候処、味方忽テ敗走之機会ニ打合、同廿四日解隊イタシ帰家仕候、然処八月七日五日鹿兒島出張綿貫少警視工相附帰順書差出候也、

月七日鹿兒島下薩摩国第三大区三小区

鹿兒島郡武村居住

明治十一年寅二月 旧士族 海老原半助

#### 四三 神田橋助護上申書

先般都城区内人民保護ノ為明治十年丑四月下旬福山本營伊東正吉巡廻ノ上分營建設相成、六小隊建付相成居候処、同七月区内挙兵ヲ相募ノ為亦々本營東郷實證同所エ巡廻ニ付、其節分營詰戸長財部實秋ヨリ予備隊三番分隊長命セラル、一周間位相勤居候処、平病等相煩暫時在宿イタシ、然處財部井庄内(都城市)末吉等味方敗衄シテ山ノ口エ引揚ニ相成、依テ敵兵ノ儀ハ同所工滯陣ニ相成、尤川村參軍

同断ニ付、彼ノ方エ相附自首仕候也、

鹿兒島県下日向國第十二大区  
一小区諸県郡都城下長假村居住

明治十一年寅二月 旧士族 神田橋助護

#### 四四 平嶺治右衛門上申書

明治十年五月七日戸長井上孫兵衛ヨリ被申付速ニ出立、本營詰中山甚五兵衛エ届申出候処、勇義十壹番小隊半隊長被申付、川内隈之城諸所番兵致シ、六月九日阿久根諸所番兵致シ、同月十七日二時計ノ間同所(阿久根市)桑原城ニテ官兵ヨリ相掛リ戦争致シ、其節弾丸尽キ同所田代口エ引揚候処亦々桑原城エ守兵ス、其時官兵後エ廻リ川内隈之城町エ引揚、官兵ヨリ進撃致シ川ヲ隔昼夜互ニ戦争致シ候処、官兵川下ヲ渡り破り出候ニ付致方無ク永利エ引揚、直ニ帰郷仕、八月十五日頃戸長取次ヲ以テ帰順書差出置、九月六日頃鹿兒島ニテ帰順書差出候也、

鹿兒島県薩摩国薩摩郡永利郷  
第二十七大区二小区山田村居住

明治十一年二月 旧士族 平嶺治右衛門

## 四五 宮ノ原亮介上申書

抑出軍之趣意タルヤ中原尚雄等數十名暗殺之内意ヲ奉シ  
帰県周旋之内捕縛ニ就キ謀事逐一暴露シ、仍テ西郷隆盛  
等為尋問上京、旧兵隊隨行小子(永山新郎隊長)第三番大隊八番小隊橋口  
吉左衛門隊兵卒ニテ丁丑二月十六日鹿兒島出軍、同廿二  
白熊本ニ着ス、彼地ニ於テ三十余日戍兵シ三月廿日ニハ  
代ニ向フ、小川ニ至テ日暮、翌日小川之山手より進撃累  
戦不利シテ退テ御船ニ墨シ血戰、遂ニ負傷シ入院療養ス  
ト雖モ不愈帰郷ス、五月初旬勇義隊本營中山甚五兵衛鹿  
兒島県内(宮之城町)山崎郷ニ於テ募兵スト、戸長池田正義ノ達ニ応  
シ出行ス、本營より分隊長命セラレ阿久根郷ニテ戍兵、  
同十三日官兵襲來之節、引テ帰郷シ帰順自首仕候也、

十五小区日置郡串木野郷下名村  
明治十一年戊寅三月 旧士族 宮ノ原亮介  
四六 松山八郎兵衛上申書

私儀私学校工兼て入校不致候得共、西郷隆盛出発後分署

詰警部ヨリ出兵不致候てハ難成事情等戸長エ被達、百余  
名程戸長ヨリ募兵ニ相成居候処、其折淵邊直右衛門熊本  
ヨリ帰県掛、鹿兒島之内大口郷之様出張候様達ニ相成、  
戸長募兵ニ応シ明治十年丑旧二月十一日前件百余名同道  
ニテ大口差向出張仕申候、左候て熊本県エ着之上、本營  
エ届申出候処、隊名遊擊七番小隊ニテ分隊長被申付候、  
直ニ熊本之内御船ヨリ矢部之内(矢部町)萬坂村峠エ番兵仕居候処  
無程各隊も矢部エ引揚相成、我隊も其通引揚、尾前ヨリ  
(丘代、水上村)營代エ一周間位も滯陣、終二人吉エ繰出シ一泊シ、丑旧  
(五月五日)三月廿二日鹿兒島県之内大口郷エ繰込、翌廿三日同所小  
木原ト申所ニテ官兵ニ抵抗シ、十字比ヨリ午後三字比迄  
双方打合候処味方敗軍散々引揚申候、其夜大口之内山之  
口エ一泊シ、翌日吉田ト申所ニテ隊ヲ相円メ二日程滯陣  
致シ又々大口エ繰込ミ、同廿七日山野エ進撃、我隊官兵之  
後ヨリ相掛候処、最早正面ニ相掛候味方ハ打合相始居、  
我隊後ヨリ相掛候処官兵逃去、追討致シ候処負傷シ其儘  
病院エ被差送候、然共其日味方勝利之由御座候、其後養  
生トシテ小林郷病院ヨリ帰郷仕居申候処、帰順掛御巡回  
ニ付、帰順自首仕候也、

鹿兒島県薩摩国第三区

## 四小区日置郡市來郷長里村居住

## 四八 小田原秀順上申書

明治十一年寅二月 旧士族 松山八郎兵衛

## 四七 萩輪孫六上申書

抑出軍之趣意タルヤ中原尚雄等數十名暗殺之内意ヲ奉シ  
帰県周旋之内、捕縛ニ就キ謀事逐一暴露シ、仍テ西郷隆盛  
等為尋問上京小子隨行、(永山添一郎隊長)第三番大隊四番小隊山下喜衛隊  
兵卒ニテ丁丑二月十六日鹿兒島出発、同廿二日熊本ニ着  
ス、同所八幡山ニテ戦争負傷シ帰郷ス、然ル廻戸長有馬  
誠之丞ヨリ出張イタシ候様達セラレ、其時疵モ稍平愈シ  
五月廿七日出張ス、本營邊見十郎太ヨリ千城一番中隊右  
分隊長命セラレ鹿兒島県内財部ニ於テ戦争、彈薬尽テ退  
軍シ帰順自首ス、然テ九月初旬長崎裁判所工遞送、同十  
四日処刑相成、懲役一年被申付候也、

薩摩国鹿兒島県下第廿二大区  
小一区日置郡伊集院郷下谷村

明治十一年戊寅三月 旧士族 萩輪孫六

## 四九 岩切清兵衛上申書

自分儀私学校へハ入校不致候得共、西郷隆盛等政府へ尋  
問ノ筋有之出発以来、戸長北郷吉左衛門ヨリ達ニ付、明

兵士ニて出張、肥後国人吉表工到着、鵬翼六番中隊工編  
入被申渡、(入吉市西端)中神村工相固居候處、官兵ヨリ進撃ヲ受ケ三  
時間程互ニ銃戦中、我隊右手之方ヨリ横矢ヲ入、終ニ官  
兵ヲ追退ケ、其後吉松ヘ番兵、夫ヨリ高原ニ於テ官軍ヲ進  
撃、其台場迄乗取リ一時勝利ヲ得ルト雖モ、既ニ弾薬尽  
キ、其上官軍ノ盛返ヲ受ケ難支、空ク都之城(山田町)大谷頭工引  
揚暫シ番兵、同所ニて半隊長被申付候、無程宮崎ヨリ帰  
郷、八月十二日帰順自首仕候、以上、

鹿兒島県薩摩国第六大区小堀区  
川邊郡加世田麓居住

明治十一年第二月 旧士族 小田原秀順

治十年五月六日宿許出発、向田本當へ至り、此ニ於テ勇

(川内市)

義六番小隊々長柳田吾左衛門隊半隊長申付ラレ、夫ヨリ

阿久根郷へ戍守致居候所、同月廿六日出水郷分當ヨリ同

(肥薩境)

所ノ内矢筈嶽へ応援トシテ至急繰出スペク報知相達シ、

直ニ肥薩ノ国境野間(出水市)ノ原ヘ戍守致居候所、矢筈嶽ノ方相

敗レ候ニ付、我隊モ下知識(出水市)へ転陣、夫ヨリ間ナク出水郷

(お坂屋内)

麓ヘ転陣、拠形(出水市)ヘ堡壘ヲ築キ戍守致居候所、六月十一日

官兵來擊候ニ付防戦致候得共応援モ至ラス、終ニ敗走官

之城郷平川迄引揚、夫ヨリ同月十八九日頃出水城へ進軍

セント同所ヨリ砂(良カ)ノ乱マテ進軍ノ処、官兵道ヲ塞クト聞

ク、因テ又官之城郷町マテ引返シ同月廿一日鶴田郷ノ内

(音之坂町)

紫尾山ヲ守ラント進軍ノ処、途中ニテ官兵ニ出会ヒ戰ハ

ント欲スレトモ地形便ナラス、因テ又官之城郷町へ転廻

シ川越ニテ午前十二時頃ヨリ午後四時頃迄戦闘ノ処、終

ニ弾薬尽果、致方ナク入來郷マテ引揚、夫ヨリ同所添田

(副)

原ヘ転陣相守居候所、同月廿四日又官兵來攻候ニ付、奮

撃防戦致スト雖トモ孤軍故防禦致兼引退候所、猶官兵追

来リ遂ニ取廻シ、夜ニ紛レテ漸々抜出、平佐郷マテ引退

ク、然ニ七月十三日岩村鹿兒島県令殿へ帰順書差出置候

兵器ヲ持シ三番大隊四番小隊兵卒ニテ同月二十二日安

政橋ニ於テ三日間番兵致、又八幡山ニ三月七日頃迄番

処、其後警部差入ノ砌、又々綿貫少警視へ帰順書可差出

鹿兒島県薩摩國第廿九大区小二区  
薩摩郡平佐郷中村居住

明治十一年二月

旧士族 岩切清兵衛

(中表紙)

## 戦地形状口述書取

### 五〇 松下兼丈戦地形状口述

鹿兒島県下第五拾三大区

小三区薩摩國鹿兒島郡加茂郷(浦生)居住

士族助一長男

松下兼丈

一自分義明治九年月日不覚、私学校加茂分校へ入校、(翌)同

年二月十六日西郷隆盛暗殺之儀政府へ尋問之筋有之、

仍テ上京候ニ付、途中護衛可致邊見重郎太ノ達ヲ受、

永山孫一郎隊長(土)持シ三番大隊四番小隊兵卒ニテ同月二十二日安

政橋ニ於テ三日間番兵致、又八幡山ニ三月七日頃迄番

兵致居候処交代相成、同月十二日肥後國吉次峰ニ於テ  
(玉東町)

官兵ト奮戰之際銃丸ヲ受ケ川尻病院ニ入ル、四月廿一  
 日帰宅ノ上治療仕候候快愈ニ付、再ヒ出軍シ十一番小  
 隊分隊長トナリ、七月上旬(湯之屋、義知町)ユヅノヲニ於テ官兵ト戰、  
 終ニ敗レ半里程引退、同日午後三時頃ヨリ十時迄大ニ  
 戰亦敗ル、同日自分病ニ罹リ日向国都城病院ニテ治療  
 中官兵大舉攻擊終ニ城陥ル、仍テ密ニ帰宅候処、先非  
 ヲ悔悟シ依テ薩摩國加茂郷警視出張所ニ自首仕候、

明治十一年二月

## 五一 田中太左衛門戰地形状口述

鹿兒島県下第四大区十小区

薩國(鹿兒島市谷山上福元)山郷上福本村居住

旧士族 田中太左衛門

明治十一年二月  
付候、

## 五二 指宿幸助戰地形状口述

鹿兒島県下第六大区毫小区

薩摩國(川)河邊郷麓居住

指宿幸助 旧士族

一自分義四月十六日人吉本營別府(新助)ノリ凡千人程出兵  
 可致様達ニ付、早々出張可致旨区長松田内膳ヨリ達ニ  
 依リ、同十七日加治木迄罷越、翌十八日(えびの市)飯野村へ止宿、  
 同十九日人吉本營工到着、同日別府新助ニ面会致候處  
 十一番大隊(小隊脱力)四番長被申付、同二十日總隊長池田庄左衛門

一自分義明治十年四月三日区長島津又七ヨリ巡查可心得  
 旨達之趣通達ニ付、郷内取締勤務罷在、然ル處肥後國

門と共々百壱人ヲ引キ(五木村)頭地番兵可致旨被達、五月十日  
 頃自分儀四十九人ヲ以テ梶原村迄進ミ、同十七日頃前  
 軍敗走ノ趣坂田權重郎申来ニ付、一ト先ユヅノヲ迄退  
 キ候処、猶又前軍敗走スルニ付遂二人吉本營ニ引上候  
(大畑、人吉市)小木場ノ番兵致居候処、官軍遂ニ不可当ヲ知リ、六月  
 十一日總隊長池田庄左衛門・分隊長久保田長保部下兵  
 卒都合四十九人人吉ニ於テ山田陸軍少將ノ軍門ニ降伏  
 仕候、同月日不覺熊本裁判所檻倉ニ被送、五十日程入  
 檻致居ル、九月十四日長崎裁判所ニ於テ懲役一年被申

人吉迄出兵可致再達ニ付、兵器ヲ持シ常山隊八番小隊  
半隊長トナリ同月十八日出發、別府新助ノ指揮ヲ受、  
同所中神村<sup>(人吉市西端)</sup>二番兵龍在、其後五月日不覺同國遠矢村ニ  
於テ官兵襲撃候ニ付防戰致候處敗軍、同所<sup>(大畠)</sup>山田村ニ引  
揚兩三日宿陣龍在人吉ニ退陣候處、同所<sup>(天鹽山)</sup>熊川ヲ隔テ官  
兵ト正午十二時ヨリ午後六時迄激戦及候際、人家焼失  
致、宿陣難相成、同日夜同所<sup>(大木場)</sup>大木場邸ニ移陣致四五日  
番兵龍在候折柄<sup>(えびの市)</sup>、午前六時ヨリ官兵襲ヒ來リ擊戦及ヒ  
敗走致、日向国加久藤越ニ引揚ケ、同日同所ニ於テ官兵  
ニ抵抗スト雖トモ弾丸尽キテ加久藤町工退陣、翌日午  
前六時ヨリ飯野郷ノ官兵ヲ進撃候處勝敗無之、午後五  
時頃同所壹里余退キ陣シ四五日宿陣致、同国小林郷ニ  
十四五日滯陣龍在常山隊解隊相成振武隊十五番小隊半  
隊長トナリ、六月日不覺同國須木郷<sup>(伊唐郡上村)</sup>皆越ノ官兵ニ午前  
六時ヨリ進撃候處、官軍大木場ニ退陣ニ付同所ニ止陣、  
其夜午前五時ヨリ官兵襲ヒ來リ擊戦敗走及、鈴張越<sup>(須木村)</sup>  
四五日宿陣、官兵ト攻撃ニ及、官兵同所ヨリ壹里余退  
ク、翌午前六時ヨリ官兵ノ襲撃ヲ受ケ敗軍致、同所一  
里余退陣、翌日同所ニ於テ正午十二時頃官兵ニ進撃候  
處敗走致、七月日不覺綾陣<sup>(綾町)</sup>野岡ニ於テ官兵襲撃候ニ付

防禦候處敗軍佐土原ニ引揚ケ、八月二日午前五時ヨリ  
官軍攻撃抵抗スト雖モ、翌正午十二時遂ニ敗軍諸隊散  
乱、三日程山谿ニ潜伏罷在帰宅仕、一時方向ヲ誤リタ  
ルヲ悔悟シ、八月二十四日加世田郷ニ於テ帰順書ヲ警  
視出張所へ呈シ、夫ヨリ長崎裁判所ニ於テ国事犯律ニ  
依リ、懲役壹年被処候事、

明治十一年二月

### 五三 白尾實記戰地形状口述

鹿兒島県下日向国第十八大区

諸方郡飯野郷前田村居住

旧士族

白尾實記

一自分義昨明治十年二月中同県士族當時東京警視局奉職  
中警部中原尚雄等外數十名、上官ノ内命ヲ受西郷隆盛  
ヲ暗殺致ント欲シ帰省中、遂ニ及露顕、仍テ隆盛政府  
ヘ尋問之為校党ヲ擁シ上京之趣ハ兼テ巷説ニハ承知致  
候、自分固ヨリ校党ニハ無之候、然ル处同年四月十一  
日区長伊東新八<sup>(祐善)</sup>ヨリ達之旨ヲ以テ、戸長間方 チカサト  
ヨリ出兵可致通達ニ依リ、刀ヲ携出兵候處、翌十二日

右伊東新八ヨリ三番遊軍隊半隊長申付候間、勉勵可致達ニ付、則拝命、小隊長今由善左衛門(好)と同行ニテ部下兵卒九十名引率之、肥後国人吉ニ到着同所ニ一泊、夫ヨリ隊長今由善左衛門共々本當ニ至リ防禦可致ケ所軍議候處、同國ツイク谷ニテ番兵可致旨達ニ付、同十四日同所ニ至リ両三日ヲ經テ全隊九十名之内ニ小銃拾挺其他彈薬共本當ヨリ引渡相成、同所ヲ距ル三里余中(中村、五木村)地(五木村)移転五六六十間程番兵致居候處交代ニ相成、同國ト(頭)ヲチヘ引揚、同所坂瀬川(逆瀬川、五木村)二番兵致居、然ル処六月上旬日不覺早天官兵ノ進撃ヲ受、二時間程防戦ストイヘトモ兵器ニトモシク遂ニ敗軍、其節我隊死亡者名・手負二名同國(須恵村)下瀬川ヘ引揚候處、同所ハ既ニ官兵ノ攻破スル処トナリ衆皆散乱、僅ニ身ヲ脱シテ人吉(大畑、人吉市)バヘ遁走、同所本當詰方賀榮介と軍議之上、我散兵ノ至ルヲ待居候處、六月十二日同所官兵ノ進撃ヲ受散乱、仍テ吾ガ飯野鄉(えびの郷)ニ遁逃潛匿イタシ居候處、追々官兵繰込相成ニ付、一時方向ヲ誤リ候段、先非ヲ悔悟シ、同所前田村(えみのむら)ニ於テ出張之官兵ニ降伏致候、

右

白尾實記

## 五四 黒田源左衛門戰地形状口述

鹿兒島県下第二大区七小区

薩摩国鹿兒島郡西別府郵居住

旧士族 黒田源左衛門

一 自分義明治十年二月中同県士族當時東京警視局奉職警部中原尚雄等上官ノ内命ヲ受、西郷隆盛ヲ暗殺致サント欲シ帰省中、遂ニ及露顎、仍テ隆盛政府へ尋問之為メ校党ヲ擁シ上京之義ハ兼テ承知致候、自分素ヨリ校党ニハ無之、然ル処同年五月二十二日県下石敷本當詰同県士族中島建彦(健)ヨリ出兵之上、兵勢可相援達シノ旨ヲ以テ私学校党同県士族松田萬ノ召募ニ応シ、則刀ヲ携帶シ振武拾四番兵卒ニテ出兵、同月廿八日肥後国人吉ヘ到着之上、正儀九番小隊ヘ転隊相成、本當詰多城重次ヨリ同隊押伍被申付、同國雨堤(多良木町)ニ於テ番兵可致達付、小隊長上郵良右衛門共々同所エ出張、六月上旬日不覺先鋒常山六番小隊遂ニ官兵ノ陥イル処ト相成、同日午後三時頃官兵我隊ヲ進撃ス、仍テ百方籌策ヲ運シ拒戦ストイヘトモ同所岩野塞官兵ノ攻破スル処トナ

リ、就てハ総軍可引揚人吉本營ヨリ達ニ付、同日午後十時頃其場ヲ引揚、其節我軍手負武名、少シク不利、翌日本營モ官兵ニ擊破セラレ、同國須木ヘ移転、我隊同所(多良木町)ニ番兵致居候処、本營ヨリ自分ヘ御用有之、早々出頭可致達ニ付、則出頭候処、自分義九番左小隊長拝命、然ル処自分出頭之跡、我隊既ニ官兵ノ進撃ヲ蒙リ遂ニ敗軍、部下ノ兵卒退キ来リ候ニ付、憤然吾力率ヒル処ノ隊と敗兵ヲ合シ迅速引戻シ接戦之際、正儀(善)八番小隊応援トシテ來リ候ニ付、稲ル兵氣ヲ得、官兵ヲ壱里余追ヒ退ケ、北ルヲ追テ同所(多良木町)花立峠ニ守備ヲ嚴ニス、然ルニ同所官兵と谿ヲ隔テル而已、砲声昼夜絶ス、同月日不覺我軍進撃可致本營ノ指揮ヲ受、曉ヲ冒シテ襲撃シ一時我軍勝利、其節分取リ小銃六挺、我隊死亡武名・手負二名、然ルニ猶亦進撃ヲ蒙リ敗軍、同所ハ亦官兵ノ地トナル、仍テ我隊本營ヘ引揚ケ同月中旬日不覺我鍊撲遊軍隊同國須木ノ立越ニ於テ官兵ノ進撃ヲ蒙、少シク不利之趣報知ニ付、我正儀九番・八番・七番合テ三小隊応援トシテ出張、同所ニ於テ二日間昼夜ノ激戦互ニ死傷アリ、流血河ヲナシ、然ル処同所綾ノ雨ガ台ノ吾カ墨官兵ニ攻破セラレ、官兵既ニ我背ニ廻(綾町)

我隊同所河渕ニ番兵致居候処、山ディ方敗軍之趣報知ニ付、本營諸共同國(日向市)美々津ヘ転陣、然後我一小隊同所(福浦、東郷町)へ転陣、遂ニ官兵ノ合闘中ニ陥リ、出ルニ無道、不得止部下ノ兵卒三十六名ト兵器ヲ棄テ降伏致候、明治十一年二月

### 五五 石塚甚助戰地形状口述

鹿児島県下第三十三大区薩摩国  
高城郡水引郷居住  
旧士族 石塚甚助

一自分義昨明治十年二月中同県士族當時東京警視局奉職  
警部中原尚雄等數十名、長官ノ内命ヲ受西郷隆盛ヲ暗殺致サント欲シ帰省中、遂ニ及露顎、仍て隆盛政府へ尋問ノ為メ校党ヲ擁シ上京之義ハ兼て承知致候処、同年四月十九日戸長山崎俊造ヨリ早々出兵之上、兵勢可相援達ヲ受、則刀ヲ携帶シ出發ス、同國(えびの市)飯野郷へ到着、吾近郷ヨリ募集スル処兵卒合テ九拾名、同県士族木原(武志)武小隊長トナリ、自分其節半隊長トナリ、夫ヨリ翌二

十日肥後国人吉へ到着之上、出張之趣名簿相届候処、  
 隊名ヲ第十壹番大隊九番小隊ト称スル趣、同所本當詰  
 同県士族川口三平ヨリ達相成、同月二十四日同國原田  
 村へ出張、同所ニ四十日間程番兵致居候処、其節隊長  
 木原武義疾病ニ罹リ、治療ノ為メ帰宅ス、其後我隊同  
 所ヲ距ル二里余、処口不存岳上へ転陣、然ル處五月一日  
 午前第七時頃突然官兵襲撃ヲ蒙リ一時拒戦ストイヘト  
 モ、我全隊九十名之内小銃二十挺、其他ハ何レモ抜刀  
 而已、然ルニ官兵是レヲ攻ムル甚タ急ニシテ遂軍、仍  
 テ原田越へ引揚候処、官兵我背ヲ尾擊スル亦急ナリ、  
 自分ハ白刃ヲ打振り近寄ル官兵ヲ左右へ切払、自カラ  
 殿シテ人吉本當ニ至リ候処、同所モ亦々官兵ノ進撃ヲ  
 受遂ニ敗軍ス、仍テ本當諸共同所(人吉市)大畑へ転陣、其節吾  
 カ小隊長へ同県士族樺山喜平次拝命相成、自分隊長共  
 タ同所二十日間程番兵致居候処、六月十一日前午七時  
 頃官兵ノ進撃ヲ受、幾トント二時間程激戦ストイヘ共、  
 遂ニ敗軍、其節我隊死亡二名、仍テ猶亦同所飯野へ転  
 陣、其後本當之指揮ヲ受、同國野尻へ転陣、然ルニ官  
 兵同所ヲ距ル二里余、西鏡山ニ來テ守備ヲ嚴ニス、仍  
 テ我軍總隊合シテ六小隊、六月十八日早天ヨリ進撃、

戰フコト幾トント六時間、互ニ勝敗ナシ、同日午後六  
 時頃總軍引揚、日向國本庄へ転陣、同月二十三日同所  
 官兵ノ進撃ヲ受、遂ニ敗軍八月上旬日不覺、同國佐土  
 原ニ於テ官兵ノ襲撃ヲ蒙リ散乱、自分同所愛宕山ニ潛  
 暗シ砲声ノ絶ルヲ窺ヒ、密々山岳ヲ繞リ、八月十二日  
 漸ク帰宅、同月廿三日水引郷(内市)ニ於テ帰順書ヲ巡廻ノ警  
 視官ニ呈ス、

明治十一年二月

五六 山口喜右衛門戰地形状口述

鹿兒島県下第五十三大区四小区

薩摩国(姶良郡清生町)始羅郡加茂郷居住

旧士族

山口喜右衛門

一自分義昨明治十年二月中、同県士族當時東京警視局奉  
 職警部中原尚雄等外數十名、顯官ノ内命ヲ受、西郷隆  
 盛暗殺致サント欲シ帰省中遂ニ及露顕候ニ付、隆盛政  
 府へ尋問之為メ校党ヲ擁シ上京之義ハ兼て承知致候、  
 然ル處同年四月二十日同県士族戸長酒匂重右衛門義自  
 分ヲ宿許へ呼寄、早々出兵之上兵勢可相援達ヲ受ケ、

則刀ヲ携帶シ出発ス、同月十日肥後国人吉へ到着同所

二五日間滯在致居候処、官兵鹿兒島表へ進入候ニ付、

早々引還シ接戦可致本營ノ達ヲ受、五月二日薩摩國加千木ニ至リ番兵致居候処、六月廿日同国吉野本營ヨリ

自分ニ御用有之出頭可致達ニ付、則出頭ノ処、行進十

七番分隊長被申付、火繩銃八十挺受取之、其節小隊長

有馬源右衛門兵卒百三名ト同国<sup>(須崎)</sup>巢佐久<sup>(加治木町)</sup>ヘ本營ノ達ヲ受

転陣、七月二日午前第八時頃ヨリ同所上別府川ヲ隔テ

開戦ス、此日タルヤ互ニ勝敗ナシ、我軍終ニ弾薬尽、

不得止同国<sup>(須崎)</sup>敷根・福山へ引揚、然ルニ官兵我隊ヲ追撃

ス、仍テ猶亦日向国高鍋へ転陣、七月二十日終ニ王師

ノ不可敵ヲ知リ隊長有馬源右衛門兵卒二十四名と同所

第三旅團轄門へ降伏致候、

明治十一年二月

## 五七 有馬源右衛門戰地形状口述

鹿兒島県下第五十三大区四小区

薩摩國始<sup>(姶良郡蒲生町)</sup>羅郡加茂郷居住

旧士族 有馬源右衛門

一自分義昨明治十年二月中、同県士族當時東京警視局奉職警部中原尚雄等上官ノ内命ヲ受、西郷（隆盛暗殺致サント欲シ帰省中）既ニ及露顕、仍テ隆盛政府へ尋問之為メ大兵ヲ擁シ上京之義ハ、兼テ世上風説ニて承知致候、自分固ヨリ私學校党ニハ無之、然ルニ同年四月二十日同県士族戸長酒匂重右衛門自分等ヲ宿許ヘ呼寄せ、早々出兵之上兵勢可相援達ニ付、則刀ヲ携帶シ出発、同月日不覺肥後国人吉到着、同所ニ五日間滯在中、本營詰同県士族逸見十郎太ヨリ行進拾七番小隊長被申付候處、官兵追々鹿兒島表へ進入候ニ付、早速引還シ接戦可致本營ノ達ヲ受、五月二日薩摩國加千木ニ至リ同所ニ番兵致居候処、六月廿日始メテ火繩銃八拾挺同国吉野本營ヨリ引渡相成、其後同国巢佐久ヘ転陣、七月二日午前八時頃ヨリ同所ニ於テ上別府川ヲ隔テ、官兵ト互ニ砲戦ス、其節我軍遂ニ弾薬打尽シ候ニ付、同国敷根・福山エ引揚、然ルニ官兵我隊ヲ追撃ス、仍テ猶亦日向国高鍋へ転陣、七月二十日終ニ王師ニ不可敵ヲ知リ、分隊長山口喜右衛門兵卒二十四名ト同所高鍋第三旅團轄門へ降伏致候、

明治十一年二月

(表紙)

# 西南之役懲役人筆記 十 埼 県

(中表紙)

## 拳 兵 始 末 明 細 書

### 一 高田勝四郎外六十名連署上申書

臣等暗愚

辱シケナクモ 天譴ヲ犯触シ、 王命ニ違背シ惶懼止ム  
コトナシ、 今日已ニ囚奴ノ身、 又何喋々論弁ゼン、 然リ  
ト雖トモ殊ニ明府ノ寵命ヲ辱フシ、 敢テ黙止シ而シテ其  
情状ヲ陳セスンハ、 是却テ罪ヲ増シ、 譴ヲ益ス者ニ似タ  
リ、 因テ其ノ殘陋鄙拙ヲ顧ス、 謹テ拳兵終始ノ大概ヲ記  
シ、 以テ省覽ニ具、 惟ルニ前大將西郷隆盛戊辰以降數危  
難ヲ犯シ、 万死ノ途ニ出入シ、 力ヲ竭シ 王室ヲ輔翼シ、  
堺

謀ヲ運ラシテ國家ノ傾頽ヲ挽回シ、 聖朝ノ妖雲ヲ一掃  
シ億万ノ生靈ヲシテ再ヒ天日ノ光ヲ仰クヲ得セシム、 其  
ノ王室國家ニ大勳勞アル、 方今誰カ其ノ右ニ出ル者ア  
ラン、 一旦議論協合セサルヲ以テ、 故ニ明治六癸酉年廟堂  
ヲ屏去シ鹿児島ニ還リ、 尔來五年以テ今日ニ至ルマテ、  
眷々未タ嘗テ 陛下ノ湛恩ニ背負セス、 之ヲ上ニシテハ  
忠貞正直、 信ニ人臣ノ分節ヲ失セス、 之ヲ下ニシテハ優  
功逸労アリト雖トモ、 其ノ優功逸労ニ矜ラス、 只能ク其  
ノ明哲ヲ保チ、 稽察國事ヲ憂思シ、 私學ヲ開キ、 孜々以  
テ諸生ヲ教誨シ、 自ラ未耜ヲ負ヒ、 以テ開墾ヲ勉メ、 苛モ  
國益ヲ広メンコトヲ要ス、 夫レ天下ノ人士少シク是非ヲ  
弁知スル者誰カ其行義ニ感激贊嘆セサルモノアラン、 実  
ニ國家ノ柱石 朝廷陛下ノ股肱トモ謂ツヘキ、 臣等元ヨ  
リ其高義大節ニ感徹シ、 若シ夫レ一旦天下ニ不幸不虞ア  
ラハ、 正ニ先ツ勤 王ノ軍ニ西郷氏ニ従ヒ、 以テ潔ヨク  
西郷氏ノ麾下ニ死シ、 上ハ以テ寸忠ノ赤心ヲ全シ、 下ハ  
以テ国恩万份ノ一二報ント欲ス、 是レ則チ臣等ノ素志寢  
食遺忘セサル所ナリ、 然ルニ十年一月下旬遊学ノ同志相  
報知スルニ、 廟堂ノ大臣故ヘ無キニ刺客ヲ遣シ、 之ヲ暗  
殺セシメントス、 因テ西郷氏上東、 闕下ニ至リ尋問訪

敵セン為メ、既三行発ノ趣キナルヲ以テス、臣等報ヲ得テ大ニ驚駭シ、因テ武部小四郎・越智彦四郎・久光忍太郎等ヲ始メ同志ノ者ヲ集会シ相協議スルノ際、已ニ数日又戦端ヲ肥後ニ開クヲ聞キ、慷慨苟モ安然トシテ其ノ困扼ヲ坐視スルニ忍ヒス、且ツ國家ノ榎石タル忠義ノ士、之レヲ危難困扼ニ救フハ国恩ニ報酬スルノ一旦トモナル可キヲ思慮シ、故ニ速ニ応援ヲ為シ、苟モ凌遲スルノ志ニ非スト雖トモ、又因循其ノ明義明分ヲ疑懼憤慮シ略猶予スルノ間、專使ノ檄文ヲ見ルニ及ンテ、正ニ明義明分ノ確然ナルヲ知リ、是ニ於テ同志相共ニ決議誓約シ、武部小四郎・越智彦四郎ヲ大隊長トシ、久光忍太郎・舌問慎吾ヲ副官トシ、三月廿七日西郷氏応援ノ為福岡城ニ於テ遂ニ戦端ヲ開ク、

嘗テ廿七日ノ夜大隊長越智彦四郎・副官久光忍太郎・小隊長久世芳磨・同加藤堅武・同村上彦下・同江上述直・同大畠太七郎・同月成元雄其他八木和一・船越聞道等數名(福岡市西区)西方ノ同志ヲ城西ノ田島村ニ集会シ、四更追廻裏門ニ進軍ス、月成元雄独リ兵士三四拾人ヲ從ヘ下ノ橋ニ至リ表門ヨリ進撃シ、火ヲ放チ勢ヲ合セ表裏一時ニ迫撃ス、城内ニ於テハ台兵砲ヲ發シ固ク拒守ス、曙ニ至リテ勝敗

未タ決セス、是ニ於テ越智等相議シ、隊伍ヲ整ヘ再ヒ進軍セント、先ツ軍ヲ城後ノ大休山ニ退ク、東方ニ於テハ

大隊長武部小四郎・副官舌問慎吾其他尾形到・平岡孝太郎・石田勉之助・清原強助・森震志等東方同盟ノ兵士ヲ招集セント、那珂郡住吉村ニ於テ集会ス、然レトモ東方已ニ警視ノ着手スル所トナリ、集会セント欲スル者モ空ク発スルヲ得ス、偶発スル者ハ道途ニ於テ縛虜セラル、全ク会スルヲ得ル者數人ニ上ラス、已ニ曉ニモ垂ントス

レハ、越智等発起談合ノ時機モアレハ、武部等扼腕切歎謀慮百日スト雖トモ、元ヨリ兵士ノ集会スル無ケレハ、相共ニ合議シ暫ラク潔散シ兵士ヲ募リ薬器ヲ整ヘ、而シテ再発センコトヲ約シ、各所在ニ伏匿シ密ニ相通知シテ之レヲ計ル、只舌問慎吾大休山ニ趣キ之レヲ越智等ニ報ス、已ニ明旦廿八日ニ至レハ官兵直チニ進軍シ、山ノ東西ヲ環廻シ、繁ク砲ヲ發シ薄撃ス、越智等兵ヲ勒シ之レヲ拒ク、而シテ一隊ヲ谷間ニ伏シ、又一隊ヲ遣シ戰ヲ挑ミ以テ之レヲ誘フ、官軍勝ニ乘シ大ニ進ンテ谷間ニ至ル、因テ伏ヲ發シ擊テ大ニ之レヲ敗ル、然レトモ官軍益東西ヨリ進撃シ、斜陽ニ及ンテ戰ヒ尚ヲ止マス、因テ嘗ヲ内野村ニ移シ、軍ヲ同所ニ退ク、廿九日官軍追尾シテ至ル、

因テ又軍ヲ勒シ、一ツハ村上彦下・加藤堅武・船越聞道各兵數十ヲ率シ金武村<sup>(福岡市西区)</sup>ニ向ヒ、一ツハ越智・久光・大畠・江上・八木等兵百余ヲ從<sup>(福岡市西区)</sup>ヘ野芥村ニ向フ、然ルニ村上等金武村ニ至ルニ、候騎忽チ馳セ來リ官兵百余車ニ乗シ金武本道ヨリ進軍スルヲ報ス、村上等乃チ兵ヲ金武川ノ上ニ伏シ其ノ至ルヲ俟ツ、暫ラクシテ官兵至リ各車ヨリ下リ、已ニ川ヲ乱サントス、因テ吾軍一度ニ呐喊、銃ヲ發シ之レヲ縱擊ス、官兵大ニ散乱シ、器械ヲ捨て逃走ス、村上等皆追蹤シテ原村ニ至ル、時ニ越智等軍ヲ進メ野芥村ニ至ルニ、先鋒ノ候騎十余人、官兵ニ合囲セラレ既ニ全ク擊殺セラレントス、越智等乃チ軍ヲ潛メ、道ヲ山間ニ取り遽ニ官軍ノ左ニ出テ、忽然砲ヲ発シテ之ヲ擊ス、官軍之レヲ顧ミテ大ニ狼狽シ野芥村口マテ退軍シ、林ニ依テ防戦シ、午前十一時ヨリ午後四時ニ至ルマテ勝敗未タ決セス、因テ久光忍太郎一隊ヲ率シ、間道ヨリ密ニ遡テ官軍ノ後ニ出テ、直ニ進ンテ其軍ヲ衝キ、以テ其勢ヲ格ス、而村上等又援軍ノ為メ原村ヨリ直チニ野芥村ノ前ニ出テ、以テ官軍ノ右ヲ縱擊ス、是ニ由テ官軍大ニ乱レ遂ニ退走ス、吾軍又内野ニ凱旋ス、其夜議シテ再ヒ曲淵村ニ移ル、卅日已ニ曙ニ至ラントシテ、官兵金武・内野

両道ヨリ進軍ス、久光・舌間・久世・村上・大畠・八木・船越・加藤大三郎各兵ヲ率シ各所ニ於テ防戦シ、午前八時ヨリ午後四時ニ至ルマテ薄撃拒戦益力ム、而シテ吾軍利ナキヲ以テ越智等令ヲ伝ヘ、軍ヲ佐賀県内<sup>(神崎郡)</sup>三ツ瀬村ニ退ケ、又當ヲ同所ニ移易ス、卅一日ニ至リ越智・久光等相共ニ協議シ、三ツ瀬ノ遂ニ支保ス可カラサルヲ以テ、使ヲ遣ハシ武部等ニ報スルニ、一タヒ兵ヲ秋月ノ旧城ニ退ケ俱ニ軍ヲ整ヘ再ヒ大事ヲ謀ランコトヲ以テス、武部等之レヲ諾ス、因テ舌間慎吾・久世芳磨・村上彦下・江上述直・大畠太七郎・月成元雄・吉安謙吾・吉井勝馬其他兵士百余名ヲ殿軍トシ昼夜兼行、四月一日筑後国御原郡乙隈村<sup>(小郡市)</sup>ニ至ル、時ニ前軍ト相去コト稍遠シ、偶同所ニ於テ廣島鎮台ニ逢值シ、逡巡ノ間遂ニ全ク合囲セラル、是ニ於テ皆必死ヲ期シ搏戦スト雖トモ、元ヨリ彈薬・器械ノ具備ナケレハ舌間等切歎奮呼、兵士又一層激励、傷ヲ扶ケ涙ヲ呑ミ更ニ鬪戦ス、然レトモ防禦成リ難ク、益進メハ益死傷シ空シク官軍ニ困蹙セラレ、舌間・久世・江上・大畠・月成・吉安・吉井ノ七子ハ戦死シ、村上ハ両股ヲ射ラレ、尚ホ兵士ヲ励マシ一タヒ潔戦セント欲スレトモ馳騁歩行ナラス、遂ニ官軍ニ縛虜セラル、兵士或ハ戦死

シ或ハ就縛シ略尽ク、然ルニ越智等之レヲ知ラス益道ヲ  
倍シテ行ク、乙隈ヲ去ル里許リニシテ巡查有馬彦馬・吉  
田虎彦其他四名ニ遭遇ス、越智・久光・森寛忠等誘引シ  
テ之レヲ詰ルニ、有馬等ノ談論元ヨリ同議論ニシテ且ツ  
其言ニ速ニ帰県、同士ヲ募リ、鹿児島応援ヲ為スノ趣キ  
アリ、因テ越智等慰懃之レヲ慰シ、而シテ別ル、薄暮漸  
ク秋月ニ着ス、己ニ二日ニ至リ越智等始テ舌間等ノ敗軍  
ヲ聞キ大ニ愕胎ス、而シテ未タ武部等ノ援兵モ至ラス、  
有ル者僅ニ百ニ満タス、由テ抗拒ノ策ヲ會議シ議論紛々  
ノ間、己ニ午後ニ至リ廣島鎮台遽ニ進軍シ、候騎之レヲ  
報ス、越智等則チ其ノ兵ヲ勤シ、久光忍太郎・八木和一・  
船越聞道・加藤堅武・加藤大三郎・森寛忠各兵ヲ引テ之  
レヲ女夫石<sup>(夫婦石)</sup>ニ迎フ、拒撃數戦久光忍太郎・船越聞道並ニ  
傷ヲ蒙ル、越智等頗ル奮勉兵士ヲ励マスト雖トモ、或ハ  
傷シ或ハ斃レ余僅ニ數十人、然ルニ台兵益進撃ス、因テ  
一タヒ軍ヲ八幡山ニ退ケ衆ヲ会シ議シテ曰、今兵士僅ニ  
數十、殊ニ器械・彈薬・糧食ノ全備ナク擊戦スト雖トモ  
徒ニ弾丸ニ斃傷セラル、耳ナラン、因テ暫ラク散シ所在  
ニ潜伏シ機会ヲ窺ヒ再発ゼン、只空シク戸ヲ原野ニ暴横  
スルニ孰レソ、衆其ノ議ニ同ス、是ニ於テ衆皆涙ヲ揮テ

戦争ニ嚮フ処々ヲ左ニ記載ス

高田勝四郎

旧福岡城追廻裏門

早良郡大休山<sup>(福岡市中央区南公園)</sup>

石津直五郎

旧福岡城追廻裏門

早良郡大休山<sup>(福岡市西区)</sup>  
早良郡金武村

田川蓄四郎

早良郡曲淵村<sup>(早良郡)</sup>

白石平之助

早良郡大休山  
早良郡曲淵村

高城 安吉

去ル、越智等又之レヲ慰勞シテ遣ル、時ニ福岡ニ於テ武  
部・森・平岡等種々謀慮ノ際、越智・久光等ノ就縛ヲ聞  
キ大ニ驚駭ス、然レトモ恬然トシテ止ム可キニ非ラサレ  
ハ密ニ合議シ、各所ニ在テ相通シ心志ヲ尽シ思慮ヲ竭シ、  
日夜再挙ヲ相策ルト雖トモ、警視ノ着手弥厳重ニシテ遂  
ニ並ニ縛虜セラル、凡ソ挙兵ノ本末如斯、

十 塚 県

野坂 種外

佐賀縣神崎郡三ツ瀬村

銃創浅手

早良郡大休山

早良郡大休山

銃創淺手

北山 八郎  
小村直太郎  
大神 茂  
井上勝之助  
樋口 信樹  
福竹 武平

旧福岡城追廻裏門

福田彌一郎  
正田 築

旧福岡城追廻裏門

原  
五郎

早良郡野芥村

佐賀県神崎郡三ツ瀬村

佐々川市作

旧福岡城下橋

佐藤 虎雄

早良郡野芥村

早良郡曲淵村

佐賀県神崎郡三ツ瀬村

片岡徳太郎

早良郡曲淵村

佐賀県神崎郡三ツ瀬村

筑後国御原郡乙隈村

永野 卯作

早良郡野芥村  
(福岡市西区)

早良郡曲淵村  
(早良町)

佐賀県神崎郡三ツ瀬村

筑後国御原郡乙隈村

大木 政雄

菅安虎治郎

多久 虎作

大神三大郎

伊藤 蔦吉

貫 龍雄

佐坐 積

銃創深手

旧福岡城追廻裏門

早良郡大休山

早良郡野芥村

早良郡曲淵村

早良郡大休山

早良郡野芥村

早良郡曲淵村

佐賀県神崎郡三ツ瀬村

筑後国御原郡乙隈村  
(小郡市)

川崎 始

讀井 七次

旧福岡城追廻裏門

早良郡大休山

早良郡曲淵村

佐賀県神崎郡三ツ瀬村

筑後国御原郡乙隈村

明永 卯三

徳永伊七郎

岡本善十郎

早良郡大休山

早良郡曲淵村

佐賀県神崎郡三ツ瀬村  
(甘木市)

福岡県秋月

早良郡野芥村

早良郡曲淵村

佐賀県神崎郡三ツ瀬村

佐賀県神崎郡三ツ瀬村

福岡県秋月

樺 増次郎

十 塙 県

吉安代四郎  
久野 生木  
西尾 定吉  
伊藤 恕  
石川 早瀬  
柴田 兼吉  
山崎 清吉  
小金丸要太郎  
野田 敏彦  
三月廿七日住吉二相赴キ集会スト雖トモ警視着手厳密ニ  
シテ兵士ノ集会セサルヲ以テ、(建カ)武部等ヨリ暫時潰散致ス  
可キノ議ニ付帰宅潜伏ノ際遂ニ縛虜セラル、  
加ヘ、同所ニ二泊シ、本營ノ移易ニ従ヒ、三十日佐賀県  
内三ツ瀬ニ至リ一泊ス、四月一日退軍ニ秋月旧城迄隨行  
シ、四月二日潰散ノ節同所ヲ脱シ帰宅、同五日遂ニ幽囚  
セラル、

福岡市秋月

佐賀県神崎郡三ツ瀬村

早良郡曲淵村

早良郡曲淵村

佐賀県神崎郡三ツ瀬村

福岡市秋月

友納 德郎

西村 茂

内海 重雄

宮崎 謙吾

丸山 麓

尾本吉次郎

安田 保

藤村太三郎

三月廿八日久光忍太郎等ノ議論ニ同シ、漢方医術施行ノ  
為メ葉ヲ携ヘ直チニ早良郡曲淵村ニ至リ両三名ニ療治ヲ

三月廿八日武部等ノ集会ヘ相赴クノ途、同志ニ行逢、潛伏再挙相俟ツ可キノ言ニ付、早速帰村潜伏中私宅ニ於テ  
捕縛セラル、

三月廿七日夜<sup>(建)</sup>武部小四郎ヨリ集会ノコト通知セシニヨリ即夜兵器ヲ携へ趣カントセシニ、既ニ警視庁ヨリ四街ヲ塞扼スルヲ聞キ竊ニ間道ヨリ赴キシニ、途中ニ於テ巡査ニ捕縛セラル、

徳末楯夫

自分巡査奉職中二月下旬肥後ニ於テ西郷氏戦端ヲ開キシヲ聞キ、就テ同志ノ者其ノ行義ニ感徹シ、殊ニ明義明分モ確然ナルヲ以テ西郷氏応援ヲナスノ議ナリ、自分尤モ其ノ議論ニ同シ、密ニ県斤等ノ景況ヲ謀セシニ、三月十五日久留米及ヒ熊本県下<sup>(五名市)</sup>高瀬エ出張ヲ命セラレ、因テ戰地ノ趣キヲ探ラント欲シ、早速福岡ヲ発シ高瀬エ到リ、三月下旬帰路久留米エ在留セシニ、同志ノ者ヨリ発起ノ事ヲ報知セシニヨリ直チニ帰県シ、三月二十八日密ニ県庁ノ景況ヲ探偵センタメ相趣キシヲ途中ニ於テ遂ニ巡查ニ捕縛セラル、

有馬彦馬

明治十年三月福岡県下小倉警察分署巡查奉職セシ処、薩兵追討ノ為メ該県久留米エ出兵ヲ命セラレ、三月十八日小倉ヲ発シ同月廿日久留米エ着ス、二等警部立花某隊エ編入セラレ、翌廿一日旧柳川領<sup>(柳川市)</sup>金松ヘ出張ノ命ヲ受ケ同

所ヲ発シ金松ニ至リ立花氏ノ指令ヲ受ケ、多々羅・アブミ両道ヲ守リ、且ツ近傍ヲ巡視ス、同月廿七日七等警部豊永高義<sup>(佐賀県三ツ瀬村)</sup>隨行シ植木・山鹿両戦地ノ景況ヲ探偵シ、同廿九日金松ヘ引取り再ヒ多々羅・アブミノ両道ヲ守リシニ、福岡士族西郷氏応援ノ為メ兵ヲ起シ、福岡城ニテ數戰シ、其ノ儘三ツ瀬<sup>(三井郡)</sup>峠ニ引退キシノ電報本府ヨリ来ル、因テ久留米エ引上ヶ同所ヨリ三ツ瀬ヲ夜襲致ス可クノ指令ニ付、直ニ金松ヲ引キ上ヶ久留米エ至リ、其夜午後第十二時コロ七等警部豊永氏エ事故有テ差迫リ、聊カ議論ニ及ヒ協合セサルヲ以テ、竹内恒三郎・財津十一郎・吉田虎彦・中村直行・林七郎等自分ニ同意シ、其ノ儘同所ヲ脱シ、四月一日午前第七時コロ筑後国御原郡三軒茶屋ヲ通行ノ砌リ、偶福岡士族越智彦四郎其他久光忍太郎・森寛忠等エ行逢ヒ談論ニ及ヒ、互ニ素志ヲ吐露シ且ツ自分ハ帰國、同志ヲ募リ鹿兒島エ応援センコトヲ語リ、因テ懇懃契約ヲナシ其場ヲ別レ、同郡馬市村ヲ過クルノコロ又タ大畠太七郎エ行逢ヒ大畠ト再ヒ談論セシ所、俄ニ廣島鎮台ヨリ襲撃セラレ、是ニ於テ争闘ニ及ヒ、福岡士族頗ル激戦シ遂ニ大畠氏其他將士多ク戦死ス、因テ其ノ儘同所ヲ脱シ帰路福岡ニ於テ博縛セラル、

福田 靜雄

楨 増次郎 (花押)

石津直五郎 (花押)

佐々川市作 (花押)

白石平之助 (花押)

三月廿七日(建々)武部等満散潛伏再舉相許り、就テ自分尤モ議論ニ同シ、陰密彈薦尽力ノ際、四月十日私宅ニ於テ捕縛セラル、  
挙兵之旨趣戰爭之景況並ニ前書之通相違無御座候也、

森 震志 (花押)

徳末橋夫 (花押)

内海重雄 (花押)

西村 桂 (花押)

福田彌一郎 (花押)

宮崎謙吾 (花押)

大神 茂 (花押)

岡本善十郎 (花押)

多久虎作 (花押)

上田伊興吉 (花押)

福竹武平 (花押)

川崎 始 (花押)

德永伊七郎 (花押)

西尾定吉 (花押)

田川蓄四郎 (花押)

眞永卯三 (花押)

菅安虎次郎 (花押)

貫 龍雄 (花押)

樋口信樹（花押）

岩室文太（花押）

高田鬼丸（花押）  
小金丸要太郎（花押）

石川早瀬（花押）

福田靜雄（花押）

井上勝之助（花押）

高田勝四郎（花押）

佐藤良太郎（花押）

久野生木（花押）

佐藤虎雄（花押）

大神三太郎（花押）

北山八郎（花押）

佐坐 積（花押）

伊藤 恕（花押）

八尋 豊（花押）

原田 茂實（花押）

安田 保（花押）

尾本吉次郎（花押）

丸山 麓（花押）

藤村太三郎（花押）

## 二 神崎潛一良・船越聞道連署上申書

明治十年第二月中西郷隆盛兵ヲ率ヒテ熊本県下ニ侵入スルノ際、我カ県下越智彦四郎・久光忍太郎・建部小四郎等首トシテ、彼ニ応スルノ議ヲ唱フ、蓋シ此議ノ生スル所以ノ根原ハ決シテ偶然ニアラス、抑モ我カ国維新以来國体ヲ改革シ、廢墜ヲ興起シ治術尽サ、ルニアラス、教令布カサルニ非ス、執政大臣ノ勤メサルニ非ス、百官有司ノ怠ルニ非ス、然リ而シテ人民ハ却テ安寧ノ幸福ヲ仰カス、兵乱各処ニ止ム時無ク、外侮常ニ免レサル者ハ何ソヤ是レ他ナシ、下ヲ馭スルニ道徳ヲ以セシテ而シテ術数ヲ以テシ、世ニ視スニ矯飾浮華ヲ以テシテ而シテ廉恥信義ヲ以セス、概シテ之ヲ云ヘハ国是ヲ失フカ故ナリ、

是レ越智彦四郎等カ他ノ同志輩ト切歎憂憤シテ久シク止  
 マザル所ナリ、然ルニ当年二月鹿兒島県桐野利秋竊ニ信  
 ヲ彼レニ通シ、告ルニ刺客云々政府ヘ尋問等ノコトヲ以  
 テス、尋テ薩兵熊本県下ニ侵入遂ニ戦端ヲ開クニ至ル、  
 是ニ於テ越智彦四郎等同志輩ト相議シテ曰ク、時機未タ  
 早キカ如シ、然リト雖トモ西郷氏豈ニ之ヲ知ラサランヤ、  
 事勢ノ已ム可ラサルモノ有テ然ルヤ必セリ、夫レ氏ノ国  
 家ノ為メニ私セサルヤ、其言行実跡ニ於テ既ニ世人ノ普  
 ク知ル所ナリ、且ツ氏妄ニ凶器ヲ弄シ政府ヲ窘蹙シ民心  
 ヲ脅惑スルヲ好マサルヤ亦明ナリ、然ラハ則チ何ヲ以テ  
 事ノ此ニ至ルヤ、是レ必ス言語口舌ノ以テ為ス可キ無ク、  
 ルカ故ノミ、顧フニ氏ヲシテ一旦事ヲ誤ラシメハ后チ遂  
 ニ此ノ衰運ヲ挽回スルノ期ナカル可シ、然レハ則チ今日  
 ノ事ハ安危存亡ノ因テ相判ル、処、豈ニ徒ニ時ノ緩急ヲ  
 論シ、事ノ得失ヲ説テ、而シテ袖手傍観スルニ忍ンヤ、且  
 ツ成敗天ニ在リ慮ルニ遑アラスト、是レ越智彦四郎等カ  
 断然戦ニ決スル所以ナリ、此ニ於テ潜ニ會議ヲ作シ、兵  
 士ヲ招集シ会同スル処ノ衆四百余  
一ノ居士二ノ分ノ ヲ以テ分ツ  
 テ五隊トナシス毎隊三分ノ一ヲ鉄隊トシ、二ヲ銃隊ト、各自之レヲ所有ス、村上彦下・大畠

太七郎・加藤堅武・久世芳麿・吉安謙吾等各々之レニ長タ  
 リ、更ニ之レヲ大別シテ二トナシ、一ヲ東組トシ一ヲ西組  
 トシ、東ハ建部小四郎之レヲ惣管シ舌間慎吾副タリ、西ハ  
 越智彦四郎之レヲ惣管シ久光忍太郎副タリ、而シテ建部  
 小四郎ハ県庁ヲ屠リ以テ官庫ニ儲蔵スル処ノ金穀器械ヲ  
 奪ヒ、越智彦四郎ハ福岡旧城ニ在ル処ノ台兵ヲ侵撃セん  
 コトヲ約ス、軍議漸ク決スルヲ以テ同年三月廿七日午前  
 第三時頃兵ヲ発シ直ニ城兵ニ薄リ砲戦數合将ニ城ヲ抜ン  
 トス、而シテ夜已ニ暁ニ垂ルヲ以テ官兵ノ為メニ寡兵ヲ  
 認メラレンコトヲ怖レ、退ヒテ大休山ニ拠ル、時ニ建部  
 小四郎力管スル処ノ東ノ兵機ヲ誤ツテ発スル能ハス、因  
 テ県庁ヲ襲フノ策亦タ成ラス、小四郎深ク之ヲ慚憤シ遁  
 レテ再挙ヲ謀ルモ遂ニ成ラスシテ捕ヘラル、翌廿八日大  
 休山ニ戰フ、地利宜シカラザルヲ以テ更ニ転シテ第九大  
 区飯場村ニ拠ル、同廿九日午前第八時追兵ヲ邀ヘテ同区  
（早良町）  
 金武村ニ戰ヒ追撃シテ野芥村ニ至ル、既ニシテ日暮レ兵  
 疲ル、ヲ以テ師ヲ班ス、同卅日午前第五時金武時・飯場  
 峰・曲淵峰ノ三処ニ戰フ、此ノ日雨雪凜冽道路艱難且ツ  
 我カ兵雨衣ニ乏シキヲ以テ士卒多ク凍冷シ進退度ヲ失シ  
 各処利アラズ、惟金武峰ノ一方ハ船越間道カ率ユル処ノ

一分隊ヲ以テ急ニ敵中ニ研り込み、奮戦突撃以テ之ヲ破ル、因テ勢ニ乗シテ益々進ミ戰ハントス、会々他ノ二道

使ヲ馳セテ敗ヲ報シ、且ツ急ニ引去ラシム、故ニ俄ニ兵

ヲ収テ退キ、全軍遂ニ肥前ノ國三ツ瀬村ニ走ル、時ニ午

後第六時ナリ、同卅一日曙明同處ヲ発シ、同國(日連原、三田)ノ内目田

原・轟・田代(甘木市)ノ數所ヲ經テ昼夜兼行シ、四月一日午後第

三時筑前國(秋月)ニ到ル、同二日午前第七時同所夫婦石・

八幡山辺ニ戰フ、而シテ衆寡敵セサルヲ以テ遂ニ午後第

五時ニ至リ潰散ス、是ニ於テ越智・久光・加藤・船越等

事ノ成ラサルヲ憤リ、直ニ豐後路ニ馳セテ南軍ニ投セン

コトヲ謀リ、逃レテ加摩郡ニ至ル、而シテ久光忍太郎・

船越閻道等先ニ銃創ヲ被リ頗ル行歩ニ艱ムヲ以テ、同郡

馬見村ニ於テ遂ニ民間ニ潜匿ス、后チ三日ヲ經テ警部官(嘉穂町)

内氏力管スル所ノ巡查兵ノ為メニ縛セラル、時ニ越智彦

四郎・加藤堅武等モ亦策ヲ失シ、同郡椎木村(嘉穂町)ニ於テ巡查

兵ノ為ニ逮捕セラル、是ヨリ先卅一日ノ夕、舌閻慎吾・

大畠太七郎等道ヲ失シ、同國ノ内夜須郡馬市村ニ進ミ、

適々官兵ノ大挙來討スルニ会ス、於是官軍四面夾撃、我

カ兵力戦シテ克タス、舌閻慎吾・大畠太七郎・久世芳磨・

吉安謙吾等戦死シ、村上彦下重創ヲ被リ、遂ニ官軍ノ為

ニ獲ラル、其他戦死スル者殊ニ多シ、而シテ余衆皆潰走シ、后チ或ハ自首シ或ハ追縛セラル、右之通り戦地ノ形状相違無御座候也、

福岡県筑前國第八大区一小区

當時和歌山県監獄内已決囚(梅田)

船越閻道(梅田)○

福岡県筑前國第九大区二小区

當時和歌山県監獄内已決囚

神崎潛一良(梅田)○

明治十一年第三月十六日

(表紙)

## 西南之役懲役人筆記十一 廣島県

(中表紙)

明治十年九州戦争記 熊本

テ曰ク、是実ニ天下ノ大事國家存亡ノ機ニシテ臣子身ヲ  
捨テ國ニ報スルノ時ナリ、宜ク急ニ京師ニ上リ、  
鳳闕ヲ護衛シ鞠躬尽力斃レテ而シテ後已ムヘシト、因テ  
健軍社ニ会スル者壱千余人、將ニ発セントスルニ臨ンテ  
書ヲ縣厅ニ投シテ曰ク、

當一縣有變一方生亂也、台兵能鎮圧之、則天下之士民  
傍觀坐視亦可也、然至國家安危社稷存亡、則不得止決  
然奮起、以身當大難之衝焉、語曰、食人之祿者死其難、  
況於沐浴數千年之

皇恩者乎、今夫陸軍大將西郷隆盛等將率大兵直至廟  
堂、有所問焉、既於熊本鎮台開兵端、雖未知其旨如何、  
此美國家安危天下存亡之機、而臣子捨身報國之秋也、

是以同志之士數百人斷然將星馳、以護禁闈、鞠躬尽  
瘁斃而後已矣、若夫有豺狼橫道、敢妨勤

王之師、則一喝駆除而過焉耳、臨発略書其由以報焉、  
閣下幸諒焉、

斯、已ニシテ延テ市街ニ及フ、熑サル者三四日間城下二  
万余家一時尽ク灰燼トナル、真ニ絶世ノ大火ナリ、古称  
ス兵ハ國ノ大事ト、誠ナル哉、此時ニ当テ熊本有志輩ノ  
如キ未タ西郷等ノ旨趣如何ノ知ラスト雖モ、乃議ヲ決シ

時ニ池邊吉十郎ナル者独身薩軍ニ投、別府<sup>(晋介)</sup>新助ニ逢ヒ、  
兵ヲ擧ルノ旨ヲ問ヒ、初メテ刺客云々之由ヲ聞、慨然共  
与ニ廟堂ニ至リ姦臣ノ罪ヲ問ンコトヲ約シテ還ル、廿  
一日薩兵已ニ川尻ニ至ル、城兵夜ニ乗シ一小隊ヲ遣シ薩

當ヲ火ント欲ス、路ヲ失ヒ薩ノ哨兵ニ遇ヒ、事ナラスシテ逃走或ハ河ニ陥テ死スル者有ト云、廿二日未明川尻ヲ発シ、兵ヲ五道ニ分チ一ハ段山口、一ハ二本木口、一ハ川尻口、一ハ安臼橋口、一ハ龍田口、独リ北一方ヲ闕キ以テ生路ヲ示ス、池邊吉十郎・竹内武繁太・高橋長秋・吉田傳太等数名之カ嚮導ヲナス、一時攻撃砲声雷ノ如ク弾丸ヲ犯カシテ進ム、而シテ段山口ノ如キハ、篠原國幹自ラ衆ニ先チ頗ル追撃スト雖モ、城壁堅固ニシテ且ツ処々ニ地雷火ヲ設ケ、其急ニ力ヲ以テ抜キ難キヲ察スルヤ、遠囲ヲナシ、本官ヲ一本木ニ安キ、四方ニ巨砲ヲスヘ以テ攻撃、糧ノ尽ルヲ待テ之ヲ陥ント欲ス、已ニシテ報アリ、応援ノ官兵植木ニ迫ルト、乃チ伊集院某ヲシテ兵ヲ率テ往テ之ヲ防カシム、向坂<sup>(植木町)</sup>ニ迎撃大ニ之ヲ敗ル、追撃二里余銃器及ヒ旗幟一流ヲ奪フト云、此日官兵狼狽散乱、漸ク足ヲ<sup>(玉名市)</sup>高瀬ニ留ルヲ得タリ、此日熊本隊々伍ヲ編整ス、凡十八小隊池邊吉十郎ヲ推テ大隊長トナシ、松浦新吉郎ヲ副トシ、山崎定平・櫻田惣四郎・大里八郎ヲ以テ參謀トナス、堂々整列健軍社ヲ發シ<sup>(熊本市)</sup>大江村ニ一宿、半ハ奇兵トシテ柿原村ニ屯ス、廿三日熊本隊未明ヨリ大江村ヲ發シ路ヲ龍田口ニ取り赤尾口ニ出ル、是ニ於テ柿原屯集ノ隊

モ亦來リ会ス、時ニ一番小隊長佐々友房・九番小隊長深野一三・七番小隊長北村盛純与ニ相議シテ曰、閉城ノ兵已ニ余アリ、碌々如此ナランヨリハ寧ロ直ニ高瀬ニ趣キ一快戰ヲナシ奇功ヲ建ルニ如スト、因テ本官ニ請ヒ日暮乃チ發ス、木留ニ至テ宿ス、二月廿四日晨タニ發<sup>(玉東町)</sup>シ吉次ヲ越<sup>(玉名市)</sup>伊倉街ニ至ル、斥候ヲ高瀬ニ出セハ官兵已ニ退テ玉名山ヲ守ルト云、此日城兵出町ヲ衝キ將ニ出ントス、三番小隊長城市郎隊下ヲ率ヒ薩兵ト共ニ擊テ之ヲ退ク、同廿五日朝<sup>(番)</sup>斥候還報ス、敵已ニ高瀬川ニ傍ヒ進来ルノ勢アリト、因テ相議シテ曰、寡ヲ以テ衆ヲ擊、險ニ依ルニ如ハナシト、乃チ退テ吉次ノ險ヲ守ル、之ヲ久フシテ敵至ラス、是ニ於テ河内屯集ノ薩兵三小隊ニ通シ、与進テ高瀬ヲ衝ク、閑声波ヲ湧シ上軍下軍舟ヲ争ヒ渡ル、官兵狼狽高瀬ヲ退キ玉名山ヲ守ル、乃チ兵ヲ三道ニ分チ之ヲ攻ム、地形惡ク且日暮ルヲ以テ急ニ兵ヲ揚ケ伊倉ニ至テ宿ス、此日熊本全隊皆赤尾口ヲ發シ木留ニ至テ宿ス、初メ池邊吉十郎薩本營ニ至リ、一時力攻以テ城ヲ拔シコトヲ約シテ還ル、已ニ配兵期ニ及ヒ薩兵議變ス、池邊憤激又本官ニ至リ其違約ノ状ヲ責ル、桐野カ曰、力攻セハ則多ク兵ヲ亡ン、寧ロ糧ノ尽ルヲ待テ之ヲ陥ルニ如カス

ト、池邊猶激昂、利力攻ニ在ルヲ論ス、別府新助大ニ之ヲ助クト雖モ事遂ニ行レサルヲ以テ、池邊熊本全隊ヲ以テ高瀬ヲ衝ンコトヲ請フテ還ルト云、同廿六日未明ヨリ発シ直ニ進テ寺田<sup>(玉名市)</sup>ニ出ル、官兵伏ヲ設ケ夾テ之ヲ擊、是ニ於テ伊倉屯集隊<sup>(一番・九番)</sup>モ亦報ヲ聞テ之ニ趣ク、激戦之ニ久フシテ遂ニ敗走ス、時二十一番半隊長菅十洲丸ニ中テ死ス、大隊長池邊吉十郎銃丸腹ニ中ルト雖モ愈奮戰、競ヒ來ル敵中ヲ研崩シ吉次ヲサシテ退ク、是日各隊散乱、木留及ヒ大久保<sup>(大屋、熊本市)</sup>ニ退ク、独佐々友房孤軍ヲ以テ吉次ノ險ヲ守ル、台場ヲ築キ夜ヲ徹スト云、同廿七日寺田ノ敗報薩ノ本營ニ達スルヤ、乃チ昧死ヨリ別府新助・村田新八自ラ大兵ヲ率ヒ路ヲ木留ニ取り寺田ニ出、直ニ高瀬ヲ衝ク、河ヲ夾テ戦フ、小隊長西郷小平丸ニ中テ死ス、議有兵ヲ還シ、吉次ニ一小隊ヲ残シ熊本壹番小隊ト与ニ之ヲ守ル、是ニ於テ高橋<sup>(熊本市)</sup>ヲ左翼トシ山鹿ヲ右翼トナシ其間十  
余里連絡ヲ相通ス、是ヨリ日夜戦争休マス、山鹿方面ノ如キハ桐野利秋軍ヲ督シ毎戦利ヲ得ル、而シテ熊本協同隊之ヲ助ケ頗ル尽力、該隊長平川<sup>(惟一)</sup>覺次郎丸ニ中テ死ス、三月二日熊本壹番隊左半隊及ヒ薩兵半小隊吉次・立磐<sup>(立岩、玉東町)</sup>ノ塞ヲ守ル、官兵曉霧ニ乗シ背後ノ間道ヲ潜ミ急ニ進テ熊

本及ヒ薩兵ノ不意ヲ衝ク、壹番隊薩兵ト共ニ配シテ是ヲ拒ナ、時ニ篠原國幹・村田新八・別府新助自ラ大兵ヲ率ヒテ応援ニ来リ、直ニ進テ官兵ノ山下<sup>(山下)</sup>ヨリ来ル者ヲ衝ク、戦利アラス退ヒテ壹番小隊ノ台場ニ縁ル、篠原國幹等拔刀能ク兵ヲ指揮シ激戦之ヲ防ク、佐々友房・高島義恭等モ亦壹小隊ヲ率ヒ周旋尽力セリ、先是左半隊<sup>(番)</sup>亦少ク退ヒテ平行山<sup>(玉東町)</sup>ニヨル、監軍古閑俊雄之ヲ督シ兵ヲ茂林ニ伏セテ以テ官兵ノ来ルヲ待ツ、官兵曾テ之ヲシラス、山下原<sup>(玉東町)</sup>倉村ヲ焼ヒテ進ミ来ル其間ヒ数間ニ至ラス、古閑俊雄兵ニ指揮シ連発、其不意ヲ擊タシム、官兵伏ニ陥イリ狼狽散乱、遂ニ敗走シテ退ク、同三日辰牌ニ及テ官兵愈進来ル、篠原及ヒ土橋某丸ニ中テ斃ル、是ニ於テ衆皆奮激刀ヲ揮テ研入り大ニ之ヲ敗ル、官兵散乱伊倉ニ退ク、而シテ斃ル、者数百人、是ヨリ後官兵数々吉次ノ塞ヲ襲フ、然モ毎戦薩・熊利ヲ得サルト云コトナシ、同日那知<sup>(熊木町)</sup>耳取等皆激戦砲声雷ノ如ク午牌ヨリ接戦終夜休マス、此日田原方面モ亦薩兵勝利、是ヨリ十八昼夜連戦歟モ止ス、而シテ敵間ヒ僅カ五丈余、或ハ争ニ詞ヲ以テシ、或ハ投スルニ石ヲ以シ、動モスレハ官兵台場ヲ重ネ築キ愈迫リ来ルトキハ、則薩兵毎ニ抜刀切崩シ、以テ利ヲ得ル、

薩兵死傷官兵ノ半ニ及スト雖、隊長斃ル者多ハ此戰ニ在  
リト云、三番小隊長城市郎・十壹番分隊長餘田五郎・同  
半隊長船津東平・七番分隊長中島忠三郎皆肥後ノ人ナリ等モ戦歿  
ス、十三日官兵進撃ス、七番小隊長北村盛純隊下ヲ率ヒテ  
奮戦研入り、以テ之ヲ退ク、同參謀友成正雄モ亦大ニ尽力  
セリト云、十五日本道ノ薩兵將ニ敗ントス、壹番小隊長  
佐々友房・十壹番小隊長樋岡小七郎各一小隊ヲ率ヒテ奮  
戰研入り台場二三ヲ取ト雖モ、其守ニ難キヲ以テ舍テ元  
線ニ還ル、十八日官兵薩兵ノ怠リヲ窺ヒ切り入り之ヲ敗  
ル、熊本十壹番小隊長下河邊次郎太郎隊下ヲ率ヒ奮戦、  
遂ニ元線ニ復ス、時ニ樋岡小七郎丸ニ中テ死ス、廿日薩  
兵強雨ニ依テ怠ル、官兵昧爽ヨリ潛ニ間道ヲ廻リ其後ニ  
出、夾ミ擊テ大ニ之ヲ敗リ、勝ニ乘シ直ニ進テ植木ヲ衝  
ク、熊本十五番隊ノ如キハ曾テ之ヲ知ラス台場ヲ守ル、  
未明ヨリ官兵拔刀來擊スト雖モ、該隊弱ヲ示シテ敢テ動  
カス、稍近クニ及テ一声ニ連発以テ之ヲ斃ス、頗ル激戦  
スルノ際砲声已ニ後ニ在リ、是ニ於テ薩兵・熊本隊皆散  
乱、漸ク残兵三小隊ヲ以テ之ヲ向坂ニ防ク、是ニ於テ出  
町口ヨリ二小隊ヲ出シ中島武彦之三将タリ、木留ヨリ九  
番小隊長深野一三半隊ヲ吉次ノ援隊ニ残シ、半隊ヲ率ヒ

之ニ趣ク、中島ト謀リ官兵ノ左右ニ廻リ相夾テ奮戦研入  
リ首ヲ斬ルコト三百余級、追擊植木街ニ至ル、官兵狼狽  
巨砲二門・彈薬若干ヲ舍テ走ル、田原ノ敗ルヤ山鹿ノ兵モ  
已ムヲ得ス退テ鳥巢・菊池ヲ守ル、廿二日官兵曉霧ニ乘  
(西合志町・菊池市)  
シ三嶽ヲ襲テ之ヲ取ル、小隊長安田某丸ニ中テ死ス、因  
テ木留本官ニ会シ議シテ曰、三嶽ハ枢要ノ地之ヲ得ルモ  
ノ勝、而シテ今已ニ敵ノ有トナル時ハ則之ヲ為ンコト如  
何ント、衆皆之ヲ難シス、時ニ參謀山崎定平ナル者、決  
然自ラ奮テ之ニ当ラント欲ス、是ニ於テ小隊長山縣庄治  
郎・半隊長宇田某等先登襲撃、竟ニ元線ニ復ス、居ル三  
四日、九番小隊代テ之ヲ守ル、官兵又采撃、半隊長可兒  
才八一分隊ヲ率ヒ潛ニ間道ヨリ官兵ノ横ニ出、一声其不  
意ヲ衝ク、官兵狼狽敗走シテ退ク、四月一日吉次右翼人  
吉隊持場ヨリ敗レ退テ山口村ヲ守ル、鳥巢方面少ク敗テ  
(玉東町)  
退ト雖モ又還シ戦、左右ヨリ夾テ研入り大ニ之ヲ敗ル、  
斬首百余人、廿七日報アリ、官兵軍艦ヨリ八代ヘ廻リ、  
其不意ニ出、人ナキノ地ヲ踏ミ直ニ進テ小川ニ至ルト、  
桐野利秋嘆曰ク、兵ヲ八代ニ置サルハ是吾力誤也、乃チ兒  
玉八之進ヲシテ七百余ノ兵ヲ率ヒテ往テ之ヲ防シム、兵  
ヲ三道ニ分テ氷川ヲ夾テ戦コト三日、左翼山ノ手敗ル、  
(鏡町・童北村界)

砲隊長田代五郎奮激隊下十六名ヲ遣シ之ヲ救ヒ、元線ニ復セシム、已ニシテ右翼海手又敗テ松橋ニ退ク、夜ニ入リ奮戦又進テ元線ニ復ス、居ルコト五六日、敗走退テ松橋ヲ守ル、因テ連絡ヲ隈庄・(小川町)娑婆峯ニ通、此敗兒玉八之進丸ニ中テ死ス、甲野某代テ軍ヲ督ス、此時ニ当テ城兵愈餓ニ迫リ將ニ陷ラントスルノ勢有、以テ応援官兵モ亦愈遽テ四方ヨリ進撃、是ニ於テ薩兵内外敵ヲ受、頗ル兵員ノ足サルヲ苦ムノ際、池邊策ヲ以テ石塘ヲ塞キ、(井川町)壺川及ヒ段山川ヲ堰シテ、以テ其冊ヲ補フ、城外水溢レテ海ノ如シ、城兵容易ニ出ルコト能ハス、然レトモ竟ニ冊ノ薄キヲ察シ、四月三日昧爽ヨリ安政橋口ヲ敗ル、路ヲ水削寺ニ取(六幕、嘉島町)リ六荷村ヲ經、隈庄ノ官兵ニ合シ之力嚮導ヲナシ頻ニ進撃、娑婆峯ヲ敗リ堅志田ニ出ル、薩兵退テ御船ヲ守ル、(天明町)永山某往テ軍ヲ督ス、居ルコト六七日薩兵奮ハス敗走、(鎌藤、船田町)永山憤激返シ戰、敵中ニ冊マレ割腹シテ死ス、十四日未明官兵二丁ニ廻リ其備ナキヲ察シ連ニ進撃、川尻ニ迫ル、援兵三百榎藤村ニ至リ激戦數時遂ニ敗ル、官軍連絡ヲ城内ニ通ス、是ヨリ先キ西郷隆盛村田新ハヲ伴ヒ潛ニ脱シ路ヲ矢部ニ取り人吉ニ退ク、独リ桐野ヲ本營ニ残シ軍務ヲ督セシム、是ニ至テ桐野モ亦事ノナス可サルヲ察シ、遽

(益城町)二揚テ木山ニ退ク、因テ北方ノ守兵モ亦皆夜ニ入り大久保ニ退ク、此日南方ノ敗報東門寺熊本々當ニ達スルヤ、各小隊長ヲ集メ相議、時ニ壱番小隊長佐々友房・七番小隊長北村盛純・同參謀友成正雄・九番小隊長深野一三与ニ議ヲ建テ云ク、事茲ニ至、生又何為成敗ノ決今日ニ在リ、請找三小隊ヲ以テ之ニ当ント、乃チ隊ヲ纏メ將ニ発セントスルニ臨テ報アリ、官兵已ニ城ニ入り二本木本營モ亦木山ニ退クト、因テ果サス、十五日忽軍大久保ヲ發シ熊本隊薩兵ヲ夾テ列ヲ乱サスシテ退、龍田山ヲ超ヘ小関ヲ渡リ、日已ニ暮ル、尚行コト三里余木山ニ達ス、居ル三日、薩兵・熊本隊与ニ船底山及ヒ飯田山ヲ衝キ御船ニ進撃、官兵已ニ退テ一人ナシ、乃チ守ヲナサントスル際官兵襲来ル、因テ迎撃テ之ヲ敗ル、首ヲ斬ルコト五十九級、是ニ於テ大津ヲ右翼トシ弓削・長峯等ヨリ連絡ヲ木山・御船ニ通ス、因テ官兵モ亦城ヲ出之ニ備フ、是ニ於テ九番小隊長深野一三事已ニナス可サルヲ察シ本營ニ迫テ曰、城兵新ニ戰勝必ス誇テ意ラン、宜ク夜襲ヲナシ成敗ヲ一時ニ決スヘキ也、參謀福田抱一等奮然此議ニ同スト雖モ事竟ニ行レスシテ止ム、是ヨリ先キ別府新助・逸見十郎太國ニ還リ大ニ募兵シ、直ニ本道ヲ推シ水俣ヨリ

八代ニ進撃、不意ヲ衝キ之ヲ敗ル、竟ニ城ヲ拔キ勝ニ誇

リ少ク怠ル、官兵謀シテ之ヲ知、機ニ乗シテ夾撃大ニ是

ヲ敗ルト云、廿日未明ヨリ官兵大進撃、長峰・竹宮諸方ハ

木島清・中島武彦等自ラ衆ニ先テ抜刀奮戦、斬首二百余

級、大津方面モ亦薩兵勝利、初メ薩兵伏ヲ設ケ潛ニ間ヲ

遣シ官兵ヲ誘リ導キ包シテ研入追撃、多少俘獲等アリト

云、而シテ御船方面ノ如キハ官兵頻ニ進撃、熊本九番・壱

番ノ台場ニ蟻附シ弾丸雨ヨリモ繁ク斃ル、者若干頗ル苦

戰スト雖モ猶奮然能ク防禦ス、已ニシテ右翼薩兵敗レ熊

本隊ノ後ロヲ絶ツ、十八番小隊長井芹敬七・一番半隊長

眞鍋慎十郎・同分隊長淺山基雄・同平井臣夫等戦歿ス、

乃チ引テ矢部ニ退ク、因テ木山・長峯等ノ薩兵モ亦尽ク

引テ來リ会ス、

四月廿三日熊本隊伍ヲ改編シ五中隊トナス、元十二番・

十五番二小隊ヲ合シテ一番中隊ト為ス、同三番・七番二

小隊ヲ合シ二番中隊トナス、同一番・二番・八番ヲ合シ

三番中隊トス、同ク四番・九番・十三番・十四番・十八

番・十九番六小隊ヲ合シ四番中隊ト為ス、同ク四番・五

番・十番・十二番四小隊ヲ合シ五番中隊ト為ス、即チ中

隊長一人・幹事両名・左右小隊長二人・同ク半隊長二

人・同ク分隊長四人ヲ置ク、議有テ遂ニ兵ヲ二道ニ分チ

一ハ奈須越、一ハ熊山越連々深山幽谷ヲ經人吉ニ割拠ス、

兵ヲ四方ニ出ス、右ハ湯前・黒ヒヂヨリ湯地・烏帽子越。

甲瀬・大野等ニ到リ戰爭日尋ク、熊本一中隊ハ本營ノ命

ヲ以テ平瀬ニ出ル、官兵進撃薩利アラスシテ少ク退ク、

明日官兵猶勝ニ乘シ進ミ来ル、該隊其頭上ノ山ヨリ官兵

ノ横ヲ衝キ破テ之ヲ退ケ、遂ニ元線ニ復スト云フ、已ニ

シテ報アリ、官兵山野ニ迫ルト、乃チ兵ヲ出シテ之ヲ防カ

シムル、利アラス、同日逸見十郎太自ラ兵ヲ率ヒ本道ヨ

リ直チニ山野ニ進撃、熊本隊ハ奇兵トナリ遠ノ原ヨリ間

道ヲ経、其裏ヲ衝ク、大ニ之ヲ敗ル、進撃三里余深川ニ

至ル、官兵山ニ拠リ備ヲ堅メ守ル、熊本四番中隊薩兵ト与

ニ本道ノ左翼トナリ連々進撃、半隊長城平八丸ニ中リテ

死ス、已ニシテ本道薩兵敗ル、ヲ以テ官兵我後ロニ出ル、

中隊長深野一三・小隊長芦村準与ニ隊下ヲ指揮シ奮戦切

リ入り遂ニ本道ヲ元線ニ復ス、時ニ五番中隊ハ右手大平

ノ間道ニ進ム、官兵不意ニ頭上ノ山ヨリ銃ヲ連発ス、中

隊長牧柴謙十郎・中村信雄急ニ兵ヲ指揮シ以テ之ニ応ス、

三番中隊長佐々友房ハ隊下ヲ率ヒ直チニ攻撃已ニ一嶺ヲ

抜ク、熊本協同隊モ亦來テ与ニ之ヲ助ク、絶險頗ル運送

ニ苦ム、弾丸雨注、斃者転シテ千仞ノ壑ニ落、薩兵難色アリ各事ニ託シテ退ク、熊本隊ノ如キハ愈奮戰スル一昼夜、稍ク労ルヲ以テ四番中隊代テ之ヲ守ル、猶激戦二昼夜弾薬已ニ尽ク、如何トモスル能ハス、中隊長深野一三令ヲ下シテ曰ク、宜ク台場ニ伏シ若シ敵近カハ則一声ノ下直ニ切入リ、勝敗ヲ一時ニ決スベキナリト、小隊長野田甚内丸ニ中リ磯野今彦死ヲ遂ク、其他斃ル者十余名、時ニ五番中隊ハ進ンテ官兵ノ横腹ヲ衝ント欲ス、潛ニ壑ニ從ツテ進ム、忽チ官兵ノ後ニ出ル、將ニ四番中隊ト夾ンテ之ヲ擊ントス、半隊長江口彌三重瘡ヲ負フ、猶進ム三丁余、官兵陥陥ニ拠リ備愈堅シ、因テ少ク退テ戦フ、四番隊ニ代ル幾何モナクシテ弾薬弥尽ヲ以テ遂ニ薩兵ノ嶽ニ退キ、熊本隊ハ明日守ヲ雉子山ニ転ス、居ル二三日台場ヨリ敗ル、依テ少ク退キ守ル、時二十番小隊長下河邊次郎太郎重瘡ヲ負フ、已ニシテ左翼薩兵又敗レ鬼神山（水俣市大川内）大野口薩兵破ル、ヲ以テ二番・五番中隊与（久木野・水俣市）拂ル、是ニ於テ本官（水俣市）三番右小隊長高島義恭ヲシテ隊下弾薬等ヲ奪フト云、同廿四日未明ヨリ官兵進テ矢苦嶽ニ（水俣市・水俣市）率ヒ之ヲ襲ハシム、途瘡ヲ負テ果サズ、而シテ其嶽タル、池邊吉十郎・山崎定平等敗兵ヲマトメ奮激返シ戦テ

ルヤ絶險攻ムヘカラサルヲ以テ遂ニ議ヲ決シ、三番中隊長佐々友房・四番中隊長深野一三各隊下ヲ率ヒ半夜ヨリ発シ直ニ官兵ノ本營ヲ衝至ル比ニ天已ニ明、衆皆刀ヲ揮テ研入り大ニ激戦、台場ニツヲ取ト雖トモ後援ナキヲ以テ急ニ兵ヲ旋ス、時ニ小隊長鳥井數惠丸ニ中テ斃ル、居ル八九日本道薩兵敗ル、ヲ以テ熊本隊モ亦引テ六ヶ所ヲ守ル、明日薩兵又敗ル、因テ各隊皆退テ石小地及ヒ小河内ヲ守ル、連路ヲ六ヶ所ニ通ス、同廿九日鳥帽子越・湯地方（球磨村）面皆敗ル、官兵直ニ進テ人吉ニ迫ル、淵邊某大ニ奮激刀ヲ揮テ敗兵ヲ指揮シ、自ラ衆ニ先チ奮戰丸ニ中テ死ス、竟ニ防ケ能ズ、（入吉市南端・えびの市）田野・加久藤ニ退キ守ル、十一日薩兵左翼敗ル、因テ熊本隊亦兵ヲ揚ル際官兵連々尾撃、是ニ於テ小隊長芦村準（肥後ノ人）隊下ヲ率ヒ奮然返シ戦、丸ニ中テ死ス、遂ニ守ヲ高隈山ニ転ス、十八日官兵曉霧ニ乗シ襲撃熊本隊大ニ激戦、半隊長能勢和雄重瘡ヲ負フ、官兵死傷居多、其抜可ラザルヲ察スルヤ明日三方ヨリ巨砲ヲ連発シ声雷ノ如ク、砲台尽ク崩ルト雖トモ猶砲戦一步モ退カス、而シテ夜ニ入ル、弾薬已ニ尽ルヲ以テ如何トモスル能ス、徒ニ虚声ヲ張ルノミ、廿日丑牌遂ニ敗テ大口ニ至ル、（頃迄日本半隊長安岡砲丸ニ中テ死）

之ヲ敗ル、追撃、時ニ參謀友成正雄・幹事竹内武繁太・中隊

長中村信雄重瘡ヲ負フ、小隊長眞邊元治戰歿ス、遂ニ進

薬尽ルヲ以テ退テ本庄ヲ守ル、連絡ヲ右ハ吉田・米良、左

ハ加治木・鹿兒島ニ通ス、廿五日官兵未明ヨリ本道ノ薩

兵ヲ衝ク、薩兵遂ニ敗レテ退キ熊本隊<sub>五中</sub>共ニ高田山ヲ守

ル、官兵尋テ至ル、激戦數時薩兵亦將ニ敗ントス、逸見

十郎太大ニ憤リ、自大刀ヲ揮フテ衆ヲ指揮ス、暫時支ユ

ルト雖トモ再ヒ敗レテ横川ニ退キ僅ニ其余ス處十數人ヲ

下ラス、時ニ三番中隊殿レテ退ク、逸見是ヲ見テ呼ハツ

テ曰ク、公等頗クハ此ニ止マリ吾当ニ公等ト共ニ死守シ

テ以テ敵ヲ拒クヘシ、幹事古閑俊雄之ニ謂曰ク、夫官兵ノ

進ミ来ル大ニ翼ヲ左右ノ山ニ張リ夾擊、我軍ヲ鑿ニセン

トス、今左右ノ險曾テ一人ノ守兵ヲ見ズ、独リ本道ヲ守ル

果テ何ノ益アランヤ、逸見歎息シテ曰ク、事已ニ此ニ至

ル、終ニ残兵ヲ纏メテ退カントス、果シテ官兵左右ノ山

ニ縁リ夾テ追撃ス、我軍頗ル苦戦漸シテ横川ニ退ク、官

兵進来ルコト愈急ナリ、熊本隊奮戦横川ヲ支ユルコト数

刻遂ニ退キ<sub>(抜畠町)</sub>二縁ル、此日ニ番中隊長北村盛純奮戦丸ニ

中テ死ス、踊ヲ守ルコト兩日國分已敗ル、ヲ以テ全軍

退ヒテ大久保及ヒ田口ニ縁ル

<sub>月日不分明</sub>

官兵進ンテ大久保及

田口塞衝ク、薩・熊ノ兵共ニ進ンテ之ト戰フ、互勝敗ナシ  
月日不分明

薩・熊相議シテ巨砲一發ノ下共ニ進ンテ官兵ノ塞

ヲ衝ク、官兵亦進ンテ我塞ヲ衝カントス、共ニ田口ノ岡

ニ戰フ、中隊長牧柴謙十郎・太田保・幹事古閑俊雄・小

隊長可兒才八等各一中隊ヲ率ヒ共ニ進ンテ官兵ヲ破ル、

奮戦數時薩兵ト更替シ転シテ本道ヲ救ハントス、時ニ薩

兵再ヒ敗レテ田口岡ヲ退ク、此ニ於テ中隊長太田保・幹

事古閑俊雄共ニ一中隊ヲ進メ競ヒ來ル、官兵ニ抗當シ奮

激戦ス、小隊長沼田恒夫・筑紫照門・加來信門等頗ル尽

力、復ヒ官兵ヲ敗リ田口岡ヲ復ス、弾薬數箱ヲ奪ヒ取ル、

逸見十郎太大ヒニ喜ンテ曰ク、今日ノ勝チハ熊本隊ノ功

ニ在リ、琴酒數桶ヲ贈ツテ以テ軍ヲ勞フ、已ニシテ右翼ノ

薩兵報知ノ過リヲ以テ遂ニ戰カハズシテ潰エ走ル、此ヲ

以テ薩・熊全軍ノ敗トナリ全軍退ヒテ霧島ニヨル

夜ニ入りテ退ク、互ニ勝敗ナシ<sub>月日不分明</sub>、官兵進ンテ熊本ノ

守塞ヲ突ク、此日五番尤モ苦戦、即夜議アリテ<sub>(財部町)</sub>十文字ニ

退ク、初メ熊本ノ守リ菖蒲谷ニ定ルヤ<sub>月日不分明</sub>兩翼已ニ空虚ニ

シテ僅カニ本道ヲ扼ハル耳、依テ數逸見十郎太<sub>(庄内)</sub>ニ談

シ両翼ニ兵ヲ出サンコトヲ議ス、逸見聴カズ更ニ別府九郎<sup>(財部)</sup>ニ謀ル、別府亦兵ヲ出サス、此ニ於テ中隊長牧柴誠十郎・太田保・幹事古閑俊雄・小隊長可兒才八相共ニ議シテ曰ク、夫レ両翼ヲ虚フシテ特リ、本道ヲ守ルハ恰モ物ヲ以テ無底ノ囊ニ入ル、カ如シ、何ヲ以テカ相支ユルコトヲ得ンヤ、宜ク速ニ退ヒテ薩兵ト連絡相通シ以テ後図ヲナスヘン、議遂ニ一決シ其田ヲ薩ノ本営ニ通シ兵ヲ纏メテ以テ該地ヲ退ク<sup>(月日不分明)</sup>、官兵進シテ十文字ヲ衝ク、熊本隊奮戦數時少シク退テ十文字ヲ与フ、官兵勝ニ乗シテ進来ル、熊本隊返戦フ、再ヒ之ヲ敗り進撃數丁、終ニ進ンテ之ヲ元線ニ復ス、已ニシテ鹿兒島方面モ敗レ國分・福山等ニ退ク、連絡ヲ綾及ヒ<sup>(須木)</sup>杉・米良等ニ通ス、廿九日官兵軍艦ヨリ志布子<sup>(志)</sup>ニ上ル、因テ村田新八・池上四郎自ラ兵ヲ率ヒ往テ之ヲ擊ツ、官兵為メニ百引<sup>(舞北町)</sup>・市成ニ巡ル、村田等之ヲ伺知リ枚ヲ含ミ潛ニ退テ之ヲ包ミ各銃丸一發ノ下、刀ヲ揮テ切り入り大ニ之ヲ敗リ連々進テ轎重病院ヲ衝ク、官兵散乱、銃器・弾薬若干ヲ捨テ走ル、薩兵一人ノ死傷ナシト云、廿二日議アリテ熊本隊守リ庄内ノ左翼ニ転ス、廿四日官兵曉霧ニ乗シ庄内本道薩兵ノ守塞ヲ襲フ、薩兵驗ヲ頼ンテ守ヲ怠リ遂ニ大ニ敗レテ庄内ヲ

退ク、此日寶<sup>(金原)</sup>邊ノ薩兵モ亦大ニ敗レテ都ノ城ニヨラントス、此ニ於テ熊本隊モ亦退テ都ノ城ニ依ル、官兵勝ニ乘シテ尾撃、本道ヨリ進ム、二番中隊長太田保・三番中隊長佐々友房各一中隊ヲ率ヒ抜刀、庄内本道ヲ突出ス、小隊長加來信門・分隊長高橋長秋・高橋俊次等先登ス、両隊奮戦官兵數人ヲ斃ス、遂ニ後援ナキヲ以テ退テ<sup>(山ノ口町)</sup>ニヨル、廿八日巳牌ヨリ官兵清武ニ進撃之ヲ破ル、逸見十郎太憤激自ラ衆ニ先チ奮戦元線ニ復ス、已ニシテ官兵騎馬隊ヲ以テ縦横馳突、薩兵為メニ敗レテ宮崎ニ退キ河ヲ夾守ル、此日時雨<sup>(宮崎市)</sup>方面モ亦タ木島清・中島武彦頗ル激戦防禦ヲナスト雖トモ、左翼敗ル、ヲ以テ夜ニ入り引テ倉岡ヲ守ル、此日五番小隊長水野治平弾丸ニ当リテ斃ル、是ヨリ連々敗走ニ退テ<sup>(日向市)</sup>美々津ニヨル、是ヨリ先キ高鍋ノ敗レニ三番中隊長佐々友房重濱ヲ負フ、幹事小野長四郎其他分隊長三名一時ニ戰歿ス<sup>(月日不分明)</sup>、桐野利秋熊本隊ニ託シ以テ海岸細島ヲ守ラシム、該地固至テ閑静、数日ノ勞ヲ慰スルニ足レリ、時ニ一番小隊長可兒才八・二番中隊長太田保・三番中隊ノ幹事古閑俊雄・五番中隊長牧柴誠十郎共ニ相議シテ曰ク、夫レ近頃ノ敗報アルヤ日一日ヨリ甚シク遂ニ以テ今日ノ勢ヒヲナセリ、逡巡如此ニシ

テ久シキヲ亘ラハ勝算敢テ万ヲ期ス可ラス、宜シク速  
カニ兵ヲ豊後口ニ転シ、熊本はカ先鋒トナリ以テ血路ヲ  
開キ決然成敗ヲ一時ニ決スヘシ、議已ニ是ニ決シ以テ薩  
ノ本宮ニ迫ル、総督桐野利秋・村田新八等モ亦タ大ヒニ  
之ヲ好シ直ニ豊後進発ヲ許ス、同日未明熊本隊ヲ纏メテ  
延岡ニ到ル、即夜池上四郎等ト相謀リ翌日熊田<sup>(北川町)</sup>ニ向テ發  
セントス、忽チ夜半報アリ美々津<sup>(白向市)</sup>已ニ敗レ官兵將<sup>(白向市)</sup>二新町ニ來レリト、此ニ於テ豊後行ヲ転シ兵ヲ返シテ新町ヲ衝  
カントス、夜半直ニ兵ヲ発、然モ天未夕明ケス、小隊長  
可兒才八・幹事古閑俊雄各一中隊ヲ纏メ延岡ニ屯ロス、  
奇兵聯隊長野村忍助單身該地ニ馳セ来リ可兒才八・古閑  
俊雄等ニ説テ曰ク、吾聞兵ノ要ハ其思ハサル處ニ出テ、  
其備エサル處ニ趣ク、即チ桶狭間ノ役タルヤ織公ノ今川  
氏ヲ敗ル、皆此ヲ以テ也、今東重新ニ勝チテ新町ニ至ル、  
恐ラクハ其備未タ全カラサルノ處アル可シ、公等願クハ  
速ニ該地ニ至リ急ニ擊ツテ之ヲ退クヘシ、兩人直チニ  
兵ヲ発シ二番・四番・五番継至ル、即日遂ニ門川ニ至リ  
桐野利秋ト相謀リ兵ヲ転シテ田淵方面ヲ守ル、居ルコト  
二三日本道已ニ敗レ<sup>(頃在「延岡」改ル)小隊長可兒才八重瀬ヲ負</sup>全軍退ヒテ延岡ニヨル、幾何モナク  
シテ又敗レテ<sup>(北川町)</sup>長井村ニ退ク、是ニ於テ西郷隆盛事ノ已ニ

ナラサルヲ察シ、一快戦ヲナシ一方ヲ擊破シ以テ勝ヲ万  
一二取ント欲ルヤ尽ク豊後路ノ兵ヲ揚ケ鋒ヲ一ニシテ直  
ニ延岡ヲ衝ク、西郷・桐野・村田等皆出テ兵ヲ指揮ス、  
兵氣為メニ奮、頗ル激戦、午牌ニ及ンテ遂ニ左翼ヨリ敗  
ル、是ニ於テ熊本各隊長本宮<sup>(熊本)</sup>ニ会シ相議シテ曰ク、天下  
下ノ事已ニ定レリ、決然一快戦ヲナシ腕力ノ有処縱横奮  
戦骸骨原野ニ暴サン、如シ千万ノ一モ天命ノ未タ尽サル  
有ラハ則チ宣ク熊本ノ虚ヲ衝キ抜テ之ニ拠リ、柳・米・  
佐賀ヲ扇動シ直ニ馬關ニ渡リ山陽・山陰ヲ火ノ如ク掠メ、  
席ノ如ク巻キ、以テ京師ニ出ント、薩本宮モ亦此議ニ從  
フ、与ニ共ニセンコトヲ約ス、期ニ及ンテ薩ノ議変ス、往  
復ノ間天明ル、因テ熊本隊モ亦異議ヲ發スルモノ多シ、  
遂ニ果サズ、此ニ至テ策謀已ニ窮ル、因テ熊本隊ノ如キ  
相議シテ曰、事茲ニ至リ尽ク割腹死ニ就ハ、則勢西郷ノ  
為メニ力ヲ尽スニ似タリ、焉ソ赤心報國ノ誠ヲシテ一タ  
ビ

天聴ニ達セシムルヲ得ンヤ、実ニ千載ノ遺憾宣シク一タ  
ヒ膝ヲ法庭ニ屈シ、詳ニ素懐ヲ述べ、而シテ後、隊下數  
百人ノ命ニ代リ從容刑典ニ處セラルヘシト、即チ其議ヲ  
薩本宮ニ達シ、尽ク皆虜ニ就ク、

明治十一年三月二日

右御下問ニ付陳述仕候也、

熊本県下肥後国飽田郡古京町元士族

除族ノ上懲役五年 岩間小十郎(押印)○

熊本県下肥後国飽田郡京町元士族

前同断 牧柴謙十郎(押印)○

前同断山崎元士族

前同断 深野一三(押印)○

前同断訖摩郡神水村元士族

前同断 太田保(押印)○

前同断 鮎田郡鷹匠小路元士族

前同断 古閑俊雄(押印)○

前同断坪井元士族

前同断三年 高島義恭(押印)○

(中表紙)

明治十年九州戦争記 中津

一 筑摩宗太郎外五名連署上申書

始メ西郷隆盛・篠原國幹・桐野利秋等大兵ヲ発シ熊本ニ入ルヤ、該県士皆之ニ応ス、遂ニ与ニ熊本城ヲ開ム、然レ共城壁固シテ拔サルコト已ニ三十日、諸道ノ官軍城兵ヲ救ハント欲シ益進ム、薩兵之ヲ山鹿・田原ニ禦ク、此時ニ当テ報アリ、佐賀・福岡ノ士皆隊兵ニ応スト、於是我旧藩士増田宋太郎ナル者、素ヨリ桐野利秋ト水魚ノ交アリ、因テ詳ニ刺客云々ノ一条ヲ説キ断然薩兵ニ投シ与ニ京師ニ上リ 鳳闕ヲ衛ル可シ、苟モ臣子タル者豈手ヲ袖ニシテ傍観スヘケンヤト、即夜同志ヲ中津豊後町松野屋ニ会ス、刀ヲ佩ヒ銃器ヲ携ヘ集ル者殆ント六十余名、実ニ明治十年第三月三十一日ノ夜也、予メ數名ヲ分チ廣津・宮永・鍛矢堂等ノ口々ニ要シテ諸方ニ報知スル者ヲ捕ヘシム、夜將ニ十二時ナラントス、又數十名ヲ分ツテ支庁・警察及ヒ諸官員ノ私宅ヲ襲フテ、十等出仕堀兼某ヲ斬リ、支庁用務所ニ在ル所ノ銃器・弾薬ヲ奪ヒ遂ニ放火ス、因テ大門外ニ於テ人員ヲ点検ス、時ニ米山秀雄・戸倉千太郎等鏑矢堂口ニ於テ二等属馬淵清純ヲ斬リ首級ヲ提テ來リ会ス、是ニ於テ相議シテ曰ク、聞ク官軍内ノ牧ニ在リト、是ヨリ直チニ大分城ヲ衝ハ、則其兵必ス驚愕之ニ應セン、時ニ道ヲ油布院・湯ノ平ニ取ラハ容易ク肥後

ユフイン (湯布院町)

地ノ薩兵ニ合スルヲ得ント、即チ鏃矢堂・四日市ニ到レバ夜已ニ明ク、

四月一日立石ニ到ル、於是大分ノ景況ヲ察スルニ、官兵

高崎(大分市)ノ險ニ要スト、今夜兵ヲ二隊ニ分チ、一ハ海路ヨリ急ニ大分ヲ衝キ、一ハ本道ヨリ進ミ前後夾擊セハ其兵戦

ハスシテ走ルベシト、黃昏立石ヲ發シ鹿鳴声越(カナゴエコシ)シ、

一ハ後藤純平・梅谷安良ヲ始トシ日出(日出町)ヨリ直チニ海路大

分ニ迫ル、一ハ増田宋太郎ヲ隊長トシテ本道豊岡別府ヨ

リ進ム、後藤等已ニ上陸シ高崎山ノ背ニ出テ其後ヨリ急

ニ砲擊ス、官兵狼狽戰ハスシテ走ル、本道ノ兵又砲声ヲ

聞テ急ニ之ニ会スレハ夜已ニ明ク、二日將ニ大分城ニ迫

ラントス、時ニ報アリ、応援ノ兵馳セ来ルト、衆大ニ喜

フ、濱(大分市)ノ市ニ到ル頃ニ來レバ即チ同県士筑摩宗太郎等及

ヒ島原ノ旧藩士等凡十八名ナリ、始メ増田等ノ事ヲ發ス

ルヤ、予メ書ヲ筑摩等ノ旧友ニ投ス、是ヲ以テ同志ヲ語

ラヒ急ニ高田ヲ發シ車ヲ馳テ以テ來会ス、遂ニ与ニ城下

ニ迫ル、官兵外郭ヨリ急ニ砲擊ス、我兵散兵ヲ以テ之ニ

応ス、勝敗未タ決ズ、火ヲ城下ニ放ツ、官兵退テ城ニ拠

ル、衆先ヲ争テ進ム、然レトモ彈薬ノ乏シキヲ慮リ且ツ

日暮ル、ヲ以テ兵ヲ纏メ別府ニ退ク、

三日同所ヲ發シ道ヲ転シ油布院ヲ経テ湯ノ平ニ宿ス、四日道ヲ小國ニ取り市ノ原ニ到ル頃ニ日將ニ暮ル、土民

ヲシテ炬火ヲ取ラシメ將ニ進シテ畠邊越ニ到ラントス、

ノ薩兵ニ対スト、衆為ニ振フ、急ニ其後ヲ襲ント欲ス、

各刀ヲ抜キ鎗ヲ揮テ進ム、至レハ則チ寂焉トシテ更二人

影ヲ見ス夜亦明ク、五日終ニ二重峠ノ薩兵ニ会スルヲ得

タリ、則チ大津街ニ宿シ、各連日ノ疲ヲ息ハシム、増田・

梅谷等ハ熊本ニ本官ニ到リ西郷・桐野等ニ面謁事

由ヲ陳スト云フ、此時ニ当テ川尻・熊本・植木・鳥ノ巣・

隈府等ノ諸方昼夜ヲ分タズ砲声天地ヲ轟ス、実ニ希代ノ

大戦ト謂ツベシ、此ニ於テ隊伍ヲ編整シ増田宋太郎ヲ隊

長トシ中津隊ト称ス、此ニ止ルコト三日間ニシテ川尻ノ

敗アリ、已ニシテ熊本城ノ圍ヲ解クヤ隈府口モ亦敗ル、

官兵住吉ニ迫リ時々哨兵ヲ杉水ニ出ス、

四月十日二ノ四小隊ト共ニ杉水ヲ襲フ、官兵退ク、我兵

亦要地ナキヲ以テ退テ大谷ヲ保ツ(大津町)ル十丁余、諸方ノ薩兵多

ク大津ニ集ル殆ント三千余、

十四日未明薩兵我隊ニ代ツテ大谷ヲ守ル、我兵予メ官兵

ノ櫻山ヨリ二重峠ニ迫ルヲ知ル、即チ兵ヲ分ツテ二隊ト

ナシ増田宋太郎右半隊ヲ率ヒテ己ニ二重峠ニ到ル、薩ノ小隊長川上某ニ四小隊ヲ率テ來リ会ス、共ニ与ニ進ム、途官兵ニ逢フ、因テ大ニ櫻山ニ戰フ、辰ヨリ西ニ到ル、川上戰死ス、凡死傷十七八名、薩人佐藤三二等大ニ奮戦シテ官兵ヲ退ク、此日大谷口モ亦一度ヒ官兵ノ為メニ陥ラルト雖トモ、衆皆奮然銃器ヲ擲チ刀ヲ揮テ進ミ首ヲ斬ルコト六十余級、終ニ元線ニ復ス、十五日二ノ四小隊ト我右半隊ト共ニ進ミニ二重峠ノ中ノ小屋ニ到リ各隊ト共ニ之ヲ守ル、

十九日未明ヨリ官兵大進撃、大津・櫻山等頗ル苦戦、薩人池水某ニノ四小隊ト我左半隊ヲ率テ中ノ小屋ヲ下リ、横ニ櫻山ノ官兵ヲ衝ク、池水某丸ニ中ツテ死ス、己ニシテ大津敗レ我後ヲ絶ツ、即夜引テ矢部ニ退ク、居ルコト四日隊伍ヲ改編ス、各同所ヲ発シ(水上村) (鷺前町)胡麻山・奈須越等連々深山幽谷ヲ抜渉シ終ニ江代ノ湯ノ前ニ到ル、止ルコト二三日、桐野利秋独リ当所ニ在リ、是ヨリ兵ヲ農後路ニ出スヘント議ヲ定メ則チ兵ヲ二道ニ分チ、一ハ野村忍助ヲシテ奇兵廿一中隊ヲ率ヒテ日州路ニ出テ、延岡城ヲ根拠トシ農後路ニ出シ、一ハ立木七之丞ヲシテ正義二中隊・奇兵十六番中隊ト我中津隊ヲ先鋒トシテ即チ湯ノ前ヲ発シ

(椎葉村)奈須越ヨリ多加良木ヲ経テ坂本ニ到ル、官兵ノ鏡山ニ在ルヲ聞キ急ニ兵ヲ室野ニ進メ砲台ヲ男山ニ築キ以テ各隊ノ至ルヲ待ツ、各隊尋テ至ル、共ニ三田井ニ到リ大鹽越ヲ戍ル、

五月廿二日馬見原進撃ノ議ヲ以テ同処ヲ引揚ケ復室野ニ会ス、

二十三日中隊長小濱某相議シテ奇兵十六番中隊・正義六番中隊・同七番中隊ト我中津隊ノ凡七百余名分ツテ三隊トナシ、一ハ本道、一ハ岩神ノ間道ヨリ、一ハ山下ヨリ、急ニ曉霧ニ乘シ巖石ヲ攀チ各拔刀ニテ直チニ鏡山ノ頂ニ築ク官兵ノ砲台ヲ襲テ立ニ數名ヲ斃ス、各隊皆奮戦砲台ヲ落スコト凡十數ヶ所、將ニ馬見原ヲ衝カントス、官兵能ク防ケ、砲戦終日我兵弾薬ノ乏シキヲ以テ復退テ男山ヲ守ル、此役ヤ死傷二十余名、我中津隊死傷五名、

五月廿五日本營ノ命ヲ以テ奇兵十六番中隊・正義七番中隊ト与ニ三田井ヲ守リ、正義六番中隊ヲ以テ坂本及ビ檜ノ木原ヲ守リ、我中津隊ヲ以テ男山ヲ守ラシム、居ルコト十余日ニシテ官兵未明ヨリ我男山ヲ襲フ、我兵能ク防ケ、砲戦終日日暮ルヲ以テ官兵亦鏡山ニ退ク、翌日官兵復来ル、終ニ擊テ之ヲ退ク、己ニシテ報アリ、三田井ノ

守敗レ悉ク七折ニ退クト、終ニ各隊ト共ニ七ツツ山ニ退キ

(日之影町)  
諸聚村

数ヶ所ニ戌ヲ安キ居ルコト五日、亦同所ヲ発シ七折ノ大  
之影町

楠村ニ到ル、奇兵十六番中隊・同二十一番中隊ト共ニ要

所ニ拠テ戌ルコト凡廿日間、官兵亦敢テ襲来セス、只互

ニ哨兵ヲ出シテ其景況ヲ探ル耳、

六月廿一日豊後口進撃ノ議ニ因テ正義隊ヲシテ代リ守ラ

シメ奇兵十六番・廿一番中隊ト我中津隊ト共ニ延岡ニ会

ス、同廿二日未明ヨリ各隊ヲシテ城内ニ集合セシム、堂

々整列、野村忍助自ラ兵ヲ率テ同地ヲ發ス、總兵千四百

余熊田<sup>(北川町)</sup>ニ到ル、翌廿四日議ヲ定メ兵ヲ四道ニ分ソ、一ハ本

道、一ハ水ヶ谷口、一ハ宗太郎越、一ハ間道<sup>(宇佐町)</sup>赤松谷ヨリ

急ニ重岡ニ迫ラシム、殊ニ此間道ハ奇兵廿一番・同十二

番ヲ以テ中軍トシ、十六番ヲ以テ応援隊トナシ我中津隊

ヲ以テ先鋒トナス、即日黄昏ヨリ発シ土民ヲシテ郷道ヲ

ナサシメ將ニ本道・間道ノ二道ヨリ発セントス、時ニ本

道ノ薩兵半途ニシテ驚愕散乱空シク潰エテ退ントス、我

中津隊ノ如キ皆大ニ憤然各刀ヲ拔テ呼テ曰、未戦ハスシ

テ退ク、何ソ夫レ怯ナルヤ、正ニ退ク者ハ斬ラント、直

チニ之ヲ追返エシ即チ兵士某ヲ本營ニ遣シ本道ノ薩兵云

々云ハシメテ曰ク、我隊ノ如キハ死又恒ニ期ス、敢テ決

然進マサルヲ得スト、即チ間道赤松谷ニ向フ、奇兵十二・

同廿二番・同十六番之ニ尋ク、之レニ依テ野村忍助自ラ

本道ノ兵ヲ督シテ進ム、時ニ梅雨連リニ降リ闇黒咫尺ヲ

弁セズ、我兵茂林ヲ潛伏シ漸ク官兵ノ台場ニ近ヅクヲ得

タリ、時ニ天已ニ明ク、我兵熟々其地景ヲ廻見スルニ山

上多數ノ台場ヲ築キ守衛大ヒニ嚴ナルガ如シ、又山下ニ

哨兵所ヲ設ケ兵士一名ノ未タ我兵ノ襲フヲ知ラス、空シ

ク銃器ヲ横タエテ眠ルアリ、我兵之ヲ擒セントス、番兵

駭キ覺テ逃ケ走ル、我兵之ヲ狙擊スト雖トモ遂ニ斃スコ

トヲ得ス、直チニ一時鬨声ヲ挙ケ砲戰數刻、梅谷藤次郎

ナル者奮然抜刀衆ニ先チ斜ニ山上ニ登ラントス、留川良

吉亦鎗ヲ揮テ進ム、衆皆之ニ尋ク、遂ニ進テ砲台五ヶ所

ヲ奪ヒ官兵數名ヲ斃ス、直チニ重岡ニ迫ラントス、諸道

ノ薩兵大ニ奮戰利ヲ得ルト雖トモ死傷頗ル多ク且弾薬ノ

続カサルヲ以テ、不得巳ムコトヲ退テ<sup>(北川町)</sup>松瀬ヲ守ル、此役ヤ

我隊死傷十七名、此ニ於テ我中津隊ヲ以テ奇兵本部附斥

候二番隊ト称ス、復代ツテ<sup>(義道、宗太郎等)</sup>ニブエヲ守ル、二日間ニシ

テ野村等ノ議ニ依リ一旦兵ヲ熊田ヘ返シ更ニ進ンテ水ヶ

谷ヲ衝クノ報アリ、因テ兵ヲ熊田エ返シ同処ヨリ道ヲハ

戸村ニ取リ八戸山ニ到ル、此日前軍・後軍等総テ十中隊

ト共ニ梓峠ヲ衝ントス、天已ニ明ケ遂ニ其策ヲ遂ゲズ、即日空シク谷中ニ潜伏シ以テ日ノ暮ル、ヲ待ツ、此夜我隊ハ本營ト共ニ鶏鳴ヨリ進ム、途ニシテ報アリ、前軍已ニ進ンテ接戦シ官兵ノ砲台ヲ奪ヒ遂ニ梓峠ヲ取ルト、我隊奮然即チ進ンテ梓峠ニ到ル、時ニ官兵尚水ヶ谷ニ在ツテ防戦ス、即チ兵ヲ分ツテ一ハ黒土口、一ハ境山ニ縁ラシム、官兵終ニ支ユルコト能ス民家ヲ放火シテ黒土ニ退ソク、遂ニ該地ニ台場ヲ築キ固守防戦ス、是ニ於テ我中津隊ヲシテ代ツテ境山ヲ守ラシメ、五中隊ヲ以テ勢ニ乗シテ直チニ黒土ニ迫ラシム、薩人佐藤三二等曰刃ヲ閃カシ衆ヲ勵シテ進ム、弾丸兩ヨリモ繁シ、黒土ハ重岡ノ要地ニシテ官兵ノ台場ヲ距ル六七丁、進路平坦ニシテ甚進ムニ弁ナラス、是ニ於テ台場ヲ築テ相対ス、居ルコト數日間ニシテ協同隊ヲシテ我隊ニ代ツテ境山ヲ守ラシメ、我中津隊ヲ以テ熊田ヨリ三河内歌糸村ニ至ラシム、三河内ハ豊後佐伯ノ本道ニシテ各処ノ山上ニ砲台ヲ築キ之ヲ成ルコト二日間、是ニ於テ議ヲ定メ奇兵十九番・二十二番中隊・宮崎隊・我中津隊等凡四百余名ヲ以テ市尾・梅木ノ官兵ヲ襲ヒ少シク利ヲ得ルト雖トモ、遂ニ退テ元線ニ還リ居ルコト十四日、是ノ時我中津隊ヲ以テ救応一番隊

ト称シ、即チ増田宗太郎ヲ以テ奇兵・救応總軍監トナス、八月一日土民アリ来ツテ明日官兵進撃ノ由ヲ告ク、因テ其旨ヲ各隊エ通シ予メ其來ルヲ待ツ、二日官兵果シテ未明ヨリ曉霧ニ乗シテ來リ襲フ、我兵能ク防ク、独リ宮崎隊ハ止ツテ梅木口ノ山上ヲ戍ル、官兵小富士山ヨリ直チニ之ヲ進撃ス、宮崎隊多クハ和銃ヲ用ヒ、殊ニ砲戦ニ弁ナラス、遂ニ退テ高尾山ヲ保ツ、官兵勝ニ乗シテ進ム、其隊頗ル苦戦、時ニ梅谷藤次郎一分隊ヲ率ヒテ応援トシテ高尾山ニ趣ク、砲戦終日官兵ヲ斃ス者殆ント数十名、然レトモ弾薬皆尽キ高尾山ヲ捨テ、退ク、我隊ノ如キハ既ニ其後エヲ絶レ遂ニ已ヲ得スシテ各隊ト共ニ熊ノ江及ヒ總別當等ニ退ク、即チ各方ヲ巡見シ其要地ヲ撰ンテ砲台ヲ築テ以テ之ヲ成ル、即チ我隊ヲ以テ熊ノ江ノ山上ヲ守ラシム、海岸ヲ距ルコト凡ソ十五丁余、右ハ赤江洋ヲ受ケ左ニ四州ヲ望ミ眺望絶景、山下ハ即チ古江港ニシテ軍艦時々來ソテ我台場ヲ砲撃ス、我兵応セス、官兵又古江村ニ來ソテ土民ヲ脅迫ス、我隊及ヒ奇兵十六番・振武隊等各十数名ヲ撰ンテ竊カニ其来ルヲ窺ヒ不意ニ襲フテ數名ヲ斃ス、此時ヤ諸方ノ薩兵連々敗走退テ延岡ニ集ル、已ニシテ延岡モ亦敗レ長井村ニ退ク、

八月十四日各隊ト共ニ該地ヲ退ソキ、即チ長井村ニ会ス、

官兵益迫ル、已ニシテ豊後口ノ本道亦敗レ、衆皆奮戰梅

谷藤次郎等多ク戦歿ス、遂ニ或ハ虜ニ就キ残兵僅カニ西

郷等ニ従ツテ一方ヲ突破シ道ヲ米良ニ取り鹿児島ニ出ル

ト云フ、

明治十一年三月二日

右御下問ニ付陳述仕候也、

大分県豊前国下毛郡中津町元士族

除族ノ上懲役拾年 筑摩宗太郎○  
(押印)

大分県豊後国速見郡猪尾村元士族

除族ノ上懲役五年 阿部省吾○  
(押印)

大分県豊後国直入郡久住村元士族

除族ノ上懲役五年 佐藤龜四郎○  
(押印)

大分県豊後国速見郡日出村元士族

除族ノ上懲役五年 山本欽治○  
(押印)

大分県豊前国下毛郡砥瀬村元士族

除族ノ上懲役三年 戸倉千太郎○  
(押印)

大分県豊前国下毛郡中津町元士族

除族ノ上懲役二年 久保益良○  
(押印)

除族ノ上懲役二年 久保益良○  
(押印)

右ハ昨十年国事犯罪ニ依て三年懲役ニ被処、折節重病ニ罹リ居、未タ御発配不相成候処、今般該事ノ顛末詳悉筆記セシメ可差出旨御達ニ付、早速該家ニ出張、右御達ノ趣相示シ候得共、病勢日ニ増シ相重リ、別紙診断書之通

(表紙)

## 西南之役懲役人筆記 十二 熊本県

(中表紙)

(未)  
「第拾五号」

懲役人筆記

熊本県

### 一 那須拙速病状申達并診斷書

熊本県第十四大区四小区

球磨郡人吉原ノ城居住

懲役人

那須拙速

七十二年

右ハ昨十年国事犯罪ニ依て三年懲役ニ被処、折節重病ニ罹リ居、未タ御発配不相成候処、今般該事ノ顛末詳悉筆

記セシメ可差出旨御達ニ付、早速該家ニ出張、右御達ノ趣相示シ候得共、病勢日ニ増シ相重リ、別紙診断書之通

リ一切言語不弁ニ付、何分書取モ出来兼候ニ付、則医師診断書相添ヘ、此段御達申上候事、

人吉警察署詰

明治十一年二月廿一日 十等警部 内田友行

熊本県権令富岡敬明殿

診断書

那須拙速  
〔十二年〕  
〔印〕

右者脳出血症ニ罹リ追々診断書差上候通危険、近日ニ至テハ四肢不随意、言語失順、屎尿之通利モ不覺ニ有之候程ニテ、何分予後危難ニ候也、

明治十一年二月十六日 人吉公立病院

〔印文、人吉公立病院〕

## 二 新政英治郎上申書

戰地形状書

一 私儀明治十年二月廿日麻生敬治ト申者誘ニ因て同伴保田窪神社之様參り候處、同社エハ凡ソ四五拾名モ集合仕居、隊長ハ宮崎八郎・平川格次郎等ニテ、翌廿一日夜宮崎八郎忽兵ヲ率ヒ川尻町ニ至リ止宿、翌廿二日朝

未明薩兵之内ニ混シ同町ヲ発シ花岡山ヨリ始戦、午後二時頃ロ迄攻城、賊兵大ニ苦戦ス、午後五時頃ロヨリ島崎ニ至リ野ニ伏シ居、夜ニ入引揚、新村ト欽申処ニ至暫時休足、同夜夫レヨリ花岡山ヲ繞リ春日村ニ至リ候處、同隊崎村某ヨリ本隊ハ本庄村エ大概纏居候ニ付、同所エ至リ合集致シ候様申聞候ニ付、直ニ本庄村ノ様至候處、則本隊休足致居候、廿二日ノ戰争ニ我隊幾名之死傷有ルヤ未タ相知レ不申、野瀬兄弟・硯河五六郎ノ三名ハ全ク戦死致候ト相分リ、夫レヨリ平川格次郎惣兵ヲ率ヒ出京町小学校之様至リ、該校ニ於テ隊名ヲ協同隊ト号ス、夫レヨリ石神神社ノ様至一泊、夫レヨリ春日村之様參候處、本隊宿當ト記シ有之候ニ付同所エ止宿、半隊ハ隊長平川格次郎率ヒ山鹿口ノ様出兵ス、残半隊滯宿仕居候内、二月廿八日頃ロ日覚不申、本營ヨリ隊長宮崎八郎・轄重安藤維ヨリ矢部地方エ県官莫大ノ官金ヲ所持致シ居候由ニ付、探索自身列三名エ申付候ニ付、則チ罷越シ矢部〔天都町〕和田某宅エ預ケ有金弐千円且〔天都町〕猿渡村渡邊某宅ヘ預ケ有金三万七千五百五拾円都合三万九千五百五拾円取、則チ本營エ証書ヲ添相納メ候、三月十四五日頃ロ二本樹町浦エ転營シ同十九

明治十一年二月十七日

新政英治郎(海田)

日残半隊モ山鹿口之様麻生直温兵ヲ率ヒ出兵ス、山鹿町ニテ前ニ出兵シ半隊ト合シ止宿致居候内、田原口破レ植木町ノ様退去候段報知有之ルニ因、山鹿口引揚鳥(西合志町)ノ栖村エ参リ、同所エ台場ヲ築キ数日守ヲ付居候處、未タ不戦内半隊ハ隈府町ノ様出兵、残半隊ハ四月上旬頃口隈府町エ出兵致シ、同十日頃口菊地神社ノ東方エ守ヲ付居候處、官兵ヨリ進撃午前八時頃ヨリ始戦、日没ニ至リ止戦、同夜十二時頃ニ猝ニ引揚、竹迫ノ様参、夫レヨリ鳥ノ栖村エ参候處、川尻口破レニ付木山町ノ様引揚御船町之様出兵、同所ニテ大ニ敗走、依テ矢部濱町ノ様引揚、自身儀ハ平病ニて日向延岡ノ様参リ同所ヨリ尚亦人吉ニ至リ五月廿五日帰隊、久木野山ニテ守ヲ付、六月三日官兵ヨリ進撃、右翼ヨリ破レ数百歩ヲ退キ候ニ付、我兵モ内ニ躍マレンコトヲ懼レ直チニ引退キ、本隊山手ヨリ進撃セントスルニ自身右股ニ傷ヲ蒙リ一ハ腹ニ弾丸兩所ニ受ルニ付高岡ノ様参リ、七月廿五日帰隊、其後一戦モ不仕、賊我兵ハ戦毎ニ悉ク敗走、終ニ長井村ニ於テ降伏仕候事、

右之外戦地之形状存不申候、以上、

当時懲役百日

### 三 松井正堅上申書

#### 戦地形状書

私儀強鷄姦之科ニ依リ懲役ニ被処服役中、明治十年二月鹿兒島賊徒熊本エ乱入ニ際シ、同二十二日木山町ニ於テ一時官ノ御解放ヲ受ケ即日自宅エ立帰り、其ノ後村上貞雄ヨリ強迫セラレ熊本協同隊エ入隊致居、一戦モ不致内川尻口破レ候ニ付キ木山エ惣軍引揚ケ夫ヨリ御船ノ様ニ出兵、同所エ守ヲ付ケ置候處官兵ヨリ進撃、左翼ヨリ破レ候ニ付キ、猶惣軍矢部濱町エ引揚ケ濱町ニテハ不戦惣軍人吉ノ様ニ引揚ケ、夫ヨリ官兵山野ニ守リ付ケ置キタルヲ聞テ、薩兵式拾中隊計左右翼ヲ突キ我兵ノ一中隊ハ正面ヨリ掛リ、官兵ト我兵ト戦争一時間計リ戦テ官兵ハ水俣エ退キ、翌日薩兵ト我兵ト共ニ水俣エ進撃ス、其ノ日勝敗ハ不決、其ノ日退テ深川ニ守リ付ケ置候處、翌日官兵釘野山ニ守リ付タル事ヲ聞テ薩兵ト我兵ト官兵ニ進撃ス、官兵破レテ釘野山ヨリ十丁計リノ所ニ退テ守ヲ付ケ、薩兵モ我兵モ釘野山ニ守ヲ付ケ置タル處官兵ヨリ進撃ニ

我兵破レテ我兵ハ大口ニ引揚ケ猶又大ニ味方敗走ス、其

ノ後平病ニテ戰地退キ其ノ後悉ク敗走ス、終ニ八月十八

日長井村(北川町)ニテ一同降伏仕候事、

右之外戰地之形狀存不申候、以上、

明治十一年二月十七日

當時懲役九年五十四日

松井正堅(海田)○

#### 四 田中十内上申書

##### 戰地形狀書

一私儀闘殴之科ニ依、懲役十年ニ被處服役中、明治十年  
二月鹿兒島縣賊徒熊本エ乱入、之ニ際(浦水村、熊本市)シ桑水邸ニ於テ  
一時御解放ニ相成候處、其日祖母宅工帰居候處工藤甚  
平ニ強迫セラレ熊本協同隊エ入隊致シ、夫ヨリ御船エ  
出兵戦ヒ敗走ニ付矢部濱町エ引揚、猶又人吉ニ引揚、  
釤木野表ニテ再三戰争仕、猶ヲ敗走候ニ付大口邸ニ引  
揚急応二番隊エ入隊致シ本陣付ニ相成候内、長井村ニ  
て八月十八日一同降伏仕候事、

右之外戰地之形狀存不申候、以上、

明治十一年二月十七日

當時懲役十年

田中十内(海田)○

#### 五 佐村左造上申書

##### 戰地形狀書

熊本県第二大区三小区

肥後國飽田郡高平村

平民

佐村左造

一自分儀明治十年二月逆憲ヲ企テ官兵ニ抵抗スル賊徒ニ  
与シ、同年四月十六日第四大区五小区木山町賊本陣ヘ  
罷越候處、熊本県士山崎定平(熊本隊參謀)ナル者家族人吉迄連越ノ  
依頼ヲ受ケ同月十九日ヨリ同所出発、同年五月中旬人  
吉到着、右山崎定平ヘ面会シ右家族一同同所ヘ寄留罷  
在候處、賊本陣ヨリ出頭ノ通知有之ニヨリ出頭ノ處、  
十七歳ヨリ四十歳迄ノ者都テ兵士ニ編入可致旨ニテ熊  
本武番中隊兵士ト申鑑札受取隊付罷在、夫ヨリ所々戰  
争ノ處、賊兵始末敗戦ノミニテ終ニ同年八月十七日日  
向國長井村ニ於テ一同官軍ニ降伏、同國(北川町)熊田村官軍本  
陣ヨリ旧宮崎県へ追送セラレ、同年九月二日熊本へ到

着御裁判ニ相成、明治十一年二月十二日官兵ニ抵抗ス  
ル科ニヨリ懲役三年被申付筈ノ処、情状ヲ酌量セラレ  
懲役百日被申付、當時服役罷在申候事、  
右相違不申上候、以上

明治十一年二月十七日

佐村左造○  
(捺印)

右

敗戦ノミニテ終ニ同年八月十七日向國長井村ニヨイ  
テ官軍ニ降伏シ、延岡官軍本陣ヨリ旧宮崎県へ遁送セ  
ラレ、同年同月三十日熊本ヨリ到着、御裁判ニ相成同  
年十一月廿六日官兵ニ抵抗スル科ニヨリ懲役三年被申  
付筈ノ処、情状ヲ酌量セラレ懲役百日被申付、當時服  
役罷在申候事、

六 友井 巖上申書

戰地形状書

熊本県第三大区六小区

詫摩郡本山村居住

平民清藏長男

友井 巖

戰地形状書

七 田代信利上申書

明治十一年二月十七日

友井 巖○  
(捺印)

右

一自分儀明治十一年二月逆意ヲ企テ官兵ニ抵抗スル賊徒ニ  
与シ、同年三月十五日第二大区拾小区春日村賊本當ヨ  
リ銃器・弾薬ヲ請取、同廿七日木留戰地工出張、弾薬  
方ニテ罷在、同年四月十六日賊兵一同該地引拏第四大  
区三小区御船町エ罷越、夫ヨリ馬見原通ニテ人吉エ到  
(熊本市)  
着ノ処、十七歳ヨリ四十歳迄都テ兵士ニ編入ノ旨ニテ  
熊本四番中隊兵士ト申鑑札受取、始末戰争罷在處賊兵

私儀鬪殴殺之科ニ依リ懲役終身ニ御処刑ヲ遂リ服役中、  
明治十年二月二十二日交換ニ際シ一時御解放ニ相成候間  
即日江津村ニ至リ同村ニ居住、親戚島崎忠兵衛宅ニ罷越  
(熊本市)  
二三日滞留仕、其後自宅ニ立越タル所、求ントシテ熊本  
地方ニ罷越途中ニ於テ鹿兒島軍士ヨリ差押、田崎村鹿兒  
(熊本市)  
島病院ニ被引越吟味ヲ受ル処、懲役人之輩各所ニ放火ス

疑ヲ以テ、已斬討被為仕所、上野嘉衛門成モノ情ヲ以テ

助命被為処、直ニ熊本土族河部津治成者進シテ幸ト薩軍  
(善等)之儀拳ニ当ル折柄、方向之為鎮撫党ニ加ル由進メヲ受、

右ニ組シ同廿五日春竹鎮撫林政八之党ニ入り所々巡回仕

候処、四月十二日熊本本陣ヨリ頼ニ依テ中ノ瀬ニ出張仕、

同十四日河尻破ニ依テ一戦仕敗走ニテ直ニ引揚、木山町

ニ於テ兵集メ、同十八日御船ニ於テ官兵之進撃ニ依テ大

ニ敗走仕直ニ引揚、矢部濱町ニ於テ兵集リ、尚又(大部町)男成迄

引退同所ニ於テ麥姓、依テ熊本五番中隊ト改メ、牧柴謙

十郎ヲ中隊長ト仕、水野次平ヲ小隊長ト仕、杉原芝平・加

藤民七郎ヲ半隊長ト仕、吉田傳太・西澤文藏ヲ分隊長ト

仕、猿木五良八・林政八・石原保茂ヲ監事ト仕、右麥姓

之後地方引揚人吉ニ本營ヲ定メ、其砌平病ニ依テ當分休

兵中、官兵之進撃ニ依テ敗走、同所破、忽チ(えびの市)加久藤ト申

所ニ引退キ尚又高熊山ニ退キ、同所ニ於テ一戦致シ、然

ニ尚敗走仕、依テ引揚、横川ト申所ニテ尚又病ニ罹リ平

病院ニ入、折伏戦争毎ニ敗走仕、依各所ヲ引揚ケ延岡和(金剛市川島)

田越ト申所ニ於テ快氣仕、此所ニテ官兵大進撃、尚敗走

仕候故同士集テ長井村ニ於テ降伏仕候事、

右之外戦地之形状存不申候、以上、

共、自身儀ハ決て左様ノ儀不仕ト相答、細田直部ヲ招キ

明治十一年二月二十日

當時懲役終身

田代信利(海印)○

## 八 栗原 繁上申書

### 戰地形状書

私儀明治六年二月十九日強盜之科ニ依リ懲役十年ニ被処

服役中、明治十年二月薩賊乱入ニ付、木山町ニ於テ一時

御解放ニ相成候間、細田直部同伴熊本之様參リ途中落日

ニ及ヒ候ニ付、何方成共一泊可仕ト存候得共モ騒動ニ付

宿等モ無御座、因て熊本近辺之神社エ一宿仕、然ル処細

田直部ヨリ當所ニテハ物験ノ砌ニ付紛敷有之、依テ翌朝

出京町(マヤ)之參居候處、途中ニテ當県士細田直部兼て知員シ

者ヨリ細田直部エ此節薩兵熊本エ來ルニ付、當県士凡千

五百人計リモ出京町往成院工集合致居候ニ付、冀望可致

候様相誘タルニ付、細田直部ハ直ニ同意仕、私ハ相断、夫

ヨリ同人ト別レ出京町ヲ通行候砌、薩兵ヨリ奸者之嫌疑

ヲ入レ直ニ捕縛致シ薩兵宿官ニ放火致ス抔ト尋問仕候得

同人エ可様ノ嫌疑ヲ受候ト相處候處、同人ヨリ申開放免

(表紙)

仕候ニ付、自身儀ハ帰宅仕ト存候處、細田直部ヨリ帰宅致候テ薩兵山鹿口方エ出兵致居候ニ付、難有ルコトモ難

計リ、因テ自身エ從參可致様申聞候ニ付、無覩同伴二月廿四日熊本十二番ノ平卒ト成リ同廿六日高瀬寺田出兵、

戦大ニ敗走ス、木留エ引揚ケ同所エ二三日滯留致居候内  
(猪本市)

平病ニテ柿原病院エ入院仕、三月廿九日全快候ニ付木留・  
(五名市)

山ノ口エ出兵致シ、未不戦内川尻口破レニ付木山エ惣軍

引揚ケ、夫ヨリ御船ノ様ニ出兵致同所エ守ヲ付ケ候處、

官兵ヨリ進撃、左翼ヨリ破レ猶惣軍矢部濱町エ引揚ケ矢

部萬谷ト申所ニ守ヲ付ケ、同所ハ一戦モ不仕、夫ヨリ人  
(坂ガ)

吉ノ様ニ惣軍引揚ケ、自身ハ平病ニテ猶同所病院エ入院

仕、其内同所破レ候ニ付、病院カク頭ノ様ニ引揚ケ当所エ

二三日滯留、夫ヨリ小林ノ様引揚ケ四五日入院全快仕候

元士族 宮川貞衛

熊本県第一大区五小区居住

ニ付、大口エ出兵仕、本陣エ為報知差越ニ相成候内、同所戦敗走ニ付横川エ引揚、夫ヨリ処々ニテ味方戦悉敗走、地名ハ存不申八月十八日長井村(北川町)ニテ降伏仕候事、

右之外戦之形状存不申候事、

明治十一年二月十七日

當時懲役十年

栗原 繁〇  
(捺印)

(中表紙)

青森県

一 宮川貞衛上申書

明治丑ノ二月廿三日ヨリ出兵イタシ熊本城下出京町ト云處ニ兩三日滯陣、給養ノ周旋イタン夫ヨリ木留ト申ス處ニ転陣四五日滯在ノ処、熊本隊長池邊吉十郎列ヨリ猶又出京町ニ参リ米穀出納ノ周旋致シ吳候様頼ミヲ受、同所ニ四十余日滯在、夫ヨリ四月中旬比惣軍引揚ノ節木山・御船ト云両所ニ滯陣、矢部・馬見原ノ山道ヲ経歷シ人吉



夜戦争、我本隊戦死一人、奇兵モ死傷アリ、抑此日ノ戰ヒ互ニ山ノ頂キヲ取ラント憤戦、山ノ九合目ヲ過クルノ地位ニ登リ、墨ヲモ築カス防戦ス、官兵ハ間モナク墨ヲ築キ北面ヨリ砲撃セリ、死傷モ亦多キヲ見ル、左半隊ハ村井正綏引率本道左翼ナル奇兵十八番中隊ノ右小隊ニ応援ス、官兵大砲數発ヲ放チ民家ヲ放火ス、夜半ヲ過ル比ヒ遂ニ忽軍引揚トナリ、力チジ<sup>峰</sup>日向ト豐後ノ境ナリ、此夜雨強クシテ水漲り河流ノ渡り頗ル困難セリ守ル、後又忽軍<sup>(豊・日後)</sup>松瀬ニ引揚ケ再ヒ進撃ノ軍議ニヨリ進ンテ大原越ニ向フ、官兵砲墨三四ヶ所ヲ捨テ引ク六七丁、直ニ進ンテ該墨ヲ取り守衛數十日間台場ゼリ合死傷スル者アリ、後転シテ奇兵二中隊・報國隊<sup>竹田</sup>・中津隊ト合シテ宗太郎越<sup>一名セニブモ云</sup>守ル、或日<sup>七月下旬</sup>未明官兵密樹ノ中ヨリ突出砲撃、事不意ニ出ルヲ以テ一二ノ砲墨ヲ捨て引き、第三ノ墨中ニ踏止ル、然レトモ第三ノ墨守リ難キ地形防戦頗ル困ム、此戰酣ナル時宗太郎越ノ本道ヘモ進撃スト雖、待儲テ防戦シ殊ニ官兵ハ地位低ク密樹ヲ隔タレハ弾丸達セス敗ル能ハス、此時奇兵八番中隊ノ右小隊長篠崎正大一小隊ヲ引率、密樹ノ中ヲ攀チ登リ我軍ニ敵スル官兵ノ背後ニ出、烈シク攻撃スルヲ以テ遂ニ官軍敗ル能ハス引退ク、死骸・銃器捨タルアリ、此戰ヤ篠原

正大ガ背後ヲ突ニアラスンバ全ク防ク能ハザルベシ、此日小隊長關精一郎戦死、兵士傷ク者五六名、報國隊ノ死傷ハ我本隊ヨリ多シ、前後病ヲ以テ病室ニ引クコトアリ、後本營ノ指揮ニ依リ我本隊ヲ解キ奇兵四番中隊ニ属ス、八月上旬我隊転シテ宮崎口ニ向フ、佐土原川ノ辺ヲ守ル、僅ニ一夜ニシテ翌早天本道筋ノ守敗レ忽敗軍トナリ、高鍋旧領ノ山手ニ散乱、帰宅シテ高鍋警視出張所ニ帰順スル、八月中旬ニ御座候也、

明治十一年二月十四日

### 三 平島重綱上申書

鹿兒島県第九十七大区二小区

日向国兒湯郡高鍋村

元士族 平島重綱  
私儀  
明治十年三月九日高鍋士族凡武百名余高鍋出発二小隊ニ編制ス一小隊兵士八十名トス、其壱番小隊分隊長ニ撰レ固辞スルヲ得ス、肥後國熊本表ヘ出兵、途中昼夜兼行等ヲ以テ同十四日川尻着、貴島清隊ヘ屬シ同十五日植木町ヘ操込、翌十

六日全隊早天田原坂へ向フ途中ニテ吾流丸ニ中リ、直ニ川尻へ退キ病室へ入ル、同十八日ヨリ帰郷ス、創殆ト癒ユルヲ以テ高鍋三番隊ノ弾薬輸送ヲ世話掛財津吉一等ヨリ托セラレ、四月卅日再ヒ高鍋出發、五月八日日向国椎葉山着同隊へ加ハリ、押伍ト同シク隊ノ周旋ヲ致、同十五回ヨリ同卅日迄同所財木村ノ守衛トナル、同卅一日同國白杵郡高千穂<sup>(日之影町)</sup>竹ノ原村へ転陣、墨ヲ築キ高鍋壠番隊ト<sup>(准備費付)</sup>守衛ス、右翼楠原村ハ延岡隊、左翼<sup>(日之影町)</sup>中村ハ正義五番中隊各墨ヲ設ケ守衛、六月十四日参軍坂田諸潔ヨリ鎌壠三番隊<sup>(高鍋隊總テ難)</sup>半隊長ニ申付ラル、同廿五日頃ヨリ七月一日迄ノ間中村其他各所ニ於テ川ヲ隔砲戦數度、互ニ勝敗アリ、同二日仏晩官兵楠原村ヲ襲撃、続テ竹ノ原・中村モ川ヲ隔砲戦、此戦ニ官兵大砲ヲ以テ楠原村ヲ焼ク、延岡隊直ニタンスケ嶽ノ方へ引揚ク、因テ我隊前面及ヒ側面ヨリ頻ニ砲撃ヲ受ケ、詮方ナク守リヲ捨テ、タンスケ嶽ノ側へ引揚、其内第四分隊僅カ二十余名分レテ中村ノ方へ回リ、本道ヲ退ク、上面<sup>(日之影町)</sup>ニテ正義五番隊二十余名ト合シ操引ニテ戦、午後六時頃下面ニ至リ遂ニ拒止、今日ノ戦爰ニ於テ止ム、我隊戦死壱名、手負式名アリ、タンスケ嶽ノ雙方糧食等運送ニ不便ナルヲ以テ此夜各隊新町ヘ

退キ、尚軍議ノ上本道ヲ正義五番一小隊、其右翼高塚山ヲ我隊左半隊ヲ率ヒテ守ル、我右翼ノ間道ヲ正義五番一小隊我隊ノ右半隊及鎌壠壠番隊ト合シ守衛、延岡隊<sup>(日之影町)</sup>菅原村ヲ衛ル、同三日休戦、各隊墨ヲ築ク、同四日午前七時頃ヨリ開戦、吾持場高塚山タルヤ官兵ノ所有トナルトキハ、各隊ノ持場支ユル能ハスシテ瓦解トナル第一ノ要地ナレハ、弾丸尽ナハ切込メト、本營長高城七之丞ヨリ嚴達ニ依リ一同必死ニテ防戦スベシト約セリ、戦ヲ開クヨリ雙方発砲劇ク、正午頃ニ至弾薬乏ク頗苦戦ス、戦ノ緩ナル處ノ弾ヲ急ナル處ヘ分チ、或ハ和銃ノ弾ヲ用ヒ或ハ空砲ヲ放チテ声援ヲ為シ漸ク防戦ノ處、午後三時頃遂ニ右翼ノ持場悉ク衝敗ラレ、吾其景情ヲ目擊スト雖、本營ヨリ退軍ノ命アル迄ハ一步モ退クマシキトノ約ユヘ、本道ノ左翼正義隊へ急ニ右翼ノ景情ヲ伝ヘ、俱ニ退軍セントスルニ彼ノ隊モ追々引揚ケントスルノ報ヲ聞テ径チニ兵ヲ纏メ山上ヲ下リ本道へ出ルニ、新町ニハ既ニ官兵充滿シテ帰道ヲ絶且ツ三面ヨリ追撃セラレ進退窮リ南ノ方五家瀬川ヲ指テ敗走シ、數丈ノ川岸ヲ下リ急流ヲ泳キ渡リ、過半銃器・刀剣ヲ捨テ、千辛万苦シテ城村へ逃レ退キ、又五家瀬川ヲ渡リ椎畠村へ趣キ、我右半隊及ヒ各隊ノ景

情ヲ聞クニ未タ新町ノ方ニアリテ防戦酣ナリト云フ、迅速残兵ヲ引率シテ綱ノ瀬川ヲ渡リ新町ノ方へ進ム、時ニ黄昏半途ニテ我右半隊及ヒ各隊へ出会合隊シ、此夜総軍椎烟ノ方へ退キ綱ノ瀬川ノ東岸ヲ衛ル、我隊戦死五名・手負數名アリ、鎌撲壱番隊半隊長久保田新藏戦死、外ニ死傷數名アリ、吾川岸ヲ下ルトキ誤テ疵ヲ負、翌五日ヨリ本隊ヲ離レ延岡工赴キ病室へ入ル、八月十二日稍癒ユルヲ以テ高千穂口(北方町)曾木村ヘ至リ再ヒ本隊へ属ス、同十三日・十四日高千穂口總敗軍、偶門川口モ同断ニテ延岡陥リ、夫レヨリ本隊モ和田崎工退キ無鹿ト申処ノ山上ヲ衛リ十四日午後四時頃ヨリ戦争、同十五日朝大戦味方敗走ニテ即日(北方町)長井村ヘ退ク、同十八日同所俵野小学ニテ第一旅団第九聯隊合併第一中隊へ帰順仕候也、

明治十一年二月十四日

#### 四 野口一馬上申書

鹿児島県第九十七大区二小区

日向国兒湯郡高鍋村

元士族 野口一馬

五 柳田重周上申書

鹿児島県下百一大区五小区

明治十年五月廿日塩増宰(領)料トシテ日向国椎葉山財木郵迄

至リ、同廿五日高鍋三番小隊ノ隊付トナリ同所ヲ守衛ス

ルコト凡五日、六月十八日竹ノ原邸ニ赴キ、同所ニテ坂

田参軍ヨリ鎌撲三番隊ノ分隊長ヲ申付ラレテ守衛ス、右

竹ノ原守衛ヨリ高千穂(日之影町)新町ノ戦ヒ迄ハ平島重綱ト同隊ニ

テ口上異ナル処ナキヲ以テ、別ニ贅言セス、ソノ後平島

病室ニ入ルヲ以テ四月五日半隊長ニ申付ラレ(日之影町)菅原ヲ守衛

シ八月八日頃ヨリ開戦、但シ官軍ヨリハ大砲・小銃スキ間

ナク放チ、金山・菅原等數ヶ所焼失ス、同十二日午前六

時頃同所延岡ノ持場破レテ鎌撲三番隊モ守リ難クシテ引

退キ、美々地ト云処ニテ暫拒戦シ、兵士一名戦死、手負武人アリ、軍又敗レ逃レテ八峠ト云処ニ退キ守ルヤ否ヤ又敗レ山中ニ潛伏シ、翌十三日午後三時頃近衛隊ニ帰順

仕候、

明治十一年二月十四日

私儀

那珂郡飫肥<sup>(北郷町)</sup>上郷ノ原村居住

元士族 柳田重周

私儀

明治十年二月七日鹿児島県旧大山県令ヨリ西郷隆盛尋問ノ一条ニ付、兵士ヲ率ヒ上京セント欲スル内書投来ス、乃チ同夜伊東直記始メ八九名飫肥大区事務扱所ニテ評議アリ、翌八日曉天ヨリ又右扱所ニ集リ隊ノ組立ヲ為ス、号ヲ一番ト名ツク、員数凡百名余、吾ハ同隊ノ小頭ナリ、同九日一番隊當所発足、<sup>(日南市)</sup>酒谷村迄出張、同村ニテ鹿児島ノ挙止ヲ確ト聞定ルタメ前後九日間滯在ス、同十七日同村発足、復タ旧城下ヲ返通シ<sup>(北郷町)</sup>郷ノ原村ト申處エ泊ス、是ノ村ハ飫肥城下ヨリ里程三里之處ナリ、夫レヨリ凡七泊高千穂通ニテ熊本城下へ着ス、早速鹿児島出張大本營ノ指揮ニ依リ同県川尻井<sup>(学科 天明町)</sup>學料新地ト申処へ番兵ス、同処等エ日数凡五日間余滞泊、又同所引揚ケ同山鹿郡吉田村エ転陣ス、同三月三日同処早晩引揚ケ同県南ノ關エ達スル間道ヨリ吾隊共凡六小隊位進軍ス、途中ニテ官軍ノ哨兵ニ出合ヒ小戦争アリ、官軍即死五名位アリ、吾ガ隊ノ方エ手負一名アリ、ソノ儘<sup>(三加和町)</sup>岩村十丁マテ進軍ス、日没ニ付同処エ休泊、仮リニ哨兵ヲ為ス、是ノ夜無事ナリ、同四

日南ノ關エ忽進軍ノタメ同処早天引揚ケ、吾ガ一番小隊ハ先鋒ノ命ヲ受ケ平<sup>(山鹿市)</sup>山村口指掛リ候處、官軍ヨリモ進軍ノ由ニテ斥候互ニ相出合ヒ、両軍山間且溝内エ伏シ小銃ヲ打チ放ツコト大ニ烈シ、又官軍ヨリハ砲ヲ發スコト是又シキリナリ、遂ニ大戦争トナル頃午前第八時ナリ、吾ガ隊ハ初メテノ戦争且大風雨ニテ大ニ困難ス、両軍互ニ勝敗アリ、午後第五時頃両軍共引退キ吾ガ隊ハ山鹿郡山鹿町エ泊ス、當日戦争手負小頭一名・兵士一名都合二名ナリ、尤小頭ナル者ハ五日ヲ経テ死ス、同町エ凡五泊間滯在、同十日ヨリ同県姫井村ト申処エ哨兵ノタメ転陣ス、同廿日田原坂大敗ニ付応援ノタメ同処引揚ケ御鳥越井近隣ノ村エ出張シ四方ノ守リヲナスノミ、吾レハ当所ヨリ足痛ニ付川尻病院ニ入ル、本隊植木ニ至リ戦争ス、兵士ニ手負四五名アリト聞ク、続テ又同県隈府今朝尾原ヲ固メタリ、同中旬頃官軍右今朝尾原ヲ襲ヒ吾ガ本隊火急ノ事ニテ両翼ヲ破ラレ大敗トナル、隊長佐土原藤吾・半隊長阿万南八郎即死、小頭一名・兵士四名位即死、手負小頭共凡十名余ナリ、是レハ右今朝尾原ヨリ川尻エ手負護送人來リ吾ニ云フ、依テ概略ヲ記ス、同四月中旬頃足痛平癒ニ付帰隊ス、本隊ハ右今朝尾原大敗後同県梨坂ト申

處ノ哨兵ニアルユヘ同処ニテ入隊ス、乃チ時々小戦争アリ死傷ナシ、同下旬頃同所引揚ケ高場ト申処ニ退ク、同所兵少ニシテ守ル能ハス、凡ニ泊ニシテ又大津ト申処ニ退陣ス、吾ガ隊ハ同所高場街道口ヲ固守ス、同ク中旬頃官軍ヨリ進軍大戦争トナル、勝利アリ、当所ニテハ戦争凡兩三度ニ及ブ、尤官軍ヨリ進軍ナリ、程ナク本營ヨリノ令ニテ矢部ト申村エ引退ク、同処ニテ大本營ヨリ令下リ諸隊ノ編製<sup>(制)</sup>アリ、飫肥一番小隊ヲ以テ奇兵十八番トナシ、當ヨリノ令ニテ十九番中隊左翼分隊長ニ移ル、依テ本隊ハ当所<sup>(矢部町)</sup>猿渡村ト申処ノ固メニアルユヘ直ニ入隊ス、番兵同二番ハ十九番、同三番ハ二十番トナル、吾ハ又飫肥本營ヨリノ令ニテ十九番中隊左翼分隊長ニ移ル、依テ本隊ハ当所<sup>(矢部町)</sup>猿渡村ト申処ノ固メニアルユヘ直ニ入隊ス、番兵スルコト凡五日、又惣軍引揚ケ吾ガ隊モ次テ矢部ニ退ク、同夜全軍又湯<sup>(湯前町)</sup>ノ前ト申処エ引退ク、滯泊スルコト十日間余、又同処引揚ケ大河内并渡川等ヲ経歷シテ日向国美々<sup>(日向市)</sup>津エ退軍ス、居ルコト五日、同所ヨリ富高井<sup>(日向市)</sup>細島港エ固メノタメ転陣ス、又居守スルコト凡五日、同所引揚ケ延岡エ転陣ス、本夜ヨリ吾ガ中隊両翼交番ニテ同所寶財村エ出陣ス、海岸ノ防禦ヲナス、宿陣スル凡廿日間程、宿陣中官軍ノ軍艦來リ港内ヲ探ルタメカ発砲ナシ、直ニ出帆ニナル、同所ニテ飫肥本營ヨリ奇兵十八番中隊豊後國

三國峠ニテ大敗ヲ取り中隊長石川駿・半隊長和田勇手負ニ付、吾半隊長トナリ直ニ出陣ノ命アリ、不得已翌日早晩ヨリ早追ヒニテ豊後國<sup>(宇佐町)</sup>重岡ニテ右十八番隊エ入隊ス、毎日戦争アリ、官軍高山ヨリ大砲ヲ放ツコト如雨、吾ハ無砲ニテ小銃ヲ以テ之レニ抗ス、然レトモ死傷ナシ、程ナク当所引揚ケ延岡ノ内<sup>(北川町)</sup>熊田村ト申処エ退陣ス、間モナク豊後佐伯口陸地峠ヘ進軍、吾ガ十八番中隊ト奇兵八番中隊二中隊ナリ、右二中隊山間ヲ攀チ登リ官軍ノ後ヲ不意ニ襲ヒ山頂ニ突出発砲シ忽チ第一ノ台場ヲ乗リ取り、第二ノ台場ト打チ合ヒ両軍是ヲセントト必死ヲ極メ戦ヒ遂ニ二三ノ台場迄乗取リ官軍ノ炊事場迄攻メ込ミ大勝利ヲ得、吾隊即死一人、当所引揚ケ楊ケ内<sup>(矢ヶ内)</sup>村ト申処奇兵本營ノ脇ニ休泊ス、尤陸地峠ハ奇兵八番中隊ニテ守リヲナス、翌早晩ヨリ不動野ト申処ヘ番兵ス、居守スル凡五日、昼夜ノ別ナク探リ銃ヲ放ツ、五日目ノ朝官軍ヨリ陸地并大原越へ進軍相成リ、吾ハ其ノ中央ノ守リタリ、然レトモ右両所大敗ノ由ニテ引退ク模様アリ、吾レヨリ直ニ斥候二名ヲ出ス、其ノ内<sup>(北川町北端)</sup>陸地防禦ノ隊ハ頂ヨリ七八合位モ退キ候様右斥候ヨリ通知ニ付、吾ガ隊共ニ矢ヶ内ト申処エ退ク、引キ陣中兵士ニ手負一名アリ、居守スルコト凡一月

途ニシテ程ナク宮崎并延岡下手口大敗惣軍引揚ニ付、延岡ノ内(延岡市川島町)和田峠迄退キ下口ヨリノ官軍ヲ防ク、又敗ラレ隊中散乱、吾ハ延岡ノ内(北川町)長井村ト申処ニテ帰順ヲ願フ、

明治十一年二月十四日

六 佐土原省吾上申書

鹿児島県第百式大区四小区

日向国那珂郡飫肥脇元邸

元士族 佐土原省吾

私儀

明治十年二月七日鹿兒島旧大山県令ヨリ内書来ル由ニテ西郷隆盛暗殺ノ一条ニ付尋問ノ為メ上京故義拳ニ相違ナク、勇士ノ面々隨從スル由ナリ、依リテ当飫肥区内四小

区戸長ヨリ私エ出兵申付、式番小隊ニ加リ清武迄参り當所ニテ小隊(編制)変製シ吾ヲ小頭トナシ、肥後国熊本迄参リ同

國岩村ト申処ニテ官軍ニ出合ヒ戦争致シ、戦中ニテ手負致シ直様山鹿エ引取り病院ニ入り療養ス、ソノ後創少シ

癒テ本隊熊本城筒口ト申処ニ番兵シ凡十日余ニテ又(学科)新地(天明町)エ番兵ノ為メ赴ク、同所ニテ分隊長トナリ、守ル数

七 長倉英士上申書

鹿児島県第百二大区一小区

日向国那珂郡飫肥板敷村

元士族

長倉英士

日ニシテ官軍小舟數十艘ニテ押來リシ處ヲ小銃ニテ打掛ケシニ、官軍直チニ引退ク、後三月中旬頃川尻敗レテ熊本之二本木エ引上ケ、又木山ニ引退ク、同所ヨリ飯田山ニ番兵シ小戦アリ、守ルコト一両日ニテ矢部邸工引退キ、同所ニテ半隊長ニ申付ラレ、俄ニ椎葉越ニテ江代邸ニ退陣ス、後湯前村二十日余滞陣、同所ヨリ日向国美々津エ番兵、又細島ヨリ山陰・富高等ヲ番兵ス、夫ヨリ豊後口ニ赴キ赤松嶺工進撃致シ三ノ台場迄乗取リ頗ル勝利ニテ分取物少々、官兵數人戦死ヲ見ル、後退軍ノトキ兵士二三分戦死アリ、ソノ後ハ諸用ニテ飫肥・宮崎エ數度通行シ、或ハ病氣ニテ延岡病院ニテ療養スルヲ以テ隊中ヲ離レ、戰地ノ形況承知不致候、但シ本隊ハ三河内口ニ出張ナリ、延岡引上ノ後八月十七日長井邸(北川町)佐敷野ニテ帰順仕候也、

明治十一年二月十四日

明治十年二月七日鹿児島県旧大山県令ヨリ西郷隆盛等暗殺ノ一条尋問ノ趣ニテ上京ニ付、義挙ニ相違ナク勇士ノ面々隨從スルノ内書來リ、依リテ當飫肥区内モ県下ノ事ナレハ出兵可致旨、副区長ヨリ口達シ、飫肥一番小隊伊東直記隊長トナリ、同月八日ヨリ国内酒谷村迄出發ス、程ナク河崎新五郎二番隊長トナリ、吾ヲ以テ同隊ノ書記方ニ申付ラル、県下ニテ義務ト云ヲ以テ辞スルヲ得ス、同十七日ヨリ二番小隊モ出發シ十八日清武ニ至ル、同夜鹿兒島桐野利秋ヨリ川上・小濱等五六名ヲ遣リ飫肥隊ヲ改製シ、吾ヲ以テ二番小隊ノ監軍トナス、重任ナルヲ以テ固辞ス、不聽不得已シテ從ヒ行ク、高千穂通リニテ同廿四日肥後国保田窪ト云処ニ着ス、翌日薩州本宮ヨリ川尻口ノ固メラ申付ラレ四五日番兵ス、三月二日俄ニ山鹿ニ赴ク、而シテ飫肥三小隊ヲ分ツテ四小隊トナシ、飫肥本營ヨリ吾ヲ四番小隊川上彦一ノ監軍トナス、同三日ヨリ平山村辺進軍ニテ小戦アレトモ、四番隊ハ後軍ナルヲ以テ戦ハス、翌四日南關ノ間道岩村ト云処ニ進軍アリ、飫肥一番・四番二隊共ニ進軍ス、但シ一番ハ先鋒、四番ハ後軍ナリ、外五六小隊ニテ同日朝ヨリ戦争相始マル、四番

八応援トシテ十二時前ヨリ進軍シ、共ニ山上ト田間トヨリ発砲シ官軍ヨリハ大砲・小銃雨ノ如ク発ス、互ニ烈戦シ勝敗アリ、四番半隊長野崎保戦死シ手負三四名アリ、官軍四五町退陣ナリ、日晡ニ及ヒ休戦シテ吾隊ハ山鹿ニ退ク、夫ヨリ四五日山鹿吉田村辺ヲ番兵ス、同十日頃ヨリ姫井村ト云処ニ番兵ノ為メ赴ク、此ノ時ニ当リ田原坂・木留辺ハ大砲・小銃ノ声轟雷ノ如ク劇戦数日、昼夜ヲ別タスル十日余ニテ山鹿ニ引退キシ処、俄ニ薩州本宮ヨリハ代口ニ応援ニ赴ク可旨申付ラレ、同廿三日植木駅ニ至リシニ官軍已ニ田原・木留等ヲ破リ当所ヲ焼キ道ヲ要シテ行コトヲ得ス、乃チ同日十二時頃ヨリ戦争相始メ、両軍共小銃ニテ劇戦シ勝敗ナク日暮交綏ス、但シ四番ノ兵士二人戦死ス、夫ヨリ熊本城ノ筒口ト云処ヲ番兵シ、十日余ニテ學料新地ノ番兵ニ赴ク、居ル二日吾病ニ罹リ黒石村ト云処ノ病院ニ往キ療養シ、依リテ監軍ヲ辞シテ弾薬製造方トナリ隊付ヲ離ル、程ナク川尻破レ惣隊引擧ケ矢部村ニ両三日滯在シ、四月中旬本營ヨリ椎葉越ニテ江代村ニ引取ヘキ旨令アリ、乃チ同所ニ引キ退キ又湯前村二十日余滯在シ弾薬ヲ製ス、後チ割拠ノ姿トナリ山陰通リニテ隊ハ細島・美々津或ハ豊後口ニ赴ク、吾レ宮崎

或ハ延岡ニアリテ彈薬ヲ製造ス、肥後ニテ二月ノ末ヨリ  
 三月中旬迄官軍ニ抗敵致シテ後ハ隊ヲ離レ戦地目撃セサ  
 ル故、戦争ノ形情ヲ詳述スル能ハス、延岡引挙ノトキ弾  
 薬方八人共飫肥隊ノ處ニ至リ、順逆ヲ熟談シテ十九番・  
 廿番隊ト共ニ八月十七日長井村(金岡市川島)和田越ニ於テ帰順仕候、  
 明治十一年二月十四日

八 飯田通義上申書

鹿児島県第九十六大区二小区

下那珂郡百五拾二番屋敷居住

元士族 飯田通義

私儀

鹿児島県指宿郷住居元士族

九 辻 八之進外二名連署上申書

辻 八之進

石峰善十郎

圖師助七

私共儀

明治十年二月上旬頃鹿兒島巡查相見ヘ九十六大区役所エ  
 出張シ、諸人ヲ脅迫シテ出兵セシム、我レ壹小隊兵器方  
 申附ラル、素ヨリ病歟故辞スレトモ不聴、二月廿八日佐  
 土原ヲ発足シ、宮崎県厅跡ニテ鹿兒島貴島藩隊ニ附屬シ  
 半隊長申付ラレ、三月八日頃同所出发、同十四日肥後國熊  
 本ヘ着ス、翌十五日本當ヨリ田原坂守リヲ申付ラレ、同  
 所へ赴、同夜戦争ス、同十六日官軍へ切込ノ節私ハ貴島

方へ援兵乞ヒニ参リ、兵士ハ皆々守場ヘ引揚ケノ上、我  
 レハ帰隊仕リ候、同十七日朝官軍ヨリ台場ヲ攻敗ラレ  
 小隊ノ中、手負・戦死三四十人許ナリ、我レ其中ニ植木  
 町エ引上ケ二三日滯在シ大病ヲ受ケ川尻ノ病院ヘ引キ療  
 治仕候内、官軍同所ニ攻掛ケニ相成リ、三月廿五日夜中ニ  
 同所ヲ馬・駕籠等ニテ引上ケ、同廿九日帰宅療生致候、右  
 病氣後ハ戦地ニ出場不仕故、戦争ノ形状不存候、其後八  
 月一日宮崎県厅跡ヘ至リ帰順仕候、

明治十一年二月十四日

テ同所番兵仕、六月廿四日官軍海陸ヨリ御進撃戦争相開  
ケ大小砲打合之末弾薬尽果テ、(原良)  
ハラ、ト申処ヘ敗走仕、

味方戦死二三名・手負二名計有之、隊長ヨリ銘々心ニ任  
セ進退可致旨差図有之候ニ付、同廿八日宿元ヘ罷帰謹慎

仕居、七月中旬ト覚、官軍別勵隊御進入ニ付帰順自首仕、

自宅謹慎被申付候處、九月上旬賊本營附税所小二郎ト申

者、召募ニ応シ重テ喜入郷<sup>(瀬々串)</sup>セ、クンヘ出兵中、右小二郎

斥候ヘ出候ヲ窺ヒ宿元ヘ逃帰、其後無程警視局御出張ヨ  
リ御呼出シ御召捕相成申候、外ニ戰地之形状等心得居候

事無御座候也、

### 一〇 鎌田政直上申書

鹿兒島県第二大区四小区

元士族 鎌田政直

私儀

鹿兒島県六等属在職中西郷隆盛暴動ニ付出発ノ砌リ、大  
山綱良差図ヲ受ケ、同隊会計方谷元延清其他隊長別府<sup>(晋)</sup>新  
介・邊見十郎太・淵邊群平等エ県厅ニ於テ金四拾万円余

銘々エ曳渡候儀有之候得共、戰場之始末一向存知不申候、  
此段申上候也、

明治十二年二月十四日

### 一一 竹内與一左衛門上申書

鹿兒島県指宿郡今泉郷

元士族 竹内與一左衛門

私儀

一一番大隊八番小隊ニ編入相成、十年二月十五日出立ニテ

同廿二日肥後熊本ヘ着陣、翌廿三日未明熊本城ニ進撃致

シ当日出町ニ引揚ケ十日位滯陣、夫ヨリ同県之内清水ト

云フ所ニ二十日位番兵致シ、夫ヨリ為應援田原ヘ進撃、同処

ニ於テ二昼夜銃戦、終ニ敗走植木町ヘ引揚ケ、同所ニ於

テ十三日程日々戦争又々同所引揚ケ鹿兒島表ヘ帰着、直

ニ武村ト申処ニ一七日位番兵致シ候處、陸ヨリ官軍御進

撃ニ相成、戦争之央四月上旬頃ト覚、手負致シ夫ヨリ上

伊敷村病院ニ六日程入院致シ、引続キ帰家仕居候處、七

月廿一日官軍別勵隊御差入ニ付帰順自首仕、其後税所小  
二郎募兵方ニ差越シ、右小二郎ヘ脅迫セラレ喜入郡瀬々

串迄出張候へトモ小二郎為斥候ニ出テ候跡ニ帰家致シ、其後警視隊御差人、御用有之旨ニ付罷出候處、直ニ鹿兒島磯監へ護送ニ相成、同所ヘ廿五日入監、夫ヨリ長崎表へ護送ニ相成、同所ニテ御<sup>(越)</sup>所分相成候事ニ御座候、外ニ戰地地形等承知之儀無御座候也、

明治十一年二月十四日

## 一二 甲斐半藏上申書

鹿兒島県三大区六小区

元士族

甲斐半藏

私儀

明治三年ヨリ上京、昨十年二月帰県ノ処、中原尚雄ト同盟ニテ西郷隆盛等ヲ暗殺センカ為帰県之者ト疑ヒヲ受ケ捕縛ニ成リ糺問ノ未疑念相晴レタルニ付、邊見十郎太ヘ相談セシ処、今般西郷隆盛ヘ同盟ノ輩尋問ノ為出京ノ筈ニ付加入セヨトノ申聞ニ任せ、同月中旬人吉ヘ出張、破竹三番隊押伍被申付、比奈久海岸ヘ御軍艦數艘米リ直ニ同隊ノ内一小隊ヲ連レ出兵シ、官軍頻ニ上陸ト見受、一小隊ニテハトテモ防キ兼可申ト謀計ヲ廻シ、大隊ノ号令

ヲ降シタル故乎、御軍艦ノ兵士等モ引戻シ大砲數発ヲ打掛け、午後二時頃ヨリ尤烈シク、賊兵只一小隊ノ事故所々ニ屯セリ、此戰ニ味方一名手負ス、三月上旬同所ニ於テ小雨降出シ明家ニ兵士休息ノ折柄、官軍廿名程上陸進撃ニ驚キ、私共八名ニテ右上陸ノ兵ヲ追打セシニ、海岸迄凡十町計負退ケリ、官兵バツテーラニ乗リ御軍艦<sup>(馬)</sup>ヘ引取タリ、夫ヨリ三昼夜程防戦勝敗分ラサル中八代櫻<sup>(馬古代市)</sup>ノ場迄引揚ケ、於同所三昼夜戦ヒケルニ八代ヘ滞陣ノ官軍応援アルト聞キ、右ヲ防カン為メ要地ニヨリ番兵シタルニ、案ニタカハス官兵變ヒ來リ、又二昼夜程防戦セシカ遂ニ賊兵敗走シテ淵邊<sup>(津)</sup>軍平ト申仁來リ、兵士引連レ神<sup>(珠磨村)</sup>ノ瀬迄引揚タリシヲ、我隊ニテハ不知シテ外二名私ト三名奥ノ間ニ引籠リ居タリシカ、数日ノ戦ヒ草臥ニ堪ヘカネ実ニ必死ノ覺語ニテ其場ヲ忍ヒ出シカ、官軍ヨリ見付ラレ一里余追打ニアヒ、辛シテ山合ニ隠レ其夜山陰ヲ便リテ漸ク本隊ニ帰リタリ、其時分隊長申付ラレ、神ノ瀬ニ番兵シ、夫ヨリ鹿兒島大口ヘ官軍御進入ト聞キ直ニ進撃セシカ他ノ隊敗走、其後他隊ト共ニ大口ヘ進撃大勝利アリ、夫ヨリ水俣ト申所迄追打ノ際、銃弾ニ当リ都城病院ニ入り二十日余療用全快、鹿兒島本営ヘ帰隊ス、行進四

番中隊トナリ、又出陣セントスレトモ未タ平癒ニ至ラス

故入院療用ヲ加フ、然ルニ海軍兵(佐佐・哈良町)中佐郷松原ト申処ヘ上

陸シタルニ寄リ、同所ヘ私一人参リ見聞スルニ、士官ト覺

捕者一名、兵士一名居リタル故召捕ヘ糺問シタルニ、人

家ヲ放火セン為メ上陸ジタリト答ヘシ故本官ニ引連レ行

カントセシニ、其夜両名共脱走シタリ、其曉ヨリ又々砲

戦防禦接戦ニ及ヒ終ニ敗走、(隼人町)小濱ト申所迄操引シテ退ケ

リ、夫ヨリ數根郷上ノ段ニ退陣番兵ス、夫ヨリ尚進擊シ

テ戦ヲナスト雖モ又々敗走、手負・戦死数多アリ、財部

ヘ引揚ケ同所番兵ス、而シテ末吉郷ヘ官軍御進撃ト聞、

同郷ヘ進撃、戦ノ央又候足ニ銃丸ヲ受ケ都城病院へ入院

療用ノ處、尚又官軍御進撃ニ付延岡ノ方ヘ退キ(北川町)長井村二

於テ交戦ノ未捕縛相成申候也、

明治十一年二月十四日

### 一三 唐鎌岩輔上申書

鹿児島県廿三大区四小区

四百三十六番地居住

元士族

唐鎌岩輔

私儀

明治十年二月中旬西郷隆盛上京出発ノ後三月中旬戸長ノ

達ニ依リ鹿児島県下牛山郷ニ至リ候処、遊撃七番小隊伍

長エ編入シ、同ク下旬熊本県下エ差越、甲佐ニテ相戦ヒ

終ニ敗軍ニ及ヒ御船エ引揚ケ番兵シ、同ク四月三日官軍

ヨリ進撃ニ相成候処、御船モ敗軍シ矢部迄引揚ケ、夫ヨリ

人吉ノ内江代ニ至リ隊号ヲ行進一番中隊ト改メ、夫ヨ

リ牛山郷ニ向フ途中ニテ相戦ヒ、是亦敗軍シ吉田郷エ引

揚ケ候折、同隊ノ押伍被申付、又々牛山郷ニ進撃シ漸ク

勝利ヲ得、熊本県下深川迄追撃シ同所ニテ九昼夜相戦ヒ

終ニ敗軍ニ及ヒ、同県久木野マテ引揚ケ候際、私病氣相

煩ヒ帰郷帰順仕、自宅謹慎被申付居候内、同八月一日西

郷隆盛鹿児島エ襲來、旧城跡ニ依リ県内巡查捕縛可致旨

四方エ申触、戸長其儀ヲ相達候折柄、我郷城之町ニテ広

袖湯形着タル者、我弟山下勇次郎ヲ見ルヨリ早ク遁ケ去

ル由ヲ承リ、直ニ私追掛けキ、杉ノ追ニテ追付、誰レ也

ト問ヒ掛、答テ曰ク、当所港町巡查里見義秋ト相答ヘ同

道ニテ副戸長方エ連レ越、右ノ段申出候処、鹿児島賊本

當エ可連越トノ差図ヲ得、同當エ護送仕早速帰郷致シ、

湊分署エ右ノ趣キ悉皆自訴仕候也、

明治十一年二月十四日

一四 蒲生才藏上申書

鹿兒島県第百五大区三小区

日向国諸縣郡庄内郷安永村

元士族 蒲生才藏

私儀

(植木町)

兼テ私学校エ入校中、中原尚雄等陸軍大将西郷隆盛等ヲ

暗殺スルノ内命ヲ川路大警視ニ受テ帰県セシヲ隆盛聞伝

テ政府ヘ尋問ノ訳有リテ、旧兵隊ノ輩ト俱ニ上京可致旨

鹿兒島県令大山綱良ヨリ尚雄等ノ口供ヲ副テ布達シ、依

テ其口供ヲ只管信シ俱ニ上京センコトヲ望メリ、然ル処

二月十四日於鹿兒島<sup>(薩摩國幹隊長)</sup>ニ第一大隊六番小隊押伍ニ編入シ、

明治十年二月十五日鹿兒島出発、同廿日熊本県下小川宿

ニ至リ通口々ニ番兵シ、当所ヨリ川尻ニ至リテ又々番兵シ、同廿二

大ニ動搖シ、翌廿一日川尻宿ニ至リテ又々番兵シ、同廿二

日午前三時ヨリ本日ノ当番隊ヨリ準<sup>(順)</sup>ニ熊本城へ進撃ニ及

ヒ、我隊ハ非番故ニ同五時頃川尻ヲ操出シ、熊本城ヨリ

一里程モ手前ニテ砲声烈シク相聞得、程ナク破竹ノ勢トナリ大音ヲ上ケテ城ノ西口ヨリ花岡山ヲ越、賊隊四方ハニ落城ノ躰難見得、其折味方手負・戦死等不少、同廿三日午前十時頃ヨリ迎町迄引揚、同廿四日迄退陣ス、同廿五日ヨリ三月二日頃迄同県内<sup>(大分市)</sup>鶴崎街道筋大津町エ番兵シ、

同街道ニ<sup>(阿蘇郡西端)</sup>重峠ヘ押出シニ昼夜程番兵シト雖、無何義、同五日迎町エ引揚ニ昼夜休陣ス、同七日同県内<sup>(大分市)</sup>豊岡村<sup>(植木町)</sup>ヘ台場ヲ築キ番兵セシ中田原口ニテ戦ヒ夥シク、且味方勢危

ク見得、応援五十余名進撃ニ及ヒケルカ、田原口ニ於テハ終ニ防留、味方手負・戦死トモ數名アリ、午後六時頃ヨリ豊岡村ヘ引揚番兵シ、同十八日午後六時頃ニ田原口外隊ト交代シ、直ニ進撃ニ及ヒ砲声烈シク暗夜モ白昼ノ如シ、官兵二千計リ味方七八百許リニテ互ニ勝敗アリ、

味方手負・戦死算スルニ耐ヘス、同十九日午前七時頃丸ヲ受ケ直ニ川尻病院ニ入ル、同三十日頃松橋ノ味方危

クナリ病院ヲ<sup>(益城町)</sup>木山ニ移シ、依テ木山病院ニ行、四月四日頃迄養生ヲ加ヘ、暇ノ願差出シ聞濟ノ上ニ同五日出発同十

一日帰宅療養ス、六月上旬桐野利秋官崎支庁ヲ軍務所トナシ、彼ノ所ヨリ平病ヤ手負ニテ帰宅輩トモ全快シタル

者ハ勿論、本隊帰隊或ハ官崎工出張スヘクトノ指揮ニヨリ病院ノ医師診察ノ上不得止事宿元ヲ六月十四日出発ス、同十五日加治木郷ニ於テ行進十二番中隊兵士ニ加入シ、同十六日横川郷ニ至リ同十七日同所ニ於テ半隊長ノ命ヲ蒙リ、夫ヨリ所々ヘ番兵ノ後<sup>(牧園町)</sup>蹄<sup>(暴)</sup>郷内塩シタシ温泉ヘ両三日程番兵シ、七月二日夜行進本營國分郷ヨリ応援ノ義申来リ、且出兵迅速ノ義報知アリテ同三日七時頃ニ國分郷エ着陣セシ処敗走ニ及ヘリ、<sup>(織)</sup>操引ニ退キ同所新川筋ニテ防戦ナシト雖モ終ニ川尻破レ、止事ヲ得ス敷根上段エ引揚同四日ヨリ<sup>(国分市)</sup>清水郷鈴木村ヘ番兵シ、七月十一日官軍ヨリ進撃ニナリ防禦セシカ終ニ敗軍トナリ、手負・戦死数ヲシラス、<sup>(財部町)</sup>通山村ヘ引揚ケ同十五日福山郷ヘ進撃ノ折、両足ニ弾丸ヲ受ケ直ニ都城病院ニ入、同十九日養生暇ノ願書差出タル處、聞済ニ成リテ帰宅セント思ヒシカ、郷里戦地ト成ルノ形勢ニ付、都城郷内<sup>(都城市)</sup>早水村親類之所ヘ退キ療養中又々同廿四日官軍襲來リ、同村ヘ潜伏仕居、八月三日自宅ヘ着、同四日先非ヲ悔悟シ都城警視分署ヘ帰順、尚自首候処、御糺問ノ上官軍病院エ入ル、同十二日退院願出候処、自宅謹慎被仰付、九月廿六日尚又分署ヘ御呼出、直ニ鹿児島裁判所ヘ御引渡シニ相成、再応御糺問ノ末十

月廿二日長崎臨時裁判所ニ於テ、懲役二ヶ年御申渡相成、実ニ悔悟ノ至ニ候、今般御達ニ付戦地ノ手続キ俱ニ奉書上候也、

明治十一年二月十五日

### 一五 河野悦兵衛外二名連署上申書

鹿児島県下百五大区都城郷

元士族 河野悦兵衛

右同 丸田秀二

右同 有馬靜治

私共儀

明治十年西郷隆盛変動ニ付、六月中旬頃分當詰ヨリ予備分隊長被申付、無是非相勤メ無銃隊ニテ火用心旁取締メトシテ区内通口張番兵交代詰メ致シ居、尤官軍工抗敵ハ壹度モ仕不申候、七月廿四日官軍御進入之節、川村參軍殿エ自首帰順仕候処、御聞届之上放免相成居申候間、尚又十月上旬頃区内分署ヨリ御呼出ニ付、前文ノ通り実意申上候、此段相違不申上候也、

明治十一年二月十四日

## 一六 篠崎正大上申書

鹿児島県第三区三小区

元士族

篠崎正大

私儀

製<sup>(制)</sup>ス、我此時ニ第四大隊弐番中隊右小隊長ノ命ヲ蒙リタ  
リ、然後城原戰爭三四度ニ及ト雖、是皆勝利ヲ得テ銃器・  
彈薬等ヲ分捕ルコト夥シ、後田原坂ノ味方敗北シテ植木  
迄引揚ケシニヨリ山鹿ノ兵モ亦止ムコトヲ得ス南田島村  
エ引揚ケ此所ニテ防戰イタセシニ熊本エノ本道相敗レ、  
鳥ノ巣村迄官兵進入セリ、其時漸クシテ鳥ノ巣村ヲ取返  
(西合志町)

盛等ヲ暗殺スルノ内命ヲ川路大警視ニ受テ帰県セリ、因  
テ隆盛政府エ尋問ノ訳有之、旧兵隊ノ者ト共ニ上京可致  
旨鹿兒島県令大山綱良ヨリ尚雄等ノ口供ヲ相添布達ス、

是ニ因テ其ノ口供ヲ只管信シ、共ニ上京センコトヲ望メ

(翁野利秋威長)

リ、然ル如(第四大隊)第弐番小隊押伍ニ編入シ、明治十年二

月十六日鹿兒島ヲ出發シ同廿三日熊本ニ至リシニ豈図ヤ

既ニ戰爭相始リ、礮銃ノ音烈クシテ市街火起リ遠近動搖

セリ、翌廿四日植木町ニ至リ一泊シテ山鹿ニ進軍シ城原

ニ台場ヲ築キタリ、然ル後チ南ノ關進軍ノ賦リニテ出發

セシニ途中(三和町)永野原ニテ官軍ノ防禦ニ遇ヒ戰爭殆ント一昼夜

夜ニ及フト雖トモ遂ニ抜クコト能ハス、此時我隊長山口

孝右衛門戰死セリ、押伍兵士夫卒ニ至ルマデ殆ント三十

名ノ死傷アリ、夫ヨリ後再ヒ山鹿ニ帰り小隊ヲ中隊ニ編

出テ頻リニ狙擊シ台場ヲ乗リ取ルコト三四ヶ所、銃器・

弾薬・刀・服類分捕スルコト其數ヲ知ラス、然シテ此嶮ヲ

守ルコト六七日ニシテ外隊ト交代シ、我八番ハ熊田ニ向

フ途中宗太郎越ノ嶮ヲ官兵ニ奪ハレ、味方難儀ノ模様ヲ

見受タルニヨリ嶮ヲ攀チ忽然官兵ノ背ニ突出タリシニ、

官兵狼狽シ銃十挺位、弾薬夥ク取残シ谷ニ落チテ引退ケ

リ、故ニ我カ隊ハ臨機応援シタルニヨリ外隊ト交代シ、直

チニ熊田ニ向フ、夫ヨリ八戸村ニ行テ一泊シ梓崎ヲ取り

〔全自町〕水ヶ谷ニ陣スルコト二旬位ニシテ終ニ保ツコト能ハス、

梓崎迄退キ台場ヲ築キ守ルコト十五六日ニシテ官兵延岡

ヘ進入シタルノ報知アリ、因テ彼ノ地ヲ再ヒ取ラスンバ

叶フマシト本營ノ下知ニ依リ峠ヲ引揚ケ熊田ニ至リ、暫

時シテ長井村〔北川町〕ニ至リシニ、早延岡ノ官兵襲来リ味方甚タ

難儀セリ、斯スル内四方山谷皆官兵ト成レリ、味方ハ狭隘

ノ間ニ充塞シ四方ノ弾丸輻湊シ実ニ切迫ノ機会ナリ、然

ルニ一夜隆盛等畠ヲ破出ルノ議ヲ決スルト聞キ、即時ニ

其當ニ至レハ則チ一人モ無シ、然ル故其跡ヲ尋ネ漸ク洩

レ出ルコトヲ得テ数回官兵ニ阻マレ、或ハ打破リ、或ハ

路ヲ避ケテ溝邊迄至リシニ、身躰疲労シ暫時民家ニ休息

シ、道ノ順逆ヲ悟リ官軍哨兵場ニ至リ、前非悔悟シ帰順ノ旨申述候處、加治木警視分署ニ護送セラレ、夫ヨリ宮

崎エ送ラレ該地裁判所ニ於テ悉曲申上候也、  
〔委〕

明治十一年二月十四日

## 一七 伊丹親衛上申書

鹿児島県第五十九大区一小区

加治木郷三十六番地

元士族 伊丹親衛

私儀

兼テ私学校へ入校罷在候処、西郷等ヨリ政府へ尋問之筋

有之、上京可相成、因テ旧兵隊之者共隨行可致段、鹿兒

島県令大山綱良ヨリ中原等之口供ヲ相添タル布達書、同

郷受持区長ヨリ承知致シ居候処、明治十年二月十三日区

長ヨリ罷出候様申來リ、区長役所へ罷出候処、隊伍之名

簿ヲ以テ右通承知可致段承リ一見スルニ、第六大隊六番

小隊編入、小隊・半隊・分隊長・押伍并四役場等ノ肩書ア

リ、依テ私儀モ半隊長之肩書アルニ付、再三相断リ候得

共、更ニ採用無之、致方ナク其意ニ隨ヒ、同十五日郷里

出發、同廿日熊本県下川尻宿へ着、同夜砲発致シタル者

アリ、直ニ出張致シ候處、外隊ノ者共ヨリ捕縛致シ候者

アリ、何様之者ニ候哉糺方ニ及ヒ候処、熊本鎮台ヨリ一  
中隊川尻ヲ襲ヒ来リ候段白状致シタル旨承リ候、然ル処  
同廿二日未明ヨリ熊本旧城裏手段山ト申処へ進撃、烈戦  
致シ候処、交代相成リ春日町ヘ引揚ケ、翌朝木葉宿(玉東町)へ出  
張一泊、又翌朝高瀬川ヘ進撃終日ノ戦争夜ニ入り植木宿  
へ引上ヶ同所ヘ三日位休兵、夫ヨリ豊岡ト申処へ出張、  
四五日哨兵致シ、官軍ヨリ進撃ニ相成リ候得共、終ニ官  
軍引退キ、夫ヨリ熊本ヨリ交代相成リ旧城下高麗門ヘ哨  
兵致シ候処、川尻口相敗レ木山ト申処へ引上ヶ失(植木町)  
(熊本町)ヘ出張三四日位哨兵致シ、官軍ヨリ進撃相成リ候得共、  
勝敗相分ラズ防戦シ、同夜木山ヘ引上ヶタリ、翌朝矢部  
ノ様引上ヶ、夫ヨリ人吉ヘ引上ヶ相成リ又翌朝鹿兒島県  
下蒲生郷(蒲生町)佐山ト申処へ哨兵トシテ帰県セリ、此所戦ナシ、  
又候人吉大木場(大畑人吉市南部)へ出張可致段承リ同所發足(日ハ失念)大木場ヘ  
着致シ居候処官軍ヨリ進撃ニ及ヒ味方敗軍シ飯野郷迄引  
上ヶタリ、引続キ小林郷ヘ引上ヶ相成リ候、其後又々飯  
野ヘ進撃シ候得共勝敗不決、夜ニ入り同所八幡馬場(えびのむち)ヘ引  
揚タリ、同処ヘ三日程哨兵致シ其ヨリ加治木郷ノ様引上  
ケ候処、直様末吉郷へ転陣、(郡北町)市成郷へ官軍進入ニ付進撃

鄉へ進撃ニ及ヒ候処、兩日之戦争ニテ大勝利ヲ得タリ、  
直ニ末吉郷へ引上ヶ暫ク有テ岩川郷辺へ官軍進入ニ付、  
又候進撃相成リ候処、是以勝敗ナシ、同夜末吉迄引上ヶ  
タリ、翌朝官軍ヨリ不意ニ進撃セラレ味方混雜シ終ニ敗  
走シ、我隊散乱致シ候故、外隊へ隨從致シ居候処所々相  
敗レ、終美々津川迄引上ヶ此所ニ於テ我隊少々相纏リ福  
瀬村(東鶴町)へ哨兵致シ、折節山陰村哨兵相敗レ味方之後ヲ取切  
ラレ、又候隊伍散乱シ其成リ味方へ寄ル事能ハズ帰郷致  
シ、加治木郷警視分署ニ於テ、方向ヲ相誤リ候次第先非  
悔悟、帰順自首仕居候処、翌日鹿兒島警視出張所ヘ護送  
相付キ御引渡ニ相成リ、同日裁判所迄御引渡シ相成リ、  
夫ヨリ築地へ入監罷在候処、同九月一日味方再度城山ヘ  
進入ニ付、外ヨリ何者共相分ラズ者監倉ノ戸ヲ開キ候ニ  
付、同日加治木分署へ馳帰リ再度自首仕候処、同所戸長  
補監ニテ戸長役所ヘ拘留セラレ、夫ヨリ護送相付キ官崎  
警視出張所ヘ御引渡シ相成リ、同所監倉入監罷在候処、又  
候長崎御差送リ相成リ同所裁判所ニ於テ懲役二年之御処  
分相成リ候次第ニ御座候、此段申上候也、

明治十一年二月十四日

# 一八 前田軍左衛門上申書

鹿児島県第五十九大区二小区

加治木郷

元士族 前田軍左衛門

私儀

兼テ私学校へ入校罷在候処、西郷隆盛等ヨリ政府へ尋問ノ筋有之、上京相成リ因テ旧兵隊ノ者共隨行致スペク段、鹿兒島県令大山綱良ヨリ中原尚雄等ノ口供ヲ添タル布達書同郷受持区長別府晉介ヨリ承知致居候処、明治十年二月十三日区長ヨリ罷出候様申来り、直ニ区長役所へ参候處隊伍ノ名簿ヲ以テ右通り承知可致段承リ一見スルニ、  
(越山休蔵隊長)第六大隊四番小隊編入、小隊・半隊・分隊長・押伍并四役場等ノ肩書アリ、依テ私儀モ小隊長ノ肩書アルニ付再三断申出候得共採用無之、致方ナク其意ニ従ヒ同十五日郷里出立、同廿日熊本県下川尻宿へ着、同夜砲發致シタル者アリ、直ニ出張致シ候処、外隊ノ者共ヨリ捕縛致シ候者アリ、何様ノ者ニ候哉糺方ニ及候処、熊本鎮台ヨリ一中隊川尻ヲ襲ヒ來リ候段日状致シタル旨承リ候、然ル処同廿一日夕方ヨリ同県下高橋ト申処エ出張、翌廿三日京

町口へ出張、夫ヨリ三間町口へ出張、此三ヶ所戦ヒナシ、夫ヨリ同県下高瀬ト申処へ出張、此地ニ於テ初テ戦争ニ及ヒ候處味方敗走シ同日引揚ケタリ、日ハ失念、翌日ヨリ西三日ノ間休兵致シ豊岡村ト申処エ哨兵トシテ出張致シ居候処官軍ヨリ進撃相成候得共、官軍引退キ相成、此処ヘ西三日位哨兵致シ間モナク熊本旧城下ヨリ交代相成リ明治橋口へ哨兵致シ居処、川尻口敗走ニ付木山ト申処ヘ引揚ケ、夫ヨリ武宮ト申処エ三四日位哨兵中官兵ヨリ進撃相成候得共勝利無之、同夜木山エ引上ケ翌朝矢部ト申所へ引上ケ、夫ヨリ人吉ヘ引上ケ相成リ居、間モナク鹿兒島県下加治木郷海岸ノ哨兵トシテ帰県セリ、同年五月三日頃着、暫ク哨兵致シ候得共戦ヒナシ、夫ヨリ未吉郷エ引上ケ相成、  
(柳北町)市成郷へ進撃、我隊ハ応援隊トナリ候得共勝敗相分ラス故戦争致サス、同夜引上ケ大崎郷へ進撃西日ノ戦争ニテ味方勝利ヲ得、翌日未吉迄引上ケ其後岩川郷近辺へ官兵進入、又候進撃相成候得共勝敗無之候、同夜引上ケ居候処翌朝官兵ヨリ不意ニ進撃相成、味方敗走ニ及ヒ隊伍散乱致シ、夫ヨリ相纏ラス故外隊へ隨從候処、所々相破レ終ニ美々津川迄引上ケ相成リ、同処ニテ我隊少々相纏リ福瀬村ト申所へ哨兵致シ居候得共戦ヒナ

シ、折節山陰村へ出張ノ哨兵相破レ、官軍味方ノ後ヲ取  
切り候故、又候散乱シ味方へ寄ルコト相叶ハズ、夫ヨリ帰  
郷致シ、同所警視分署ニ於テ、方向ヲ誤リ候次第先非悔  
悟、帰順自首仕候訣ニ御座候、此段申上候也、

但器械・彈薬掠奪ニハ関係仕ラス候、

明治十一年二月十四日

### 一九 松下兼信上申書

鹿児島県第六十五大区一小区

財部(鶴)郡

元士族

松下兼信

私儀

### 二〇 宮春岩次郎上申書

鹿児島県下第三大区十五番小区

四十六番地

平民

宮春岩次郎

私儀

兼テ私学校ヘハ入校不仕候ヘトモ明治十一年二月西郷隆盛  
暴発之後、警部奈良原喜角差入、戸長伊集院良助ヘ脅迫、  
良助ヨリ戸長役所ニテ出兵致候様申付候ニ付、三月廿八  
日出立、高原郷へ一泊、翌日同所出發飯野郷(みのむち)へ出テ、四  
月一日肥後人吉町へ着陣同所へ三日程滯在、夫ヨリ熊本  
二本樹町へ出陣、同所ニテ遊撃十番小隊長和田正之丞ヨ  
リ同隊半隊長被申付、二本樹町へ番兵仕、四月上旬ト覺

ヘ同所引揚ケ夫ヨリ求摩(くま)ノ内江代ト申所へ六日程滞陣、  
同所ニテ奇兵一番小隊ニ相改メラレ鹿兒島士族有馬彦七  
ト申人奇兵本當ヨリ奇兵一番小隊半隊長被申付、私儀同  
隊ノ兵士へ被操下、夫ヨリ日向國富高新町(ひなた)へ一週間位番  
兵仕リ、夫ヨリ豊後国竹田ト申所へ出陣、五月廿六日同  
所古城ニテ一戦之節手負、同廿七日竹田出發延岡病院ヘ  
入院、翌廿八日同所出立高岡病院ヘ差送ラレ六月二日帰  
宅養生中、八月十日都城警視所ニテ降伏仕候、外ニ戦地  
之形状等承知之儀無御座候也、

明治十一年二月十四日

明治十年二月十六日四番大隊大小荷駄桂四郎附屬ニテ鹿  
兒島県下出發仕、同月廿三日熊本県下へ着足、翌廿四日  
植木町へ差越一日滯在シ廿六日山鹿へ転シ廿三日位滞陣  
(梶野利秋隊長)

仕候処、各隊山鹿ヲ引揚候節ワイフ町へ一日滞陣シ、翌

(銀府、薬治市)

日熊本春竹村へ差越シ同地へ十五日位滞陣シ、夫ヨリ矢部町へ引上ヶ爰ニテ七日位滞在、同所ヨリ人吉へ引上ヶ之後チ製作方相勤候様大小荷駄ヨリ被申付、夫ヨリ日向國延岡へ転陣シ三ヶ月位同地ニテ彈薬製造仕、同地ヲ七月月中旬引上ヶ長井村へ差越申候処、官軍ヨリ四方御取囲ニ付同所ニ於テ降伏仕、宮崎櫻倉へ御差送リ同所裁判所ニテ放免帰宅仕居候処、西郷隆盛等鹿兒島へ襲來リ賊本營桐野利秋ヨリ人夫相募候様申付候ニ付、人夫二十名計リ相募リ差出シ、又本官ヨリ敵ト見受候者ハ悉ク捕縛可致旨被達候ニ付、官軍夫卒一名捕縛仕、西郷隆盛等戦亡之後帰順自首仕候、大小荷駄附屬并弾薬製造方相勤候ニ付戦地之形況等心得不申候、此段申上候也、

明治十一年二月十四日

## 二 杉崎喜次郎上申書

鹿兒島県第二一大区小拾区

五拾二番地

平民

杉崎喜次郎

## 三 大内田七兵衛上申書

鹿兒島県第二一大区五小区

郡山郷

元士族

大内田七兵衛

私儀

明治十年二月中旬西郷隆盛上京出発之後五月上旬鹿兒島県下へ官軍御差入之節、振武隊本官貴島清ヨリ本官附屬給養被申付相勤メ、鹿兒島ヲ各隊引揚ケ之節本官ヲ見失ヒ、致方ナキ処ヨリ阿多郷へ家内立退キ居候場所迄差越シ候、鹿兒島鎮定之上帰宅仕居候処、西郷隆盛等鹿兒島へ襲來リ旧城跡ニ相拠リ振武隊本官ヨリ出頭可致旨申來リ早速差越申候処、敵軍ト見請候ハ、悉ク可切捨旨貴島清ヨリ被相達候ニ付、再ヒ振武隊本官へ相付居、然ルニ元南林寺前ニ於テ官軍体之者一人切殺シ申候、隆盛等戰亡致候ニ付再ヒ阿多郷へ差越居候処、該地ニテ捕縛相成申候、給与方相勤候ニ付戦地之景況承知不仕候也、

明治十一年二月十四日

私儀

兼テ私学校へハ入校不仕候ヘトモ明治十年二月西郷隆盛上京出発之後警部野崎次郎戸長役所へ差入、壯年之者ハ出兵候様申聞ニ從ヒ、四月廿一日出立肥後人吉町へ着二日程滯在、第拾三番小隊兵士へ加入シ、同廿六日頃同所引揚ケ鹿兒島県下加治木郷へ着、於同所四五十日程番兵仕居候處、日向国延岡表へ出張候様別府(晋介)新助ヨリ申付ニ付足、同所ニテ振武十一番中隊ニ編製(制)相成、左小隊分隊長被申付、同所宮ノ浦(北浦町)へ番兵罷在候内、長井村ニ於テ西郷隆盛敗走之趣承リ竊ニ罷帰り、九月八日自郷ニテ降伏仕候、番兵ノミ相勤候ニ付戦地景況承知不仕候、番兵ノミ相勤候ニ付戦地景況承知不仕候也、

明治十一年二月十四日

### 二三 有馬嘉兵衛上申書

鹿兒島県第二拾壹大区五小区

郡山郷

有馬嘉兵衛

私儀

兼テ私学校エハ入校不仕候(傳)共、明治十年二月西郷隆盛上京出発ノ後、警部野崎次郎戸長役所エ差入、壯年之者

ハ出兵候様申聞ニ從ヒ、四月廿一日出立求磨人吉町エ着二日程滯在、第拾三番小隊兵士エ加入シ同廿六日頃同所引揚ケ、鹿兒島県下加治木郷エ着、同所ニ於テ四五拾日程番兵仕居候處、日向国延岡表エ出張候様別府新助ヨリ申付ケニ付足、同所ニテ振武拾壹番中隊編製相成、右小隊分隊長被申付、同所宮ノ浦へ番兵罷在候内、長井村ニ於テ西郷隆盛敗走之趣承リ竊ニ罷帰り、九月八日自郷ニテ降伏仕候、番兵ノミ相勤候ニ付戦地景況承知不仕候也、

明治十一年寅二月十四日

### 三四 東條吉左衛門・川崎佐一郎連署上申書

鹿兒島県下第五拾二大区三小区

帖佐郷三拾町村百十七番地

元士族

東條吉左衛門

同県同大区同小区同郷鍋倉村

百六十二番地

元士族

川崎佐一郎

私共儀

去明治十年二月西郷隆盛暴挙ノ際、区長別府晉介脅迫ニ  
ヨリ行進拾番中隊半隊長ニ編入セラレ、同十五日出立、

熊本県エ出兵、同廿二日該城下ニ於テ戦争仕、其日東條

吉左衛門負傷、翌廿三日ヨリ川崎佐一郎平病相煩、兩人

共三十日余り病院ヘ引籠療用仕、漸ク快氣ヲ得テ本隊へ

鹿兒島県宮之城郷住  
元士族  
指宿貞篤

私儀

帰隊仕居候處、無程鹿兒島エ可引帰旨本當ヨリ承知仕、  
直様鹿兒島ノ様引退吉野村滯陣ノ所、当地ノ戰爭モ味方  
敗走ニテ同県下帖佐郷ニ引退居候所、官軍御追撃ニ付、  
先邦ヲ悔悟シ同七月三日一中隊三百拾余名ヲ引円、右帖  
佐郷ニ於テ第四旅団會我少將・坂元少佐エ帰順自首仕候  
所、則降伏人取扱且賊地ノ探偵方等被仰付、帖佐・加治  
木・國分・日當山・清水・福山・都ノ城・山ノ口等其他諸  
郷工奔走仕、帰順ノ後ハ同旅団參謀部エ一向被召附相勤  
居候所、西郷伏誅兵乱及鎮定候故、私宅エ罷帰謹慎仕居候  
所、警視派出所ヨリ御呼出、始出兵中ノ拳動而已御聞糺  
相成、右帰順ノ情実ヨリ衷効相立候次第申上候得共御採  
用無之、遂ニ長崎県工被差廻、九州臨時裁判所ニ於テ懲  
役二年被仰付候事、

明治十一年二月十四日

明治十年丑五月居郷戸長ヨリ川内表エ出兵致候様申聞ニ  
従ヒ、副戸長佐々木八郎次同道ニテ同所エ着、直ニ佐々  
木八郎次ヲ以テ本當エ着ノ段届ケ出候處、本當ヨリ出頭  
可致旨ニ付罷出候處、勇義隊二ノ小隊々長申付ラレニ付  
同所ニ二十日位滯在、然ル処出水郷エ官軍御進入ニ付、  
阿久根郷エ番兵可致旨本當ヨリ申来、因テ直ニ出軍致シ  
同郷田代ト申所ニ番兵致シ數日滯陣、其後病氣差起川内  
病院エ差越養生中、官軍同郷迄御進撃ノ趣ニ付、直ニ帰  
郷潛伏仕居候處、戸長・副戸長等帰順致候段承リ候ニ付、  
私儀モ直ニ帰順自首仕候處、自宅謹慎申付ラレ候ニ付慎  
ミ罷在候、然ルニ九月中旬頃御呼出ノ上鹿兒島裁判所ニ  
護送ニ相成候、右次第ニテ戰地形況存不申候也、

明治十一年二月十四日

## 二六 津崎直介上申書

鹿児島県下佐多郷第七十九大区

小一区

元士族

津崎直介

私儀

明治十年二月中旬頃西郷隆盛暴発之後四月下旬頃区長士橋休五郎巡廻ニテ出兵可致旨達相成、不得已出兵仕候処、福山本營伊東正吉ヨリ切隊三番分隊長被申付、五月上旬頃人吉エ<sup>(操)</sup>演出相成十日位滯陣仕候折柄病氣相煩、賊徒病院エ入院養生、同下旬頃帰郷仕七月下旬頃出張御分署エ帰順御願申上置候処、九月下旬頃小根占警視分署ヨリ呼出之上御差留相成申候、此段申上候也、

明治十一年二月十四日

## 二七 津崎英吉上申書

鹿児島県第七十九大区一小区

佐多郷住居

元士族

津崎英吉

去ル丑二月中旬頃ヨリ西郷隆盛暴発ニ付福山本營ヨリ出軍之段申來候間、出軍可致旨戸長ヨリ度々達シ有之候得共氣服不仕差扣居申候処、壯健之者ニテ出兵無之銘々ハ忽テ擊捨可致等之趣又々申來候間、誰人ニ不限出兵無之候テハ不相叶義ニ候間、依テ只今ヨリ出兵可致旨右役々之者共ヨリ達有之、不得止事五月六日發足仕、同八日福山へ着本營ニ所申出候処、切隊十三番分隊長被申付、度々断申候得共取上無之、無是非相勤居申候処、五月下旬人吉ヘ演出相成リ同所<sup>(五木村)</sup>鶴ヶ峰ト申処へ固メ居候得共、同三十日夜同所大久保村へ参り、同三十一日官軍御進入ニ付砲発仕候得共、終ニ火薬尽果、兵士散々ニ打敗ラレ、私儀ハ監軍ニ相付同所皆越ト云処へ引退キ、六月一日米良ノ様差越<sup>(西都市)</sup>シ銀鏡ト云所へ番兵仕候得共、小川相破レ延岡へ引取、鳥川ト云処へ又番兵仕居、八月十二日同所平岩ニ於テ降伏仕、宮崎裁判所ニ於テ自宅謹慎被申付帰郷之処、九月上旬頃小根占警視分署ヨリ御用有之罷出候処、裁判所ニテ十月廿二日御<sup>(延)</sup>所分相成リ申候、外ニ戰地之形狀承知之儀無御座候也、

明治十一年二月十四日

二八 加世田一二上申書

鹿兒島県第九十六大区二小区

日向国那珂郡下田島村

元士族 加世田一二

私儀

二九 菊池繁上申書

鹿兒島県第九十六大区二小区

下那珂郡百八十三番地居住

元士族 菊池繁

私儀

昨丑ノ二月下旬頃旧佐土原藩三番小隊ノ監軍ニ挙ラレ候  
得共、動搖ノ始末方向等モ定メ兼且不敏ニシテ一軍ヲ監  
スルコト能ハス、依テ副区長森權十郎エ辞職申立候處、右  
職名ハ免シ候得共、中原尚雄外數名ノ口供ヲ以テ圧シ免  
モ角モ隊ニ附屬シ兵ノ勤隸等可成監督可致旨申候ニ付、  
同廿八日頃出発、宮崎ニ於テ貴島清ノ隊ニ合併シ、三月  
八日頃同所出発同十三日熊本エ着、本營ノ差団ニヨリ午  
後九時頃出町ニ操込ミ、<sup>(續)</sup>同十四日午後十一時頃同所操出  
シ同十五日田原坂ニ進軍、砲戦勝敗不分、午後四時頃抜  
刀討入候處、官兵敗走、午後六時頃味方兵ヲ纏メ各隊持  
場ノ台場エ引揚昼夜砲戦、同十七日午前十時頃官兵ヨリ  
頻リニ大小砲ヲ放チ、旧佐土原三・四番小隊ノ台場エ迫  
リ苦戦、味方彈薬尽キ防キ兼、既ニ引揚ントスルトキ手  
足ニ銃創ヲ蒙リ、直ニ川尻病院ニ入り四五日治療相受居

候處、佐土原旧知事父子來県説諭ノ趣承知イタシ候ニ付、  
不敢同所出発ニテ同廿三日頃帰県、宿元ニテ治療イタ  
シ、官軍御進入ヲ奉待、八月一日帰順自首降伏仕候也、  
明治十一年二月十四日

候處、佐土原旧知事父子來県説諭ノ趣承知イタシ候ニ付、  
不敢同所出発ニテ同廿三日頃帰県、宿元ニテ治療イタ  
シ、官軍御進入ヲ奉待、八月一日帰順自首降伏仕候也、  
明治十一年二月十四日

明治九年十一月頃郷地風俗頽敗シ隨テ人民懈惰ニ流ル、  
ヲ憂歎シ、有志輩等ト相謀リ自立社ト云ヲ設立シ、中年  
以上専雇間職業アル者ヲ臨時会聚シ、読書或ハ議会ヲ設  
ケ、上ハ朝旨ノ在ル所ヲ詳ニシ、下ハ人民義務上ノ事ヲ  
研究討論罷在申候處、明治十年二月上旬頃鹿兒島県宮崎  
支厅官員小牧秀發ト云者宮崎ヨリ帰区致、自立社々長島  
津啓二郎ヲ伴ヒ自立社ヘ相会シ、即西郷隆盛以下政府ヘ  
尋問之事情等粗相嘶候處、社員各意見ヲ吐露シ、名義ノ  
在否ヲ討論致候ヘトモ、自分ハ其名義ノ在ル所ヲ詳悉ス

ル能ハス狐疑罷在申候折柄、村田正宣・野村正道ト云者

之義無御座候也、

明治十一年二月十四日

社長島津啓二郎ノ命ヲ受ケ、事実精確ヲ要ンカ為メ鹿兒

島ヘ行クトノ事ニ決シ、自分モ実地ノ景況ヲ探ンカタメ

野村等ニ陪シテ鹿兒島ニ行キ、野村等ハ直ニ県庁ヘ出張

シ事実県官ヘ相尋候処、則各府県鎮台ヘ懸合ノ書面相示

候由野村ヨリ承知致候、野村等即日鹿兒島出発、昼夜道

ヲ倍シテ帰区致候、自分ハ逆旅ニ罷在候処、偶三ニ郷

朋相來リ、這回ノ事実ハ不明瞭候ヘハ妄ニ輕挙躁行致候

テハ不宜様忠告致候ヘトモ、自分ハ西郷等ノ為業モ万々

無謂事ニ有之間敷トモ思慮シ、自ラ晰断スル能ハス、鬱

然狐疑罷在申候処、自分モ知朋ト俱ニ鹿兒島出発、福山

ト申所迄参り候処、遇々<sup>(佐土原隊縦裁)</sup>島津啓二郎兵隊ヲ引率シ来ルニ

会シ、即啓二郎ヨリ自分ハ副監軍ニ職タル旨承知致候ヘ

トモ頑魯勇劣固ヨリ其職ニ非サル趣一応辞退モ致候ヘト

モ強テ懲憲ニ因リ、止ヲ得ス其場ヲ勤メ罷在申候、自分

ハ該隊ト俱ニ再ヒ鹿兒島ニ行キ、夫ヨリ熊本県下肥後国

<sup>(熊本市西部)</sup>小島ト申所ヘ二三日海岸警護罷在候処、鹿兒島賊徒征討

ノ御下命有之由承知致候ニ付、実ニ不相濟義ト始テ懺悔

シ、兵器ヲ廢棄シ直ニ帰区罷在申候、其後佐土原ヘ官軍

御進入之節、前非悔悟自首仕候、外ニ戰地ノ形状等承知

### 三〇 大始良義昌上申書

鹿兒島県第九拾五大区三小区

日向國諸縣郡綾鄉北俣郵

元士族 大始良義昌

私儀

昨丑三月上旬鹿兒島士族貴島清日向國宮崎工出張相成、

西郷隆盛以下政府工尋問ノ儀ニ付先日発足、其趣意ハ先

般當県令ヨリ布達有之タル通之儀ニ付、今般当地ニ於テ

壯年ノ者ヲ募兵相成候ニ付、宮崎之様出張致候様戸長等

エ申来リ候段、該役ノ者ヨリ致承知、何レ筋アル儀ニ付

男子タルノ義務ト存シ、同月八日頃宿許発足宮崎工出張

候処、七番小隊半隊長被申付、同九日頃ヨリ宮崎発足肥後

熊本工同十四日頃着、本當工届出候処、長六橋エ番兵交

番被申付、四月中旬頃迄番兵仕居候処、川尻味方敗軍ニ

テ熊本迎町迄官兵襲来リ候ニ付、暫防戰候得共味方敗軍

ニテ<sup>(益城町)</sup>木山之様引揚、同所竹宮原工番兵被申付、同地ニテ官

兵四方ヨリ襲來リ、烈戦ニテ味方死傷不少、敗軍ニテ総隊木山ヨリ矢部エ引揚、其後病ニ罹リ馬見原病院エ入、

(暮陽町)

四月下旬養生暇ニテ帰県、五月下旬頃桐野利秋宮崎エ出

張相成、手負・平病等ニテ帰区イタシ居全快之者ハ總テ

募兵相成候ニ付早々同地エ出張候様廻達有之、若募兵ニ

不応者ハ敵ト見微候旨被達、快氣仕居候ニ付宮崎エ出張

届出候処、宮崎壹番隊給養被申付、五月下旬ヨリ宮崎発

足延岡エ出張、同地海岸エ番兵被申付、同所エ八月上旬

迄番兵仕居候内、中隊編制有之、小隊長被申付候ニ付、

一隊ニ指揮スル不能ト存シ辞職申出候得共聞届無之、依

テ相勤居候処、高千穂筋味方小勢ニテ応援トシテ操出候

(延岡市)

様達相成、八月十四日頃野田ト申所エ操出同所ニテ戦争、

味方敗軍ニテ稻葉崎ト申所エ引揚、翌十五日頃同所ニテ

大砲合戦ヲ以テ進撃ノ令アリ、依テ合戦ニ從ヒ進撃、官

兵台場近ク進入烈戦候處弾薬尽キ味方死傷不少、終ニ敗

軍ニテ隊中離散、僅四五名ニ相成長井畠ト申所エ引揚、

同十七日前非悔悟、第四旅團エ自首降伏仕候也、

明治十一年二月十四日

### 三 有馬純信上申書

鹿兒島県下日向国都城百五大区  
壹小区拾七番地

元士族

有馬純信

私儀

去ル丑年西郷隆盛変動ニ付戸長差支候処ヨリ六月中旬戸

長仮リ役被申付、然処区内壯年之者共出兵相成居候ニ付、

跡家内女童子等ニ罷成候モ不少候ニ付、火用心旁取締ト

シテ旧駅所エ出席ニテ夜廻リ等為仕申候処、尚又右為取

締残リ、病身又ハ十三歳ヨリ六拾歳マデ予備隊立付相成

リ、無銃隊ニテ区内通口張番等交代相成候処、右予備隊監

軍ト相唱候様分當ヨリ致承知相勤メ罷居候、敵共異論之

訳有之辞職願出差扣罷居申候、七月廿四日官軍都城郷エ

御進入相成候ニ付、同廿七日川村參軍殿エ帰順奉願候処

御聞届相成、官軍四旅團本部兵糧并弾薬至急運送方ニ付、

人馬方二百人長承知仕、直様山ノ口郷エ出張、宮崎ノ様運

送方成就仕、月給一月ニ一円五拾錢宛被成下帰郷仕候処、

出張県庁ヨリモ区内ニテ人馬方相勤同給等被成下候、尤

区内混雜之折柄ニテ保長被申付相勤罷居申候、十月十日

分署ヨリ御用有之、予備隊監軍ニテ帰順書差出候様承知仕差出置申候処、十月廿二日長崎裁判所ニテ御处分相成申候、右旁事件ニ付戦争之次第全ク相分リ不申候、此段相違不申上候也、

但分署工帰順書差出候節ハ連名ニテ差上候様御沙汰ニ付、官軍工御奉公申上候儀申渡ニ御座候、

明治十一年二月十四日

### 三一 宮野豊治上申書

鹿児島県第廿七一大区小一区

永利

元士族

宮野豊治

私儀

### 三二 薩谷英孝上申書

鹿児島県下九拾九大区三小区

延岡住

元士族

薩谷英孝

私儀

シ居候處五月一日頃又候給与役ニ帰役致居候内、病氣相煩五月廿日頃人吉病院へ入院仕、同六月八日養生トシテ入湯之願申出帰郷イタシ、腫物弥相重リ朝夕ノ寝起等モ不調様罷成候央ニ、帰順可仕旨承知仕、直ニ八月二十日頃水引郷出張分署へ帰順奉願候儀ニ御座候、右ハ出足ノ砌ヨリ戰場ノ事実右之通御座候間此段申上候也、

明治十一年二月十四日

元來私学校へ入校不仕候ヘトモ西郷隆盛上京出発ノ後、鎌田十太郎(川内市) 永利郷へ出張、出兵可致旨申聞ニ從ヒ、明治十年三月下旬頃出足仕、大口郷ニ於テ邊見十郎太指揮ヲ以テ九番大隊八番小隊ニ加入シ給与役相勤居、分隊長ニ転シ、四月五日頃八代妙見山ニ於テ戦争イタシ、夫ヨリ(八代市占越) 櫻馬場敗走才木村へ引揚ケ、同所并ホコノ峠辺番兵イタ

鹿児島県二等属奉職官崎支厅在勤罷在候処、去明治十年二月五日方ト覚、鹿児島表穩カナラサル趣キ承知ノ処、六日朝元十等属長倉訥ナル者、大山綱良ヨリ同人エノ私書持參私宅へ参リ為見候ニ付披見シタルニ、西郷隆盛等政府工為尋問旧兵隊ヲ召連上京可致旨届出、於県庁傍観ノ外他事無之趣キ認有之、不容易事ニ存居候処、同日昼元

十二等出仕寺田盛之外一人出張、前段ノ義相話シ、暗殺

ヲ企テシ者モ召捕、及糺問追々白状、右ニ付テハ支庁在  
金且貢金未納ノ分ハ早々取立廻金スヘキ旨県令ヨリノ達  
有之、出張ノ旨申聞ニ付未納ノ各区エ官員派出取計ヒ、  
然ルニ佐土原・飫肥等ハ隆盛エ隨行依頼トシテ罷越タル  
ヤニ承リ、独リ延岡ノミ隨行セスシテハ如何ト存、大山  
綱良ヨリ長倉認エノ文通大意ヲ書取、区長塚本長民外一  
名宛ニ申遣シ、且大和田傳藏貢金督促出張ニ付、長民エ  
尚又申遣シ佐土原・飫肥等ハ已ニ多人数鹿兒島ヲ向ケ出  
足ノヨシ、延岡ヨリハ為何返報モ無之故、大島景保ヲ遣  
シ候處、無程官崎ニ馳集百余名ニ及び、景保・傳藏モ帰  
リ来ル、右ノ内三名隨行依頼ノ為メ鹿兒島表エ罷越タレ  
トモ已ニ出発ノ前日ニテ隨行不叶趣ニテ帰り来レリ、飫  
肥人數ハ日向國通リ熊本エ出兵ノヨシニテ清武新町迄罷  
越シタルヨシ相聞エ、延岡人數モ高千穂通リ熊本表ニテ  
西郷隆盛ニ追付キ隨行可然ト衆決、大島景保エ隊長勤ク  
レヘキ旨一統ヨリ依頼スト雖モ辞退ニ及ヒ、因テ是非頼  
ミクレヘキト惣代兩人罷越依頼ニ付同意イタシ、衆望ノ  
コト故可相勸旨景保エ相勸候處承引イタシ延岡ヲ向ケ引  
取候、同八日頃本府官員伊藤祐國、西郷隆盛等上京云々ノ  
大山綱良エ未タ面会シタルコト無之ニ付、共ニ鹿兒島表

達ヲ持出張、各区エ及巡廻、同廿九日頃細島港エ猛春艦  
(日向市)  
御入港、区長御呼出シ有之候得共出艦致サス、巡查トシ  
テ人数差出シ吳候様同区長ヨリ延岡表エ申遣シ、人民ニ  
於テモ動搖ノ旨、三月一日正午ノ頃報知有之、無名ノ暴  
挙有之候テハ以ノ外且ツ区長モ早々上艦御用相窺可然ト  
支庁詰ノ者共協議ノ上、私并十五等出仕泥谷直養出張、  
区長エ上艦御用窺ヘキヲ談シ、区長細島ニ出張途中ニテ  
御軍艦出港ノ趣キ承リ罷帰、因テ以後人民動搖不致様話  
合序ニ延岡エモ参リ、前頭ノ次第相話、直ニ帰庁ス、同  
廿三日方飫肥ノ人小倉處平ト申者中村町エ止宿ニ付、面  
会スヘキ旨申越タル故旅宿ニ至候處、同人東京表ニ於テ  
有馬藤太・大泉某ト共ニ罷下リノ約束シタルニ、大泉ハ  
大病ニ罹リ相残リ藤太ト共ニ二月十四日東京発足十七日  
神戸エ着、両人大阪迄出タルニ藤太モ発病、處平一人西  
京ニ至リ形況等ヲ見、伊藤參議殿ノ御印章ヲ申受ケ、十  
九日神戸ヨリ小倉ヘ渡海、同所ヨリ陸行豐地等ノ景況一  
通申聞、且鹿兒島人ハ參リ居リ不申哉ヲ尋ニ付、田中鼎  
介ナル者詰居ル旨相答タルニ面会イタシ度トノコト故、  
同人工申遣シ面会為致、西京ヨリ豐地等ノ形景話ノ末、

エ参クレ候様トノコトニテ、翌朝両人出足罷越タリ、同八日頃貴島清兵隊四五百名引率官崎ニ来り、本庁ヨリノ書簡差出候故披見致シ候處、豊地エ出張ニ付同人ヨリ金子ノ義申出候ハ、可相渡旨認有之、員數何程ナルヤヲ問シニ、七八千円ト申聞ケリ、因テ有金ノ内五千円相渡シ、佐土原・高岡・(高岡町)穆佐・綾等ノ人数モ追々馳集、已ニ発セントスルニ臨ミ熊本表エ操作出スヘキ趣キ鹿兒島表ヨリ申来ルヨシニテ熊本ニ転シ発向セリ、飫肥ノ兵ハ後ル、ノ故ヲ以テ直ニ都城通り熊本エ向ケ出発ノ処、勅使鹿兒島表エ御下向、県庁ヨリ達ノ義有之趣キ都城ニ於テ聞キ、飫肥エ引戻タリト聞ク、又島津忠寛(佐土原領主)并又之進鹿兒島表ニ來リ旧藩士共大義名分ヲ誤リ不申様為説諭、且ソ三男啓三郎ナル者モ出先キヨリ早々引戻スヘキ為、又之進一人佐土原迄被參タルヲ聞キ、佐土原表ハ斯ノ次第タル旨ヲ高鍋井ニ延岡エモ申遣シタリ、其後賊熊本敗走ニテ手負數百人日ニ通行、右病院掛リ有馬雄之介ナル者外一名、四等属田中傳方エ参リ、病人護送大井ニ薬品調等無金ニテ甚夕困却ニ付金子相渡シクレ候様トノコトニ付、都合イタシクレ可申トノ申聞故、金四千元両度ニ相渡シ、且ツ大藏省御預ケ米積残四千石余外(南郷町)ノ浦・細島両港エ有之

候處、賊掠奪イタシタル旨出張官員ヨリ申達有之タリ、其後同月下旬鹿兒島表エ惣督宮御本陣据ラレ、区戸長早々出頭スヘキ旨御達シ有之、元第一大区々長上村行清・第四大区々長武藤東四郎等出頭、其他ノ区長ハ遠隔ノ地旁延滞ナリシ故福山迄罷越シタルニ已ニ鹿兒島表戦端相開ケ渡海不叶帰リ来リ、右行清・東四郎等ハ開戦前日着庁、新県令ヨリ之達ヲ承知シテ帰リ来レリ、故ニ支庁心得方相窺可然ト、支庁詰ノ者共決議、右窺トシテ私義同十日出発罷越候得共、最早開戦通路無之達スル能ハス、二十日帰宮仕候、然ルニ去ル十一日鮫島元・野村某日向国参軍トシテ支庁ニ来リ曰ク、割拠ノ今日ニ至リ我カ軍令ニ従ハサル者ハ敵ト見ナシ臨機ノ処分ニ及フヘキ、否返答スヘキ旨五等属山下元次其他詰合ノ者エ申聞、不得已從命シタリト云、引続キ支庁長屋エ兵隊操込、出口々々ニ番兵ヲ張、桐野利秋モ来リ本當ヲ据エ、西郷隆盛モ亦來リ滯陣ス、同人護兵凡百余名アリト云、而シテ区長所ヲ郡務所、支庁ヲ軍務所ト改称シ紙幣ヲ佐土原ニテ製造シ或ハ土民ヲ募リ兵トシ、四百余名ヲ豊地堺ニ操出シ、学校ヲ製造場ニナシ土民所持ノ錫・銅器等ヲ集メ以テ鉛丸ノ不足ヲ補ヒ、飫肥地方ハ丁男ヲ募リ海岸并四方ノ口々

ヲ警メ番兵ヲ張ル、然ルニ都城等大敗走、七月廿七日學ノ

(田野町)

木・船引村ノ間ニ於テ終日戦争、晡時ニ至リ又敗走官崎

ニ引上ク、此日清武新町焼亡、其夜中村町・城ヶ崎・福島等

ニ火ヲ掛け其機ニ乘シ西郷隆盛始佐土原表ニ引上ト云、

翌廿八日ヨリ卅一日早天迄大淀川ヲ挾ミ砲戦、同日高岡

口ヨリ官軍御進撃、大瀬村辺焼亡、賊ノ後ロヲ擊レタル

故大淀川ノ守兵敗走、此又佐土原エ退散セリ、私共詰合  
ノ者十余名支庁エ相詰居、同日三旅団別働隊エ就キ自首

帰順仕候、尤戦地エ臨タル義無之候得共、官崎近傍見聞  
ノ次第ヲ略記シ申上候也、

明治十一年二月十四日

### 三四 和田一平・和田諸介連署上申書

鹿児島県下甑島郷第二十五大区

小一区

元士族元戸長

和田一平

シ、巡查之内両名川内警視署へ内々差送リ、右形行申達  
候處、直様警部衆御出張、私共召出サレ御取調相成リ申  
候、右之外戦地之形状等心得居候事無之候也、

明治十一年二月十四日

右同断元副戸長

和田諸介

三五 和田一作上申書

正副戸長相勤居候処明治十年丑二月西郷隆盛上京出発之  
後、同四月頃肥後人吉賊本營ヨリ速ニ募兵操出候様、書

面ヲ以テ申越候間、人數五十名大口筋ヘ発足為致、同五

月頃本県下川内向田本營中山甚<sup>(威高)</sup>五兵衛ヨリ又候人數差出

候様申来リ、是又五十名相募り向田ヘ発足為致、其後同

八月頃巡查衆御差入之上自首帰順仕居候処、同九月比賊

深見有常ト申者私共郷里甑島ニ來リ居、然ルニ西郷隆盛

ヨリ巡查致捕縛鹿兒島表ヘ突入候様申来候間、早々捕縛

致シ候様有常申聞候ニ付、官員捕縛致シ候儀ハ相叶不申

段相断候得共中々聞入レ無之、其勢ニ押サレ不得止人數

差出捕縛相成リ、有常相受取居候処、同人鹿兒島ヘ引取

候節、巡查衆ハ戸長方へ受取直ニ解縛致シ、衣食等相進

私共儀

鹿児島県飯島郷

鷲山九左衛門

元士族 和田一作

後藤軍次郎

私儀 鹽田甚九

昨明治十年二月上旬西郷隆盛暴発ノ際、副戸長相勤居申

候処、賊徒中山甚五兵衛ヨリ脅迫セラレ、五月十八日本

県下隈ノ城エ出張仕、右甚五兵衛方エ届出候処、勇義隊

十三番小隊半隊長申付ラレ候得共、無間モ病氣相煩兵役

勤マラズ、暇ヲ請テ帰郷仕候、然処一時方向ヲ誤リ候者

ハ自首帰順致候様、八月頃警視分署ヨリ御達ノ旨戸長等

ヨリ承候ニ付、自首帰順ノ書面差出申候処、九月下旬頃詰

居ノ巡查捕縛致シ候様賊徒深見有常ト申者ヨリ達ノ旨承

リ、否ト申者ハ敵ナリト、直ニ縛セラル、ノ形勢故、帰

順ノ事件ヲモ不顧、右捕縛方ノ手数等エ立会仕候、右ノ

外戦地ノ形状等心得候儀無御座候也、

明治十一年二月十四日

三六 平嶺篤治外三名連署上申書

鹿児島県飯島郷元士族

平嶺篤治

三七 後藤休七・河野傳治連署上申書

明治十一年二月十四日

鹿児島県飯島郷元士族

後藤休七

河野傳治

私共儀

出兵候段、私共方向ヲ謬リ区長共々主取周旋、且其後モ  
金穀・弾薬等之世話致シ、始終郷里ニ罷在、戦地ヘハ相  
臨マス、依テ其形状詳悉承知不仕候、此段申上候也、

明治十一年二月十四日

明治十年丑四月廿一日副戸長大山善太福山表へ出兵致シ  
候様申付候間、直ニ出兵仕、切り隊小隊長梶原小介指揮  
ニ從ヒ、五月下旬比官軍へ抗敵仕敗軍ニ及ヒ、都ノ城へ引

揚ケ相成リ、夫ヨリ宮崎へ引揚ケ、同所ニ於テ八月十五

日比自首降伏、九月四日帰郷謹慎能在候処、巡查捕縛方

有之候間、出張致シ候様右善太ヨリ申付候ニ付、相断候得

共中々聞入レ無之、不得止出張仕申候、外ニ戦地ノ形状

承知之義無御座候也、

明治十一年二月十四日

三九 永田半太夫上申書

鹿兒島県飢島郷

元士族 永田半太夫

私儀

明治十年丑四月廿一日副戸長大山善太ヨリ福山エ出兵致  
候様申付候ニ付直ニ出兵仕、小隊長梶原小介從指揮ニ候  
処、病氣ニテ戦争ハ一度モ不仕候、五月十六日帰郷自首  
帰順仕居候処、巡查捕縛方有之候間、出張致候様右善太  
ヨリ申付候ニ付相断候得共聞入無之、不得止捕縛方エ出  
張仕申候、右之外戦地の形状等心得居不申候也、

明治十一年寅二月十四日

同区百番地 井上勝利

同区百番地

柴田 敬

旧士族

柴田 敬

去十年二月西郷隆盛始暴発之砌、区内土族之内三百余名